朝鮮語新聞「毎日新報」（朝鮮総督府機関紙）に掲載された「国語」欄の歴史的変遷（一九三九年～一九四四年）

熊谷明泰

はじめに

本稿は、朝鮮総督府の日刊朝鮮語版機関紙「毎日新報」で「国語欄」「国語教室」、「国語毎新」などのタイトルを付し、朝鮮民衆に対する「国語普及」を図り、「国語」による記事を通じて戦時総動員体制に朝鮮民衆を組み込むことを目的として編輯された日本語紙面についての考察である。なお、「毎日新報」第四面全体に「国語」欄を拡充させた一九四三年九月十四日（第一二九六五号）以後は、この紙面の「国語」欄にはタイトルは付されていない。「毎日新報」に掲載された「国語」（＝日本語）記事は小さなベタ組のものから始まり、第四面の半分から三分の二程度を割いた段階を経て、第四面全体が「国語」紙面が割り当てられるまでに拡充していった。筆者はこれらを「国語」欄と総称して、本稿のタイトルとした。したがって、本稿のタイトル〝「国語」欄〟は、一九三九年七月二十五日（一一四六二）から一九四一年七月十二日（一二一七六）まで「国語欄」というタイトルで掲載された紙面だけをさすものではない。

「毎日新報」の前身は「毎日申報」で、経営権の再編にともなって一九三八年四月十六日に「毎日新報」に紙名が変更されはしたが、その後も朝鮮総督府の朝鮮語版機関紙であり続けた。

「毎日申報」は、一九〇四年にイギリス人アーネスト・ベッセル（Bethell. E. T）を発行人兼編集者、朝鮮人ヤン ギタク（梁起鐸）を総務として発刊された「大韓毎日申報」が韓国統監府に買収され、その後紙名から「大韓」を削り取って、「毎日申報」として韓国併合の翌日（一九一〇年八月三十日）に創刊されたものである。[1]「毎日新報」は八・一五解放後の一九四五年十一月十日に廃刊されるまで発行された。この廃刊は朝鮮総督府に代わって南朝鮮地域を統治した米軍政当局に協力的ではないという理由で、米軍政庁より停刊命令が下された結果である。また、朝鮮総督府の日本語版日刊機関紙だった「京城日報」は、十二月十一日に廃刊された。

朝鮮総督府が米第八軍の南朝鮮占領軍司令官に対して降伏した一九四五年九月九日以後も、これら朝鮮総督府機関紙が発行され続けたのは、当時上記「京城日報」と「毎日新報」の二紙以外に朝鮮では全国紙が発行されていなかったことに加えて、米軍政庁は南朝鮮を軍事支配しつつ、朝鮮総督府のさまざまな統治機構、行政機構、公共サービス、産業組織などを米軍政のもとで新たに組織再編するために、自らのコントロール下にあった朝鮮総督府の旧機構を利用したためだった。

「毎日新報」は、朝鮮語版新聞であるため、その読者のほとんどが朝鮮人だった。本稿で紹介する「毎日新報」の記事は、すべて朝鮮民衆に対して向けられたメッセージであった点に、特に留意しておきたい。

民族資本によって一九二〇年に創刊された「東亜日報」、「朝鮮日報」は朝鮮総督府の言論統制政策によって一九四〇年八月に強制廃刊されている。したがって、植民地時代の全期間を通じて発行された朝鮮語新聞は「毎日申報」と「毎日新報」だけだった。ゆえに、歴史的資料として重要なものであることは、わざわざ指摘

するまでもないことであろう。

本稿は、景仁文化社（ソウル）で一九八九年に復刻刊行された『毎日申（新）報　一九一〇・八～一九四五・八』（全八十五冊）のうち、第六十七冊（一九三九年四月～一九三九年七月）から第八十五冊（一九四四年九月～一九四五年八月）までに収録されたものをもとに「国語」欄の歴史的変遷を分析するものである。本稿が取り扱う「国語」欄は「毎日申報」から「毎日新報」に紙名変更された後に登場する。

なお、「毎日新報」では朝鮮文字の濃音は ㅆ 以外は、例外なくすべて合用並書（異なる子音字の併用）で表記されているが、本稿に転載するにあたっては入力の都合上、ㄲ・ㄸ・ㅃ・ㅉは現行正書法の各自並書（同じ子音字の併用：ㄱㄱ・ㄷㄷ・ㅂㅂ・ㅈㅈ）に置き換えて示した。

一．「国語全解・国語常用運動」による「毎日新報」の「国語欄」の変容

「毎日新報」に初めて「国語」欄が登場するのは一九三九年七月二十二日（一一四五九）の「曙だより」だった。その後、持続的に「国語欄」、「国語教室」が掲載されるが、一九四二年七月一日（一二五二八）からは紙面が拡張され、「毎日新報」第四面の半面を割いて「国語」による「国語毎新」欄が掲載され始めた。その後、一九四三年九月十四日（一二九六五）からは第四面全体が「国語」紙面となったが、物資不足の為「毎日新報」が二面建てに完全に縮小された一九四四年十月二十八日（一三三七三）を最後に「国語」欄は消滅した。

「国語毎新」欄は、一九四二年五月以後、朝鮮総督府および国民総力朝鮮聯盟によって朝鮮全土で総力運動として展開された「国語全解・国語常用運動」に呼応して登場したものである。この時期の「国語全解・国

語常用運動」は、一九四四年から朝鮮で徴兵を実施するという閣議決定（一九四二年五月八日）を直接的な契機にして始められた。「国語」が理解できない限り、朝鮮青年を徴兵することなどできなかったからである。

「国語全解・国語常用運動」遂行のために、国民総力朝鮮聯盟指導委員会はその施策の雛形として、「国語普及運動要綱」（一九四二年五月六日）を策定した。その「（四）文化方面に対する方策」で、「……ラジオ第二放送に国語をより多く取入れること。諺文新聞に国語欄を設くること」と決めていた。

一九四二年五月、朝鮮総督府は、朝鮮全土の地方行政機関に対し、この「国語普及運動要綱」をモデルにして各地方の実情に沿った「国語全解・国語常用」を推進するための施策を練ることを命じた。この地方行政機関が策定した施策には、「国語普及運動要綱」にならって、朝鮮語新聞に国語欄を設けることを主張した例が多く見られた[2]。

朝鮮総督府編修官廣瀬續は、「國語普及の新段階[3]」で、「（国語）講習用の雑誌としては、（中略）新聞では京城日報社から「皇民日報」が日刊され、毎日新報社から「国語教室」といふ附録が毎週木、日の両日発行され、共に入門の指導をも行つてゐることは、如何に本運動を徹底的ならしめんとするかを観ずる好箇の見本であらう」と「毎日新報」を「国語普及」運動に協力させている状況を述べている。

当時、朝鮮総督府編修官森田梧郎は、「朝鮮の国語普及全解運動[4]」という文で、「国語講習会」だけでは「国語全解運動」を展開しきれない状況下において、朝鮮語新聞が果たすべき役割について、次のように指摘している。

［国語講習会は］限られた人員を収容する講習会だけに、全解運動のすべてを嘱することもできない。そこで広く全未解者への入門手ほどきとして、朝鮮唯一の諺文新聞（朝鮮語新聞）である『毎日新報』紙の一面に、「コクゴノページ」を設け、生活用語の基礎語及び基本文型を表

音的仮名遣によって示し、一般大衆への国語学習の便としている。他方、国語講習会の終了者、乃至国語入門の過程を了えたものに対する読物として『皇民日報』を発刊せしめている。新聞紙半截型の四ページもので、国民学校四年程度の国語力で読解し得られる内容のものをもって編輯されている。これらの新聞による全鮮の国語全解運動に協力し、更にラジオによる国語普及が実施されている。

ここで森田が書いている「コクゴノページ」とは、実際にそのような名称の紙面が「毎日新報」にあったわけではなく、一九四二年七月一日（一二五二八）から掲載されていた「国語毎新」を仮にこのように呼んだものである。

「国語全解・国語常用運動」の要請をうけ、新たに掲載を始めた「国語毎新」欄は、従来の「国語欄」、「国語教室」より紙面のスペースをより多く割き、その内容は「国体明徴」、「内鮮一体化」、「皇国臣民化」、戦意昂揚、節約貯蓄、物資の供出、ヤミ経済の統制、反スパイキャンペーンによる言論統制の更なる強化を煽り、更には戦死への諦念を迫る記事が立て続けに掲載されるなど、国家総動員体制のもと朝鮮民衆を戦争に駆りたてるものだった。「国語」学習用として掲載された日本語文の内容も、それ以前の「国語欄」や「国語教室」のものとは比べようもないほど、国家総動員体制を反映した戦時色の強いものとなっている。

徴兵が始まる一九四四年になると、「毎日新報」紙の掲載文は、いよいよ差し迫った論調になって行った。その論調は戦況において圧倒的に優位に立つ米英に対して、精神主義的にひとりよがりな虚勢を張るものだった。

一九四四年四月二十二日（一三一八四）の「毎日新報」記事「今年こそみんな国語を習おう」では、「いよいよ今年から半島の若者はみんな兵隊になれる徴兵制が布かれましたので、どんなことがあっても国語を覚えなくてはならなくなりました。今年は青年特別錬成

所、女子特別錬成所は勿論のこと、各村々でもみな夜学を開いて国語を教えることになっています。」と書いて、徴兵制実施のもとで「どんなことがあっても国語を覚えなくてはならなくなりました」と発破をかけている。

徴兵制が実施された当時の「毎日新報」には、「国語」普及運動を更に徹底させるための、次に紹介するような国民総力朝鮮聯盟の方針や同聯盟総長の談話が載せられている。そこでは、「日本の男児として、日本の国民として日本語が分からないこと」が「矛盾」したことであるなどと、文字言語も兼ね備えた独自の民族言語を有する朝鮮民族からすれば本来全く矛盾でしかありえない、「朝鮮」を消し去った論理があけっぴろげに展開されていた。

国語全解へ大進軍＝適齢者からどんどん教えて行く(5)

半島にも国民としての最も大きい光栄である徴兵制が布かれ、いま第一次検査が行われて、憧れの入営の日も間近に迫っていますが、残念なことには、まだ国語の分からない者が少なくありません。日本の男児として、日本の国民として日本語が分からないことほど矛盾したことはありません。それで総力聯盟［国民総力朝鮮聯盟］では、次のような方法で今までよりもっと国語普及に力を入れることになりました。

▲国語を教える人

一．国語の分からない徴兵適齢者から真っ先に教える。

二．適齢者のほかにも二五歳までの者には教えられるだけ教える。

三．役所、学校、会社などには一般の模範になるように必ず国語を常用させる。

▲国語を普及させる方法

一．愛国班を通じて国語を知らない者の名前を調べておいて、国語講習会を開いて教える。

二．講習を受ける者も徴兵適齢者から先にすること。

三．講習を受けて国語が分かるようになった者には認定章を授ける。

四．国語が分かる者にはすべて国語を常用させる。

國語を習おう、常用しよう、特に壮丁たちは一刻も早く

韓総長談[6]

八月一日から全鮮一斉に徴兵制に伴う国語常用と国語全解の運動を起こすことになりましたが、これについて韓（かん）聯盟総長は次のように語られました。

本当の内鮮一体は、まず国語を使うことから始まります。ことに徴兵制が布かれた今、皇軍の一人となった者が国語が分からなくては本当の立派な兵隊となることはできません。ところが 今のところでは兵隊に行く年頃の若者のなかで、まだ国語を知らないものがいるので、聯盟ではこれらの人にすっかり国語を教えるとともに、一般の人もこの若者たちを助けて国語生活へ突き進んでいただきたいと思うのであります。そのためには、特に指導者、学問のある人たちが常に国語を使って手本を示さなければなりません。国語は知っていても使わなくければ、いつまでも上手なりませんから、誰もみな普段の生活に国語を使うようにし、特に兵隊に行く青年たちは心を奮い起こして、どのようにしてでも国語を覚えるやうにしてもらひたいと思います。［原文はカタカナだけで表記されているが、平仮名漢字交じり文に置き換えて示した。］

また、徴兵検査が終わった直後に朝鮮軍参謀長が語った次のような話も「毎日新報」紙上に紹介されているが、そこでは朝鮮民衆の間に徴兵忌避の風潮があったことをおおやけに認めざるを得ないほどの状況が語られている。ここからも、度重なるプロパガンダにも拘らず、多くの「半島のお母さんや姉さんたち」は、我が子や弟が戦場に連れ去られることになる「一視同仁の有難き天皇陛下の思し召し」に首肯していなかったことが分かる。

やがて軍人になる半島壮丁は内地の壮丁に劣らぬ　井原軍参謀長談[7]

朝鮮最初の徴兵検査は一億国民の大きい期待を浴びて、さ

る四月から内外地とも一斉にとり行われましたが、朝鮮内は予定のとおり大へん良い成績を収めて、去る八月二十日めでたく終わりました。

かえりみれば一視同仁の有難き天皇陛下の思し召しに感激した半島若人たちの愛国の血潮は、いやがうえにも高まり、敵米英撃滅の決意をいよいよ固くしたのであります。続く壮丁たちの兄としての誇りを失わず、その態度はりりしく、皇国臣民たるの心構えもまた内地の若人たちに決して劣らなかったことは、このたびの検査の大きな収穫でありました。国語の理解ということに対しても、大きな注意を払いましたが、これも官民一致のまじめな努力により、入営後ほとんど差し支えない程度に達しております。

強い母となれ

しかし、いささか遺憾に思ったのは母親たちの無理解により、徴兵を嫌がったおこないがあったことであります。わが夫を、わが子をことごとく御国に捧げ、しかもなお勇敢に国のために戦い抜く母の姿こそ本当の日本の姿であります。「額には箭はたつとも背にはたてじ」といって、卑怯な振る舞いがないように、心からお祈りを捧げたのが日本の母でありました。半島のお母さんや姉さんたちもこの点について、一段と自覚と反省を願ってやみません。

心身をきたへよ

ほまれある現役兵として入営する者は、近いうち本人のもとへ入営部隊と期日などの知らせが行くはずです。また補充兵、国民兵となったものも、お国の干城に間違いはありません。常に心身の鍛錬に努め、身のまはりを整えて、いつお召を受けようとも大君の御前に馳せ参じることができるように、心掛けなければなりません。［原文はカタカナのみで表記されている］

徴兵制実施のための「国語」普及は、徴兵適齢期青年だけを対象とするのではなく、家族をも巻き込んだものとして「国語全解運動」が行われていた。「半島の女の人を本当に立派な兵隊の母や妻になるように教え導くため」に一九四四年四月十日から、朝鮮全域二千四百五ヶ所に「女子青年錬成所」を開き、「女子青年練

成」では十六、七歳から二十歳までの女性を対象とした「国語」普及運動も行われていた[8]。そして、国民総力朝鮮聯盟では「立派な兵隊を出すために国語生活実行しよう」といったポスターを掲げて、「一人も国語の分からない兵隊が出ないようにしようと骨を折っております。立派な国語のよく分かる兵隊を出すためには、半島のすべての人が家でも外でも国語生活をし、どの家庭にも国語の分からない人が一人もいないようにしなければなりません。ことに兵隊を出す家庭では国語生活に努めましょう」と呼びかけていた[9]。

「毎日新報」の「国語」紙面は物資不足のための紙面縮小によって一九四四年十月二十八日を最後に消えるが、徴兵実施後も「国語全解・国語常用」は続けられていた。以下、本稿では「毎日新報」における「国語欄」の登場（一九三九年七月）から「国語」紙面が無くなるまでの記事を分析に、その変遷をみていくことにする。

二．「国語欄」の登場―「曙だより」・「国語欄」一一四五九（一九三九・七・二十二）～一一八四五（一九四〇・八・十二）

「毎日新報」で初めて「国語」（＝日本語）による欄が登場するのは、一九三九年七月二十二日（一一四五九）付第二面紙面に掲載された「曙だより」からである。「曙だより」はこれに続く一九三九年七月二十三日（一一四六〇）付第二面紙面に掲載されただけで終わっている。

「暁だより」の表記は漢字ひらがな交り文で、すべての漢字にルビが振られている。これは、日本語版の朝鮮総督府機関紙「京城日報」と同様であり、「毎日新報」の「国語」で書かれた文で用いられる漢字のほとんど総てにルビが振られている。なお、「曙だより」及びこれに引き続いて掲載された「国語欄」では日本語に対する朝鮮語対訳は付されていない。ルビを振るスペースを確保するためか、「国語」欄では日本語の活字

の大きさは他の紙面の朝鮮語の活字より少し大きくなっていて、読みやすくなっている。

「曙だより」の内容は、以下のように他愛もない冗談話だった。なお、本稿では、「毎日新報」の記事を転載するにあたり、漢字に振られたルビはすべて省略した。また、角括弧（［　］）内の記述はすべて筆者による注記である。横棒「一」や「二」は読みやすさを考慮して筆者が挿入したものである。四角（□）は判読できなかった部分を示したものである。

一一四五九（一九三九・七・二十二）「曙だより」

一日繰上げ

朝鮮はいはゆる大陸性氣候とかなんとか云ふて、昼は随分暑いけれども、そのかはり夜は涼しいので凌ぎよかったのですが、近頃は天氣までも、完全に内鮮一體になったらしく、昨今の夜の蒸暑さつたら、誠に閉口ものです。昨夕も寢つかれぬまゝに、うつらうつらしてゐると隣の家で時ならぬ子供□、續いての泣聲が聞旦那さまの辨明が聞えて來るのです。

「どうしてそんなに、子どもを叱るのですか」

「こいつは明日成績表を持って來るんでね…本當は明日やるべきなんだが、實は明日朝早く出張するんで、仕方がないから一日繰上げて叱るのです…」

一一四六〇（一九三九・七・二十三）「曙だより」

資源愛護

資源愛護、資源節約は今の時代の合言葉で、ご時勢がご時勢だから、誰しも異存はなからうが、さてそれも程度の問題、こんな男は一寸考へものです……或る男が電燈の側で本を読んでゐたが、二、三分毎に起ち上がって電氣を消し、数秒の後にまた點けるのです。いつまでも之を繰返すので、傍の人が不思議に思つて、その譯を聞くと、その男「頁をめくる間は、電燈が要らないので、時節柄資源愛好であゝして消すのです」

「曙だより」の掲載はわずか二回で終わり、この「曙

ばなし」に類した内容の日本語文が一九三九年七月二十五日の号から「国語欄」とタイトルを変えて第四面に連載され始めた。「曙ばなし」から「国語欄」にタイトルが急きょ変更された事実から、「毎日新報」が「曙ばなし」のタイトルのもとに初めて日本語文の掲載を行った時点において、「国語」文を掲載することの明確な意味付けがなされていなかったことが伺われる。なお、日本語による紙面、すなわち本稿でいう〝「国語」欄〟は「曙だより」が第二面に掲載された以外は、「国語」欄が消滅する一九四四年十月二十八日まで終始一貫して第四面（最終面）に掲載されている。

この当時の「国語欄」の連載は一九四〇年八月十二日（一一八四五）まで続き、本稿で利用した「毎日新報」復刻版では、百九十回分の掲載が確認できる。この時期の「国語欄」は、大きく二つの時期に区分できる。前半の時期は、一九三九年七月二十五日（第一一四六二号）から一九四〇年四月十一日（第一一七二二号）までで、この前半期のものは読者の日本語読解能力の水準を考慮した文章ではなく、普通に日本語が読める読者を想定していることから、「国語普及」の手段として掲載されたとは言い難いものである。朝鮮語新聞である「毎日新報」に日本語の文章を掲載するという事実自体にその意義を見出していたかのようである。

この時期の「国語欄」で取り上げられた日本語文は、一九四〇年四月十一日（一一七二三）までは、その八割が他愛もない笑い話である。本稿で利用した「毎日新報」復刻版では、この時までの「国語欄」は百三十二回分が確認できるが、そのうち三回は二つずつ話が載せられているので、実際には百三十五の話の掲載が確認される。

掲載された話は、下に示すように、その内容から主要な読者対象は「国語普及」運動の対象者ではなく、相当な日本語読解力を有する層の朝鮮人を想定していたものと判断される。また、笑い話を多数掲載したのは、ともかくも読者の俗な興味・関心を引き付けることを意識したためであろう。したがって、このときの

「国語欄」連載初期には「国語普及」を計画的に推進するための紙面づくりを意識していたとは思われない。また、時局を反映した話は一切載せられておらず、この時期の「国語欄」は、日中戦争のさ中ではあったが「国語普及」の手段として利用しようとする明確な方針が打ち立てられていなかっただけでなく、戦時体制に朝鮮民衆をかり立てる思想統制の手段としても考えられていない段階にあったと言える。

ここに掲載された笑い話を全体的に見ると、いつの世も綺麗ごとだけでは生きて行けそうもない一般社会における「ユーモア」感覚を垣間見ることも出来る。

一一四七五（一九三九・八・七）「国語欄」

これは思ひつき

遅くまで、外で遊んでゐた姉と弟とのはなし

姉の英姫「さあ、英男ちやん、家へ帰らうよ。もう八時だから」

弟の英男「いや今は駄目。こんなに遊び過ぎて歸ればひどく叱られるばかりだよ。だけど十時頃まで待つて歸れば、まあよく無事だつたねと云つて、お父さんもお母さんもキツスしてくれるよ」

一一四八九（一九三九・八・二十一）「国語欄」

赤いもの

A「ヤレ、赤い思想だ、それ赤字だなんて赤い物には碌なものはないね」

B「しかし、カレンダーの赤い字は日曜日だぜ」

一一四九二（一九三九・八・二十四）「国語欄」

父親「コラ、またお前はお隣の子を、泣かしたか。お前のことを世間でなんと云ふてゐるか知つてゐるか」

その子「お父さんの子供の時そつくりだと、云ふてゐるよ」

一一五〇四（一九三九・九・五）「国語欄」

下心

先生「私たちは何故貧乏な人に親切であらねばなりませんか」
生徒「ひよつとしたらその人たちが、近い中に金持になるかも知れないからです」

一一五一二（一九三九・九・十三）「国語欄」

世の中

息せき切つて驅込んで來た男
「今、貴社の社員が電車に轢かれましたから代りに私を雇つて下さい。」

一一五七二（一九三九・十一・十二）「国語欄」

空氣税

「衛生試驗所で空氣のことを調べたさうだ」
「へえー」
「さうしたら一日一人が百リットルの空氣を吸うさうだ」
「たまげたなア、それでまた、税金をかけようつてのかい！」

一一六〇六（一九三九・十二・十六）「国語欄」

好景氣來

職業紹介所をのぞいた田舎者。「不景氣、不景氣つて云ふがこの繁盛は、どうだんで！」

一一六一一（一九三九・十二・二十一）「国語欄」

これは無理

「君、いよいよ劇場へ就職したつてね。入場券位くれ給へよ」
「い、とも。だが、君はうまく銀行に入れたんだもの、僕に紙幣の一、二枚くれるだらう」

一一六一三（一九三九・十二・二十三）「国語欄」

五分五分

金を貸した男「おい、この前君に貸した金のこと、まさか忘れてるんぢゃあるまいね。一體幾度請求させるつもりだい？これで六度目だぜ」
金を借りた男「忘れてやせんさ。だけど僕が借りる時は一

體幾度頼んだと思つてる？これで五分五分だよ」

一一六五六（一九四〇・二・五）「国語欄」

当世奥さま氣質（きだて）

奥様「お前なんか、お嫁に行つても、とても、家がやつて行けませんよ」

下女「まあ、どうしてで御座いませう？」

奥様「だつてお前、先程料理屋からとつた、お膳はすつかり、返してしまつたでせう」

下女「はい」

奥様「馬鹿だね、氣の利いた小皿の一つ位家に殘しておくものですよ」

一一七二三（一九四〇・四・十二）「国語欄」

おべんとう

先生「さあ、何でもわからないことがあつたら、おきゝなさい。太郎さん、なんですか」

太郎「先生、あのうこれからどれ程まてば、お辨當ですか」

上掲のような笑い話は、一九四〇年四月十二日発行の号までの「国語欄」掲載文の主流をなしていた。

一方、笑い話ではない話の中には、以下に示す「ドレイク先生」のように西欧人の英語の先生が見せた紳士的な姿を紹介したり、「点字の放送プロ」のように、イギリスでは盲人用のラジオ放送プログラムが点字で作成されていることを話題として取り上げ、日本に比して進んだ福祉施策を紹介している。こうした話題の取り上げ方が注目されるのは、その後の太平洋戦争期には、英米に関する話題が一貫して「鬼畜米英」の論調に変化し、米英を見下したりあざ笑ったりする内容に変化するためであるのに反して太平洋戦争勃発直前のこの時期の「国語欄」には、そうした内容の文が一切掲載されていないからである。

一一四七七（一九三九・八・九）「国語欄」

ドレイク先生

電車には若い母親が赤ちゃんを抱いて乗つていた。隣

には英語の先生のドレイクさんが居られる。子供は先生の持つてゐるステツキに眼をつけた。欲しさうに幾度か小さな手を出すのである。それと氣がついて、母親がむきをかへるやうにしたが、徒勞だつた。

やがて、先生は實直にステツキを渡した。子供の嬉しさうな顔が目に見えるやうである。暫くして、先生は思ひ出したやうにポケットから手帳を取出して、一枚の紙を破つてそれを子供に渡した。そして、ちょつとステツキを引いてみた。が、余程ステツキが氣に入つてゐるらしい。すると今度は、その一枚の紙をおだやかに取戻して、それを二つに切つて、一枚宛、子供に持たせたのである。

そして、ステツキは先生の手に取戻された。先生の下車すべき停留場へ來たのである。

ドレイク先生は私の恩師で、今歸國して居られる。ナルホド紳士道とは、そんなものかと、今もときどき、その車中風景を思ひだすのである。

朝鮮語新聞「毎日新報」（朝鮮総督府機関紙）に掲載された「国語」欄の歴史的変遷（一九三九年～一九四四年）　一五

一一五一四（一九三九・九・十五）「国語欄」

點字の放送プロ

イギリスでは、最近盲人用の點字プログラムが出來ました。このプロさへあれば盲人は他人の助けを借りないで、自分の好きな放送の時間が分かるので、大變評判がよいさうです。

これはイギリス本國にある盲人七萬三千人に充分ラヂオを樂しませたいと言ふので始められたのです。今イギリスの盲人が使つてゐるラヂオセットは、四萬四千臺あるさうですから、この放送プロが出來たので、ほどなく 全盲人に聽取機が行き渡るだらうとのことです。

その後、一九四〇年四月十五 日（一一七二六）からは編輯方針が変わり、この「国語欄」に小学生の綴り方が載せられるようになる。そしてこの段階で、「国語欄」を「国語普及」に資するものとすべしという目的意識が顕在化し始めたと見ることが出来るだろう。

この小学生の綴り方は「毎日新報」復刻版では一九

四〇年四月十五日から同年八月十二日（一一八四五）まで五十七回（五十八話）にわたって執筆者の名前および所属小学校名を明記したうえで連載されていることが確認でき、その多くは小学校高学年（五年生、六年生）の朝鮮人児童が書いたものである。表記はすべて漢字ひらがな交じり文で、総ルビとなっている。ルビは編輯段階で振られたものと判断される。

これらの綴り方の文章は、日本語能力が日本語母語話者に劣らない水準の者でなければ書けそうにもないものであり、また用いられた漢字は、相当に日本語が書ける一般人レベルのものであり、このことから、およそ小学生が綴ったまま掲載された文とは思われない。

最初に掲載された綴り方「神社参拝」は、それまで掲載された類の話とは全く性格を異にし、皇民化政策を煽るものとなっている。この段階から、「国語欄」の編輯は、植民地統治イデオロギーを朝鮮民衆の間に浸透させることを目的意識的に図るようになった。

確認された五十七回分の小学生の綴方のうち、皇国臣民化や時局絡みの内容の文は全体の四分の一に当たる十六回のものに見られる。

一一七二六（一九四〇・四・十五）「国語欄」

神社參拝

和順大□尋小校［尋常小学校］（六男）［六年男子］崔□□

神社の大□であたりを見廻した。大人も子供も皆参拝に來てゐる。これは神國日本をおいては、外に見られぬ事だ。私はつくづく日本に生れた事を有難く思ふ様に成つた。私は眼をずつと下の方に移した。にぎやかな和順の町も一目見られる。大小幾多の建物が軒を接して竝んでゐる。私はあたりの景色を眺めながら、さくさくと、玉砂利の上を歩く。折からの朝もやに囲まれ、千木が見へたり、かくれたりするのも、神社で無くては見られぬ風情だと思つた。

やがて私共は拝殿の前に立つた。此の時は何とも言ひあらはす事の出來無い實に敬虔な氣持だつた。

朝鮮をお守りくださる天照大神様、明治天皇様、朝鮮が

ますます発展して行きます様に、言葉には言はれないが、心の中では、かう言はずには居られ無い。私は西行法師の作つた歌を思ひだして、校長先生のなされる通り柏手を打つて頭を下げて、黙禱した。

「何事のおはしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる。」

小学校六年生の朝鮮人児童が書いたものとはおよそ信じがたい「神社参拝」というこの綴り方が掲載されたあとになってから、一九四〇年四月十八日（一一七二九）の紙面に「国文綴方募集」と題した、次のような毎日新報社学芸部からの案内記事が掲載されている。また、一九四〇年四月二十二日（一一七三三）にも、全く同じ案内記事が掲載されている。綴り方募集案内の掲載以前に「神社参拝」のような文を載せたことは、「いい綴り方」の方向性を暗示したものと解される。

今までの國語欄を拡張して、これから、小學校の皆様のすぐれた綴方を毎日のせて行きます。國語欄は國語普及に備へるのですから、なるべくやさしい分かり易い文章をとります。長短は随意ですが、なるべく短いのがよく二百字詰二枚を適宜とします。どしどしい、綴方をお送りください。（學藝部）

この案内記事で、「国語欄」は「国語普及に備える」ことを目的としていることが明記されている。「国語普及」は単なる日本語それ自体の普及のみならず、むしろ「国語普及」を通じて天皇制イデオロギーを浸透させ、戦時総動員体制に民衆を組み込むことを重視していたことが、以下のような「すぐれた綴方」を掲載していることからもわかる。

一一七四二（一九四〇・五・一）「国語欄」

志願兵の勇士へ

□□小　金□□

陸軍志願兵の皆様方お變りは御座いませんか。私は元氣

で居ります。皆様方は名譽ある志願兵として何千人の中から選ばれて、お國の爲に盡すことが出來るのは、日本國民として、この上もない名譽であります。私は新聞やラヂオで、皆様方の狀況を良く知つて居ります。

私も大きくなつたら、戰場に出ようと思ひますけれど、女で出ることが出來ないから、愛國婦人にならうと思つて居ります。さやうなら

一一七七三（一九四〇・六・一）「国語欄」

教育

黄海道□明□書堂（三年）□□□

教育は、獨り大日本帝國だけで無く、世界中何れの國でも、最も大切がられる物であります。もしわが國に教育がないとすれば、古今に輝く大日本の歴史を、知ることも出來なければ、話さへもよく出來ないかも分りません。我等が、學校や書堂でべんきゃうしてゐるのも、皆天皇陛下の御恩と思はなければなりません。昔にはゆめにも思はなかつた飛行機や自動車が今日教育の力によつて發明することが出來たのを見ても、教育は「此の上もない寶物だ」と思ひます。

一一七七六（一九四〇・六・四）「国語欄」

報恩感謝

□南通二□□□小校（六年）金東明

私共は生まれながらにして、君の恩、親の恩、師の恩、その他社會の恩、又は自然の恩を受けてゐます。今私達が平和に暮せるのは、皆ひとへに、天皇陛下の御稜威（みいつ）と、あらゆる辛苦と戰ひながら東洋永遠の平和の為に、ひいては世界平和の為に、將兵が、よく奮闘して下さるお蔭でございます。（續）

一一七七八（一九四〇・六・六）「国語欄」

報恩感謝

□南通二□□□小校（六年）金東明

私達は、共に將來立派な人間になつて、國民を赤子のやうに、お思ひ下さる大君の御恩にむくゐ、又自分の子の爲に

は、汗と血とにまみれながら、働いて下さる親の恩、又弟子の為には、夜もろく〳〵眠れずに、私達を敎へて下さる師の恩や、夜の寒い日にも暖かく勉强出來る火の有難さ、又夏の暑い日、のどをうるほしてくれる有難い水等の自然の恩を受けて、日々に伸び行くのであります。（續く）

一一七七九（一九四〇・六・七）「国語欄」

報恩感謝

□南通二□□□小校（六年）金東明

これらの有難い恩を忘れずに此の恩に報ゐねばならぬと思ひます。私共は榮ある三千年の永い歴史に飾られてゐる大日本帝國の臣民として恥ぢざる行ひをし、報恩感謝の美風がわが國に溢るやうに。何時も□けて居ります。（おはり）

一一八一八（一九四〇・七・十六）「国語欄」

節約

□□□州明□□□□　白川□□

今の時代は、節約時代ですから。私達はなるべく節約しなければなりません。私達が節約するのは、國民の義務として、もつとも大切な事ですから、節約するのは、忘れてはなりません。私達は或日、先生に次のやうな話を聞きました。兵隊さんは煙草一本でもお互ひに分けて吸ふことを考へれば私共は仕事も節約しないでをられない、と。そのことをきゝながら、目に涙が出る程の感激を受けました。私達は節約して御國の為につくさねばならないと思ひます。

一一八二六（一九四〇・七・二四）「国語欄」

愛國貯金

□田公立尋小校（二年）金□姫

支那じへんは又つゞいてゐます。ことしはうれしい紀元二千六百年でございます。我が皇軍は强く戰つてゐるでしよう。しかし我が少國民がもつとも銃後をまもらなければ早くじへんはかたつかないでしよう。この銃後をよくまもるには儉約が大切であると校長先生が朝會にはなされました。それで私は學習帳や鉛筆や學用品みんなをせつやくすることにしました。さうしておとうさんから毎月七〇錢づ

つもらうことにしました。その七〇錢から授業料と學用品ぜんぶをすることにしましたが、私は其の中からせつやくして毎月二〇錢づつ愛國貯金をすることにしました。この貯金がだんだんふえてゐるとうれしくてたまりません。友だちが飴をかつてたべるのを見ると、私もたべたがつて、一しょに買つてむだにしたことがありましたが、この貯金をはじめてからは一錢でもあまつたらすぐ貯金と思つて、飴を買つてくふなどのやうなむだつかいをしたくありませんでした。先生からもたび〳〵ほめられてゐます。

一一八二八（一九四〇・七・二六）「国語欄」

一錢の力

□田公立尋常小學校　李鳳求

我が日本は今新東亞建設、朗らかな明るいアジヤを作るといふ大きな仕事のため澤山なお金と物が要る時であります。タンクを動かし、大砲をうち、軍艦を作り飛行機をとばせるのにも澤山なお金がなければ出來ないことであり、又いろ〳〵な産業を盛にして行くためにも多くのお金と物が必要であります。此のお金と物はいくら入らうと私共日本人が作り出さなければなりません。よつて一枚の紙一錢のお金でも決して無駄にしてはなりません。「たつた一錢が」といつてかろんずる人は一錢の力をしらない者といはねばなりません。

当時の「国語欄」にはこのような戦時体制や天皇制イデオロギーへの従属を煽るものばかりではなく、次のような素朴な日常生活を描いた綴り方も多数掲載されていた。

一一七六一（一九四〇・五・二十）「国語欄」

鶏

（四年）趙東□

小屋の中で雌鶏の鳴き聲が、さわがしく聞える。父は「今卵を産むのだ」とおつしゃつた。暫くたつて行つて見ると、成程箱の中に真白な卵がさも温かさうに横はつてゐた。私の家に來てからかれこれ十一程産んだ。雌鶏が五羽

雄鶏一羽、一間四方に仕切つた中に、さわぎながら□まつてゐる、雌鶏は、茶のコーチンで、雄鶏は白のレグホンである。今年の五月頃から六月頃にかけて、□を孵化するんださうです。雌鶏は、雪の未だ振らない十二月始め頃に川の□から五羽、籠に入れて送つて來たのです。

一一八一三（一九四〇・七・十一）「国語欄」

生意氣な鼠

□松尋小校　洪性□

此の頃毎晩のやうに、台所でかだかだする音が聞えて來る。一昨晩　兄さんが、僕にあの鼠を取らうと言つたので、僕は「よし」と言ふが早いか、ほうきを取り出し、兄さんははたきを持つて台所に下りた。兄さんははたきで、板をたゝきながら探したが、見つからないので、ふと□□のすみの方を見ると、鼠が小さくなつてちゞこまつてゐる。僕はほうきでなぐらうとすると、何時の間にか棚の上に上つてしまつた。（續）

一一八一五（一九四〇・七・十三）生意氣な鼠（下）「国語欄」

生意氣な鼠（下）

□松尋小校　洪性□

やがて鼠は棚の上で辨當箱や皿などを、落したりわつたりしてあばれだした。僕は此れを見てしゃくにさわるので、「しゆつ〳〵」と言つて追ひまくつた。すると間もなく板の上に下りて來たのをほうきでたゝかうとしたら一すばしこく又棚の上に上つたり下りたりする中に、鼠はとう〳〵兄さんのはたきにうたれて足をふるへながら死んでしまつた＝[11]　それを見ると何だかかはいさうな氣がした。（おはり）

小学生の綴り方の連載は、一九四〇年八月十二日（一一八四五）の「学校が始まるまで」で終わり、その後「国語欄」は約二カ月間掲載されることなく、一九四〇年十月十日（一一九〇四）より、新たな装いで再度掲載され始めた。

三、「国語欄」の「国語講座」

一一九〇四（一九四〇・十・十）～一二一七六（一九四一・七・十二）

一九四〇年十月十日（一一九〇四）から「国語欄」は再度掲載され始めるが、一九四〇年八月十二日（一一八四五）までの「国語欄」に比して、掲載スペースを拡大している。それまではベタ組で主に笑い話や小学生の綴り方を掲載するだけだったが、この時点から「国語欄」は毎回一段あたり一五行から二〇行（一行当たり一五文字）で、五段から六段の紙面を割くようになり、各回複数の記事を載せるようになった。なお、「毎日新報」の紙面のサイズは下段広告のスペースも含めると、一〇五行一五段となっているので、第四面の五％弱から八％弱のスペースが割かれていた計算になる。

「国語欄」では、日本語の文字のポイントは朝鮮語の文字より一段階大きくなっており、読みやすくなっている点は従来通りである。

この時から「国語欄」において「国語講座」の連載を始めるとともに、同時に毎号、日中戦争などの時事問題を扱った記事を一本ずつ掲載し始めた。これらの記事はタイトル以外のほとんどの漢字にはルビがふられており、次に紹介する記事のように、その文体や使用語彙は一般の日本語の新聞記事と変わらない水準のものである。

一一九一〇（一九四〇・十・十六）

われ等も戰士一力を出し切らう一劃期的な國民總力運動

總督府では非常時局に處しての覺悟を新たにし國民全部の有つたけの力を遺憾なく発揮させるために朝鮮の國民組織新體制について前週から屢々局長會議を重ねて來ましたが今度漸くその成案を得ましたので來る十六日に臨時道知事會議を開催し正式にこれを發表することとなりました。

朝鮮國民組織の新體制はこれを國民總力運動と名付けま

す。目指すところところは、わが國體の本義に基いて内鮮一體の實を擧げ、各人が自分の受け持つてゐる仕事を通じて滅私奉公の誠をいたし、以て國防國家體制を完成せしめ、東亞新秩序の建設へ邁進せしめるにあるのです。

南總督閣下が總裁となり、その指揮下に國民精神總動員運動や農村振興運動等と密接に結びついて物心兩方面の運動を益々力強いものとして、國民の全部の力を惜みなく出しきらうとするのであります。

若干の例外を除き、この時期の「国語欄」の紙面は「国語講座」と、一般記事から構成され、一般記事は復刻版では一九四〇年十月十日（一一九〇四）から一九四一年七月十二日（一二一七六）まで二百二十二本の記事が確認できる。一般記事の約三分の一は戦勝気分に酔わせる日中戦争絡みの話題、三分の一は枢軸国と連合国との戦争絡みの話題をテーマとした文となっている。

一方、「国語講座」では「一、二、三」などの漢語数詞や「金」、「李貞子」などの姓名など、ごく少数の漢字以外は総てカタカナで表記されたデス・マス体の文となっており、まずカタカナで日本語を学ぶ小学校低学年までも読者対象としていたようである。

また、すべての日本語に朝鮮語の対訳が付されている。朝鮮語の活字は日本語の活字より小さくなっており、日本語本文を主とする位置付けがなされている。

当時、「内鮮一体化」を口実にした第三次教育令の施行（一九三八年）にしたがい、学校教育で朝鮮語教科が廃止されていった当時、朝鮮人学童たちは学校で朝鮮語の読み書きを学ぶ機会を剥奪されていた。したがって、この「国語講座」の朝鮮語対訳文は、「国語欄」を通じた「国語」学習の過程で、使いようによっては朝鮮語の読み書き能力をも高めることに寄与するものであっただろう。「国語講座」の紙面づくりを担当していた「毎日新報」編集部スタッフがこのことを認識していなかったはずはなく、むしろ「国語普及」を目的とした欄ではあるが、日・朝対訳文をもとに、朝鮮語

読読み書き能力の向上をも期待していたであろうと考えられるのである。

同じく毎日新報社が朝鮮人読者向けに発行していた週刊の日本語新聞「国民新報」（一九三九年四月三日創刊、毎日曜日発行）では、「国語全解・国語常用運動」の要請を受け、一九四二年六月七日（第百六十五号）から、二面分を割いて「こくごはやわかり」という紙面を作り始めた。同年七月五日（第百六十九号）からは「国語工夫室」（「国語勉強室」の意）と紙面のタイトルが変わり、同年七月十二日付け「国語工夫室」面には「国語をおぼえるためには」という掲載文で、次のように、「諺文」（朝鮮文字）も同時に学ぶことを推奨していた。

國語を おぼえる には どうしても「ひらがな」と「カタカナ」とこの二つの 文字を ならはなくては なりません。

ア イ ウ エ オ
아 이 우 에 오
あ い う え お

これは 二とほり ここに 表にして ありますから 諺文と あはせて べんきゃうして ください この〝あいうえお〟と〝アイウエオ〟は 諺文の〝아야어여오요〟と おなじもので これは 五十一字づつ あはせて 百二字 あります これさへ おぼえれば 國語も さう むづかしい ものでは ありません。

朝鮮総督府治政下の学校教育では、「国語」科は直接教授法に依るものとされ、「国語」教科書に朝鮮語対訳は載せられなかった。したがって、毎日新報の「国語」欄はこの壁を突き破ったものでもあった。

解放後、日本語版朝鮮総督府機関紙「京城日報」社から日本人従業員が十月末をもって排除された直後の十一月二日号に、「朝鮮人従業員一同」の署名入りで「謹告」という一文が掲載されたことがあるが、そこに

はかつて植民地統治に協力してきた紙面づくりに対する慙愧の思いが、次のように綴られている。

八月十五日を契機として、朝鮮内の凡ゆるものは我等に戻りつつある。この線に沿って「京城日報」も今日を以て我等の手に帰したが、我等はその何と遅かりしを□つのみである。偖て「京城日報」が過ぐる四十年間の長きに亘って歩んで来た途程に就ては、我等朝鮮同胞として許すべからざるものの多々あるは否み難い。仍つて、いくらかなりとも職を奉じてゐた我等としては、圧力に強いられて動いて来たとはいへ、其の責に悶えてゐるのである。

朝鮮総督府の機関紙編輯という「朝鮮同胞として許すべからざるもの」にたずさわった「京城日報」従業員の負い目は、この時に始まったものでもなかっただろうし、「毎日新報」従業員も同じ思いであっただろう。朝鮮語科目が学校教育から完全に一掃された時代、更に「国語普及」のための「国語」欄に「毎日新報」の紙面が割かれるようになったが、日本語も朝鮮語もいずれも読めない非識字者が朝鮮民衆の過半数をはるかに越えていた状況で、「国語欄」の朝鮮語対訳文の方にむしろ注目して学習してほしいという思いを編集者たちが抱いていたとしても不思議なことではない。

ところで、日本語本文中で、漢字で表記された姓名は、その朝鮮語対訳文では下に示すように朝鮮漢字音をハングル表記した場合と漢字で表記した場合が混在している。この朝鮮語対訳文は完全なハングル専用文で書かれているのに、ただ姓名だけ漢字で書かれているのは意図的ですらある。次のリストで矢印の上は日本語文、矢印の下は対訳朝鮮語文における文字表記である。

金サン→김선생（一九四〇年十月二十三日）、李→李（同上）、金サン→金선생（同上）、金→김（同年十月二十四日）、金サン→김선생（十月二十五日）、李→李（十

月二十五日）、李貞子→李貞子（十一月十五日）、昌植→창식이（十二月九日）

一九四二年以後になると、創氏改名された名前は「国語読み」（日本漢字音で読んだり、話したりすること）が露骨に強要されたが[12]、一九四〇年の時点でもこうした「国語読み」の圧力がかかっており、この「国語講座」の執筆者が躊躇しながらもこうした圧力に抵抗する様子をここから読み取るのは、読みすぎであろうか[13]。

「国語講座」で取り上げられた日本語文は、日常生活を場面にした話題をもとにした話しことばの文体になっているが、最初の一九四〇年十月十日（一一九〇四）から一九四〇年十月十五日（一一九〇九）までの五回は対話文にはなっていない。ここでは「数、曜日、年月日、台所用具」を取り上げている。

以下、「国語講座」の第一回目と二回目だけ紹介する。

一一九〇四（一九四〇・十・十）「国語欄」の「国語講座」

カズ［数］

ミナサン カズヲカゾヘマセウ

여러분 수효를 세이십시다

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

ヒトツ フタツ ミッツ ヨッツ イツツ ムッツ ナナツ ヤッツ ココノツ トウ

하나 둘 셋 넷 다섯 여섯 일곱 여덟 아홉 열

イチマイ 한 장 イチジョウ［一畳］일 조 イッポン 한자루 イッサツ 한 권 ヒトビン 한 병 イチダイ 일 대 イッカイ［一階］한 층 イッコ 한 개 イッソク 한켜레

ヨウビ［曜日］

日ヨウビハ ヤスム日デ ゴザイマス

일요일은 쉬는 날입니다

月ヨウビニハ ガクコウヘ ユキマス

월요일에는 학교에 갑니다
火ヨウビハ ワタクシノ オソウジノ ヒデゴザイマス
화요일은 저의 소제하는 날입니다
水ヨウビハ 五ジ カンノ日デ ハヤク カヘリマス
수요일은 다섯시간 이니까 일직 도라갑니다
木ヨウビ ニハ オバアサンノ トコロヘ イツテ マイリマス
목요일에은 할머니한테 갓다옵니다
金ヨウビハ イチバン タノシウゴザイマス
금요일은 제일 질겁습니다
ナゼデスカ
무엇때문입니까
土ヨウビト ニチヨウビガ ツヅイテ キマスカラ
토요일과 일요일은 계속해서 오니까요
土ヨウビハ オフロヘ ハイッテ アタラシイモノニ キカヘマス。ソシテ バンゴハンハ トテモ ゴチソウガ デマス
토요일에는 목욕을하고 새옷을 가라입습니다。그리고 저녁에는 만수성찬이 나옵니다

「国語講座」の初回に掲載された「ヨウビ」は小学生の一週間の生活を描いたもので、学童を読者対象と見なしていることを反映したものである。これ以前に掲載されていた綴り方にくらべ、「国語」の初歩的な学習に焦点を合わせている。「ヨウビ」のあとは、日常卑近な話題の会話文体の文（対話文ではない）で〝ツキ【月】、ヒ【日】、とし【年】〟など[14]が一九四〇年十月十五日（一一九〇九）まで、取り上げられている。

その後、一九四〇年十月十六日（一一九一〇）からは対話文になっており、「電車、天気、掃除、火鉢、朝の暮らし、電話、他家への訪問、来客、お悔み、誕生」など、日常生活の卑近な場面を設定した対話文が一九四〇年十一月二十日（一一九四四）まで二十九回にわたって掲載されている。なお、一一九二五（一九四〇・十一・一）までは、対話文のタイトルには朝鮮語訳が付されていないが、一一九二八（一九四〇・十一・四）からは「フネ【배】」のように対話文のタイトルにまで朝鮮語訳が付されるようになる。

「国語講座」初回の一九四〇年十月十日（一一九〇四）から一九四〇年十一月二十一日（一一九四四）までの三十四回の中では、次の「シンブン」という文で時局に触れられているだけである。

一一**九**三三（一**九四**〇・一一・**九**）「国語講座」
シンブン［新聞］
コノゴロノシンブンハ センソウノ コトデ イッパイデ ゴザイマスネ
ナニシロ ヒジョウ ジ デスカラ
ケサノ テウカンヲ ゴランニナリマシタカ
イ、ヘ マダ ミマセンガ
キノフノ ゴウグヮイデ ナイカクノ ソウジショクガ ハウゼ ラレタデセウ アノコトガ クワシク デテ キマシタ ユウカン ニモ デルデセウ
コノ ゴロノ シャカイメンハ ヒジャウニ オモシロイデスネ
カテイ ランハ サンカウニ ナルコトガ トテモ タクサン デテキマスネ
フジン タチモ ケイザイランヲ ヨク ミルヤウニ ナラナケレバ ダメデスヨ
ムツカシクテ ハジメハ ナカナカ ダメデスネ

一九四〇年十一月二十一日（一一九四五）から十二月六日（一一九六〇）までは、十四回にわたって童話が載せられている。それらの題目は「忘れたお金入れ」、「王様とお百姓」、「ウサギの相談」、「力」、「カタツムリ」、「感心な犬」である。

一九四〇年十二月七日（一一九六一）からは日常対話文「イチビ【장날】」［市日］、「メイシン【미신】」［迷信］、「アイサツ【인사】」［挨拶］、「コクキ【국기】」［国旗］、「シホウ【사방】」［四方］〃が載せられている。以下に示すように「コクキ」は日の丸掲揚を強要する内容で、それまで「国語講座」で取り上げられた文とは様相を異にしている。

一一九六三（一九四〇・十二・九）「国語欄」の「国語講座」

一一九六五（一九四〇・十二・十一）「国語欄」の「国語講座」

コクキ【국기】［国旗］

コンニチハ

ナニカ ゴヨウデ ゴザイマスカ

オタクデハ コクキヲ タテルコトオ ワスレテ ヰマスネ

ア、 サウデシタ ワスレテ ヰマシタ ＝ スグタテマス

ソコニ アル リヤクレキ［略歴］ニ コクキノ シルシガ ツイテ ヰル ヒガアリマセウ ＝ ソノ ヒガ コクキヲ タテル ヒデスカラ ワスレナイヤウニ シテクダサイ

コレカラハ ワスレナイヤウニ キヲツケマス

ソレカラ ユウガタニハ カナラズ シマツテ クダサイ

ハイ シマヒマス

ヨクアサマデ タテテオク ウチガ アルガ アサタテタラ ユウガタニハ カナラズ シマツテ タイセツニ シテクダサイ

このあと、一九四〇年十二月十三日（一一九六七）からふたたび童話「テフトコドモ【나비와아이】」［蝶と子ども］など[15]が同年十二月三十日（一一九八四）まで十五回にわたって連載されている。

一九四一年一月九日（一一九九三）から一九四一年一月十六日（一二〇〇〇）までは七回にわたって、日常会話の対話文「挨拶の仕方【朝の挨拶】（아침인사）」など[16]が掲載されている。

さらに一九四一年一月十七日（一二〇〇一）から「寶石ノネウチ［宝石の値打ち］」など[17]三十六の童話が一九四一年七月十二日（一二一七六）まで百二回にわたって掲載されたあと、「国語欄」における「国語講座」の連載は終了している。

以上概観したように、「国語欄」に掲載された「国語」学習用の日本語文は時局と距離をおいた類のものだった。

なお、この間一九四一年二月十七日（一二〇三二）

から同年四月十三日（一二〇八七）まで三十八回にわたって京城師範学校、淑明高女など中等学校の国語科の「今年度の入学試験問題」が連載されているが、これは「国語の普及」を目的とした「国語欄」が取り扱っている会話文とは全くかけ離れたものであり、また、対話文と童話が交互に掲載されるなど、編集方針に一貫性が見られない。

ところで、ここに掲載された「国語科」入試問題の聴き取り問題には、次に示すように、日中戦争への出征兵士を送り出す風景や、日中戦争で戦死した兵士を日本に送り戻す上海を舞台にした風景が取り上げられている。ある中学校では、「一死報国」が模範回答とされそうな、「あなたはどういう風にして、天皇陛下に恩義を盡すつもりですか」という質問が口頭試験問題とされていた。

一二〇五六（一九四一・三・十三）

「今年度入學試驗問題」誠信家政女學校

一　聽取（兵隊さん）

空は良く晴れて風もなく春のやうな暖かい日、私は吉田さんと二人で京城驛へと向つた。今日は兵隊さんが京城を通過して支那へ行かれるのです。

驛に行つて見ると、身動きも出來ぬ位に詰めかけた見送の人々、青年團、婦人會、大人、子供、赤ん坊を連れた人など數知れぬ人達が手に手に旗を持つて滿洲の野で戰ふ私が勇士の姿を今か今かと待つてゐる。

汽車の着く時刻は近づいた。

俄かに起る出征の歌。

天に代りて不義を討つ

忠勇無雙の我が兵は

歡呼の聲に送……

人々は太鼓とともに歌ひ出した。

もう皆は胸ををどらせてゐる。

まもなく汽車は威勢よくプラットホームにすべり込んだ。

「萬歳〳〵〳〵。」

叫び聲は大人も子供も一緒になつて天地を震わすやうな勢である。兵隊さんも日にやけた元氣な顔で、旗を打ち振り萬歳を叫ぶ。プラットホームは旗の波である。突然すみから君が代を歌ふ聲が起つた。皆が聲を合はせて歌ひ出した。兵隊さんも歌つて居る。青年達の太鼓はいくほひよくなりひゞく。私も聲を限りに歌つた。

一二〇六九（一九四一・三・二十六）

「今年度入學試驗問題」東星商業學校

聽取（四十分）

其ノ一

夕日がいまにも西の方へ姿を消さうとしてゐた時であつた。聞いたことのあるやうな音が、長い上海の街路に沿つて、僕の家に傳はつた。悲壯なラッパの音である。僕も其の音を聞くと靜かにしてゐる事が出來ないで急いで驅出して行つた。さうすると軍艦旗を先頭にして數十柱の無言の凱旋である、僕は其のなくなられた兵隊さんの遺骨に對して自然に頭が下がつた。あの中にはすぐれた功績を立てられてゐる人もあるだらう。又多くの困難なめにあつて死んだ人もあるだらう。僕らは幸福だ。あの戰死された兵隊さんは、此の□れ果てた支那を良き平和にする爲に力を盡してゐるのだ。さうであるから僕は心の中でお禮を述べ、又故郷で永遠に安まれるやうに祈つて、遠い上海から兵隊さんを見送つた。

(イ) 今ノ話ノ中ニ名ニハカカレテアリマシタカ

(ロ) 何處ノオ話デシタカ

四．国語教室

一二一七七（一九四一・七・十三）～一二五二七（一九四二・六・三十）

四―一．国語教室

一九四一年七月十二日（一二一七六）をもって「国語欄」の連載が終わり、引き続いて同年七月十三日（一

二一七七）から一九四二年六月三十日（一二五二七）まで二百七十一回にわたって「国語教室」が連載される。「国語教室」の紙面のスペースは、これに先行する「国語欄」とほぼ同じである。

一九四一年七月十三日（一二一七七）から一九四二年一月二十日（一二三六七）までの百四十四回は、各号に基礎的な「国語」学習用のカタカナ書きの読み物と、漢字ひらがな交じり文（総ルビ）の一般的な日本語レベルの読み物が朝鮮語訳とともに掲載されている。カタカナ書きの文は、子どもが書いた作文のような体裁を取ったものである。一九四一年九月十七日（一二二四三）までは、次のような政治性を感じさせない文ばかりである。

なお、角括弧（［　］）内の記述は、すべて本稿執筆者（熊谷）による注記である。

一二一七七（一九四一・七・十三）「国語教室」

メダカ【송사리】［めだか］

ワタクシハ オニイサンタチト カハヘ メダカヲ スクヒニ
イキマシタガ オニイサンタチガ ナンビキモ メダカヲ ス
クフアイダニ ワタクシハ マタ（ママ）ピキモ トレマセン。メ
ダカスクヒニ ムチユウニナツテ キルウチニ ワタクシハ
ヒトリノコサレ ミチニマヨツテ コマリマシタ。

一二一七九（一九四一・七・十五）「国語教室」

カメ（거북）［亀］

マチノ マガリカドデ カメコ［亀の子］ヲ ウツテキマシ
タ＝ヒトリノ コドモガ ヤツテキテ ソノ カメノコヲ カ
ツテ カヘツテ オウチノイケニ ハナシテ ヤリマシタ＝カ
メハ ナンベンモ オジキヲ（ママ） シナガラ イヒマシタ 「アリ
ガタウ アナタハ ホントニヨイ ヒトデス イマノ ウラシ
マタラウ ナンデス」 スルト コドモハ イヒマシタ 「チ
ガフヨ ウラシマタラウヂャナク ボクハ タマノタラウタ（ママ）
ヨ」

一二二四三（一九四一・九・十七）「国語教室」

キレイナテフ（귀여운나비）［きれいな蝶］

ドコカラカ テフガ トンデキマシタ
テフハ ホントウニ キレイデス
テフハ ドコカラ クルノデセウ
テフハ ムシカラデタノデス
ムシハ ナクノニ テフハ ナゼ ウタヲ ワスレタノデセウ

しかし、その後掲載された一九四一年九月十八日（一二二四四）の「みんなはたらけ」をはじめとして、「貯金」（一九四一・十・二）、「勤労奉仕」（一九四一・十・十）、「我等の汗」（一九四一・十・二十）、「モスコーの運命」（一九四一・十・二八）、「戦地の先生」（一九四一・十・二九・一九四一・十・三十）、「国民皆労日」（一九四一・十一・十七）、「お正月」（一九四一・十二・二六）、「新年の誓い」（一九四二・一・七）、「職域奉公」（一九四二・一・十）、「えらい兵隊」（一九四二・一・十二）、「税金」（一九四二・一・十四）の十二回の文は明確な政治性を帯びたもので、勤労奉仕、節約・貯蓄、将兵慰問など、戦時総動員体制への協力を煽る文章となっている。この十二回という回数は、一九四一年七月十三日（一二五二十七）から一九四二年一月二十日までの間に復刻版で掲載が確認された、こどもが書いた形でのカタカナ文読み物百四十回全体に比べれば、さほど多くないともいえる。しかし、太平洋戦争の勃発（一九四一年十二月八日）のあとに比較的多く現れている点は注目される。

一二二四四（一九四一・九・十八）「国語教室」

ミンナハタラケ（모두일하자）［みんな働け］

ハタラキザカリノモノハ モチロン コドモモ ロウジンモ
ハタラクチカラノ アルモノガ ブラブラ アソンデヰイ ヨイトキデハアリマセン ＝コクミン ゼンブガ ヘイタイサント オナジ ヤウニ ケツシノ カクゴデ一ハタラクトキデス＝ ツヨイイキデ ミンナ ゼンリョクヲササゲマセウ

一二二五八（一九四一・十・二）「国語教室」

チヨキン（저금）［貯金］

「チリモ ツモレバヤマトナル」トイヒマス＝ムダツカヒヲ ヤメテ 一センデモ チヨキンシマセウ＝ヤガテ ソレハ タクサンノ オカネニナツテ コクカ［国家］ノ オヤクニタツノデス

一二二六六（一九四一・十・十）「国語教室」

キンロウホウシ（근로봉사）［勤労奉仕］

サア ゲンキヨク ナラバウ。セイレツダ。アサヒモ イキホイヨクノボリハジメタ。ザクザクト ジャリミチヲ フミシメテユク。ミンナ カタニ シヤベルヲ カツイダ。ボクラハ ヤルゾ キンロウホウシ。

一二二八四（一九四一・十・二十九）「国語教室」

センチノセンセイ（전지에계신 선생님）［戦地の先生］

センセイ ソノゴオカハリ ゴザイマセンカ。アツイナツモ イツノマニカ スギテ スズシイ アキヲ ムカヘマシタ。ニガクキ ニハ ヨク ベンキヤウシテ ヨイ セイセキヲ トリタイト オモヒマス＝センチ［戦地］デ ヘイタイサンハ オクニノ タメニ タ、カツテ ヰルノデスカラ

一二二八五（一九四一・十・三十）「国語教室」

センチノセンセイ（二）（전지에계신 선생님）［戦地の先生］

ワタクシタチ コドモモ アソンデ バカリハ ヰラレマセン。ムダヅカヒヲ シナイデ ネツシンニ ベンキヤウシテ リツパナ ヒトトナルノガ 一バン ヨイコトダトオモヒマス。センセイ オクニノタメニ リツパナ オテガラヲ タテテ クダサイ。ソシテ マタ ワタクシタチノタメニ ガクコウニカヘツテクダサイ。

一二二九〇（一九四一・十一・四）「国語教室」

セキタンセツヤク［石炭節約］

セキタンハ ヒジヨウニ タイセツナモノデス。イチニチモナクテハ コマリマス。セキタンヲ チノソコカラ ホリダ

スヒトニ ホントウニ カンシャシナケレバ ナリマセン。コノコトヲ カンガヘテ ワレワレハ セキタンヲ ウントセツヤクシマセウ。

一二三〇三（一九四一・十一・十七）「国語教室」

コクミンカイロウビ（국민개로일）［国民皆労日］

ケフハ コクミンカイロウビダ ＝コクミンガ 一オク一シンニ ナツテ クニノ タメニ ツクスノダ ＝ワタクシタチモ オトナニ マケズニ リツパニ ハタラカウ

一二三五四（一九四二・一・七）「国語教室」

シンネンノチカヒ（새해의맹세）［新年の誓い］

ワタクシハ シンネンヲ ムカヘテ カタク ココロニチカヒマシタ ＝ドンナ チヒサナ ゴホウコウデモ ヂウゴ［銃後］ノ コトモトシテ（ママ） マモツテ ユカウ ＝ミンナノ マゴコロノチカラハ キツト ニツポンヲ ツヨク スルダラウ、ト ＝ヘイタイサンヲ オモフト オセウガツモ ノンキニハ デキマセン

一二三五七（一九四二・一・十）「国語教室」

ショクヰキホウコウ（직역봉공）［職域奉公］

ボクタチハ カタネバ ナリマセン ＝ソノタメニハ ゼンコクミンガ ＝イツチダンケツセネバナリマセン ＝ボクタチハ イツセウケンメイベンキヤウシマセウ ＝ソレガ ボクタチ コドモノ シヨクイキホウコウデス

一二三五九（一九四二・一・十二）「国語教室」

エライヘイタイ（용한병정）［偉い兵隊］

アライナミヲ―テデ―ワケナガラ―オヨイデイツタサウダ ＝フリソ、グ―タマノナカヲ―スツパダカデオヨイデイツタト ＝エライダラウ―ヘイタイサンハ ＝ホンコンガオチタヒ―オトウサンカラ―キイタハナシ

一二三六一（一九四二・一・十四）「国語教室」

ゼイキン（세금）［税金］

ヘイタイサンハ センソウニデテ クニノタメニ一セウケンメイニ ハタラヰテイマス ＝ソレダノニ ワレワレハ マイ

ニチブジニ クラシテヰマス＝オクニノオカゲデ｜シアワセニ クラセル コトヲ カンガヘルト ワタクシタチハ ゼイキンダケデモ ヨク オサメテ｜ゴオンガヘシヲ シナケレバナリマセン

四―二．「国語教室」の「日常会話」

一九四二年一月二十二日（一二三六九）からは紙面構成が変わる。子どもが書いたように装ったカタカナ文の子供向け読み物の掲載が終わり、「日常会話」というタイトルのもとに日常会話文が朝鮮語訳と共に掲載されるようになる。「日常会話」は復刻版では一九四二年六月三十日（一二五二七）までの間に百二十六回の掲載が確認されるが、これは内容面から三つの時期に分けることが出来る。一九四二年一月二十二日（一二三六九）から二月二十六日（一二四〇四）までは「挨拶」、「天気」、「時間」、「立居」、「食事」、「初対面」、「方位」、「道を尋ねる」、「訪問」などを題目とした、カタカナだけで表記された日常対話文を載せている。また朝鮮語の対訳が付されている

この日本語対話文に添えられた朝鮮語訳をみると、朝鮮語の階称に留意して丁寧に訳されており、著述の力点は、朝鮮語訳の方にも置かれている感がある。執筆者の朝鮮語に対する愛着を感じさせるものであり、前述したように、こうした点からも「国語普及」の建前のもとで、植民地言語政策によって崩されつつあった朝鮮語言語共同体の維持・発展を図っていたと思われるのである。下に示した「인사【アイサツ】」のように日本語対話文の標題が、まず朝鮮語で表記されていることは、「国語教室」が「国語」紙面に載せられた記事だとはいえ、朝鮮語新聞「毎日新報」編輯の基本的立場を保持し、朝鮮語を媒介語として「国語」を学ぼうとする民族的主体性を闡明しているものだと解することが出来る。

注目されることは、太平洋戦争のさなかにあっても「国語教室」で取り上げられた会話文には、当時の軍国主義をにおわせる文が全く見られない点である。ここ

からは、当時の戦時体制に対する編集者の消極的非協力の姿勢を読みとることもできるだろう。

一二三六九（一九四二・一・二十二）「日常会話」

一・**인사【アイサツ】**

オハヤウゴザイマス。

밤새 안녕하십니까。

オハヤウ。

안녕히 주무셧소。평안히 쉬엇나。잘잣니。

コンニチハ。

진지 잡수셧습니까。식후시오。밥먹엇니（낫에 하는인사）

コンバンハ。

진지잡수셧습니까。밥먹엇니。（밤에하는인사）

オヤスミナサイ。

안녕히 주무십시오。안녕히주무시오。

オヤスミ。

잘자게。잘자거라。

ゴキゲンハイカゞデスカ。

안녕하십니까。

一二四〇四（一九四二・二・二十六）「日常会話」

九、**訪問【三】**

「チユウショクヲ イッショニ メシアガリマセンカ。」

「점심을 가치 하시지요。」

「アリガトウ ゴザイマス。チョット ホカニ ヨリミチヲ セネバナラン トコロガ アリマスノデ コンニチハ コレデ オイトマ サセテ イタダキマス。」

「고맙습니다。잠깐 들러가야할 될데가 잇서서 오늘은 이것으로 실례하겟습니다。」

「ソウデスカ。デハ ソノウチニ マタ オメニ カカリマセウ。ドウカ ミナサンニモヨロシク モウシ アゲテ クダサイ。」

「그러십니까。그럼 일간 또 뵙지요。부디 여러분께 안부 전해주십시오。」

「カシコマリマシタ。サヤウナラ。」

「잘알앗습니다。갑니다。」
「サヤウナラ。」
「평안히 가시오。」

一九四二年二月二十七日（一二四〇五）から一九四二年五月二十一日（一二四八七）までは、その前と同じく「日常会話」のタイトルのもとに「基本会話」とサブタイトルを付して六十一回にわたって、基礎的な会話文学習教材を掲載している。表記は漢字カタカナ交じりとなっている。すべての漢字にルビが振られているが、以下、本稿に転載するにあたってはこれを省略した。

一二四〇五（一九四二・二・二十七）「日常会話」

基本會話

（1）現在・過去・未来【二】

（一）本ヲ讀ミマス。

本ヲ読ミマシタ。

（책을 봅니다。책을 봣습니다。）

（2）道ヲ歩キマス。

道ヲ歩キマシタ。

（길을 걸읍니다。길을 걸엇습니다。）

（3）字ヲ書キマス。

字ヲ書キマシタ。

（글씨를 씁니다。글씨를 썻습니다。）

（4）子供ガ笑ヒマス

子ドモガ笑ヒマシタ。

（아이가 웃습니다。아이가 웃엇습니다。）

（5）早ク起キマス。

早ク起キマシタ。

（일찍 일어납니다。일찍 일어낫습니다。）

一二四八七（一九四二・五・二十一）「日常会話」

基本會話

【一一】敬語會話

【五五】何處かへ御旅行されると聞きましたが何時（いつ）御出發

ですか。

明日から南鮮地方に出張することになりました。

（어디 여행하신다더니 언제 떠나십니까. 내이부트 남선지방에 출장가기로 되었습니다）

【五六】何時に　お立ちになりますか。

朝十時に汽車で行きます。今度の旅行は汽車、汽船、自動車等凡ゆるものに乘るやうになります。

（아침 열시차로 갑니다. 이번 여행은 기차 기선 자동차 할것없시 말끔 타게 됩니다）

一九四二年五月二十二日（一二四八八）から六月三十日（一二五二七）までの「日常会話」では復刻版で確認される限り三十二回にわたって「基礎会話」というサブタイトルが外されて対話文が載せられている。六月二十九日（一二五二五）まではすべて「一、인사【二】」［挨拶］がテーマで、最後の六月三十日（一二五二七）だけが「二、인사【三】」［挨拶］とされているところから見ると、急に編集方針が転換されたために、こうした不自然な形で連載が中途で終わってしまったと思われる。このころは、一九四四年から朝鮮で徴兵制を実施することが閣議決定（一九四二年五月八日）され、徴兵制実施に備えて「国語全解・国語常用」運動が強力に推進されはじめた時期に当たり、このことが編輯方針の変更に大きく影響していると思われる。

以下は、「国語教室」期に連載された「日常会話」の例である。

一二四九二（一九四二・五・二十六）「日常会話」

一、인사【二】［挨拶］

【二】아침인사【四】［朝の挨拶］

○昨夜ハ良ク眠レマシタカ。

（어젯밤은 잘 주무셧습니까）

○明方カラ目ガ醒メテ、眠レマセンデシタ。

（새벽부터 눈이 떠져 잠을 못잣습니다）

○朝ラジオ體操ヲオヤリデスカ。

（아침에 라디오 체조를 하십니까）

○私ハ毎朝冷水浴ヲヤリマス。
（나는 매일 아침 냉수욕을 합니다）
○朝食前三十分位近クヲサンポシマス。
（아침 먹기전에 반시간 가량 근방을 산뽀합니다）

一二五二五（一九四二・六・二十八）「日常会話」（挨拶）
一、**인사【一】**［挨拶］
【六】겨울인사【(六)】［冬の挨拶］
【補充会話】
○酷イ吹雪デスネ、之デハ外ヘ一歩モ出ラレマセン
（눈보라가 지독하네요 이래서는 밖을 한발자죽도 나갈수 업습니다。）
○寒イ時ハ家ノ中デ、火鉢ニカジリツイテヰタ方ガ良イデス
（치운때는 집속에서 화로에 달라부터 잇는편이 좃습니다。）
○雪解ケデ道ガ悪イデスネ。
（눈이 녹아서 길이 진데요。）

一二五二七（一九四二・六・三十）「日常会話」（挨拶）
二、인사【二】［挨拶］
【一】초면인사【一】［初対面ノ挨拶］
【甲】初メテオ目ニ掛カリマス。私ハ木村トモウシマス。
（처음 뵙습니다 저는 목촌이라고 합니다）
【乙】私ハ青木ト申シマス。
（저는 청목이라고 합니다）
【甲】オ名前ハ伊藤君カラ 伺ツテ 存ジテ居リマス。
（성함은 이등군한테서 듯□□ 알고잇습니다）
【乙】デハ、貴方ハ伊藤サント オ知合デスカ。
（그러면 노형은 이등씨와 친분이 계십니까）
【甲】サウデス。私ガ今度京城（けいじょう）ヘ參ツタノモ、伊藤君ノオ世話デス。
（그럿습니다、제가 이번 경성 온것도 이등군의 주선입니다）

一九四二年五月二十一日（一二四八七）に「日常会話」の「基本会話」が終わり、一九四二年五月二十二

日（一二四八八）から再び「日常会話」が始まる。

一二四八八（一九四二・五・二十二）「日常会話」

一、인사【二】［挨拶］

【二】아침인사【四】［朝の挨拶］

○昨夜ハ良ク眠レマシタカ。

（어젯밤은 잘 주무셨습니까）

○明方カラ目ガ醒メテ、眠レマセンデシタ。

（새벽부터 눈이 떠져잠을 못잤습니다）

○朝ラジオ體操ヲオヤリデスカ。

（아침에 라디오 체조를하십니까）

○私ハ毎朝冷水浴ヲヤリマス。

（나는 매일아침 냉수욕을 합니다）

○朝食前三十分位近クヲサンポシマス。

（아침먹기전에 반시간 가량근방을 산뽀합니다）

この「国語教室」は、「国語普及」運動でも活用されていた。一九四二年五月、朝鮮総督府が「国語全解・国語常用」のための施策の立案を各地方行政機関に求めた際、たとえば江原道知事が道内の地方行政機関に向けて行った諮問「國語生活ノ促進徹底ヲ圖ルガ爲ニ採ルベキ方策如何」に対し、同道楊口郡は「［国語］講習所修了後ニ於ケル指導」方針として「從來ノ國語普及奬励施設トシテノ朝鮮放送協會發刊放送教本國語講座（初等中等ニ分科シテ毎日放送ス）ニ依リ毎日「ラヂオ」ヲ通ジテ又ハ毎日新報掲載ノ「國語教室」等ニ依リ講習修了後ニ於テモ凡ユル施設機關ヲ利用シ繼續シテ習得翫味セシメ以テ皇國臣民トシテノ精神修養ニ努メシムルコト」[18]と答申し、ラジオ放送の「国語講座」や、当時連載していた「毎日新報」の「国語教室」を利用するとしていた。

「国語教室」には、一九四二年一月二十二日（一二三六九）から同年六月三十日まで百二十一回にわたって毎号「今日の諺」が小さな囲み記事として掲載され、以下のような諺（漢字は総ルビ）とこれに対応する朝

鮮語の諺が示されている。ここで注意すべきことは、これらの諺の中には朝鮮語の諺が日本語訳されたり、日本語の諺が朝鮮語に翻訳され、長年用いられる過程を通じて、朝鮮伝来の諺として認識されることもある。諺の研究にとっては、こうした言語接触（翻訳借用）の解明は不可欠な課題であり、研究が進められるべき余地が多く残されている。

一二三七〇（一九四二・一・二十三）「今日の諺」

へまな奴は仰向けに轉んでも鼻が缺ける（안되는놈은 자빠저도 코가 깨진다）

手馴れた斧で足を斫る（아는도끼에 발찍힌다）

憎らしい子供に餅一切餘計にやる（미운아이 떡한개 더준다）

夫婦喧嘩は刀で水を斬る如し（내외싸움은 칼로 물베기라）

角立つた石は餘計に切られる（모진 돌이 좀더 맞는다）

事ならざれば祖先を怨む（안되면 조상탓）

叔父さん叔父さんといつて荷物を負はせる（아저씨 아저씨하고 길짐 지운다）

船賃のないものが先に乘る（선가 업는 놈이 먼저 오른다）

熱い汁の味知らず（끌른국에 맛모른다）

牛の耳に經を讀む（쇠귀에 경읽기）

闇夜に搗衣木を突き出す（아닌밤중에 홍두깨 내민다）

脚のない話が千里行く（발업는 말이 천리 간다）

煮上げた鍋に鼻汁（다끌흔 솟에 코풀기）

虎も自分の噂されればやつて來る（호랑이도 제말하면 온다）

耳を掩ふて鈴を盜む（귀가리고 방울도적）

餅つきの杵音聽いて漬物の汁から欲しがる（떡치는 공이소리듯고 김칫국부터달란다）

皿の飯も盛りやう一つ（접시밥도담기나름）

焚かない煙突から煙が出るものか（아니땐 굴뚝에서 연기나랴）

泣きながら芥子を食ふ（울며겨자먹기）
針の往く所に絲も往く（바늘간데실간다）
旱(ひでり)に豆の生えるや（가물에 공나기）
牛取られて牛小屋をなほす（소일코 외양깐고친다）
蛙がおたまじゃくしの時のことを考へない（개고리가 올창이쩍 생각을못한다）
密を食つた啞のやう（꿀먹은 벙어리 갓다）
粥にも飯にもならない（죽도 밥도 안된다）
舌先に斧（혀끗헤 도끼）
虎も自分のことを話せばやつて來る（호랑이도 제말하면 온다）
淺き川も深く渡れ（야튼내도 깁게건너라）
生ける犬は死せる虎に勝る（산개가 죽은범보다 낫다）
醫者と味噌は古い程好い（애사하고 된장은 오래될수록 조타）
家貧しくして孝子出づ（가난한 집에 효자난다）
大水に飲水なし（홍수에 먹을물업다）
あまり圓(まる)きはころび易し（너무둥글면 구르기 쉽다）
小兒喧嘩が大人喧嘩になる（아이싸움이 어른싸움된다）
天を見なければ星は取れぬ（하늘을 보아야 별을 따지）
臍が腹より大きい（배꼽이 배보다 크다）
圓い卵も切りよで四角（덩근 달걀도 비기에 따라 네모진다）
囁き千里（귓속 말이 천리）
餓えたる犬は棒を恐れず（주린개는 몽둥이맛 무서안는다）
豆腐で頭を打つて死ぬ（두부로 머리를 치고죽는다）
湯を水にする（숭늉을 냉수로 만든다）
蒔かぬ種は生えぬ（안뿌린 씨는 나지 안는다）
魚の眼に水見えず（고기눈깔에 물 안뵌다）
瓜の種子に茄子は生えぬ（외씨로 가지는 안난다）
上見ぬ鷲（위못보는 수리）
秋の扇（가을 부채）
樽に滿たざる酒は音がする（통에 안찬술은 소리가난

다）

泣きながら芥子を食ふ（울며 겨자먹기）

毬栗も内から破れる（밤송이도 속에서부터 벌어진다）

四―三．「国語教室」の「틀리기쉬운말」［間違えやすいことば］

一九四二年一月二十二日（一二三六九）から一九四二年六月三十日（一二五二七）まで百二十二回[19]にわたって「틀리기쉬운말」（間違えやすいことば）が連載されている。これは日朝両言語間の構造的相違から、当時生じていた（あるいは生じかねない）卑近な言語干渉事例を取り上げたものである。日朝両言語に精通した者にとっては、さほど真新らしい情報や分析が記されているわけではないが、当時における日朝両言語の対照分析の紹介として興味深いものである。以下は、その一例である。なお、原文の解説部分には日本語訳を付した。

一二三六九（一九四二・一・二十二）［間違えやすいことば］

기차를 타오＝汽車に乗る

（조선말로는「기차를 타오」「말을 타오」「자전거를 타오」。그러나 국어에 잇서서는 반드시「汽車に乗る」「馬に乗る」「自轉車に乗る」로서「を」아니요「に」。）

［朝鮮語では「기차를 타오」（逐語訳は〝汽車を乗る〟―訳注）「말을 타오」（逐語訳は〝馬を乗る〟―訳注）「자전거를 타오」（逐語訳は〝自転車を乗る〟―訳注）。しかし国語［＝日本語―訳注］においては必ず「汽車に乗る」「馬に乗る」「自転車に乗る」であって、「を」ではなく「に」。］

물을 먹는다＝水を飲む

（「食べる」가 아니라「飲む」。「담배를 먹는다」는「煙草を吸ふ」。）

［「食べる」ではなく「飲む」。「담배를 먹는다」（逐語訳は〝煙草を食べる〟―訳注）は「煙草を吸ふ」。］

一二三七〇（一九四二・一・二十三）［間違えやすいことば］

주인은 출입하엿소＝主人は外出しました

（국어의 잇서서의「出入」은「でいり」로서 들고 날고하는것。동내의。）

［国語における「出入」は「でいり」で、出たり入ったりすること。近所に。］

열급 먹는 사람은 편하겟소＝月給取りが樂でせう

（「월급먹는다」을 직역하면「月給を喰ふ」「월급탄다」또는「월급타먹는다」라고도하는바 어느거나 다「月給を取る」의 뜻）

［「월급 먹는다」を直訳すれば「月給を喰ふ」＝「월급 탄다」または「월급 타먹는다」ともいうが、どちらも「月給を取る」の意。］

この「틀리기쉬운말」（間違えやすいことば）に書かれている内容を項目別に整理して紹介すれば、以下のようなものである。

(A) **助詞の意味用法**

朝鮮語の対格助詞（를／을）と補格助詞（가／이）が日本語では「を」や「が」で対応しない以下のような例を取り上げて、注意を喚起している。なお、角括弧のなかに逐語訳を示した。

対格助詞

기차를 타오. 汽車に乗る。（一二三六九）

나라를 위하여 싸운다. 国のために戦う。（一二三七七）

바람을 쏘인다. 風に当たる。（一二四三六）。

그 사람을 보고 왓소. その人に逢って来ました。（一二五一一）

補格助詞

시간이 되엇다. 時間になった。（一二三七七）

군인이 되다. 軍人になる。（一二三七七）

잘 때가 되엇다. 寝る時になった。（一二四四一）

술이 취햇다. 酒に酔うた。（一二五〇六）

日本語と異なり、朝鮮語では属格助詞（의）や処格助詞（에・로）が顕現しないケースがみられる、このことについて以下の例が示されている。

助詞の非顕現

고향 사람　故郷の人（一二三八三）

그 사람것　その人のもの（一二三八三）

우리 집 아이　内の子供（一二五二〇）

여기 잇소.　此処にあります（一二三八一）

어듸 가오.　何処に往きますか（一二三八二）

이리 오시오.　こちらへお出でなさい。・어디 가십니까　どこへお出でなさいますか（一二五二三）。

上記と逆の例として、日本語で主格助詞や処格助詞が顕現しない以下の例が取り上げられている。

공이 둘이 잇소　毬が二つあります。（一二五〇六）

여기도 업소.　ここにもありません。（一二三八二）

また、次の例は与格助詞（한테）が、日本語の「に」および「から」に相当する意味で用いられる例を示したものである。

그 사람한테 어덧소.　その人から貰った。／도적한테 죽엇다　泥坊に殺された。（一二五一五）

（一二五二三）

(B) 逐語訳による誤用の指摘

朝鮮語語句の代表的語義に対応する日本語語句で逐語訳すれば不自然な日本語になるケースとして、以下のような例が取り上げられている。なお、カギ括弧内は原典に示されている逐語訳、丸括弧内は朝鮮語の対訳として相応しいとされた日本語である。

바지를 입는다.　「ズボンを着る」（ズボンを履く）（一二三八五）

불을 켜시오.　「火を付けなさい」（明（あかり）を付けなさい）（一二四〇三）

길이 질다.　「道が穢た」（道が悪い）（一二四〇四）

잠이 온다.　「眠りが来る」（眠くなる）（一二四〇五）

안경을 쓴다. 「眼鏡を被る」(眼鏡を掛ける)(一二四〇六)
손을 꼽아가며 고대한다. 「手を折りながら」(指折りながら)(一二四〇九)
손바닥을 친다. 「手のうらを打つ」(手をうつ)(一二四一〇)
잠을 잘 자오. 「眠りをよく眠ります」(よく眠ります)(一二四一一)
그만 하자「もう、それだけやらう」(もうやめよう、よさう)(一二四一二)
일을 본다. 「仕事を見る」(仕事する)(一二四一二)
세월이 간다. 「歳月が往く」(歳月が経つ)(一二四一九)
갑을 깍는다. 「値段を削る」(値切る)(一二四二〇)
그 사람까지 부르시오. 「その人までお呼びなさい」(その人もお呼びなさい)(一二四二二)
아, 이런 정신을 봐. 「あ、この精神を見なさい」(しまった!)(一二四二四)
손님이 차저왓다. 「お客が探して来た」(お客がたずねてきた)(一二四二六)
시계가 병낫다. 「時計が病気になった」(時計が狂った)(一二四二九)
시계에 밥을 준다. 「時計にご飯をやる」(時計を捲く)(一二四二九)
새로 한시「新しく一時」(一時)(一二四三〇)
밤이 깁헛다. 「夜が深くなった」(夜が更けた)(一二四三一)
내려다 본다「下し見る」(見下す)(一二四三三)
마음이 든다. 「心に入る」(気に入る)(一二四三四)
뺏어가젓다. 「奪って持った」(奪い取った)(一二四三七)
이리 오너라. 「こっち来なさい」(御免下さい)(一二四三九)
안녕히 주무십시오. 「無事に寝なさい」(御休みなさいませ)(一二四四〇)
형제를 두엇소. 「子供二人を置いた」(子供が二人あ

ります）（一二四四三）

병이 난다. 「病気が出る」（病気にかかる）（一二四四四）

나이를 먹는다. 「年を食べる」（年を取る）（一二四四五）

가로 노혓다. 「横に置いてある」（横たわる）（一二四四六）

잠이 온다. 「眠りが来る」（ねむくなる）（一二四四七）

성을 낸다. 「怒りを出す」（怒る）（一二四五〇）

낫 업다. 「顔がない」（面目なし）（一二四七一）

뒷 대문「後ろの大門」（裏門）（一二四七四）

바람이 잔다. 「風が眠る」（風がやむ）（一二四八七）

손 아래사람「手下の者」（目下の者）（一二四九三）

새달「新しい月」（来月）（一二四九四）

구름이 버서진다. 「雲が剥げる」（晴れる）（一二四九六）

배가 부르다. 「腹が脹れる」（満腹、腹が一杯）（一二四九七）

불이 죽엇소. 「火が死んでしまった」（火が消えた）（一二四九九）

하루밤 자고갑시다. 「一晩寝かして下さい」（一晩泊めて下さい）（一二五〇二）

네 그럽시다. 「ハイ、そうしなさい」（ハイ、どうぞ）（一二五〇二）

스무살 먹엇소. 「二十歳食べた」（二十歳です）（一二五〇三）

저 두아이는 형제요. 「あの二つの子は兄弟です」（あの二人の子は兄弟です）（一二五〇四）

술이 취햇다「酒が酔った」（酒に酔った）（一二五〇六）

나뭇가지에 새가 안젓소. 「木の枝に鳥が座っています」（木の枝に鳥が止まっています）（一二五〇八）

밤낫놀기만하오. 「昼も夜も遊んでばかりおります」（いつも遊んでばかりおります）（一二五一〇）

그사람을 보고왓소「その人を見て来ました」（その人

に逢って来ました）（一二五一一）
밧궈타시오. 「換え乗りなさい」（乗り換えなさい）（一二五一三）
새가 조치못하다. 「間が悪い」（仲が悪い）（一二五一七）
바둑을 둔다. 「碁を置く」（碁を打つ）（一二五一八）
우리집 아이「私の家の子供」（内の子供）（一二五二〇）

(C) 意味用法の異なる漢字語

日本とは意味が異なる、以下のような同一形態の漢字語を取り上げて、注意を喚起している。（二重括弧内に朝鮮語の意味を日本語で示した）

出入《外出》（一二三七〇）、層《階》（一二三七一）、是非《争論》（一二三七二）、議論《相談》（一二三七三）、内外《夫婦》（一二三七四）、發明《弁明》（一二三七四）、點心《間食・おやつ》（一二三七五）、形勢《家計》（一二三七五）、曖昧《無罪・無実》（一二三七五）、坐鐘《置時計》（一二三七六）、山所《墓》（一二三七六）、沙汰《山崩れ》（一二三八八）、食前《早朝》（一二三八九）、所用《役立つこと》（一二三九二）、工夫《勉強》（一二四〇二）、無顔《赤面》（一二四五五）、船價《船賃》（一二四五八）、既往《同じくば・どうせ》（一二四六二）

(D) 多義の朝鮮語語彙に対応する日本語表現に対する注意喚起

たとえば、朝鮮語動詞「뜨다」（一二四七九）のコロケーションに関して、対応する日本語では「（月が）出る、（紙を）漉く、（目を）あける、（船が）浮かぶ、（お灸を）据える、（水を）汲む、（水を）すくう、（網を）捲く」のような動詞が用いられる例を取り上げて、多様な日本語表現を習得する必要性を喚起している。同様の例として、먹다（一二三六九・一二五〇三）、오다、쓰다（一二四〇六）、놓다［現代正書法では놓다］（一二四〇八）、듣다（一二四一五）、기（氣、一二四六八）、낫［現代正書法では낫］、타다（一二四八八）、배

（一二四九七）などが取り上げられている。

(E) 多義の日本語語彙に対応する朝鮮語表現に対する注意喚起

たとえば、日本語動詞「かける」（一二四一七）、「あがる」（一二五二二）のコロケーションに関して、対応する朝鮮語では「（竿に）걸다、（塩を）지다、（水を）뿌리다、（腰を）걸어 앉다、（錠を）채우다、（お目に）보여 드리다、（言葉を）부치다 、（…し）-기 시작하다」、「（雨が）개다、（二階に）오르다、（お宅に）가다、（魚が）죽다、（柿が）익다、（「お上がりください」）올라오다・잡수시다」のような朝鮮語動詞が用いられる例を取り上げて、注意を喚起している。この注意喚起は日本語からの語彙干渉を予防する役割を果たす。

名詞「気」（一二四六八）を取り上げたところでは、「気が知れぬ（마음을 알수 업다）、気がある（생각이 있다）、気が利く（재치가 잇다）、気が気でない（정신이 업다［現代正書法では없다］）、気がくさくさする（속이 답답하여진다）、気がつく（생각이 나다）、気に懸る（마음에 걸린다）、気にする（걱정을 한다）、気になる（염려가 된다）、気を腐らす（속을 썩인다）、気を晴らす（손창을 한다）、気をもむ（애를 쓴다）」などのコロケーションを示している。類例として、「打つ」（一二五一八）、「上げる」（一二五二二）、「上がる」（一二五二二）、「置く」（一二五二四）、「-屎（くそ）」（一二五二五）、「着せる」（一二五二七）などが取り上げられている。

この他、複合語の語構成要素の並びが日本語と反対の次のような語を取り上げて、日本語表現で混乱を起さないように注意を喚起している。なお、カギ括弧内は原典に示されている逐語訳、丸括弧内は朝鮮語の対訳として相応しいとして示されている日本語である。

내려다 보다（一二四三三）「下し見る」（見下す）、빼어가지다（一二四三七）「奪って持つ」（奪い取る）

전답（一二五〇九）「畑田」（田畑）、밧꿔타다［現代正書法では바꿔타다］「換え乗る」（乗り換える）（一二五

一三）

(F) その他

助詞로／으로・만・고・나、副詞그만・딱・꼭・꿈쩍、名詞발・물（water）・손、依存名詞것・김（에）・가량・바람、動詞보다・굴다・길들이다・놀리다・다니다・뒤집다、接頭辞맨－、接尾辞－들・－투성이・－감、連体詞새・분（忿 憤）・한などに対応する日本語表現を解説している。また、日本語「恥」に対応する朝鮮語は「亡身、羞恥」、「先生님」に対応する日本語は「先生様」でなく「先生」であることを指摘したり、朝鮮語の漢字語「午正」（日本語では「正午」）、「山所」（日本語では「墓」）のような日本語では用いられない漢字語の例が示されたりしている。

五. 「国語毎新」

一二五二八（一九四二・七・一）～一二九六三（一九四三・九・十二）

一九四二年五月から、総力運動として朝鮮全土で展開され始めた「国語全解・国語常用運動」は、「毎日新報」の編輯方針にも大きく影響を及ぼした。これにともなって、一九四二年七月一日（一二五二八）から「毎日新報」の「国語」欄は一新され、割り当て紙面を拡大し一面の半分から三分の二を割いて「国語毎新」が新たに設けられた。そして、掲載記事は多彩になり、戦時総動員体制への屈服を迫る内容の様々な記事が掲載されるようになる。

なお、「国語毎新」は一九四三年九月十二日（一二九六三）まで設けられた。その後、一九四三年九月十四日（一二九六五）からは日本語紙面が第四面の全面を当てて作らることにより、「国語毎新」というタイトルは用いられなくなった。この日本語紙面は一九四四年十月二十八日（一三三七三）まで維持された。用紙不足のため、かつては八面建てや六面建てで発行されていた「毎日新報」は、一九四四年には二面建てで発行

されたり四面建てで発行されたりするまでに縮小され、四面建ての号にのみ第四面に「国語」欄が設けられていた。そして、一九四四年十月二十九日以後は常時二面建てで発行されるようになることによって、「国語」欄は完全に廃止された。

「国語毎日」欄は、当時強硬に展開されはじめた「国語全解・国語常用」運動に対応して設けられた紙面である。一九四二年五月八日、日本政府は閣議において、「朝鮮同胞に対し徴兵制を施行し昭和十九年度よりこれを徴集し得る如く準備を進むること」と決定し、朝鮮総督府のすべての行政機関、および官製御用団体として朝鮮全土の地域末端にまで組織を張り巡らせていた国民総力朝鮮聯盟を総動員した「国語全解・国語常用」が展開されていた。一九四二年五月六日、国民総力朝鮮聯盟指導委員会は「国語全解・国語常用」運動の基本プランとして、「国語普及要綱」を決定し、朝鮮全土において、この基本プランに基づく運動を展開させた。「国語普及要綱」の「（四）文化方面に対する方策」において「諺文新聞、雑誌に国語欄を設くること」としていたが、「毎日新報」が「国語毎新」面を設けることにしたのは、この方針に基づくものだった。また、同年七月五日から毎週日曜日にタブロイド判「日曜附録国語教室」を発行し始めた。一九四二年七月一日の「毎日新報」第一面に掲載された公告文は、一九四四年度からの徴兵実施の為に「一人残らず国語を解得」しなければならず、「国語全解運動」に一層拍車をかけるためだと書いている。

この公告文（原文は朝鮮語で筆者による訳文）は以下の通りである。なお、本稿ではこのタブロイド判「日曜附録国語教室」は「毎日申（新）報」復刻版には収録されておらず、これを考察対象として取り上げることはできなかった。

一二五二八（一九四二・七・一）第一面

國語初學の好伴侶一日曜附録國語教室一毎週一回日曜發行一七月五日始刊

國語の解得は皇國臣民たる者の絶対の義務である。國語を解得できなくては眞正な皇國臣民とはいえない。皇國臣民としての光榮と矜持は國語を解得してこそ初めて持つことが出來る。しかも再来年から半島に徴兵制が實施されることになっているだけに、二、四〇〇萬民衆は一日も早く一人殘らず國語を解得しなければならない。

本社ではかねてから紙面の一部を割いて國語欄を開設し、國語普及運動に努力してきたところだが、今日全半島で展開している國語全解運動に一層拍車をかけるために、従來の國語欄を一層擴充し、あらためて新たに國語初學者のための新聞附録を發行することとなった。この國語附録は毎週一回、日曜日附本紙に添付され、全讀者に無料で配布される。體裁は新聞半折型の「タブロイド」型二頁で、國語初學者の學習に適切なものとなるように編輯して活字を配置し、國語初級者の讀本にもなり、彼らの良き伴侶となるようになっている。大方の指示と鞭撻をお願いする次第である。

昭和十七年七月　毎日新報社

朝鮮語新聞「毎日新報」（朝鮮総督府機関紙）に掲載された「国語」欄の歴史的変遷（一九三九年～一九四四年）　五三

五―一．「国語毎新」の「カタカナ教室」

一二五二九（一九四二・七・二）～一二六三一（一九四二・十・十三）

「カタカナ教室」は固有名詞など若干の語彙を漢字表記しているほかは、基本的にカタカナだけで表記された読み物で、特に教材という体裁は取っていない。カタカナ文なので、多くの読者の獲得を狙ったものと考えられる。

「国語毎新」の掲載が始まった一九四二年七月一日号には「カタカナ教室」というタイトルは付されていないが、「カタカナ教室」のものと同様のカタカナ文が掲載されており、「カタカナ教室」は実質的には「国語毎新」とともに始まったとみなすことが出来る。この七月一日号に「カタカナ教室」というタイトルをつけ忘れたのか、あるいは、急遽次の七月二日号からタイトルを付すことにしたのか分からないが、前で指摘した「曙だより」から「国語欄」にタイトルが変更されたケースや、次に指摘する「キョーノレンシュー」から「キ

ョーノベンキョー」への急なタイトル変更と同様、「毎日新報」の「国語」欄編集における一貫性に欠ける側面をうかがわせるものである。

また、一九四二年十月十三日以後も「カタカナ教室」というタイトルは付されていないが、最後の日本語面となった一九四四年十月二十九日の紙面まで、「カタカナ教室」所載のカタカナ文と同様のカタカナ文が掲載され続けた。

一二五二九（一九四二・七・二）「カタカナ教室」

〝ウミユカバ〟ノ ウタハ 千二百ネンマエニデキタ

〝ウミユカバ ミヅクカバネ ヤマユカバ クサムスカバネ……〟ノ ウタ ハ イマカラ 千二百ネンバカリ マヘ（天平二十年ゴロ）大伴家持ト イフ チウギナ ヒト ガ ツクッテ テンテンノウヘイカ ニ ササゲタ モノデス

日本ノジドウシヤ

ニッポン ニ ハジメテ ジドウシャ ガ ユニフ［輸入］サレタ ノハ 明治三十七ネン デ チャウド 日露センソウ ノサイチュウ デシタ。フランス カラ 一ダイ 二マン五センエン デ 三井八郎衛門ト イフヒト ガ ユニフシマシタ。

七ツノ海

イギリス ガ 七ツノ 海ハ ジブンノ モノダト ホコツテヰタ ノヲ 日本軍ノ タメニ サンザン ウチ ヤブラレ 一ツノ海モ カツテニ デキナク ナリマシタ。七ツノ海 トハ 北太平洋、南太平洋、北大西洋、南大西洋、インド洋、北氷洋、南氷洋 ノ 七ツデス。

一二五三〇（一九四二・七・三）「カタカナ教室」

農村ヘオテツダヒ一食べ物ノセツヤクト 肥料ヲサシアゲマセウ

農村ノヒトビトハ センソウ ヲ シテヰル日本ノ タベモノガ シンパイ ナイヤウニ タクサン ツクラネバ ナラナイト 夜モ ヤスマナイデ 一生ケンメイ ニ ハタライテ ヰマス。ノウギョウヲ シナイ モノハ オ百姓サンニ オテツダヒ ヲ スル ツモリ デ タベモノヲ セツヤク スルコトハ

モチロン デスガ 肥料ナドモ オテツダヒ シタイ モノデス。マキ モクタン ワラナドノ灰ハ 大ヘン ヨイ肥料 デスカラ ステナイデ 肥料ノ タリナイ オ百姓サン ヘ アゲマセウ。マタ 一坪エンゲイノ ハタケニ イレテモ ヨイデセウ。セキタン レンタン マメタン ナドノ 灰ハ ダメデス。

タバコ デス

—タンベ ヲ クダサイ

—アリマセン

—ソコ ニタクサン ツンデ アリマスヨ

—チガイ マス コレハ

—ナニガ チガフカ ソレガ タンベ ダ

—コレ ワ タバコ デス

一二五三八（一九四二・七・十一）「カタカナ教室」

スパイヲ フセゲ！

十三日カラ 一シューカンノ アイダ スパイオ フセグココロ オ マススマス カタク スル イロイロ ナ モヨホシ（行事・행사）オ シマス。スパイ ワ 日本 ノ テキ イギリス ヤ アメリカ マタ ショーカイセキ ナド ノ メイレイ オウケテ 日本ガ センソー ニ マケルヨー ニ 日本ノ ヒミツ オ サグッタリ 日本ノ コクミン ガ コマル ヨーナ コト オ タクラン デ イルノデス。コノ スパイハ イツモ ワレワレ ノ ミノ マワリデ メオ ヒカラセテ イル ノデスカラ スコシデモ アヤシイ モノ ニワ ミンナ キオ ツケマショー。

五―二：「国語毎新」の「キョーノレンシュー」

一二五三五（一九四二・七・八）～一二五四〇（一九四二・七・十三）

「キョーノレンシュー」は一九四二年七月八日（一二五三五）から連載が始まるが、タイトルがカタカナで記されているように、全文がカタカナで表記され、これに朝鮮語対訳が付された紙上学習教材である。冒頭には囲み記事の形で「キョーノレンシュウー」の趣旨

説明が付されている。体裁は数語の基礎的語彙を示したあと、その語を用いた会話文を示す形になっている。

なお、角括弧（［　］）内の記述は筆者（熊谷）による注記である。

一二五三五（一九四二・七・八）「キョーノレンシュー」

みなさんの こくご を ならはれる べんり の ために これから 毎號 國語と諺文との ことばを いくつかづゝかこゝに かきます。これを よく おぼえられると そのつぎには このことば で 一つのはなしを まとめてれんしふ（련습）されるやうにします。

ウシ（소）［牛］　ウマ（말）［馬］

ウシ ガ イマスカ。

（소가 있습니까）

ハイ、ウシ ガ イマス。

（네、소가있습니다）

ウマ モ イマスカ。

（말도있습니까）

イーエ、ウマ ワ イマセン。

（아뇨、말은없습니다）

一二五三六（一九四二・七・九）「キョーノレンシュー」

エンピツ（연필）［鉛筆］、カミ（조히）［紙］

△エンピツ ト カミ オ クダサイ。

○ドノ グライ アゲマショーカ。

△エンピツ ヲ 二ホン ト カミ オ 十マイダケ クサダイ。

○ハイ アリガトー ゴザイマス。

一二五三七（一九四二・七・十）「キョーノレンシュー」

オカーサン（어머니）［お母さん］、ネーサン（누나）［姉さん］

オカーサン ハ ヤサイバタケ デ ハタライテ イマス。

ネーサン ワ コモリ オ シテイマス。

一二五三八（一九四二・七・十一）「キョーノレンシュー」

ヒガシ（동쪽）［東］ニシ（서쪽）［西］ミナミ（남쪽）［南］キタ（북쪽）［北］

ヒワ ヒガシ カラ ノボッテ ニシ ニ シズミ マス。ミナミノ ホー ワ アタタカク キタ ノ ホー ワ サムイデス。

一二五四〇（一九三九・七・十三）「キョーノレンシュー」マチ（거리）［街］、デンシャ（전차）［電車］、ジドーシャ（자동차）［自動車］、ジンリキシャ（인력거）［人力車］

ココ ワ マチ デス。ヒト ガ オーゼイ トーッテ イマス。デンシャ モ ジドーシャ モ ジンリキシャ モ トーッテ イマス。

（ソートクフ ハツコーノ「コクゴ」ニ ヨル）

五―三．「国語毎新」の「キョーノベンキョー」

一二五四一（一九四二・七・十四）～一二六八八（一九四二・十二・九）

「キョーノレンシュー」が五回連載された後、一九四二年七月十四日（一二五四一）から「キョーノレンシュー」と同じような内容の文が、全く同じ記述パターンのままタイトルのみ「キョーノベンキョー」に変更されて掲載されている。ただし、一九四二年七月十八日（一二五四五）の紙面のみ「キョーノレンシュー」にタイトルが戻されているが、これは編集段階での単純ミスの結果としか思われない。

「キョーノレンシュー」も「キョーノベンキョー」もカタカナだけで表記された「国語」学習用教材で、朝鮮語の対訳文が付されている。なお、一九四二年十二月八日（一二六八七）と十二月九日（一二六八八）の号には、ひらがな文が掲載されており、これらは十二月十一日（一二六九〇）から「けふのべんきゃう」とタイトルを変えて新たに連載され始めた「国語」学習用教材の「あ」と「い」に相当する。したがって、実質的はカタカナ教材の「キョーノベンキョー」は一二月五日（一二六八四）で終了している。

そして、十二月七日（一二六八六）の紙面には次のように、ひらがな文の学習に移行する旨が案内されて

いる。

ミナサン カタカナ ノ「キョーノ ベンキョー」ワ イヨイヨ オワリマシタ。「ア」ギョー カラ「ワ」ギョー マデ ダクオン（탁음）ノ「ガ」「ザ」「ダ」「バ」ノ サンギョート アワセテ 七十カイ グライ マイニチ ヤッツ ズツ ノ コトバ ト ヤサシー ヨミカタ オベンキョーシマシタ。ミナサン ワ ソノ アイダ ネッシンニ オボエテ モー カタカナ ワ スラスラ ト オヨミ ニ ナレルコトデショー。ソレデワ アス カラワイマ マデ ナラッテ イナイ ヒラガナ ノ ベンキョー ニ ウツリマショー。ベンキョー ノ ハジメ ニ マズ ヒラガナ ノ 五十オン オ オボエテ クダサイ。

右の案内文にある「七十回ぐらい」の「アイウエオ」順の教材は一九四二年九月十一日（一二六〇〇）から始まったものである。これが始まるまで、すでに「キョーノベンキョー」が四十二回掲載されていた。ここで特徴的なことは、「神社参拝」、「愛国班常会」、「貯蓄運動」に関する三回の文の掲載以外には、時局に関わる文が殆んど取り上げられていない点である。そして、時局を反映しない次にしめすような文が主流をなしていた。

一二五四一（一九四二・七・十四）「キョーノベンキョー」

ナツ（여름） ムラ（마을） セミ（매미） ノハラ（들）

ノーフ（농부）

ナツ ニ ナリマシタ

（여름이 되었습니다）

ムラ デワ セミ ガ ミンミン ナイテ イマス

（마을 에서는 매미가 맴맴 울고 있습니다）

ノハラ デワ ノーフ ガ イソガシ ソーニ ハタライテ イマス

（들에서는 농사꾼이 분주하게 일을하고 있습니다）

一二五四五（一九四二・七・十八）「キョーノレンシュー」

ソラ（하늘）、ウミ（바다）、ヤスミ（휴가、방학）、カラダ（몸）

ソラ ガ キレイ ニ ハレマシタ

（하늘이 맑게개엇습니다）

サー、ウミ エ イッテ オヨギ マショー

（자아、바다로 가서 헤엄을 칩시다）

ナツヤスミ ノ ウチニ カラダ ヲ ウントヒョーブ ニ キタエマショー

（여름 방학 동안에 몸을 아주 튼튼하게 단련합시다）

十二月五日（一二六八八）までの百二回にわたる「キョーノベンキョー」全体についてみると、時局に関わる内容を取り扱っているのは三十回（全体の三十％）だった。また、「キョーノベンキョー」では童話類が多く載せられているが、このことは、「国語」欄を時局から距離を置く内容にとどめるための朝鮮人編集者たちの「策略」だったと見るのは、筆者の考えすぎであろうか。

五―四．「国語毎新」の「けふのべんきゃう」

一二六九〇（一九四二・十二・十一）～一二八五九（一九四二・五・三十一）

カタカナ表記の「キョーノベンキョー」に引き続く、ひらがな表記による同様の紙上教材である。当時の初等教育はカタカナ文からひらがな文へと段階を踏んで進められており、この点から、「けふのべんきゃう」は「キョーノベンキョー」より学習段階を引き上げたものである。

ところで、実際にひらがな表記教材に切り替わるのは十二月十一日ではなく十二月八日（一二六八七）の「あ」の項からである。当日の「キョーノベンキョー」のところに、次のような「オコトワリ」が掲載されている。

オコトワリ

キョー カラ ヒラガナ ノ ベンキョー ニ ハイリマスガ イマ マデ ノ ヨーナ ヒョーオン（表音）ホーデ ナク

レキシテキ ナ カナズカイ ホー オ ツカイ マスカラヨク キオ ツケテ ベンキョーシテ クダサイ。

十二月九日（一二六八八）の「い」の項までタイトルは「キョーノベンキョー」のままになっている。したがって、「けふのべんきゃう」は実質的には次に示す同年十二月八日からはじまったとみなされる。

一二六八七（一九四二・十二・八）「キョーノベンキョー」

あ ア

あいさつ（인사） あかちゃん（애기） あくび（하품） あご（턱） あし（발） あづき（팥） あせ（땀） あたま（머리） あひる（오리） あぶら（기름）

一二六八七（一九四二・十二・八）「キョーノベンキョー」

十二月八日

昨年十二ぐわつ八か かしこくも せんせんの たいしょう［宣戦の大詔］が はっせられまして から

작년 十二월八일 황송하옵께도 선전의 대조가 내리신 후

はやくも ここに 一しゅうねんを むかへる ことに なりました

벌서 여기에 일주년을 마지 하게 되었습니다

わたくしたち 一おく こくみんは あのひ あのあさの ふるひたつやうな

우리들 一억 국민은 그날 그아침의 날뛸 듯한

かんげきを まざまざと おもひおこさずには ゐられません。

감격을 뚜렷하게 생각해내지 안을수 업습니다

一二六九〇（一九四二・十二・十一）「けふのべんきゃう」

う ウ（우）

うを（붕어）［魚］、うさぎ（토끼）［兎］、うす（절구）［臼］、うちわ（부채）［団扇］、うまい（맛있다）［美味い］、うむ（낫는다）［産む］、うる（판다）［売る］、うれしい（기쁘다）［嬉しい］、うんどう（운동―運動）［運動］

ぶしたちは この たてふだ を みて、
（무사들은 이 부친패를 보고）
みんな いさみたち われも われも と あらそって しゅっせい するやうに ねがひでました。
（모두 용감히 나도나도 하고 다투어 출정 하기를 자원했습니다）
ぶしたち だけでなく にっぽんじん は をとこも をんなも としよりも こどもも
（무사들 뿐이 아니라 일본사람은 남자도 여자도 늙은이도 아이도）
みんなこころ を ひとつに あはせ くにのために つくさう と いふ こころに もえたちました。
（모두 마음을 하나로 합해서 나라를 위하야 진력하고저 하는마음에 불탓습니다。
そのうち げん の たいぐんは にっぽんに おしよせてきましたが、さんざんに やぶれて しまひました。
（그후 원의 대군은 일본에 처들어왓스나 여지업시 패하고 말엇습니다。

「けふのべんきゃう」のタイトルが付された七十六回の掲載分のうち、次の「かつために」のような時局に関わる文が載せられているのは二十八回（全体の三十七％）であり、これは先に連載されていた「キョーノベンキョー」とほぼ同様の傾向を示している。

一二七三四（一九四三・一・二十五）「けふのべんきゃう」
かつために（이기기 위하야）［勝つために］
まいにち まいにちの わたくしどもの くらしは なにもかも みな
（매일매일의 우리들의 생활은 무엇이나 다）
いくさに かつために といふ けっしんと かくごとで すごさなければ なりません。
（전쟁에 이기기위하야 라는 결심과 각오로 지나지안흐면 안됩니다）
ごはんを いたゞいたり うんどうを したり することも
（밥을 먹는다든지 운동을 한다든지 하는것도）
いくさに かつ ために からだを ぢゃうぶに する ためだ

とかんがへ なければ なりません。

（전쟁에 이기기 위하야 몸을 튼튼히 하기 위하여서라고 생각하지안흐면 안됩니다）

えんぴつや かみを せつやくして つかふことも いくさにかつ ためだ と おもはなければ いけません。

（연필이나 종이를 절약해 쓰는것도 전쟁에 이기기 위하야서라고 생각하지 안흐면 안됩니다）

五―五.「国語毎新」の「キョーノベンキョー」

一二八六一（一九四三・六・二）～一二九六三（一九四三・九・十二）

第一二八五九号までのひらがな表記の会話文学習教材「きょうのべんきゃう」に比べて格段にレベルを落とした「キョーノベンキョー」は、国民学校（小学校）低学年をも読者対象としたものである。その構成は、以下のように若干の基礎的語彙を提示し、その日本語の発音を朝鮮文字で表記している点に特徴がある。このことからカタカナも知らない初学者をも対象としていることがわかる。また、提示された語彙を用いた語句が示され、朝鮮語対訳が付されている。

一二八六一（一九四三・六・二）「キョーノベンキョー」

アカイ アカイ

（아카이）빨가타

アサヒ アサヒ

（아사히）아침해

アカイ リンゴ

빨간 사과

アカイ モモ

빨간 복숭아

アサヒガ ノボル

아침해가 돗는다

アサヒガ ミエル

아침해가 보인다

一二八六三（一九四三・六・四）「キョーノベンキョー」

コウシ（고우시）…송아지
ノハラ（노하라）…들
ナク（나꾸）…운다
タカイ（다까이）…높픈
ヤマ（야마）…산
ヒクイ（히꾸이）…나즌
オカ（오카）…언덕
コウシガ ノハラデ ナキマス
（송아지가 들에서 웁니다）
タカイ ヤマガ ミエマス
（높픈산이 보입니다）
ヒクイ オカニ キガ アリマス
（나즌 언덕에 나무가 잇습니다）

五―六．「国語毎新」の「ミナサンノサクブン」

一二七一六（一九四三・一・七）～一二九五四（一九四三・九・三）

一九四三年一月から「国語毎新」はそれまで週五回程度掲載されていた回数を週三回（火・木・同）に減らすとともに、一九四二年七月五日から毎週日曜日に発行されたきたタブロイド判「日曜附録国語教室」は「国語教室」と改題して週三回（月・水・金）発行されることになった。次の「お知らせ」はこのことを公告した記事である。

一二七〇九（一九四二・十二・三十）「国語毎新」

オシラセ

附錄國語教室オ週三回皆様ニオ送リシマス

コトシモ イヨイヨ オワリト ナリマシタ。ミナサンノネッシンナ ベンキョーノ オトモダチ 國語毎新モ コトシワ コレデ オシマイト イタシマスガ ライネンカラワ ミナサンノ コクゴノ ベンキョーニ モット ベンリノ ヨイヨーニ フロクノ「國語教室」オ フヤシテ 月曜水曜金曜ノ三カイ ミナサンニ オオクリシ「國語毎新」ワ 火曜木曜土曜ノ三カイ 本紙ニ ノセルコトニナリマシタ。キットミナサンガ コクゴノ ベンキョーノ ヨイオトモダチ トシ

テ ヨロコンデ イタダケルト オモイマス。ライネンオ オマチクダサイ。

一九四三年一月七日からは「国語毎新」に「ミナサンノサクブン」の連載が始められた。「国語全解運動」として全国各地で展開されていた「国語講習会」受講者の作文を募って、掲載したものだった。以下はその公告文である。

一二七二三（一九四三・一・十四）「国語毎新」

ミナサンノサクブン ―ドシドシ― オオクリクダサイ

コトシモ ハヤクモ ネッシンナ コクゴ コーシューガ ハジマリマシタガ「國語毎新」編輯部 デモ―ミナサント トモニ ベンキョーシテ ヨイ オトモダチオ オトドケスルコトニ ツトメテイマス。ミナサンガ シッカリ ベンキョーシテ コクゴガ ジョーズニ ナリ リッパナ サクブンガ デキマシタラ「國語講習會」デ トリマトメテ「京城府太平通リ毎日新報社國語毎新係」アテ ドシドシ オオクリクダサイ。

「ミナサンノサクブン」欄は「毎日新報」復刻版では六十七回の掲載が確認され、百六編の作文が掲載されている。これらは「国語講習会」の講習生たちが書いたもので、国語講習会名、所在地、筆者名が記されている。ここに登場する「佳山金順」や「金本香欽」などの氏名は創氏改名によるもので、筆者はすべて朝鮮語を母語とする朝鮮人である。「ミナサンノサクブン」にはカタカナだけの文、漢字カタカナ交じり文、漢字ひらがな交じり文など、いろいろな文字表記の作文が載せられている。どのような表記の文であれ、いずれも整った日本語で書かれていて、その文章は国語講習会に通う程度のひとびとには、およそ書けそうもない水準の文章である。作文は講習会ごとに取りまとめて毎日新報社に投稿することになっていたため、執筆者以外の人間によって相当に手直しされたことは確実だが、その内容から、講習会の様子の一端が伺える点は

注目に値する。皇民化教育としての「国語」講習ではあったが、これに参加した講習生たちの多くは小学校にも通えなかった人々で、「夜学」で勉強が出来るようになった喜びが素直に表現されていたりもする。

当時、「国語講習会」は小学校に就学した経験が無かったり、小学校を中退したような人々を対象とした「国語全解」のための社会教育として、朝鮮全土で展開されていた。この「ミナサンノサクブン」には、当時の講習生たちの声が反映されている点で、興味深いものである。「国語講習会」講習生のような、いわゆる「無識者」自身の声が文字化されることはさほどなかったためである。それゆえ、ここで少し多めに紹介することにする。

なお、角括弧（［　］）内の記述はすべて本稿筆者（熊谷）による注記である。

一二八五四（一九四三・五・二十六）

私ノ講習所

新□郡新□面私設學術所　佳山金順

私ハ　毎朝　講習所ニ行クト　宮城遥拝ヲシマス。先生ニ　アイサツシマス。ソウシテ　友達トタノシクベンキョウシマス。私ハサクネン十二サイノ時　一年ニハイリマシタ。ハジメハ　ナニモ　ワカラナカッタノデスガ　先生ノ教ヘヲ　ヨクマモッタタメニ　三學期ニハ一等ニ　ナリマシタ。私ハ家ニカヘッテカラハ　子供ノセワヲシ　父母ノ　オテツダイヲシナガラ　二學年デマダ（ママ）一等ニナラウト　ネッシンニ　ベンキョウシテ　イマス。

一二七一六（一九四三・一・七）「ミナサンノサクブン」

ムラノヤガク［村の夜学］

慶北榮州郡順興面石橋里　金本香欽

タイニッポン（ママ）　コクミントシテ　コクゴヲ　ワカラナイト　オーキナ　ハジニ　ナルト　ムラノ　ヤクインノ　カタガタカラ　イワレ　ダンシモ　ジョシモ　ミナ　ムラノ　ヤガクニ　マイバン　ベンキョウニ　イッテ　ヘタデモ　コクゴガ　ハナセルヨウニ　ナリマシタ。コレハ　ミナ　ヘイタイサン　ノ　オカゲ

デ アリマス。

一二七二七（一九四三・一・十八）

先生

［平壤國語講習會］女甲　東原奇禮

私共ノ ガッコウノ 先生ハ ホントウニ アリガタイ先生デス。コウシュウカイヲ 始メテカラ 早 三カ月ニ ナリマシタガ 先生ハ ヒトバンノ ケッセキモ ナシニ ヒルノ シゴトニ ツカレタ オカラダモ オ休ミニ ナラズ 元氣ヨク 夜オソクマデ ネッシンニ オシエテ クダサイマス。先生ノソノオンハ ウミヨリモ フカク 山ヨリモ 高イデス。ドンナニ シタラ ソノ一オンガエシガ 出來マセウ。私共ハ 一ショウケンメイニ ベンキョウシテ 一ニチモ 早ク リッパナ クワウコクシンミン［皇国臣民］トナルノガ センセイノゴオンニモ ムクユル コトダト思ヒマス。

先生

［平壤國語講習會］豊山九範

先生ハ イツモ 生徒ヲ カワイガッテ クダサイマス。私タチガ マチガッタ コクゴヲ ツカフト 先生ハ ヤサシク ナホシテ クダサイマス。ソシテ トキドキ センソウノ オモシロイ オハナシヲ キカセテ クダサルノデス。私ハベンキョウヲネッシンニ シテ リッパナ 兵タイニ ナラウト オモヒマス。シッカリ ベンキョウヲシテ オクニノ タメニツクサナケレバ ナラナイト 先生ガ マイバン オッシャテクダサイマス。私ハ リッパナ 兵タイト ナッテ テンノウケイカノ タメニ ツクシタイト一オモヒマス。ソレカラ 先生ノオンモ 一ショウガイ ワスレマセン。

フユ

［咸南永興郡□□面□里國語講習會］全金玉

フユニナルト ユキガフリマス。ユキガ フッタアトハ ツメタイカゼガ フイテ ヒトハ サムイ〳〵 トイッテ カケテ イキマス。川ヲ見ルト 川ノ水ガコ［オ］ッテ 人タチガコウリノウエヲ トオリマス。ヤマヤ ノハラハ ユキガフッテ マッシロク ナリマシタ。オヒサマガ デルト ノハ

ラノユキガ ギンノヨウニ ヒカッテイマス。木ニハ マッシロイ ハナガサイタヨウデス。フユハ ドチラヲ見テモ マッシロイノデ キモチガヨイデス。フユ サムイ ヨルニ センセイガ サムサモ カマワズニ ヤガク［夜学］ニ オイデニナッテ 一二モ ワカラナイ ワタクシタチヲ オシエテクダサルノハ タイヘン アリガタイコトデゴザイマス。

一二七四七（一九四三・二・八）

國語講習會

全南潭陽郡月本里国語講習會 近安富徳

私共ノ講習會ハ昭和十五年ニ デキテカラ イママデ ツズイテイマス＝昭和十五年カラ十七年マデモ 夜學校（ヤガッコウ）トヨンデオリマシタガ 近頃ハ講習會トヨンデオリマス＝満三年目ニ ナッテイマス＝先生ハ 二人デスガ 一人ノ先生ハイママデ ヤメナイデ ツズイテ オリマス。一人ノ先生ハ トチュウデ 一回 カハリマシタ＝生徒ノスウガ七〇名位ニ ナリマスガ イママデ 先生カラ ナグラレテ［殴られて］フクレタリ［膨れたり］チガデタリ［血が出たり］シタコトガ 一回モ アリマセン＝先生方ハ ジツニ エライ方デス＝私共ハ ガクゲイカイヲ 一月一日ニ ヒラキマシタガ ヨクデキタト ホメラレマシタ＝コレカラモ ツヅケテ ヤメルコトガ ナイヨウニ シタイト トモダチモ皆ガ イッテオリマス＝シッカリ ベンキョウシテ國ノタメニ ツクシタイト 思ッテ イマス。

ユキ

咸南元山府□川町地□里国語講習所 清原鳳玉

フユニ ナルト ユキガ フリマス。カレタ キノ エダニハ シロイ ユキガ ツモッテ マッシロイ ハナヲ サカセマス。ワタクシノ ウチノ クロイ イヌハ ユキガ フルトキ ニハニ デテ アソンデ イルウチ シバラク シロイヌニ ナリマシタ。ユキガ フルト セカイワ キウニ シロイ セカイニカワッテ シマヒマス。ワタクシハ アルヒ サムイト イッテ ヒバチノ ソバニ ユクト オトウサンハ「ナニガ サムイカ センチノ ヘイタイサンニ ハズカシク ナイカ。センチ［戦地］ノ ヘイタイサン［兵隊さん］ワ イクラ サム

クテモ ガマンシテ タタカフヨ」ト オハナシシテ クダサイマシタ。ワタクシワ キュウニ ゲンキガ デマシタ。

一二七五九（一九四三・二・十九）

私ノケッシン

忠清北道陰城郡甘谷面 □今婦人国語講習會 金昌順

ワタクシハ ヤガク［夜学］ヘ イッテ コクゴ［国語］ガハナセル ヨウニ ナリマシタ。コノマヘモ オトウサンガ昌順（ショージュン）モ コノゴロハ ダイブ コクゴガ デキルネ ト オッシャイマシタノデ ワタクシハ ウレシクテ ウレシクテ タマリマセンデシタ。ワタクシハ アサ 八ジノ サイレンガ ブート ナルト ヒガシノ ホウヲ ムイテ サイケイレイヲシマス。ソウシテ ゴゴノ 七ジニハ ベンキョウヲシニ イキマス。イヘニ カヘッテ「オトウサン タダイマ オカアサン タダイマ」ト アイサツヲ シテ スコシ ベンキョウシテ スグ ネマス。コレカラモ シッカリ センセイノ オシヘヲ マモッテ ヨク コクゴガ ハナセル ヨウニ ナリタイト オモヒマシタ。ソウシテ ヒトリマヘノ リッパナ コウコクシンミン［皇国臣民］ニ ナリ、テンノウヘイカ［天皇陛下］ノ ゴオン［御恩］ニムクイ クニ［国］ノ タメニ スコシデモ ツクソウト オモッテ オリマス。

一二七六四（一九四三・二・二十四）「ミナサンノサクブン」

父のよろこび

咸南永興郡宣興面城里講習會 金剛玉周

私は こうしゅうかい［講習会］に かよってから もはや半年になりますが はじめのうちは「アイウエオ」「一二三四」をならいましたが 其のとき まえから かよった 女の人たちが じょうずに かく ひらがなが とても うらやましくて たまりませんでした。十二月二十九日の夜に ひさしく ならってゐた 國語 まき［巻］の三を おへました。そのとき先生が お正月からは あらたな きぶんをもって あらたな四のまきに はいるつもりですが まず ひらがなの べんきょうを はじめましょうと おっしゃいました。ながひあひた（ママ）まちにまった ひらがなの べんきょうができ

るので 私は あまりの うれしさに なんだか ゆめのやうな かんじが しました。それから すぐ 家にかへり「ろうそく」の下で 叺(かます)をおる お父さんに さう申しますと 父は うれしさに 思はず 私のそばに よってきて きもちよさそうに わらひながら いろいろ べんきょうに ついてのおはなしをし どこまでも がんばって 人にまけない 國語をつかうやうにと いって くださいました。

一二七六六（一九四三・二・二十六）

私タチノヤクソク［私たちの約束］

全北益山郡望城面茂形里国語講習會生 國本先童

私タチノ コウシウカイデハ マイツキ キソクヲキメテ ソレヲ マモッテイマス。

一．コクゴジャウヨウ。コクゴハ ジノトウリ オクニノ コトバデス。デスカラ ダレデモ 國語ヲ ツカハナケレバナリマセン。國語ヲ シリナガラ ツカワナイヒトガ イマスガ コレハ ゼンゼン シラナイヒトヨリモ イケマセン。コンナイミデ 私タチ コウシウセイハ ワカルコトバハ カナラズ ハナスコトニ シマシタ。モシ ワカルコトバヲ ツカハナイト 三日カン ソウジヲ スルコトニ シマシタ。

二．シンセツ。ヒトハ オタガイニ タスケアッテ シンセツニ スルノガ タイセツデス。モシ ホカノヒトカラ キニカカルコトヲ イハレテモ シンボウシテ マヘヨリモモット シンセツニシタラ ソノヒトモ ダンダント シンセツニナルノデス。ソレデ コウシウセイガ モシ ケンカヲ シタラ バツトシテ 三日カン ソウジヲ スルコトニシマシタ。私ハ コノ フタツヲ シッカリ マモラウトオモヒマス。

一二七七六（一九四三・三・八）「ミナサンノサクブン」

私達の講習會

黄海信川邑温泉里五區国語講習會男子部 平山彦標

私達の講習會は 毎晩七時から 十時迄 勉強します。必ず勉強する前に国民儀禮をしてから 始めます。此頃は 朝鮮半島を 習って居ます。先生が 地図を書いて 皆 くわしく

おしへて 下さいます。朝鮮十三道も わかり 道廳所在地や 産物は なにがあるかまで 習ひました。明日は 主な川を習ひます。私は 來年 へいたいに 行けると 先生が おっしゃいましたので、もっと〳〵 勉強して 立派な兵隊さんに なるつもりです。

一二七九〇（一九四三・三・二十二）「ミナサンノサクブン」

青年團

慶北安東邑□安町国語講習會 杉林在夏

私タチノ 部落ニハ 百十名ノ青年團員ガ オリマスガ 其ノ大部分ワ 國語講習生デ ゴザイマス ＝毎月 一日ト 十五日ノ朝 六時半ニハ 必ズ 全團員ガ 村マエノ ヒロバニ アツマッテ 訓練ヲ ウケル コトニ ナッテ イマス ＝訓練ノ日ニハ イツモ 邑内ノ青年隊分隊長ヤ 役員ノ 方方ガ 寒イノニモ カカワラズ オイデニ ナルノニ 徒タダ 感謝ノ外アリマセン ＝今月ノ 一日ノ朝ハ 特ニ團長先生モオイデニナリマシタ ＝訓練ガ スンデカラ 團長サンハ ニコニコシナガラ 私タチヲ ホメテ下サイマシタ ＝コレハ マッタク 本部 ナラビニ 国語講習會ノ 先生ノ オカゲデ アリマス ＝ワカレテ カヘル時 東ノ山ノ上ニハ 朝日ガ ノボリハジメテ イマシタ。

一二七九一（一九四三・三・二十四）「ミナサンノサクブン」

戰地の兵隊さんへ

咸南北青郡德城面□□□里九億国語講習會 四年 安川尚節

大東亞戰爭勃発以來 南に北に 御国のために 命をすてゝ働いて いらっしゃる 兵隊さん お元氣ですか ＝私達は 毎日 仕事に 勉強に はげんでいます。私達は 學校に かよふことが 出來なくとも 學生に まけないやうに 努力していますから 安心して下さい。海に 空に あの輝かしい 大戰果を あげられた事は新聞で見たり ラヂオで聞いたりしています。昨年の夏 學校で 映画をみさせて もらひました。それを見て 私は おどろきました。しかし あのやう

に 大戰果を あげられたのは まったく 兵隊さんが 一死報国という 大和魂を もっているからだと 思ひます。私は家がまずしいために 国民學校に かよふ事が 出來ませんでした。私は講習會にかよって 勉强を熱心にし 家にかへっては 仕事をねっしんにして むだな おかねはつかわないやうにし 戰地の兵隊さんに 慰問袋を 送るつもりです＝では おわりに みなさんの 武運長久を お祈りします。

一二七九七（一九四三・二・十九）「ミナサンノサクブン」

國語

平北□州郡□□面明上洞第二區一班 金田源道

私ハ 以前ハ国語ガ ワカラナイノデ ホントウニ 不安デ有リマシタガ 昨年ノ 秋カラ 夜遅ク國語ヲナラヒ ハジメテカラ ホントウニ 仕合セダト 思イマス＝夜學生ハ皆デ 十餘人デスガ 親兄弟ノヨウニ 互イニ 教エテヤリナガラ 毎晩ネッシンニ 勉强シテイマス＝私達ハ昼ハ 一生懸命ニ働イテ ヨルハ 國語ヲ 習ヒツヅケテイマス＝イマデハ タイテイノ 言葉ハ ハナセルヨウニ ナリマシタ＝私達ノセンセイガ ネッシンニ 教エテ下サッタ 御蔭デス＝私タチハ 一生懸命ニ 習ッテ 國語ガ上手ニナルト 一人マエノ國民ニナル ワケデス。

一二八〇七（一九四三・四・九）「ミナサンノサクブン」

コクゴト センセイ［國語と先生］

全南羅州郡□□□□□里國語講習會 星山鍾乙

ワタクシハ イセン（ママ）ハ コクゴガ ワカリマセンデシタ＝トコロガ サクネンノ十一月カラ ワタクシタチノ ムラニモヤガク［夜学］ガ ハジマッタノデ ワタクシハ マイバンヤガクニカヨッテイマス＝ハジメハ ジモワカラナイシ コクゴモ ハナセマセンデシタガ マイバンネッシンナ センセイニ オシエラレ イッショウ ケンメイニ ベンキョウヲシタノデ イマハコクゴデ ハナセルヨウニ ナリマシタ＝カタカナモ ジユウニ カケルヨウニ ナリマシタ＝コクゴモ ワカルヨウニ ナリ ジモ カケルヨウニ ナッタノハ センセイノ オカゲダト オモヒマス＝ワタクシタチハ モッ

トモット ネッシンニ ベンキョウヲシテ ヒトリマエニ コクゴガ ワカルヤウニ ナルノガ センセイノ ゴオンニ ムクイル ミチダト オモヒマス。

一二八二一（一九四三・四・二十三）「ミナサンノサクブン」

ワタクシタチノベンキョー［私たちの勉強］

新井淳宗

ワタクシタチハ サクネンノ 九ガツ八ニチ タイショウホータイビ［大詔奉戴日］ヨリ コクゴノ ベンキョーオ ハジメマシタ。コクゴノベンキョーノ ハジマッタ トキワ ムラノ ヒトタチノナカニ コクゴオ ナラッテ ナニヲスルノカ ユウヒトモ アリマシタガ コクゴヲ ナラッテ ナイチノヒトモ チョウセンノ ヒトモ ミンナ イッショニナッテ コクゴデ ハナスタメデスト ユウヒトモ アリマシタ＝サウシテ コクゴノ ベンキョーガ ハジマッテ ヒトバンナライ フタバンナラッテ 十日ホドタツト モウ コクゴガ スコシズツ ハナセルヤウニ ナリマシタ。ソウスルトモウ マチガッテモ コクゴデ ハナシヲシタクナリマシタ。コクゴヲ ナライハジメテ「キミガヨ」ガ ワカリ コウコクシンミンノ セイシ［皇国臣民の誓詞］ガ ワカッテ モウ ジュウブンオボエルコトガ デキマシタ。ワタクシワ ウレシクテ タマリマセン。ハジメハ ナニモ ワカラナカッタモノガ イマデワ モウ コレホド カケルヨウニナリ、マタ コレホド ワカルヨウニナリマシタ。ワタクシタチワ イチニチモハヤク コクゴノ セイカツガ デキルヨウニシタイト オモイマス。

一二八三五（一九四三・五・七）「ミナサンノサクブン」

ボクモ來年ハ兵隊だ

平北昌城郡大倉面□西洞一區 □□國語講習會男子部 山本善政

イヨイヨ 來年ハ 私モ兵隊ダ＝大君ノ為ニ 戰ウ時ハ來タ＝體中ノ血ハ 湧キアガル＝イヨイヨ 來年ハボクモ 銃ヲトルカト思ウト トテモ ウレシクテ タマラナイ 私ハ 來年ヲ ユビオリカゾエテ マッテイマス。先ヅ 國語ガ ヘタナノデ 今 講習會ヘ通イナガラ 國語ヲナラッテ オリマス。

先生ハ 教練モオシエテクダサイマス。私達ハ 自分デ作ッタ木銃ヲモッテ「ササゲーツツ」「ニナエーツツ」ト 先生ノ勇マシイ ゴウレイノ モトニ「一二三四」ト カケゴエモ 勇マシク オシエヲウケテイマス。コンナニ カラダヲキタエテ 來年兵隊ニ ナッタラ 天皇陛下ノ爲ニ 一身ヲササゲタイト 決心シテ居リマス。

一二八五四（一九四三・五・二十六）「ミナサンノサクブン」

私ノ講習所

新□郡新□面私設學術所　佳山金順

私ハ 毎朝 講習所ニ行クト 宮城遥拝ヲシマス。先生ニ アイサツシマス。ソウシテ 友達トタノシクベンキョウシマス。私ハサクネン十二サイノ時 一年ニハイリマシタ。ハジメハ ナニモ ワカラナカッタノデスガ 先生ノ教ヘヲ ヨクマモッタタメニ 三學期ニハ一等ニ ナリマシタ。私ハ家ニカヘッテカラハ 子供ノセワヲシ 父母ノ オテツダイヲシナガラ 二學年デマだ（ママ）一等ニナラウト ネッシンニ ベンキョウシテ イマス。

五―七．「今夜の放送用語」・「今日ノ放送国語」

一二七五九（一九四三・二・十）～一二九六三（一九四三・九・十二）

ラジオ放送による「国語」講座用の簡単な教材として、一九四三年二月十日から「今夜の放送用語」という小さな囲みの欄が連載され始めた。「今夜の放送用語」は連載当初の四回[20]のみで、同年二月十九日からは「今日ノ放送国語」とタイトルが変わる。タイトル名変更の経緯は分からないが、内容には変化はなく八十六回連載された（「今夜の放送用語」を含めると九〇回連載）。四回目掲載の「今夜の放送用語」（一九四三・二・十七）の冒頭には、「ココニ ノセルノワ ヨルノ コクゴ ホーソーニデテクル「アタラシー コトバ」デス。コクゴ キョーホンオ オモチデ ナイ カタワ コレオツカッテ ベンキョーシテ クダサイ。」と、教材についての案内を行っている。ここでいう「国語教本」とは『初等国語教本』のことで[21]、一九四三年三月三十一日（一二七九九）掲載の「今日ノ放送国語」までは、

その何課の部分を取り扱っているかを明記しているが、その後は語句が示されるだけとなっている。年度末の三月三十一日という切れ目の良さからみると、この時点でそれまでの『初等国語教本』に基づく従来の方針を変更したのかもしれない。

「今夜の放送用語」の二回目（一二七五二）と三回目（一二七五五）は日本語だけ書かれ、朝鮮語の対訳は付されていないが、一回目、および「今日ノ放送国語」の全てに日本語の単語に対する朝鮮語対訳が併記されている。

一二七五〇（一**九四**三・二・十）「今夜の放送用語」

二月十日（水）

四方（사방）ヒガシ（동）ニシ（서）ミナミ（남）キタ（북）

初等國語講座教本第二十二課新單語

一二七五二（一**九四**三・二・十二）「今夜の放送用語」

二月十二日（金曜日）

月ト四季

△一年ワ　何カ月デスカ

▲十二カ月 デス

△月ノ名ヲ　一月カラ 順ニイッテ ゴランナサイ

▲一月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月

十一月 十二月

△三月カラ五月マデオ ナント イーマスカ

▲春トイーマス

△六月カラ八月マデオ ナント イーマスカ

▲夏トイーマス

△九月カラ十一月マデヲナント イーマスカ

▲アキトイーマス

△十二月カラ二月マデヲナントイーマスカ

▲冬トイーマス

△春・夏・秋・冬オ ナント イーマスカ

▲四季トイーマス

初等國語教本（第二十三課）

一二七五五（一九四三・二・十五）「今夜の放送用語」

日ニチ

△一月ワ 何日デスカ

▲小ノ月ワ 三十日デス

△カゾエテ ゴランナサイ

ツイタチ フツカ ミッカ ヨッカ イツカ ムイカ ナヌカ

ヨーカ ココノカ トーカ ジューイチニチ ジューヨッカ

ハツカ ニジューイチニチ ニジューヨッカ ミソカ

△大ノ月ワ ナンニチ デスカ

▲大ノツキワ 三十一日デス

△二月モ三十日アリマスカ

▲イーエ チガイマス

△二月ワ 二十八日シカ アリマセン

▲ウルウ年ワ ドーナリマスカ

△ウルウ年ワ 二月ガ 二十九日ニナリマス

（初等國語教本第二十四課）

一二七五七（一九四三・二・十七）「今夜の放送用語」

ココニ ノセルノワ ヨルノ コクゴ ホーソーニデテクル

「アタラシー コトバ」デス。

コクゴ キョーホンオ オモチデ ナイ カタワ コレオ ツカ

ッテ ベンキョーシテ クダサイ。

二月十七日

曜日（요일）銀行（은행）魚つり（낚시질）土曜日（토요

일）一週（일주일）商賣（장사）遠足（원족）（初等國語

教本二十五課新單語）

二月十九日

冬（겨울）以上（이상）鏡（거울）氷すべり（어름지치

기）キセツ（계절・철）景色（경치）銀世界（은세계）

（初等國語教本三十二課新單語）

一二七五九（一九四三・二・十九）「今日ノ放送国語」

二月十九日（金）

冬（겨울）以上（이상）鏡（거울）氷すべり（어름지치

기）キセツ（계절・철）景色（경치）銀世界（은세계）

（初等國語教本三十二課新單語）

アイサツ（인사）、冷水マサツ（랭수마찰）、新體制（신체제）、習慣（습관）、健康法（건강법）、來年（래년）（初等國語教本三十三課新單語）

一二七六二（一九四三・二・二十二）「今日ノ放送國語」

アイサツ（인사）、冷水マサツ（랭수마찰）、新體制（신체제）、習慣（습관）、健康法（건강법）、來年（래년）（初等國語教本三十三課新單語）

病氣（병）、昨日（어제）、頭痛（두통）、鼻ジル（콧물）、熱（열）、涙（눈물）、食慾（식욕）、薬（약）（初等國語教本三十四課新單語）

五―八．「国語毎新」の「今日のつとめ」

一二五二八（一九四二・七・一）～一二六〇〇（一九四二・九・十一）

朝鮮民衆を戦時総動員体制に駆り立てる内容の話が五十七回連載されている。このうち、漢字カタカナ交じり文は八回だけで、その他は漢字ひらがな交じり文である。漢字の使用は一般の新聞記事の文に比べて相当に抑制的で、日本語読解力が十分でない読者をも対象として設定している。使用漢字の選定は、漢字の字体の難易度や使用頻度だけを基準にしていたわけではない。戦時総動員体制、天皇制イデオロギーに関連する語句は極力漢字で表記しようとしていた。ここには、漢字が持つ権威主義的イメージを背景にしており、また朝鮮民衆に対する「国語普及」のイデオロギー性が反映されている。日本の国粋主義者たちは、自らの思想・理念を言語的に展開する際、意外にもやまと言葉ではなく漢語語彙にたよる傾向が強く見られる。これは、朝鮮の民族主義者が漢語語彙をなるべく排斥しつつ朝鮮固有語彙を尊重する傾向をみせることと好対照をなしている。

京城第二放送（朝鮮語放送）でも、日本語語彙の「国語読み」が推奨されたが、真っ先に皇室関連の「テンノーヘイカ」や朝鮮総督府の「チョーセンソートク」、「ダイトーアセンソウ」、地名の「ケージョー」などか

ら徹底されていった。このような方針は「毎日新報」の「国語」欄でも採用されていたと思われる。

以下の語彙リストは、「今日のつとめ」の九つの文のなかで、漢字表記された名詞と仮名表記された名詞を抽出したものである。

仮名表記された語の中には、「戦争、総力、黙祷、総進軍、（徴兵）適齢期、志願、訓練所」など、戦時体制を反映した語彙も見られるが、総じてこうした漢字語彙は、その表記の難易度や漢字習得段階にたいする考慮なしに漢字表記されていたことが確認される。「毎日新報」を通じた朝鮮民衆に対する「国語普及」が、朝鮮民衆に求めた日本語習得の様相を示す側面の一つである。

〈漢字で表記された名詞〉

（第一二五二八号）七月、心、朝鮮、國民總力聯盟、愛國班、七月、申合せ、誰、國語、氣、全朝鮮、皇國臣民、何、毎日、大東亞戰爭、一億、國民、世界、大國、時、三つ、皆、國、一大、一人：（第一二五二九号）五つ、訓（おし）へ、小磯總督、總力聯盟、理事會、國民、五つ、戒め、一つ、日本、國、國、二つ、一視同仁、内鮮、事、朝鮮、三つ、人、者、行ひ、四、上位下達、下意上達、上の者、心、下の者、六年目、聖戰、何、決心、上、下、陛下、御心、御奉公：（第一二五三〇号）職場、國語、日本、腹、皇國臣民、朝鮮、二千四百萬人、一人、生活、國體の本義、第一、京畿道廳、會社、工場、十人以上、人、朝、ひる休み、時間、誰、勉强：（第一二五三一号）街、場、頭、一億、人、皇軍、英靈、大東亞戰爭、一億一心、心、間、武運長久：（第一二五三三号）兵隊、二年、朝鮮、今、學校、二年、徴兵制、日、青少年、日本、軍人、覺悟、男、子、天子さま：（第一二五三四号）七月七日、日本、日、朝鮮、女、人、兵、朝鮮、兵隊、姿、帝國、軍人、一あし前、母、姉、軍國、徴兵、陛下、家庭：（第一二五三五号）國語、耳、本、目、皇國臣民、兵隊、命がけ、何、心、一日、一つ、氣：（第一二五三六号）顔、事變、五年、六年目、先、百年、戰爭、戰時下、國民、町、電車、人人、人、親切、禮

儀、銃後、戰場、戰勝國民、銃後：（第一二五三七号）四十九勇士、海戰、海、九軍神、國民、一人、偉勲、時、飛行機、二十九機、海軍航空部隊、勇士、四十九名、花、護國の神、天皇陛下、隊長牧野三郎大尉、全部、戰死者、二階級、英靈、感謝

〈ひらがなで表記された名詞（ひらがなを漢字に代えて示す）〉（第一二五二八号）本、愚痴、不滿、通知、暮らし向き、不足、不自由、事、我慢、相手、戰争、注意、話、遊び、難関、突破、試し、歴史、總力、怠け者：（第一二五二九号）言葉、区別、世話：（第一二五三〇号）本当、中、普段、話、何、近道、所、練習：（第一二五三一号）黙禱、時間、誰、皆、お祈り、態度、感謝、姿、總進軍、塊：（第一二五三三号）僕ら、者、職場、皆、適齢期、筈、感激：（第一二五三四号）國民、志願、訓練所、見學、青年、訓練、実際、足、稽古、事、お召し：（第一二五三五号）言葉、決心、中：（第一二五三六号）滿、覺悟、皆、態度、名折れ：（第一二五三七号）時、發表、お耳、心、冥福

以下は、前の語彙調査で対象とした九つの「今日のつとめ」の全文である。

一二五二八（一九四二・七・一）「今日のつとめ」

七月の心

朝鮮の國民總力聯盟（愛國班のもと）では七月の申合せに誰でもかならず國語をつかふこと、ぐちやふまんをいはぬこと スパイに氣をつけることを 全朝鮮の愛國班にむかつてつうちをした。皇國臣民は何がなんでも 國語をつかふこと 毎日のくらしむきの上で ふそくなことやふじゆうなことがあっても それは大東亞戰爭を なしとげるために 一億の國民が どんな 苦しいことでも しのんで がまんすること 世界の大國をあひてにして 大せんそうをしてゐる時であるから スパイにちういしなければならない。この三つのことを皆がまもらなければならない。古いはなしではあるが 國民がそぞろぞろと あそびまはつてゐて それで國の一大なんくわんが とつぱされたためしは 世界のれきしにない。國の一大なんくわんを一とつぱするのは 一億

國民の そうりよく［総力］である＝一人のなまけものがゐても この大なんくわんはとつぱできない。

一二五二九（一九四二・七・二）「今日のつとめ」

五つの訓（おし）へ

小磯總督は總力聯盟の理事會で 國民に五つの戒めのことばを語られた。その一つは、日本といふ國は どういふ有難い國であるか といふことをはつきりと心得る。二つは 一視同仁で 内鮮のくべつのない事から 正しい朝鮮をこしらへて行くこと。三つは人のせわをする者からまづりつぱに行ひを正しくしなければならぬ。四には 上位下達 下意上達の上の者の心と 下の者の心とを ぴつたり一つにする。五つには 六年目にもなる聖戰を何がなんでもやりぬく 堅い決心をかためる。この五つを上も下も守つて陛下の御心を安んじ奉る 御奉公をはげまねばならず。

一二五三〇（一九四二・七・三）「今日のつとめ」

職場の國語

ほんとうの 日本を しつかりと腹のなかに いれるにはどうしても ふだんに 國語をつかふやうにしなければ いけない。ほんとうの 皇國臣民となりきるためには 國語がはなせないやうな ことでは ならない。朝鮮の二千四百萬人が 一人のこらず國語ではなしができ國語で生活のできるやうに なることが なによりも 國體の本義をしる 第一のちかみちである。京畿道廳では 會社や工場など 十人以上の人を使ふ ところでは 朝とか ひる休み とか の時間に 國語のれんしふ を するやうにした。誰でも その職場で 國語を つかふやうに勉強しなければ ならぬ。

一二五三一（一九四二・七・四）「今日のつとめ」

もくたう

街でもくたう（默禱）の じかんに なると だれでも みな その場に 立ちどまって頭をさげて おいのりをします。一億の人たちが、そろって つつましやかな たいどで 皇軍と英靈に かんしゃする すがたは とりも直さず 大東亞戰爭は一億一心の そうしんぐんだと いふことです。だか

ら どこにゐても サイレンが なったなら 必ず もくたうをしなければ ならない。しかも それは よその人が見てゐるからとか だれも 見てゐないとか いうのでは いけません。心から かんしゃし この間は もくたうの かたまりにならなければならない。ありがたう ございました 武運長久で 戰って下さい といのるのです。

一二五三三（一九四二・七・六）「今日のつとめ」

ぼくらは兵隊

あと二年たつと 朝鮮では あたらしい 兵隊さんができる。今學校にをるものでも ほかの しょくばで はたらいてゐるものでも みんな兵隊になれる。いや みな ぜひともりっぱな 兵隊とならなければならない。それまでには まだ二年あるから ゆっくりしてゐてゐゝ といったやうな考へを もつものが あってはならない。朝鮮に 徵兵制が しかれた その日から てきれいきの青少年は もう日本の軍人だ といふ覺悟を もって ゐるはずである。日本では男の子が生まれると〝兵隊さんが生れた〟といって喜ぶ。天子さまの 兵隊になる かんげきを しっかりと つかむことだ。

一二五三四（一九四二・七・七）「今日のつとめ」

しがん兵

七月七日は 日本こくみんとして どうしても 忘れてはならない日である。この日に 朝鮮の女の人たちが しがん兵 くんれんしょを けんがくする。朝鮮のせいねんが しがん兵となって どんなくんれんを 受けてゐるか 兵隊になるには どうするのかと いふことのじつさいの 姿を見るのである。しがん兵は 朝鮮のせいねんが 帝國の軍人となる。一あし前のけいこ（공부）である。それを兵隊の母や姉や また軍國の母となる女が 知らないでゐてはならぬ。徵兵といふことは、陛下の兵隊におめしにあづかる といふことだとはっきり家庭（식구）のものが 知らなければいけない。

一二五三五（一九四二・七・八）「今日のつとめ」

正しいことば

國語をおぼえるには 耳からきいて おぼえるのと 本（책）をよんで 目からならふのとある。どちらから ならひおぼえるにも一心をこめて どうしても このことばをおぼえなければ ならない といふ 強い堅い けつしんでなくては一なかなか おぼえられる ものではない。〝ああ めんどうくさい〟 などといふやうでは とても皇國臣民とはなれない。兵隊さんたちが どんな熱いところでも ジャングルのなかでも 命がけで すすむことを思つて一何がなんでも おぼえるといふ心でたとひ 一日に一つのことばでもよい しつかりとおぼえる。またおぼえるために 氣をつけることは 正しいよいことばを おぼえる。下らない バカだの コノヤローだのといふことばは いくらおぼえても やくにはたたない。

一二五三六（一九四二・七・九「今日のつとめ」

明るい顔

事變は まん五年を すぎて これから 六年目にはいる。これから先は まだ百年も 戰爭がつゞくかも知れない。そのかくごで 戰時下の國民は すすまなくてはならぬ。それには 國民が もっともっと明るくならなければならない。町をあるいてみても 電車にのっても どこへ行っても 人人の顔は暗い。これではいけない。どこへいっても あふ人は みな にこにこと 笑ってゐなければ 親切（다정）もなければ 禮儀も おこなはれない。銃後も戰場だ といったた たいどは よいが、暗くなっては 戰勝國民のなをれである。どこまでも明るく また ほがらかに 銃後を守らなければならない。

一二五三七（一九四二・七・十）「今日のつとめ」

四十九勇士

ハワイ 海戰のとき 海のはなとちった 九軍神の ことは國民の一人としてわすれてゐるものはないか。おなじ海戰で またもや 四十九勇士の いさましい 偉勲が はっぺうされま［し］た。それは あのハワイ海戰の時 〝まだかへらない飛行機が二十九機〟 といはれた その海軍航空部隊

の勇士 四十九名が 九軍神とおなじやうに ハワイ海戰の花とちり 護國の神となった。このことが かしこくも 天皇陛下の おみみにたっし 隊長牧野三郎大尉をはじめ 全部の戰死者にたいして とくに二階級をおすすめ 下さった。この英靈に こころから感謝し めいふくを いのりたい。

六. その他

六―一. 「皇民読本」

「毎日新報」の「国語毎新」欄には、上記以外に「皇民読本」というタイトルのもとに、次の読み物が連載されている。

(一)「徵兵と國語」

一二八一七(一九四三・四・十九)～一二八五九(一九四三・五・三十一)

著者は素木柾夫。どういう人物かは不詳。「国語毎新」第一二八一七号の「国語毎新」欄に「徵兵と国語(二)」が載せられ、その後、「(四)、(六)、(八)、(十)、(十二)、(十四)、(十六)、(十八)、(二十)、(二十二)、(二十四)、(二十六)、(二十八)、(三十)、(三二)、(三四)、(三六)、(三八九)」と一回おきに、合計十八回掲載されている。おそらく、これ以外は「毎日新報」の付録「国語教室」に掲載されたものと思われる。

(二)「海(うみ)ゆかば」

一二八六一(一九四三・六・二)～一二八七三(一九四三・六・十四)

著者は素木柾夫。「毎日新報」第一二八六一号の「国語毎新」欄に「海(うみ)ゆかば(一)」が掲載され、その後「(三)、(五)、(七)、(九)、(十一)」と一回おきに、合計六回掲載されてている。おそらく、これ以外は「毎日新報」の付録「国語教室」に掲載されたものと思われる。

（三）「無敵皇軍」

一二八七五（一九四三・六・十六）

著者は素木柾夫。「毎日新報」第一二八七五号に「無敵皇軍（二）」が掲載されているだけで、それ以外は不明。

六―二、四コマ漫画

（一）「勝抜三クン」

一二七一六（一九四三・一・七）～一二七七六（一九四三・三・八）

著者名は「凡太郎」。タイトル「勝抜三クン」の上に「ツヅキマングワ」［続きまんが］と書かれている。二十五回掲載され、日本語吹き出しの朝鮮語訳が各コマの右側に書かれている。

（二）「タカゾウノ日記」

一二七八〇（一九四三・三・十二）～一二八九八（一九四三・七・九）

著者名として、「允錡画」と書かれている。タイトル「タカゾウノ日記」の上に「ツヅキマングワ」［続きまんが］と書かれている。四十九回掲載され、日本語吹き出しの朝鮮語訳が各コマの右側に書かれている。

（三）「日ノ丸坊ヤ」

一二九〇一（一九四三・七・十二）～一二九六三（一九四三・九・十二）

著者名は「凡太郎」。二十七回掲載されている。日本語吹き出しの朝鮮語訳が各コマの右側に書かれている。

六―三、連載読み物

一九四二年七月八日（第一二五三五号）から「国語」欄の紙面拡充にともない、読み物が次々と連載されるようになった。

（一）「＝明るい讀物＝　幼い百姓」

一二五二八（一九四二・七・一）～一二五三四（一九四

二・七・七）

春山明著、六回連載

（二）「★戰地だより★　鏡（거울）」

一二五三五（一九四二・七・八）～一二五四一（一九四二・七・十四）

山野杢二郎著・尹喜淳（絵）六回連載

（三）「軍國モノガタリ　兵丁の母」

一二五四二（一九四二・七・十五）～一二五四七（一九四二・七・二十）

栗栖萬□夫著。四回連載

（四）「家庭の防空」

一二五四九（一九四二・七・二十二）～一二五六一（一九四二・八・三）

「家庭の防空」のタイトルのもと、十一回にわたって空襲対策などを書いた文。筆者は司狩四郎。十一回のテーマは「戰時下の覺悟」、「燒夷弾」、「バク弾の被害」、「防空壕」、「ガス弾」、「水をかけるな」、「避難」、「防空壕」、「防空壕」、「防毒」、「空襲下で」

（五）「時局らくご　スパイ退治」

一二五六二（一九四二・八・四）～一二五七〇（一九四二・八・十二）

大和玉著・朴性圭（絵）、八回連載

（六）「幼年のよみもの　北の燈台」

一二五七二（一九四二・八・十四）～一二五八〇（一九四二・八・二十二）

海野幸男著。七回連載。

（七）「軍国よみもの　少年航空兵」

一二五八二（一九四二・八・二十四）～一二五九〇（一九四二・九・一）

曾長尾衛著。八回連載

（八）「徴兵制度」
一二五九一（一九四二・九・二）～一二六二五（一九四二・十・七）
朝鮮軍参謀総長高橋坦著。二十三回連載

（九）「國體の本義」
一二六二七（一九四二・十・九）～一二六四六（一九四二・十・二十八）
新美武著。十五回連載

（十）「日本武勇傳　御朱印船」
一二六四八（一九四二・十・三十）～一二六五三（一九四二・十一・四）
井野梧雄著。五回連載

（十一）「聖將ものがたり　乃木將軍」
一二六五五（一九四二・十一・六）～一二六六〇（一九四二・十一・十一）
井野梧雄著。五回連載

（十二）「聖將ものがたり　東郷元帥」
一二六六二（一九四二・十一・十三）～一二六七二（一九四二・十一・二十三）
井野梧雄著。八回連載

（十三）「少していどの高いよみもの　低溫生活」
一二六七三（一九四二・十一・二十四）～一二六八四（一九四二・十二・五）
火野内史著。九回連載

（十四）「增産」
一二六八六（一九四二・十二・七）～一二六九五（一九四二・十二・十六）
畑野芋作著。八回連載。

（十五）「國民皆兵」

一二六九五（一九四二・十二・十六）～一二七〇九（一九四二・十二・三十一）

大東健兒著、十回連載

（十六）「輝く皇民生活」

一三〇一七（一九四三・一・六）～一三〇五五（一九四三・十二・十四）

朝鮮各地の「毎日新報」特派員の署名入り。ルポのようなもの。

二十四回にわたって掲載され、最後に「ごあいさつ（인사）―輝く「皇民生活」について―」という総括記事が載せられている。この文の冒頭には、「この〝輝く皇民生活〟は　かきはじめてから　二十四回　半島における皇民のありかたが　しかも　国語を通じて　どんなになってゐるかということを　かきつけました。」と連載の趣旨が記されている。

（十七）「玉砕生活」

一三〇六六（一九四三年十二月二十五日）～一三〇七二（一九四三・十二・三十一）

五回のみの連載。例えば次のような内容のもの。

一三〇六七（一九四三・十二・二十六）「玉砕生活」

組長覺書（二）　素木柾夫

班長と組長

朝鮮の愛国班を五十萬とみると　班長は　五十萬人　ゐることになる。組長は　その　十分の一とみて　五萬人となる。この　班長や　組長は　みな　いつも　戦闘配置について　ゐなければならない。けれども　愛國班の　じっさいは　なかなかさうは　いかない。總力聯盟の　くみたてから　いへば　京城のやうな　都會では　各町に　理事會と　いふものがあり、その下に　防衛、配給、經濟などの　せわをする　部長と　いふものがあり　その下に組長、班長と　いふものがゐて　國民總力の戦闘配置について　ゐるのであるが　これが　なか〳〵うまく　はこばない。それは　組長や班長にも　ゆきとゞか

ないことも あらうが じっさいは 班長の一人一人が 愛國班といふものに ついてそれが 自分達の せいかつのもとになるものだ といふことを はっきりと みとめてゐない。とりわけ 物資の配給などに なると ちぐはぐなものになり、不平や不滿の聲がおほい。理事長や 部長などの 上層の 人たちは 町會の事務員などに 命令とか さしづを するだけで じっさいの 班員の すがたといふものは わかってゐない。班内のいろ〳〵な 苦情を きくのは 班長である。そのつぎは 組長である。だから 愛國班の じっさいの 運營にあたるものは、班長と組長といふことになる。いまのところ、班長は その班の輪番……まはりばんにつぎ〴〵に やってゐて たいてい 三月くらゐで つぎの人に まはすやうな しくみになってゐる。だから よいいみでは みんなが 班長をくりかへすために 班長のくるしみと いふものがわかるが また やっとなれたころには つぎのあたらしい人にかはる。

六―四．連載小説欄の読み物

（一）「海戰實話　海鷲」

一二九六五（一九四三・九・十四）～一二九七四（一九四三・九・二十三）

芦田松太郎作、朴性圭画。九回連載。

（二）「日本人」

一二九七五（一九四三・九・二十四）～一二九八八（一九四三・十・七）

江下力・作。十回連載。

（三）「陸鷲ものがたり　武山隆大尉」

一二九八九（一九四三・十・八）～一三〇一〇（一九四三・十・三十）

わたなべ　さぶろう著　二十回連載。

（四）「決戦物語　義足」

一三〇一一（一〇四三・十・三十一）～一三〇三二（一九

四三・十一・二十一）

えした　つとむ作　十六回連載。

（五）「世界戦争物語　戰勝國」

一三〇三四（一九四三・十一・二十三）～一三〇五一（一九四三・十二・十）

坪内襄二作、金村武雄画　十一回連載。

（六）「赤穂義士譚　忠臣義士」

一三〇五二（一九四三・十二・十一）～一三〇六九（一九四三・十二・二十八）

武木たかを作　十三回連載。

七．第四面全面化期

七―一．「国語ノチカミチ」

一二九六五（一九四三・九・十四）～一三〇七八（一九四四・一・七）

一九四三年九月十二日（一二九六三）付けの紙面まで「毎日新報」の「国語」欄には「国語毎新」とタイトルが付されていたが、一九四三年九月十四日（一二九六五）からこのタイトルは付されなくなった。そして、「時局に備え」て「皇民をますます錬成」する目的で「国語」を普及するため、「国語」欄が第四面「全面」に割り当てられ紙面が拡充された。このことは次の「お知らせ」で公告されたが、実際には四面上部の半分程度のスペースで、その下には朝鮮語の小説や広告などが掲載されていた。

一二九六五（一九四三・九・十四）

お知らせ

今日から 國語らんが この 第四めんぜんたいに わたるやうに なりました。時局に そなへるのと 皇民を ますますれんせいするために 國語を ふきふ［普及］させなければならない。讀者の若者が 兵にめされる日は 刻々にちかづいて きます　陸に、海に。また 義務教育が 一せいに

しかれるのも もう とほい ことでは ありません。そのために 一日も はやく りっぱに 國語で よみかきなさるやうにと この全面を みな 國語らんと しました。そして 國語れんしふ［練習］の らんも これまでより うんと ひろげました。米英を うちのめし 戰爭に かちぬくために この國語面を すみずみまで 利用して ください。

一九四三年九月三日（一二九五四）に「ミナサンノサクブン」の連載が終わり、一九四三年九月十四日（一二九六五）から「国語ノチカミチ」の掲載が始まる。「国語ノチカミチ」では、すべての日本語に朝鮮文字による日本語音の音声表記が表音主義に徹したルビの形で付されており、また朝鮮語対訳文が付されている。「国語ノチカミチ」は一九四四年一月七日（一三〇七八）まで掲載された会話文体の「国語」学習用教材で、その内容は、「国語」学習を通じて朝鮮民衆を総力戦体制に動員しようとする意図が濃厚なものとなっている。「国語ノチカミチ」は本稿で利用した「毎日新報」復刻版では、八十三回分が確認されたが、このうち六十七回分に、戦争協力、軍隊、供出、貯蓄・節約、国家神道などの話題で構成された会話文が掲載されており、全体の八割が総力戦体制に協力することを煽る会話文である。

次に紹介する「金物」や「特別志願兵制」は金物供出の為に台所の隅々まで監視し協力しない者を「非国民」とレッテル貼りしていじめたり、「特別志願兵」への「志願」を息子に代わって父親がやることすら煽り立てる以下のような文からも、太平洋戦争期に朝鮮民衆が押し付けられた閉塞感を感じさせる。

一九四一年九月一日から施行された「金属回収令」は、同年十月一日より朝鮮でも施行された。真鍮製の食器や祭具を多用する朝鮮民族にとって、このような施策が平凡な日常生活に及ぼす影響は大きかった。

なお、本稿附録の資料一で「国語ノチカミチ」をすべて紹介しておいた。

一三〇五二（一九四三・十二・十一）「国語ノチカミチ」

カナモノ（쇠부치）［金物］

「マダ シンチュウノ ショクキヲ カクシテ オイテ
ツカフ イヘガ アリマスネ」

（아직두 놋그릇을 감춰 두구 쓰구 잇는 집이 잇서요 글세）

「セトモノヲ ツカヘバ イイデスノニ センサウニ
ヒツエウナ カナモノヲ ドウシテ アンナニ カクシテマデ
ツカフノカ ワカリマセンネ」

（사기그릇을 쓰며는 죠흘텐데 전쟁에 필요한 쇠부치를 무엇 때문에 감춰가면서까지 쓰는지 알수업서요）

「ケッキョク クニヲ アイスル マゴコロガ タリナイカラデスヨ」

（결국 나라를 사랑하는 성의가 부족한 탓이지요）

「ホントニ ヒコクミントイハレテモ シカタガナイデスネ」

（참말 비국민이란 말을 들어두 할수업슬거얘요）

一三〇二八（一九四三・十一・十七）「国語ノチカミチ」

トクベツ シグワンヘイセイ（특별 지원병제）［特別志願兵制］

「トクベツ シグワンヘイハ イツマデニ シグワンスレバヨイノデスカ」

（특별 지원병은 언제까지 지원하면 됩니가）

「コンゲツノ ハツカマデデス」

（이달 수무날 까집니다）

「アア ソレデハ シメキリマデニ アト ヨッカシカノコッテ ヰマセンネ」

（아아、그럼 마감까지 인제 사흘바께 남지안엇군요）

「サウデス マダ マヨッテ ヰルヒトハ コノサイシグワンシテシマハナイト マニアハナク ナリマス」

（그럿습니다 아직도 망서리고잇는 사람은 이때에 지원해 버리지 안으면 때를 노치고맙니다）

「デハ イソイデ カヘッテ ムスコノ グワンショヲ
カクコトニ シマス」

（그럼 빨리가서 아들의 원서를 쓰기로 하겟습니다）

次の文は国家神道の押し付けに違和感を抱く朝鮮民衆の心情を描いており、その前半部分は朝鮮民衆の共感を呼び起しかねないものだが、よく検閲をかいくぐったものだと思われる。

一三〇五八（一九四三・十二・十七）「国語ノチカミチ」

タイマ ホウサイ（一）（大麻奉斎）［大麻奉斎］

「オタクデハ タイマヲ ホウサイシテ ヰマスカ」

（댁에서는 대마를 봉재하섯습니까）

「ハヅカシイ ハナシデスガ マダ ホウサイシテ ヰマセン」

（부끄러운 말입니다만 아직 봉재하지안혓습니다）

「ソレハ イケマセンネ。スルヤウニ シマセウ」

（그건 안되겟군요 빨리 봉재하도록하십시요）

「ジツヲ イフト イタダイテ オイテハ アリマスケドイママデニカミサマヲマツタコトガナイモノデスカラ ナンダカ…」

（사실을 말하면 밧자□［워］는 두엇습니다만 지금까지 신을 모셔본적이 업스므로 어쩐지……）

一三〇五九（一九四三・十二・十八）「国語ノチカミチ」

タイマ ホウサイ（二）（大麻奉斎）［大麻奉斎］

「ソノヤウナ キモチカラ マダ一ホウサイシテ ヰナイカタガ オホイヤウデス」

（그런 마음에서 아직 봉재하지안코 잇는 분들이 만흔것갓습니다）

「ヤハリ ワタクシト オナジカタモ ヲリマスカ」

（역시 나와 가튼 사람도 잇습니까）

「アリマストモ。シカシ ジツサイニ ヲガンデ ミルトソンナ キモチナンカ トンデシマツテ ホンタウニカミサマニ タイスル キガ オコル モノデスヨ」

（잇구 말구요。그러치만 실제루 배례해보면 그런 생각은 날러가버리고 참말로 신을 대하는마음이 생기는것입니다）

「ワタクシモ サウジャナイカト オモッテ チカイ ウチニ ホウサイ シヨウトハオモッテ ヰマシタ」

(저도 그러치 안흘까 생각하구 곳 봉재할켜구는 생각하고잇섯습니다)

「サウデスカ イチニチモ ハヤク ホウサイ スルヤウニ シマセウ」

(그럿습니까。하로밥비 봉재하도록 하십시다)

「国語のチカミチ」の最後の二回(一九四四年一月五日・一月七日)だけは最初に単語が示され、その後にこの単語を用いた会話文を示す体裁を取っている(それ以前は単語を示す場合は会話文の後に置かれている)が、この体裁は一九四四年一月八日から新たに連載が始まる「ケフノオケイコ」と同じであり、連載物移行期で生じた混乱を示すものと判断される。

一二九六五(一九四三・九・一四)「国語ノチカミチ」

バウクウエンシフ(방공연습)[防空演習]

イマカラ一バウクウエンシフヲ ハジメマス

(지금부티 방공연습 시작합니다)

モンヘ[モンペの誤植] ボウシ テブクロ サンカクキン タオル ミナ ソロヒマシタカ

(몸페 모자 장갑 삼각건 수건 다 가추엇습니다)

ハイ ミナ ソロヒマシタ

(네 다 가추엇습니다)

セウイダン[焼夷弾] ニハ ユシセウイダン[油脂焼夷弾]ト ワウリン セウイダン[黄燐焼夷弾]ガ アリマスネ

(소이탄에는 유지소이탄과 황린소이탄이 잇지요)

ハイ サウデス

(네 그럿습니다)

「ユシセウイダン ラクカ[落下]ノ トキニハ ドウシマスカ

(유지소이탄이 떠러진 때에는 어떠케 합니가)

ヌレタ一ムシロヲ カブセ スナヲ カブセ ソノツギニ ミヅヲ カケマス

(저즌 가마니를 덥고 모래로 덥고 그다음에는 물

을 끼얹습니다)
サウデス モウヒトツ ワウリンセウイダンガ―アリマスネ
(소-테스 모-히도쓰 오-린쇼-이단가 아리마스네)
＝ソノトキニハ ドウシマスカ
(소노토끼와 도-시마스까)
(그럿습니다 또하나 황린소이탄이 잇지요 그 땐 어떠케합니가)
ユシセウイダンノ バアヒト オナジデスガ―ワウリン
(유시쇼-이단노 바아이도 오나지데스가 오-린)
セウイダンハアツクテ ケムリガ タクサン デマスカラ
(쇼-이단와아쓰꾸테 게무리가 다꾸상 데마수카라)
スコシ ハナレテ ヒヲ ケシマス
(스꼬시 하나레테 히오 세시마스)
(유리 소이탄의 경우와 갓습니다만 황린소이탄은 뜨겁고 연기가 만히나니까 좀떠러저 불을끔니다)
ハイ サウデス ソレデハ エンシフ[演習]ヲ ハジメマセウ
(하이 소-데스 소레데와 엔슈-오 하지메마쇼-)
(네 그럿습니다 그러면 연습을 합시다)

一三〇七八（一九四四・一・七）「国語ノチカミチ」

ユキ（눈）［雪］
(유끼)
イヘ（집） キ（나무） イヌ（개） ミチ（길） ヤマ（산）
(이에 기 이누 미찌 야마)
ユキガ フリマス
(유끼가 후리마쓰)
(눈이 옵니다)
ドンドン ツモリマス
(돈동 쓰모리마스)
(작구작구 싸입니다)
イヘモ ミチモ キモ ヤマモ マツシロニ ナリマシタ
(이에모 미찌모 기모 야마모 맛시로니 나리마시다)
(집도 길도 나무도 산도 하애 젓습니다)
イヌガ ウレシサウニ カケマハリマス
(이누가 우레시소오니 가께마와리마스)
(개가 기뿐듯이 뛰여다닙니다)

七―二、「一日一語」

一二九八三（一九四三・十・二）～一三〇六二（一九四三・十二・二十一）

「一日一語」運動は一九四二年五月から始まる「国語全解運動」の一環として、小学生（国民学校）児童に「国語」の基礎語彙を持ち帰らせ、家庭内の非識字者に一日一語宛修得するように促すことを通じて、すべての朝鮮民衆に「国語」を少しでも習得させ、たとえわずかな語彙だけでも、これを朝鮮語の中に混用して用

いさせようとした運動であった。

一九四二年四月二十日から四日間の日程で朝鮮総督府で開催された朝鮮総督府定例知事会議は「国語全解・国語常用運動」の新たな展開を提起した。会議二日目の国語常用問題についての朝鮮総督の諮問に対する答申で、咸鏡南道瀬戸知事、江原道柳生知事、全羅北道金村知事など六道の知事が朝鮮全域での「全解運動」を展開すべきであると提唱し、会議三日目には金村知事は「国語一日一語普及票を作製し、国民学校児童に教えて、簡単な日常語を家庭で普及せしめる。時に該校訓導が各家庭を査察に赴けば、その普及の程度も判明するし、優秀なる家庭には標識を掲げてこれを表彰するなどの方法もある」と、「一日一語運動」展開の具体的な方策について答申した[22]。

一九四二年五月六日、国民総力朝鮮聯盟指導委員会が「国語全解・国語常用運動」の基本指針として策定した「国語普及運動要綱」の「(三) 国語を解せざる者に対する方策」で「児童生徒による一日一語運動」を取り上げたことから、「一日一語運動」は朝鮮全土において活発に展開されることとなった。この日、朝鮮総督府学務局島田編輯課長は「一日一語運動」で修得すべき語彙数が二百語ないし三百語程度であると語ったことが、次のように「毎日新報」で報道されたことも、この運動に拍車をかけた。

この要綱［国語普及運動要綱］で、老人や若者、男や女を問わず、誰でも容易に実践できる国語普及の方法として、「一日一語運動」［記事の原文では〝하로 한마디의 운동〟と訳されている］を提唱していることと、すべての家族が国語を常に用いている家庭を「国語常用家庭」として広く表彰し、公職その他の就職でも国語を常用する者を優先的に優待することになったことは適切な方策として注目されるが、おおよそ国語を何語ぐらい知っておれば簡単な対話ができるのか？この方面の専門家である総督府島田編輯課長に尋ねたところ、二百ないし三百語だけ知っておればよいということなので、一日に一語ずつ習えば半年な

いし一年も経たずして簡単な話は理解し、話せるようになるというわけだ。島田課長は次のように話す。何語ぐらい知れば日常生活で必要な対話が出来るのかという標準は、男女と生活水準によって異なり、定めることは難しいが、おおよそ二百語ないし三百語なら簡単な対話はできる。したがって、総力聯盟から無料で広く全朝鮮の各層に配布しようとして今作っている初歩教科書としてコクゴに収録した語数も二百五、六十語程度である。[23]

「国語普及運動要綱」をモデルにして、朝鮮各道の地方行政機関で作成され、朝鮮総督府に送付された「国語全解・国語常用」に関する諮問答申書では、例えば以下のように、各地方ごとにさまざまな実施プランが示された。[24]

「一日一語運動」は国民学校（当時の初等教育機関）のみならず、簡易学校、書堂、青年隊、総力聯盟の愛国班の常会、企業所などにおいて行われ、さらには刑務所の受刑者に対しても行われていた。[25] 学校では、朝礼や終礼等で全生徒児童に同一の一語を伝授して、村じゅう一語を充満させる（黄海道平山郡）などという答申書もあった。この運動には小学生のみならず、休暇中に帰省した中等学校生徒に協力させる（咸鏡北道吉州郡）とした行政機関もあった。

そして、この運動を徹底させるため、「受持教師をして月一回巡回指導督励を加える」（咸鏡南道文川郡）、「教職員は常に査察を厳にし、実行の徹底を図る」（黄海道長淵郡）、「時々その成績を審査して、物資配給に考慮を加える」（全羅南道求禮郡）、「毎日其の状況を聴取、採点する等、積極的に指導監督を加うる」（全羅南道長城郡）、「教職員に於ては隨時巡廻、之が実践状況、並に実状を査察指導（実践は実績査察簿を備付、之に記入のこと）すること」（全羅南道珍島郡）などと、教員による巡回査察をおこなうとしていた。

平壌府の城南公立国民学校で編纂された小冊子『一日一語集』のはしがきでは、「……常に国語常用に努力しているが、こんど徴兵制施行決定に伴い、いよいよ

必要性が加重せられて来たので長期国語普及運動の一つとして登壇したのがこの一日一語運動である」と説明し、「同校では、近くこの本を利用して一斉に一日一語運動を展開しますが、方法は毎日五分間校内放送時間を設け一日一語を児童に知らせると同時に、放送の声に唱和させ、正しい発音を覚えさせて帰宅の上、早速家族に伝へ、国語のわからない父兄、母姉等に指導し国語全解に努力することになつています。」と書かれていることが、当時の「朝日新聞南鮮版」[26]で報じられている。

また京畿道では「国語を解しない者に対しては、愛国班の申合せにより必ず国語講習会へ出席させる一方、創氏と旧氏名の国語読み、一日一語習得、一日習得した国語の常時使用、汽車、電車、自動車等の行先、自己住居の町名、班名等の国語読み、就学前の児童の簡易児童保育所施設の強化による国語習得、ラジオの国語講座の利用」等の徹底に努め万全を期すとしていた。[27]

「毎日新報」で一九四三年十月二日から五六回にわたって連載された「一日一語」は、学童のいない家庭、子どもが未就学の家庭の家族にまで運動を浸透させる役割をになわせようとしたもので、国民総力朝鮮聯盟の「愛国班」（地域末端組織で、当時の日本の隣組のようなもの）の常会などでも活用されたものと思われる。毎回三語ずつカタカナで掲載され、それぞれの語の日本語音が朝鮮文字で示されると共に、[28]対応する朝鮮語が記されている。「一日一語」は基礎的な日本語語彙を修得させることを狙ったもので、当時、日本語の仮名文字も朝鮮文字も全く解しない完全非識字者が過半数を占める状況への対応策だった。「毎日新報」に五十六回にわたって掲載された「一日一語」の語彙は五十六語で、各回ごとに関連語が二語ずつ提示されている。したがってこの関連語を含めると合計一六三語[29]だった。

従来、朝鮮における「国語普及」は、初等教育への就学率を次第に高めていくことを通じて達成することを基本とし、未就学者には「国語講習会」等の社会教育で補充するというのが基本的な考え方であった。小

学校の「国語」教育では、第二言語としての教授法などは準備されておらず、教師が身振り手振りで教えていく類のものだった。朝鮮は日本帝国の版図内にあり、朝鮮人は天皇の赤子（せきし）であるとするところから、「内地」における国語教育の延長線上でしか植民地「国語」教育をとらえていなかった。

しかし、徴兵制施行にともない「国語普及」がその成否を決する状況において、未就学の徴兵適齢者には朝鮮全土二千数百ヶ所に設置した「朝鮮青年特別錬成所」（一年間六〇〇時間の日本語等の訓練課程）への入所を強制したのみならず、「国語」を修得しなければ「日本精神」も体得できないという言語観のもと、朝鮮民衆総てが「国語」を解するようにする「国語全解」を求めて行なったのが「一日一語運動」だった。

「毎日新報」に掲載された「一日一語」は次のようなものだった。太字で示した語が「一日一語」の語で、頭に星印（☆）が付された語は関連語であることを示す。なお、角括弧（［　］）内の記述は筆者による注記。

一二九八三（一九四三・十・二）「一日一語」

［ア（아）］イ（이）ウ（우）エ（에）オ（오）

アイコクハン（애구반）［愛国班］☆アイコクハンチャウ（애국반장）［愛国班長］☆アイコクハンヰン（애국반원）［愛国班員］

一二九八四（一九四三・十・三）「一日一語」

ア（아）［イ（이）］ウ（우）エ（에）オ（오）

イヌ［犬］（이누）（개）☆オヤイヌ［親犬］（오야이누）（에매개）☆コイヌ［仔犬］（고이누）（강아지）

一二九八七（一九四三・十・六）「一日一語」

ア（아）イ（이）［ウ（우）］エ（에）オ（오）

ウシロ［後］（우시로）（뒤）☆マエ［前］（마에）（앞）☆ヨコ［横］（요꼬）（옆）

一二九八八（一九四三・十・七）「一日一語」

ア（아）イ（이）ウ（우）［エ（에）］オ（오）

エンピツ［鉛筆］（엔피쓰）（연필）☆マンネンヒツ［万年筆］（만넹히쓰）（만년필）☆フデ［筆］（후데）（붓）

一二九八九（一九四三・十・八）「一日一語」

ア（아） イ（이） ウ（우） エ（에） **オ**（오）

オトウサン［お父さん］（오도오상）（아버지）☆オカアサン［お母さん］（오카아상）（어머니）☆オバアサン［お婆さん］（오바아상）（할머니）

「カ」以後の「一日一語」には次のような語が挙げられている。日本語音の朝鮮文字転写は省略する。角括弧（［　］）内の記述はすべて本稿執筆者（熊谷明泰）による注記である。太字で示したのが「一日一語」で、その他は関連語である。

カキ［柿］（가끼）（감）、シブガキ［渋柿］（시부가끼）（떨분감）、ホシガキ［干柿］（호시가끼）（곡감）：**キシャ**［汽車］（기샤）（기차）、デンシャ［電車］（덴샤）（전차）、ジドウシャ［自動車］（지도오샤）（자동차）：**クチ**［口］（구찌）（입）、クチビル［唇］（구찌비루）（입술）、クチゴタヘ［口答え］（구찌고다에）（말대답）：**ケモノ**［獣］（게모노）（즘생）、ケダモノ［獣］（게다모노）（즘생）、カチク［家畜］（가찌꾸）（집에서 길으는（마） 즘생）［家で飼っているけもの］：**コドモ**［子供］（고도모）（아해）、オトナ［大人］（오도나）（어른）、ラウジン［老人］（로오징）（로인）：**サラ**［皿］（사라）（접시）、チャワン［茶碗］（차왕）（공기）、ユノミ［湯呑］（유노미）（차잔）：**シンブン**［新聞］（심붕）（신문）、ザッシ［雑誌］（잣시）（잡지）、ケウクワショ［教科書］（교오까쇼）（교과서）：**スズメ**［雀］（스즈메）（참새）、ツバメ［燕］（쓰바메）（제비）、カラス［硝子］（가라스）（까치）：**セミ**［蝉］（세미）（매미）、トンボ［蜻蛉］（돔보）（잠자리）、コホロギ［コオロギ］（고오로기）（귀뜨라미）：**ソラ**［空］（소라）（하늘）、クモ［雲］（구모）（구름）、カゼ［風］（가제）（바람）：**タマゴ**［卵］（다마고）（달걀）、メンドリ［雌鶏］（멘도리）（암탉）、ヒヨコ［ひ

よこ］（히요꼬）（병아리）：**チリトリ**［塵取り］（지리도리）（쓰레바기）、ハウキ［箒］（호오끼）（빗자루）、ザフキン［雑巾］（조오낑）（걸레）：**ツキ**［月］（쓰끼）（딸）、タイヤウ［太陽］（다이요오）（태양）、ホシ［星］（호시）（별）：**テガミ**［手紙］（데가미）（편지）、フウショ［封書］（후우쇼）（봉투에너흔편지）［封筒に入れた手紙］、ハガキ［葉書］（하가끼）（엽서）：**トケイ**［時計］（도께이）（시계）、ハシラドケイ［柱時計］（하시라도께이）（괘종・掛鐘）、ウデドケイ［腕時計］（우데도께이）（괼뚝시계）：**ナス**［茄子］（나스）（가지）、キウリ［胡瓜］（규우리）（오이）、カボチャ［南瓜］（가보짜）（호박）：**ニンニク**［にんにく］（닌니꾸）（마늘）、ネギ［葱］（네기）（파）、シャウガ［生姜］（쇼오가）（생강）：**ヌマ**［沼］（누마）（늪）、イケ［池］（이께）（못）、ミヅウミ［湖］（미즈우미）（호수）：**ネコ**［猫］（네꼬）（고양이）、ノラネコ［野良猫］（노라네꼬）（도적고양이）、ネズミ［鼠］（네즈미）（쥐）：**ノミ**［蚤］（노미）（벼룩）、ナンキンムシ［南京虫］（낭낑무시）（빈대）、カ［蚊］（가）（모기）：**ハト**［鳩］（하도）（비둘기）、デンショバト［伝書鳩］（데쇼바도）（편지전하는비둘기）［手紙を伝える鳩］、コバト［小鳩］（고바도）（색기비둘기）：**ヒト**［人］（히도）（사람）、ヒトビト［人々］（히도비도）（사람들）、ニンゲン［人間］（닌겡）（인간）：**フネ**［船］（후네）（배、船）、キシャ［汽車］（기샤）（기차）、ジドウシャ［自動車］（조도오샤）（자동차）：**ヘイタイ**［兵隊］（헤이따이）（군인）、リクグン［陸軍］（리꾸궁）（육군）、カイグン［海軍］（가이궁）（해군）：**ホシ**［星］（호시）（별）、ヨル［夜］（요루）（밤）、ソラ［空］（소라）（하늘）：**マス**［升］（마스）（되）、ハカリ［秤］（하까리）（저울）、モノサシ［物差し］（모노사시）（자）：**ミチ**［道］（미찌）（길）、ミチバタ［道端］（미찌바다）（길가）、オホドホリ［大通り］（오오도오리）（［判読不能］）：**ムギ**［麦］（무기）（보리）、キビ［黍］（기비）（수수）、アハ［粟］（아와）（조）：**メ**［目］（메）（눈）、メガネ

[眼鏡]（메가네）（안경）、メクラ［目暗］（메꾸라）（장님）：**モン**［門］（몽）（문）、マド［窓］（마도）（장문）、フスマ［襖］（후스마）（미다지）：**ヤマ**［山］（야마）（산）、カワ［川］（가와）（강）、ノハラ［野原］（노하라）（들）：**イモウト**［妹］（이모오도）（누이동생）、オトウト［弟］（오도오도）（사내동생）、ネイサン［姉さん］（네에상）（누님）：**ユメ**［夢］（유메）（꿈）、フトン［布団］（후동）（이불）、マクラ［枕］（마꾸라）（벼개）：**エビ**［蝦］（에비）（새우）、カニ［蟹］（가니）（게）、カヒ［貝］（가이）（조개）：**コヨミ**［暦］（고요미）（책력）、ハシラゴヨミ［柱暦］（하시라고요미）（달력）：**ラッパ**［喇叭］（랍빠）（라팔）、フエ［笛］（후에）（피리）、タイコ［太鼓］（다이꼬）（북）：**リンゴ**［林檎］（링고）（사과）、クダモノ［果物］（구다모노）（과일）、ナシ［梨］（나시）（배）：**リンゴ**［林檎］（링고）（사과）、ナシ［梨］（나시）（배）[30]、カキ［柿］（가끼）（감）：**ツル**［鶴］（쓰루）（학）、サギ［鷺］（사기）（황새）、ガン［鴈］（강）（기러기）：**レンコン**［蓮根］（렝꽁）（연근）、ニンジン［人参］（닌징）（홍당무、인삼）、サトイモ［里芋］（사도이모）（토란）：**ロバ**［驢馬］（로바）（당나귀）、ウマ［馬］（우마）（말）、ウシ［牛］（우시）（소）：**ワシ**［鷲］（와시）（수리）、タカ［鷹］（다까）（매）、トビ［鳶］（도비）（솔개）：**ヰド**［井戸］（이도）（우물）、ヰドバタ［井戸端］（이도바따）（우물까）、ツルベ［釣瓶］（쓰루베）（드래박）：**ウミ**［海］（우미）（바다）、ウミベ［海辺］（우미베）（바닷가）、ナミ［波］（나미）（파도）：**エンソク**［遠足］（엔소꾸）（원족）、サンポ［散歩］（산보）（산보）、リョカウ［旅行］（료꼬오）（여행）：**ヲトコ**［男］（오도꼬）（남자）、ヲンナ［女］（온나）（여자）、コドモ［子供］（고도모）（아해）[31]：**ガン**［鴈］（기러기）、カモ［鴨］（오리）、ツル［鶴］（학）[32]：**ギン**［銀］（은）、ギンイロ［銀色］（은빗）、キン［金］（금）：**グンジン**［軍人］（군인）、グンタイ［軍隊］（군대）、グンカン［軍艦］（군함）：**ゲタ**［下駄］（게다）、クツ［靴］（구두）、

ハキモノ［履き物］（신발）；**ゴミ**［塵］（쓰레기）、ゴミバコ［塵箱］（스레기통）、ホコリ［埃］（먼지）

七―三．「敢闘生活」

一二九六八（一九四三・九・十七）～一三〇一一（一九四三・十・三十一）

従来の「国語」欄から、広告欄以外の第四面全体をぶち抜く「国語」面へと紙面拡大をした一九四三年九月十四日（一二九六五）の「お知らせ」は、〝米英をうちのめし、戦争に勝ち抜くためにこの国語面をすみずみまで利用してください〟と呼びかけている。アジア・太平洋戦争の戦局が悪化する中で、朝鮮民衆を戦時体制に従属させるためのプロパガンダがますます強化されていたが、そのひとつとして「敢闘生活」と題した読み物が一九四三年十月三十一日（一三〇一一）まで三十八回にわたって連載された。さらにこれに引き続き、「決戦語」と題した読み物が一九四三年十一月二日（一三〇一三）から掲載され始めたが、三回の掲載だけで終わっている。

こうしたプロパガンダは、戦場での「死」を美化し、十分な戦費を持たざる帝国ゆえの精神主義を強調して耐乏生活を強いる類のものだった。漢字使用が抑制された漢字ひらがな交じりや漢字カタカナ交じりの文で、日本語読解力が比較的高くない読者層をも取り込もうとしている。「毎日新報」の「国語」紙面がすべてそうであるように、「一」などの漢数詞以外の漢字には基本的にほとんど総てルビが振られている。「今日のつとめ」のところでも言及したことだが、漢字使用を抑制して広い読者層を得ようとしているにも拘わらず、次に紹介する「敢闘生活」の記事において、多くの語がひらがなで表記されつつも、「戦時下、大東亞戦争、敵米英、決死の勇、戦争生活、飛行機、軍艦、靖國神社陛下の御親拝、臣下の霊、護國の神、日本精神、戦時決戦、戦場、産業戦士の徴用」など、時局関連用語や軍事関連用語の多くは漢字で表記されている。これは、朝鮮民衆の間に「国語」を普及する「国語全解運動」

の政治的意図が露骨に伺われる側面でもある。

一二九七〇（一九四三・九・十九）「敢闘生活」

がんばれ！

がんばれとは、漢字では頑張れとかき、がんばれと はつおんし、一ど［一度］かうだときめたこと、きめられたことは、どこまでも やりとほす、なしとげるといふことであります。戰時下の生活のうちで、一ばんこれが たいせつであります。世界をたてなほす、といふ大東亞戰爭です。また敵米英は、はじめとはちがって、ちかごろは、どうしても わが日本を うちほろぼすのだと たいへんな がんばりかたです。一億の國民は、さかえるか、ほろびるかといふ あぶない時です。なりあがりや、わたりものの 米英などに まけてなるものですか、どんなに くるしいことが あっても、がんばりとほす。これが 日本國民の かくごです。

一二九七二（一九四三・九・二十一）「敢闘生活」

死を喜ぶ

誰でも死ぬことを よろこぶものはない。その世にうまれたからには 一日でも 長生して お國のために 人のためにつくしたい とおもはぬものはない といって 百年も千年も いつまでも 死なずには すまない。一どはかならず 死ななければならない。してみれば 死んでかひある 死にかたを しなければならぬ。日本人 ことに軍人はいつでも 死ぬかくごをしてゐる ＝ かっては 決死の勇といったが 今は必死である。すなはち喜んで死ぬ。日本軍のつよいのは これがためである。人は死を喜ぶ決心さへあれば どんなことでも できる。

一二九七三（一九四三・九・二十二）「敢闘生活」

隘路

隘路ト イフ コトバハ モト 軍隊用語デアッタガ ナニモカモ スベテガ センサウニ カチヌク トイフ セイシンカラ コノ コトバハ ドコデモ ツカハレルヤウニ ナッタ。アイロトハ〝セマイミチ〟トイフコトデ イマデハ一ナミタ

イテイナコトデハ トホレナイミチ トイフホドノ イミトカイシャクシナケレバ ナラナイ。コレカラ 日マシニ サムサニ ムカッテユクガ 戰爭ニカツタメニ セキタン、スミ、マキ ナドノ タキモノヲ ケンヤクシナケレバナラヌ＝シタガッテ 寒氣ヲ コラヘテ ユカナケレバナラヌ。コレモ 一ツノ戰爭生活ノ タメノ アイロダガ ドウシテモ コレヲ キリヒライテ ススマナケレバ ナラナイ。

一二九七四（一九四三・九・二十三）「敢闘生活」

自分

この大戰爭のとき 一ばんわるいことは 自分といふものをかんがへることです。なにをするにも、まづ 自分といふものを なげだし わが身といふものを わすれて、かからなければなりません。自分を かんがへると うまいものをほしい、らくをしたい、くるしいことは したくない、電車には はやくのりたい、などと、じぶんばかり、つがふ［都合］のよいことが さきにたちます。今は 自分など 毛ほども おもはず、すべては お國のためだ、米英を たたきつぶすためだ、どんな 不自由なことも、この戰爭に かつためには しのばなければ ならない。もし戰爭に まけたら、どうなるか。だんじてまけない、じぶんをすてて、お國のため つくすことです。

一二九七九（一九四三・九・二十八）「敢闘生活」

輸送力

輸送力トハ モノヲハコブチカラトイフコトデ チカゴロハセンサウ［戰爭］ニ カチヌクタメニ ユソウリョクトイフモノガ イクラアッテッモ タリナイノデス。センサウ［戰爭］ニハ 飛行機ヤ 軍艦ヤ船ガ イクラアッテモ タリナイヤウニ モノヲ ハコブ ユソウリョク、タトヘバ 汽車トカジドウシャ デンシャナドモ イクラデモ イリヨウナノデス。ソコデ タタカフ チカラヲ ウント ツヨメルタメニ 國民ハ デキルダケ 旅行シタリ モノヲオクルコトヲ サシヒカヘルヤウニ シナケレバ ナラナイ。

一二九八六（一九四三・十・五）「敢闘生活」

闘魂

日本ハ日清ノセンサウモ 日露ノトキモ イクサニ イリヨウナ═シザイハ イツモ 敵ニクラベルト、オハナシニ ナラヌホド スクナカツタ。ケレドモ、イツノ タタカヒデモ 鐵ヤ船艦(フネ)ガ スクナクテモ 一ドモ マケタ タメシハナイ。アノ 元寇ノトキデモ 日本軍ニハ 四千五千トイフ 船ハナカツタガ、十萬アマリノ 大敵ヲ ミナゴロシニシタ。今ノ 大東亞戰ハ、ナニモカモ モテル國ト ゴジマンノ 英米ヲ ムカフ［向こう］ニ マハシナガラ イツデモ タダ ドンドンススム、勝軍(カチイクサ)バカリダ。ソレハ ナゼダラウ。ベツニ フシギハナイ。ヨソノ國ニハ ダンジテナイ〝闘魂〟トイフ、タタカヒヌク 日本精神ガ アルカラダ。

一二九九九（一九四三・十・十九）「敢闘生活」

靖國の子

靖國神社の 秋のおまつりがはじまりました。このおやしろはまうす［申す］までもなくお國のためにたふれた かたがたを おまつりするところで このおまつりには 全國からその遺族たちが さんぱいするばかりでなく かしこくも 陛下の御親拝があります═臣下の靈に 御親拝くださるといふことは まことにもったいないかぎりです。〝靖國の子〟といふのは お父さんが護國の神となって お國につくした その子どものことで こゝでお父さまの靈とたいめんをするのです═おなじやうに〝靖國の妻〟といふこともいはれます═それは夫が神にまつられてをる のこった妻の人をさういひます═どれもみな かゞやく人たちです。

一三〇〇（一九四三・一〇・二十）「敢闘生活」

死に場所

人は きっと 一どは死ななければならない。どんなに幸福な人でも 百年も千年も いきつづけるといふ ことは どうしても できない═ときがくれば きっと死ぬ。しかし おなじ死ぬならば 君國のため また世のなかのため 人のために つくして死ななければならない。道ばたで 犬や 猫のやうに のたれじにをしても 戰場でめいよの戰死をしても 死ぬのは死ぬのである。人はその死に場所を えらばな

ければならない＝日本の武士 軍人たちは お國のために てがらをたてて 戰場で死ぬのを このうへもない めいよと おもってゐる。花のやうにちるといふことばは かういふところからでてゐる。

一三〇〇八（一九四三・十・二十八）「敢闘生活」

學徒出陣

學徒とは 學校の 學生や 生徒といふことである。出陣とは へいたいにゆく いくさにゆくと いふほどの いみである。敵を うちのめすために 日本の專門學校や大學の學生は みな その學業（學校の勉强）をやめて 一せいに 戰場に でむいてゆくことになった。この食ふか 食はれるかたたふす［倒す］か たふされるか といふ お國の 一大事にあんかん［安閑］として わかい學生が 勉强ばかりして ゐる時ではない＝そのうち おめし［お召し］があるのを まってゐる といふことでは 戰時決戰たいせい［体制］ではない。おめし［お召し］を うけないさきから すすんで 出陣する これが いまの 日本の 學徒の しんけんな すがたである＝お國があっての 學問であり 國家が あっての 學生だといふことが たいせつである。

一三〇一一（一九四三・十・三十一）「敢闘生活」

徵用

徵は徵兵などに つかはれる字で 用はもちひる、つかふといふいみである。これまでは あまり つかはれたことはないが 時局がら このことばは たいせつなことで、わかりやすくいへば〝メシダサレル〟といってよい。婦人の徵用、産業戰士の徵用など たくさんあるが、ことばのないようは 私をすてゝ お國の ご用にたつといふことである。國民學校から したのこどもや 六十、七十の老人ではいけないが、さうでないものは 男でも女でも だれでも、かたわや病人で ないかぎり 一人でもおほく お國のご用に たたなければならない。たっしゃなものは 一人でもぶらぶらあそんでゐることは ゆるされないときである。

七―四．「決戦語」

一三〇一三（一九四三・十一・二）・一三〇一四（一九四三・十一・三）・一三〇一六（一九四三・十一・五）

三十八回にわたって掲載された「敢闘生活」にかわって、「決戦語」は三回だけ掲載された読み物。第一三〇一三号の「決戦」には、この読み物を掲載する意義について書かれている。一回目の文は漢字カタカナ交じり、二回目と三回目は漢字ひらがな交じりの文である。三回目の「学徒よ立て」で書かれた、「第一線には、アメリカの學徒が、あの學校をわすれて 戰爭にでてゐる。かれらは まったく、あの自由主義のなかに、そだちながらも、一たん祖国の ためとなると、よろこびいさんで、戰線にでる」などという文章の書き手は、日本の軍部や特高警察などからは危険思想の持ち主だと睨まれかねないものであり、この「決戦語」が三回で連載を終えたことについては、何の確証も持ち合わせてはいないが、「決戦語」の筆者の身の上に筆禍事件でも起ったのではないかとさえ思われる。

一三〇一三（一九四三・十一・二）「決戦語」

決戰

今日カラ カントウセイクヮツ［敢闘生活］トイフ コノラン［欄］ガ〝決戰語〟ト カハリマス。ココデハ 讀者ノ國語ノチカラガ ドコマデススンデヰルカ ソシテ ミナサンガ ジブンノ チカラデタメシテミラレルヤウナ テイドノブンタイ［文体］デカキ、マタ コノ戰時下デ 国民トシテドウシテモ ジッセンシナケレバ ナラナイヤウナ コトバヲ ワカリヤスク セツメイモシ カネテ 時局セイシンヲ マスマス タカメテ イタダカウト スルノデス。〝決戰語〟トイフノハ ナニガ ナンデモ 敵ヲウチホロボシテ コノ大センサウ［戰爭］ニ ドウシテモ カタナケレバ ナラナイ ツマリ 勝ツカ 負ケルカ 死スカ 生キルカ 食フカ 食ハレルカヲ シッカリト キメルトイフ イミデス。

一三〇一四（一九四三・十一・三）「決戦語」

明治節

十一月三日は 明治節です。この日は菊のおいはひ日とも

まうします もと明治天皇の天長節（おうまれあそばされた日）でした。明治天皇は四十五ねんかんもの おながいあひだ みくらゐに つかせたまひ そのみくらゐに おつきあそばしたころの 國内は まだ徳川氏が 國のまつりごとを わたくし してゐて 今の敵米英などが 日本をごまかさうとして わるい謀略の魔手を だしてゐたときで 天皇はずゐぶん いろいろな ごくらうをあそばされました。大政奉還といって まつりごとを 調停へおもどしになり それから 日清、日露のたたかひ 今日の内鮮一體のもとなどもおさだめくださったのも この 明治大帝でありました。

一三〇一六（一九四三・十一・五）「決戦語」

學徒よ立て

このまへに、東京空襲に やってきた 敵機には、ほとんど青年學生ばかりが のってゐたといふ。そればかりでなく、第一線には、アメリカの學徒が、あの學校をわすれて 戰爭にでてゐる。かれらは まったく、あの自由主義のなかに、そだちながらも、一たん祖国の ためとなると、よろこびいさんで、戰線にでる。わが日本の學徒も、豫備學生をはじめ 研究を中途にして、めざるゝまへに もう、みな大君の おんため、國のために 挺身してゐる。この種の學徒は ずゐぶん たくさんある。一人でも おほく 国難に挺身する學徒が でなければならない。これこそ 無上の 光榮でもあり、諸君が ほんたうに 幸福になる道である。

七―五．「愛国いろはカルタ」

一三〇〇二（一九四三・十・二十二）～？

「愛国いろはカルタ」[33]の連載が一九四三年十月二十二日（一三〇〇二）から小さな紙面を割いて始まっている。しかし「毎日新報」紙上では「い」（一三〇〇二）、「ろ」（一三〇〇三）、「に」（一三〇〇六）、「ほ」（一三〇〇七）、「へ」（一三〇〇八）、「ち」（一三〇十一）、「り」（一三〇十三）の七つしか掲載が確認できない。これら以外のものは「毎日新報」の附録として配布されたタブロイド型「国語教室」に掲載されていたと思われる。

この「愛国いろはカルタ」は、一九四三年十二月十日に財団法人日本少国民文化協会制定・財団法人日本玩具統制協会発行の「愛國イロハカルタ」とおなじ内容のものである。もともとのカルタはカタカナ書きで、その箱には「あいこくいろはかるた」と印字されている。このカルタは情報局、文部省、大政翼賛会の後援のもとに日本少国民文化協会が一般公募して作成されたものである。公募要項では、「……大東亜の指導者となるべき少国民の気宇を雄大に、情操を清純にし、その日常生活を指導して忠君愛国の念を涵養するもの」を内容とし、十七字以内のもので「国民学校低学年の児童にも十分理解し得る、平易にして明朗なもの」という条件が付されていた。

「毎日新報」では「愛国いろはカルタ」の掲載にあたり、以下に示すように一つずつ解説が付されているが、いずれも戦意高揚をはかる類のものである。

一三〇〇二（一九四三・十・二十二）「愛国いろはカルタ」

このまえには 愛国百人一首といふものがありました。こんどは 少國民文化協會から えらばれた〝愛國いろはカルタ〟がでました。いろはカルタは いろはのかずの 四十七あります。それはかるたの はじめに いろはの字が ついてゐます

い 伊勢の神風 敵國降伏

伊勢の神風で 元の大軍をみなごろしに したことです。

一三〇〇三（一九四三・十・二十三）「愛国いろはカルタ」

（ろ） 爐端で きく 先祖の話

爐は 家のなかで 火をたくところ ＝その 火のまはりに 家のものが あつまって 祖先が お國のために つくしたり 戰爭をして かったといふやうな たのしい お話をすること

一三〇〇四（一九四三・十・二十四）「愛国いろはカルタ」

（は）「ハイ」で はじまる 御奉公

なんにも いはないで ただ「ハイ」と こたへて ご奉

公をする＝もくもくとして 戦争のため 米英を たたき つぶすために はたらく。これが なによりの お國への ご奉公

一三〇〇六（一九四三・十・二十六）「愛国いろはカルタ」（に）日本晴の天長節

これこそは わが國のものばかりの かんずる よい天氣で、今日こそは 天皇陛下の おうまれあそばしたよき日、空には一てん［一点］の くもりもない。いまに世界晴といふやうに はれがひろがります。

一三〇〇七（一九四三・十・二十七）「愛国いろはカルタ」（ほ）〝ほまれは たかし 九軍神〟

ほまれとは めいよといふこと。あのハワイ海戦のはじめに アメリカを メチヤメチヤに たたきつぶした いさましい 九軍神、まったく むねの すくやうなめいよです。

一三〇〇八（一九四三・十・二十八）「愛国いろはカルタ」（へ）〝平和な島に 日の御旗〟

これまでは 米英のしんりゃくのために、一日として へいわといふもののなかったのに、日本軍が 米英をほろぼして、ほんたうに たのしい平和な 島となり、日本の國旗が はためいてゐる。

七―六．「ケフノオケイコ」

一三〇七九（一九四四・一・八）～一三三七三（一九四四・十・二十八）

「ケフノオケイコ」は一九四四年一月八日から連載が始まり、「毎日新報」から「国語」紙面がなくなる一九四四年十月二十八日まで掲載され、復刻版では百七十一回にわたる掲載が確認される「国語」教材で、日本語はすべてカタカナだけで表記されている。

一九四四年一月二十八日までの十五回は、提示された日本語語彙の発音を朝鮮文字で転写し、朝鮮語対訳を付している。この十五回は「ア行、カ行、サ行、タ

行、ナ行、ハ行、マ行、ヤ行、ラ行、ワ行、ガ行、ザ行、ダ行、バ行、パ行」の一五の行を取り上げて、カタカナと、その読み方を一通り取り上げた形になっている。また、取り上げられた日本語語彙の朝鮮語対訳が載せられている。十六回目以後は、日本語音の朝鮮文字による転写は付されず、朝鮮語対訳のみが載せられている。一回目には、「今日から新しく国語のお稽古を始めます。みなさんしっかり勉強しましょう」と、新たな連載を始める旨が書かれている。

なお「ケフノオケイコ」のすべてを本稿附録の資料二に転載しておいた（ただし、朝鮮語対訳の部分は省略した）。

一三〇七九（一九四四・一・八）「ケフノオケイコ」

アメ（아메）［雨］…비　イハ（이와）［岩］…바위　ウマ（우마）［馬］…말　エンピツ（엔삐쓰）［鉛筆］…연필　オホカミ（오오까미）［狼］…늑대

アメガ フリマス（비가 옵니다）

イハガ アリマス（바위가 있습니다）

ウマガ ハシリマス（말이 달립니다）

エンピツガ アリマス（연필이 있습니다）

オホカミガ ホエマス（늑대가 짖습니다）

ケフカラ アタラシク コクゴノオケイコヲ ハジメマス。ミナサン シッカリ ベンキヤウ シマセウ。（오늘부터 새로 국어공부를 시작합니다. 여러분 열심으로 공부합시다.）

「ケフノオケイコ」は最初はやさしい単文から掲載を始め、次第に比較的複雑な文を掲載している。戦時総動員体制や戦時統制経済、勤労動員などへの服従・協力を煽り立てるたぐいの日本語文がはじめてあらわれるのは、次の第一三一〇六号からである。筆者の計算では、全百七十一回のうち、九十五回（全体の六十三％）がそのような文である。（詳細は本稿附録の資料二を参照のこと）

一三一〇六（一九四四・二・四）「ケフノオケイコ」

アイコクハン（애국반）［愛国班］

タイセウ ホウタイビ（대조봉대일）［大詔奉戴日］、コクキ（국기）［国旗］、ハンチャウ（반장）［班長］、ハンヰン（반원）［班員］、ジャウクワイ（상회）［常会］

ケフハ タイセウホウタイビデス。

（오늘은 대조봉대일 이요）

ドノ イヘニモ コクキヲ タテマシタ。

（어느집에나 국기를 세웠습니다）

ハンチャウモ ハンヰンモ ミナ ジャウクワイニ デマス。

（반장도 반원도 다 상회에 나갑니다）

七―七．「時のことば」・「ときのことば」

一三〇七五（一九四四・一・四）～一三一〇〇（一九四四・一・二十九）

漢字ひらがな交じり文の読み物。より多くの読者を得るために、漢字の使用は抑制的である。

「時のことば」は一九四四年一月四日（一三〇七五）と一月五日（一三〇七六）の二回掲載され、その後「ときのことば」とタイトルがひらがな書きに換えられ、一九四四年一月七日（一三〇七八、「いたづら」）、八日（一三〇七九、「勇士の心」）、九日（一三〇八〇、「補給戰」）、十一日（「一三〇八二、「量と質」）、十二日（一三〇八三、「徵用」）、十四日（一三〇八五、「總員配置」）、十五日（一三〇八六、「搭乘員」）、十六日（一三〇八七、「未歸還」）、二十九日（一三一〇〇、「よろこび」）の九回が掲載されている。

一三〇七八（一九四四・一・七）「ときのことば」

いたづら

〝いたづら〟は わるいことである。が 人をころすとか 國や 人のために わるいことをする。にくんでも あまりあるほどのわるいことではない。ひょっとした はずみに あまり よくない ことをする。こんなのを 國語ではいたづらをするなどと いはれる。この 新年などは 國をあげての いはひのために どこの家にも 日の丸の國旗が たてられる。すると この國旗を 夜など 人のしらずに ゐる時に

ぬすんで ゆくものが ある。こんなのを ほんのでき心のいたづら といふのであるが いたづらといっても こんなどろぼう 窃盗とおなじ たちのわるい いたづらは してはならないし また 夜まで だいじな 國旗をわすれて ゐるものも わるい。

一三〇七九（一九四四・一・八）「ときのことば」

勇士の心

死ぬまで こゝをまもる ＝そして 大君のおんために 玉碎する。これは 前線將兵の心である。鐵よりも かたい 勇士の しんねんである。ことばや 文字では 死ぬとか 玉碎するとかいはれるが ほんたうに 死ぬこと、玉とくだけて死ぬといふことは そんなに たやすい ことではない。前線の 將兵は いつも このかたい しんねんで 敵とむかひあってゐる。あ、 玉碎！と大本營の 發表をきいた時だけ かんげきしてゐたのでは いけない。いつも この勇士の決心を 心において いつでも お國のためには 死ぬ よろこんで 自分をすてる といふ かくごで わたくしたちは いつも はりきってゐなければ ならぬ。

七―八・「かちいくさ」

一三一一五（一九四四・二・十三）～一三二〇六（一九四四・五・十四）

五十七回にわたる連載が確認される読み物。漢字ひらがな交じり文で、より多くの読者を得るため、漢字使用は抑制的である。「毎日新報」の「国語」欄全体が常にそうであるように、ほぼすべての漢字にルビが振られている。

漢字表記の様相については、本稿五-八でも触れたが、たとえば、以下に転載した「かちいくさ」、「あゆむ道」、「抹殺」をみると、用いられている漢字は「敵、毎日毎夜、戰争、敵機、日本、飛行機、聖戰、道、國家、一億、敵米英、抹殺、英米、三千年、神國、決心、力」だけで、その特徴は戦争関連の語彙に集中していることが分かる。こうした漢字と仮名の使い分けは漢字の習得において、言語内的な効率性や言語習得にお

ける段階的方策にかかわりなく、戦時体制に関わる語彙を優先させるものであって、朝鮮人に「国語」を修得させる上での目的意識性を示している。「かちいくさ」の文章は、敗戦続きで追い詰められた悲壮感が漂うもので、空威張りの論調に終始している。

一三一一五（一九四四・二・十三）「かちいくさ」

きっとかつ

敵は いよ〳〵 まぢかに せまってきた。毎日毎夜 はげしい戦争がつゞいてゐる。いくら たゝきおとされても 敵機は あとから あとから とんでくる。皇軍が くるしいたたかひをして ゐるのがまざ〳〵と みえるやうだ。しかし 日本はけっして まけない。こちらからも 飛行機は どし〳〵おくる。きっと かつにきまってゐる。こちらには 敵が どんなにあせっても ないものがある。それは やまとだましひだ。だんじて まけない きっとかつ これが やまとだましひだ。どんなに つよい敵が せめこんできても びくともしない ＝ きっとかつ ＝ これが やまとだましいだ。どんなに つよい敵が せめこんできても びくとも しない ＝ きっと かって かちぬく ＝ これが 日本の 聖戦である。

一三一一八（一九四四・二・十六）「かちいくさ」

あゆむ道

〝あゆむ道〟は わたくしたちの あるく道です。戰爭のはじまるまえでは 一億のものが みな それ〴〵 おもひ〳〵に かってな道を あるいてゐました。しかしいまは だれでも あるく道は ただ 一つです。それは國家のあゆむ道を まっしぐらに あゆむことです。みぎも ひだりも みない。うへにも したにも むかない。だゞ まっすぐに 國家の道にそって あゆみ つゞけてゆく。それが われ〳〵のいま あゆむみちです。では そのあゆみは なにを めあてにして すゝむのか ＝ いふまでもなく いくさに かつためです。敵米英をたゝきつぶす ためです。

一三一二一（一九四四・二・十九）「かちいくさ」

抹殺

英米の せんさうもくてきは 日本を このせかいから まっさつしようと いふのである。アメリカの やうな なりあがりの よりあひもの、あつまった國なら いつでもまっさつできるが 三千年からの れきしをもつ神國が さう たやすく まっさつされるものでない。まっさつとは すりつぶしてしまふ なくしてしまふ といふことであるから どんなに 英米が きちがひじみて あわて、みても それこそほねをりぞんに きまってゐる。けれども 敵は なか〳〵さうは おもはない。そこで日本は あべこべに かれらを まっさつしてやる決心で すべての力を まっさつにむけてた、かふことです。

一三一二二（一九四四・二・二十）「かちいくさ」

たりない

飛行機は、いくらつくっても たりない＝敵アメリカは すばらしいはやさと 力で つぎからつぎに 飛行機をつくっては 戦場へおくりだす＝だから いくら た、き おとされても こりないで どしどし おくる。しかし そのうちにはきっと たねぎれに なることは わかりきってゐる。なにしろ 増産（たくさんつくる）ということにかけては まへから たくらんでゐたことで 自動車などは 山の鑛鐵から 自動車に なるのに □の三日と十二時間 八十餘時間でできる といふ はやわざを やってゐる＝一分の やすみもなく 機械をはたらかせる。日本は これに まけたら 戦爭にかてない といふことを かくごすべきだ。

一三一二五（一九四四・二・二十三）「かちいくさ」

追放

追放とは おひはらふ といふことです。わるものが きたら おひだす。わるい病氣になったら おひはらふ。なんにでも どんなときでも よくつかはれる ことばです。だから なにごとによらず よいことに つかはないことばです。戦時下では 米英を この せかいから おひはらふことは もちろんですが われわれは じぶんの みのまはりから おひはらはなければ ならぬものが あります。あそんだり なまけたり、ぜいたくを したり、うまいものを ほしがった

りするやうなわるい心を のこらず追放すること、そしてあべこべに 敵をマーシャル ちかくから おひはらふことです。

一三一二八（一九四四・二・二十六）「かちいくさ」

かまへ

〝かまへ〟とは 身がまへ 心がまへ などと どこにも つかはれる ことばである。いまは だれでも〝戰爭のかまへ〟に ならなければ ならぬときである。戰爭のかまへ とはたたかふための したく、用意で、ごはんをたべるときも晩にやすむときでも 戰爭のためだ 敵をほろぼすためだ といふことを かたときも わすれては ならない。どんなにくるしくても 戰爭のためだ ＝戰爭は お國のために 敵をうちやぶることで 此の戰爭に かたなければ 國も國民もほろびて しまふばかりでなく 東亞十億のものが みな ほろびるのだ。

七―九．「せんぢん」

一三二〇八（一九四四・五・十六）～一三二七五（一九四四・七・二十二）

四十二回にわたる連載が確認される読み物。漢字ひらがな交じり文で、漢字使用は抑制的である。第一三二〇六号まで連載された「かちいくさ」を改題したもので、次に転載した「戦陣」は改題のことに触れているが、「銃後も戦場」であって、「毎日生活するところも戦陣とかわりない」として、「銃後」の引き締めを図ろうという意図が込められた改題である。この「せんぢん」も、漢字表記は「かちいくさ」と同じ様相を見せている。下の「戦陣」という文で漢字表記された語は「戦陣、戦陣訓、時局、陣、銃後、戦場、毎日、戦争、敵、目、一億」だけで、一般語彙である「毎日、目」だけがむしろ特異に見えるほどである。

一三二〇八（一九四四・五・十六）「せんぢん」

戦陣

けふから〝かちいくさ〟を〝せんぢん〟とあらためます。せんぢんとは〝戰陣〟とかき 戰陣訓などといはれ みなさんは もうたいてい 時局の ことばとして しって をられるはずです。いくさの陣と いふことで ぐんたいの たむろするところで ぐんたいの をるところなどといふ いみです。しかし いまは 銃後も 戰場で ぜんせんで いくさを するところばかりが 戰陣ではなく われわれの 毎日せいくゎつする ところも せんぢんと かはりなく いつでも戰爭をし また 敵を 目のまへに にらみつけてゐる きもちで ゐなければ なりません。一億みな 戰陣にある こころもちで なくては なりません。

一三二〇九（一九四四・五・十七）「せんぢん」

若櫻

ワカザクラとよみ ワカサクラとよんでは いけない。わかい櫻で 櫻のなかの櫻。日本武士は櫻のはなのやうに いさましく うるはしく かほりたかく さいて また さっと つくしく ちる。やまと心も そのとほりで 朝日ににほふ山櫻といはれてゐます。この わかざくらは 青少年の軍人といふことで いまの青少年は つぎの日本をつぐと いふことでなく 今日 たゞ いまの 日本をまもり 敵をげきめつし さくらのやうに はなばなしく 大君のおんため 皇國のために ちってゆく わかざくらの いさましさを たとへたことばであり 徵兵合格者は、みなこの若櫻です。

一三二一二（一九四四・五・二十）「せんぢん」

決戰型

ケッセンガタとよむ＝ケッセンとは かつか まけるかをきめる さいごの たたかひ といふことであり ガタとは それがための カタチといふことで みなりも こゝろも さいごのたたかひをする といふ かたになることである。とかく 人目に たちやすい 女の みなりは モンペガタでなくては ならない。モンペは 下のはうばかりでうはぎは ながいそでなど ふらふらさせてゐては なんにも ならない。モンペの うはぎは つゝそでで なくては ならぬやうに 朝鮮婦人のチマなども やはり筒型にしなくては ならない。

それでないと はたらくに ふべんであるばかりでなく はりきった けっせんがたとは いへない。男の國民服、女のモンペ服、ケッセンガタは ぜひやってほしい。

一三二一三（一九四四・五・二十一）「せんぢん」

ぐち

ぐちとは 愚痴とかき 文字のうへでは バカといふ字が ふたつ かさなってゐる。魚にもグチとよばれるのがあるが、それとは ちがったわけで〝グチをこぼす〟などと 國語でつかはれる。ことばをかへると なきごとをいふといふこと たべものが たりない とか牛肉がないと いって なきごとをいふ。つまり グチをこぼすのである。かういふ ことばは 決戰生活には だんじて いらないことばである。さたうがない あぶらがない などと グチを こぼした ところで でてくるものではない。それよりも なくても くらせる決心をするのが 決戰生活である。

一三二一五（一九四四・五・二十三）「せんぢん」

内證話

ナイショウバナシとは、ほかの人には きかせない きみとぼくだけ あなたと わたしだけの 話といふこと。ふたりだけの はなし ひみつなことの ばあひに つかふが ふつうに ナイショウとは はっきりいはず ナイショといふやうに つかわれ 漢字では 内密とかいて ナイショといってもよい。しかし ただしいことばかり おこなはれる ところでは ナイショや ひみつなど といふことはない。ところが よく こそこそ 人に しれないやうに はなすものがある。防諜などには 一ばん きんもつなことで なにか こそこそ ばなし ナイショに しゃべるやつは ともすると 國の秘密を ナイショでしゃべる。

七―十・「必勝」

一三二八二（一九四四・七・二十九）～一三三七三（一九四四・十・二十八）

三十一回にわたる連載が確認される読み物。第一三二七五号まで連載された「せんぢん」を改題したもの

朝鮮語新聞「毎日新報」（朝鮮総督府機関紙）に掲載された「国語」欄の歴史的変遷（一九三九年～一九四四年）　一一七

である。次に転載した「きっとかつ」には、「ひっしょう」と改題した理由を、「戦争はどうしても勝たなくてはならなくなってきたからである」としており、戦争の展望を失った日本の状況に対する悲壮感漂う論調の文が並んでいる。

一三二七六（一九四四・七・二十三）「必勝」

きっとかつ

これまで〝せんぢん〟といったこの欄を〝ひっしょう〟とあらためる。なぜ そんなことをするか いふまでもなく 戰爭は もうどうしても かたなくてはならなくなってきたからである。必勝と決勝 どちらも かつことであるが 必勝はなにがなんでも どうあっても かたなくては ならないと いふことである。どんなに敵がつよくとも またどんなにあばれこんできても かたなければならず、たたきのめして グウのね（音）も でないまでに こっぱみじんにしてやらなければ 護國の英霊に たいして まうしわけがない。国民はみな さうおもってとっしん しなければならぬ。

一三二八九（一九四四・八・五）「必勝」

負けぬ

勝つ はんたいの ことばは まけるである。勝つといへば負けないといふことになる。日本は これまで どんな つよい 敵と たゝかっても 一ども まけた ためしはない。たゝかへば きっと かった。すなはち これまで まだ まけた 歴史はない。大東亞戰爭は 世界一といばってゐた 大國の 英米を むかふにまはして たゝかってゐるのであるから なか〳〵 戰爭も らくではない。皇軍將兵の 苦戰は一とほりではないが けっして まけはしない。かならず 勝つに きまってゐるが 敵もなか〳〵 よわくないから だんじて 負けない。きっと 勝つとぐわんばらなければ ならぬ。

一三二九〇（一九四四・八・六）「必勝」

興亡

興は おこる 亡はホロビルといふわけ。興亡といふときは おこるかなくなるかと いふことで 戰爭では 勝つか まけ

るかと いふことである。この戰爭は國の興亡をかけた 重大戰である。まけたら 國はなくなり 日本人もほろびることになる。それは もう一億のだれでも しらぬものはない。けれども みんなの一人一人が じぶんといふものを すててたたかふので なくては どんなことに なるか それを かんがへるときは どんなことが身のまはりに ふりかかってきても びくともしない かくごで ただ戰爭に かつためだとしのんで たたかひつづけなければ ならない。

一三二九三（一九四四・八・九）「必勝」

七生

人間は かならず一どは死ぬ。生きがひのある人間としていきぬくと おなじやうに 死ぬときも 死にがひのある 死にかたを しなければならぬ。お國のために めいよある死にかた、つまり戰死するのは まったく 死にがひのあるりっぱな 死にかたといふものである。しかも 大楠公のやうに 忠誠をつくして死んでも なほ 忠義のたましひは 七たびもうまれかはって 皇國をまもる といってゐる。かういうのを〝七生報國〟といはれる。七といふのは 七へんときまってゐるのではない。なんべんも いきかはり 死にかはりと いふことである。

八．「マチガヘヤスイ國語」

一三三四五（一九四四・九・三十）～一三三七三（一九四四・十・二十八）

日本語と朝鮮語の動詞の語義の幅の相違から、朝鮮語からの意味干渉を受けた日本語の誤用例を取り上げている。掲載回数は八回だけで、「国語」欄の消滅と共に終わっている。こうした日本語と朝鮮語の対照は、当時優位言語として振る舞っていた「国語」に対して、朝鮮語を対等の位置で論じたものと見ることが出来る。

一三三四五（一九四四・九・三十）「マチガヘヤスイ国語」

물을 먹엇습니다

○ミヅヲ ノミマシタ

×ミヅヲ タベマシタ

一三三四九（一九四四・十・四）「マチガヘヤスイ国語」
좀 비켜주십시요
○チョットノイテクダサイ
×チョット ノケテクダサイ

一三三五二（一九四四・十・七）「マチガヘヤスイ国語」
안경을 썻습니다
○メガネヲ カケテキマス
×メガネヲ カブッテ キマス

一三三五六（一九四四・十・十一）「マチガヘヤスイ国語」
우산을 쓰고 가십시요
○カサヲサシテ ユキナサイ
×カサヲ カブッテ ユキナサイ

一三三五九（一九四四・十・十四）「マチガヘヤスイ国語」
밥을 짓습니다
マルゴハンヲ タイテキマス
×ゴハンヲ ツクッテキマス

一三三六二（一九四四・十・十七）「マチガヘヤスイ国語」
밥을 짓습니다
マルゴハンヲ タイテキマス
×ゴハンヲ ツクッテキマス
［一三三五九と同じ内容］

一三三六三（一九四四・十・十八）「マチガヘヤスイ国語」
전화를 거십시요
○デンワヲ カケナサイ
×デンワヲ シナサイ

一三三七三（一九四四・十・二十八）「マチガヘヤスイ国語」
전등불이 왓습니다

○デントウガ　ツキマシタ
×デントウガキマシタ
전화를 거십시요

九．その他の記事など

九―一．「軍事」

一二九六六（一九四三・九・十五）～一二九七二（一九四三・九・二十一）

一二九六六（一九四三・九・十五、監視艇）、一二九六八（一九四三・九・十七、應召の心得）一二九六九（一九四三・九・十八、召集の種類）、一二九七〇（一九四三・九・十九、簡閲點呼）、一二九七二（一九四三・九・二十一、簡閲點呼）の五回だけ掲載された軍事関連の読み物。漢字ひらがな交じり文で、漢字の使用は一般の日本語新聞レベルか、若干それより漢字使用が少ない程度。

一二九六六（一九四三・九・十五）「軍事」

監視艇

大平洋の 怒濤の中で 活躍する 監視艇は わが本土を 敵の 空襲から守る目です。速力も早くなく また乗組員も ○名位ですが、晝も夜も 空をにらんで 頑張ってゐます。そして 敵機の空襲を うけることもあれば 敵潜水艦の 攻撃を うけることもあります。しかし 監視艇は どんな不自由を しのんでも どんな 危險にあっても 一心になって お國を守って ゐます。監視艇の 勇士に慰問袋を送って 慰めて あげませう。

九―二．「飛行機と少年飛行兵」

一二九七五（一九四三・九・二十三）～一二九八八（一九四三・十・七）

朝鮮軍報道部中川大尉が青少年に向けた講話。十二回連載されている。

九―三．「健兵の母姉へ　小磯總督の膳物（おくりもの）」

一二三〇八九（一九四四年・一・十八～一三〇九九（一九四四・一・二十八）

八回連載。小磯朝鮮総督から朝鮮青年の母や姉に与えるメッセージのかたちをとった文である。息子や兄を戦場に取られることに対して抵抗の意志を示していた母姉を説き伏せる意図のもとに連載されたもの。

九―四．連載小説欄

次の読み物が連載されている。

「海國魂」

一三〇七八（一九四四・一・七）～一三一〇三（一九四四・二・一）

来栖ますを作　十九回連載

「船長自刃」

一三一〇四（一九四四・二・二）～一三一二九（一九四四・二・二十七）

坪内襄二作　十八回連載

「撃沈」

一三一三一（一九四四・二・二十九）～一三一五九（一九四四・三・二十八）

松岡ゆづる作・金村武雄画。二十一回連載

「日日ノ戰ヒ」

一三一六〇（一九四四・三・二十九）～一三一一五（一九四四・五・二十三）

陸軍中将波田重　三八回連載

「冒険少年」

一三一七七（一九四四・四・十三）～一三一一九（一九四四・五・二十七）

高島のぼる作　三十回連載

「だれにもよくわかる　日本歴史」

一三二二〇（一九四四・五・二十八）～一三三五九（一九四四・十・十四）

小野寛著・金村武雄画　七一回連載

九―五．四コマ漫画

（一）「방울이実踐」

一二九六六（一九四三・九・十五）～一二九八二（一九四三・十・一）

著者名は「東周画」とあるので、「東周」か?。十四回掲載され、日本語吹き出しの朝鮮語訳が各コマの右側に書かれている。

（二）「鈴男の実踐」

一二九八三（一九四三・十・二）～一三〇七〇（一九四三・十二・二十九）

著者名は「東周画」とあるので、「東周」か?。四十七回掲載され、日本語吹き出しの朝鮮語訳が各コマの右側に書かれている。

九―六．「座右銘」

一二九九三（一九四三・十・十二）～（一九四四・十・二十八）

第一二九九三号および第一二九九四号の第四面に、「座右銘」を連載することについて説明がなされている。「座右銘」は、「国語」欄が無くなる時まで、ほぼ毎号掲載された。一九四三年に日本文学報国会で定められたこの座右銘は、一九四四年に朝日新聞社から『定本国民座右銘』という書名で出版されている。

一二九九三（一九四三・十・十二）

座右銘

〝座右銘〟ざいうのめいとよむ座右とは、すはってゐる右がはで 銘とは人のことばや おこなひのいましめと するものといふことである。こんど 日本文學報國會で、一年の 毎日毎日、かんがへて、自分の おこなひや ことばをただしく するやうにと、その 座右銘というものが できました。これは むかしの、えらい人、ただしい人、お國のために つくした 人たちが のこされた ありがたい ことばばかりで できてゐます。じぶんは、まちがった おこなひや、ことばは つかってはない、といっても なかなか

さうはゆかない、これから 毎日一つづつ こゝにかきます。その日 その日を わすれずに 一億のものは、心のなかで よくよみおぼえて ください。

一二九九四（一九四三・十・十三）

座右銘

こんど えらばれた 座右銘は 一日一言と いって、一日に一つづつのことばで、一年の日かずに あはせて 三百六十六ある。九月の三十日に はっぺうになったもので あるから 年の はじめから といふわけには ゆかない。さしあたり 十月のぶんから 一つづつ かきますが それも もう なんにちか すぎましたので、しきんの ものを 一つ二つかき 時局への 心がまへを、さらに よびおこすやうに するため、あすは 山本五十六元帥の この世に のこされた おことばを おつたへする。

一二九九七（一九四三・十・十五）

座右銘

わかいいのち

〝今の若い者は〟など、口幅ったきことは 申すまじ〟

山本五十六元帥

昔の人は よく 若いものたちを かういってばかにしたが、今日は 若い青少年が國をまもるのだ、とほめられたこと、口幅ったきは、なまいきな言。

一二九九七（一九四三・十・十五）

座右銘

護國の神靈

〝護國の　神靈として　悠久の大義に　生く　快なるかな〟

山崎保代部隊長遺書

命をすて　神の　靈となって　いつまでも　お國をまもってゆく　なんと　男子として　愉快な事ではないか。

こうした「座右銘」は、「毎日新報」四面の「国語」欄が無くなる時まで、毎号掲載されていた。

九―七．標語（スローガン）

縦二段、横七行から九行分ほどのサイズの枠の中に標語が掲げられている。初出は一九四二年十二月三十日の紙面に載せられた「ヒトリ ヒトリガ ミクニノ ハシラ」だった。掲載された標語は七十三種類が確認された。以下の標語はその一部である。

けふも決戦 あすも決戦 12723（1943.1.14）
スパイワ ドコニ ジブンノ クチニ 12766（1943.2.26）
そらに ふたなし したから ぼうぎょ 12799（1943.3.31）
心せよ ないしょ話が うみこえる 12819（1943.4.21）
たへぬく 一億 かちぬく 日本 12835（1943.5.7）
ながした あせを ながさぬ ちょきん 12840（1943.5.12）
虫歯 金歯は ないのが じまん 12866（1943.6.7）
せつまいは まいにち できる ごほうこう 12947（1943.8.27）
頑張れ！ ワシントンに 白旗 あがるまで 13268（1944.7.15）
オホギミヘ マモリ育テヨ ヨイ コドモ 13272（1944.7.19）
にくを きらして ほねを きれ！ 13283（1944.7.30）
空襲だ！ 水だ バケツだ ひたゝき 砂だ 13314（1944.8.30）
鬼畜 米英！ 撃ち撃ちてうちてし やまん 13321（1944.9.6）

おわりに

以上、朝鮮総督府の朝鮮語版機関紙「毎日新報」に掲載された「国語」欄について、主に「国語」教材に焦点を当てて全体を概観した。

「国語」欄は、一九三九年七月二十二日の紙面に、「曙だより」と題したベタ組のほんの小さな記事から始まった。その後、徐々に「国語」欄の紙面が拡大していった。朝鮮における徴兵制施行計画の発表（一九四二年五月九日）とともに展開され始めた「国語全解・国語常用運動」の一環として、「毎日新報」に「国語毎新」欄が設けられ、更に一九四三年九月からは第四面全体を「国語」面とする拡充を見るに至った。

本稿附録で紹介した「国語ノチカミチ」（一九四三年九月～一九四四年一月）、及びこれに続いて連載された

「国語」教材「ケフノオケイコ」（一九四四年一月～一九四四年十月）は、戦時総動員体制に朝鮮民衆をかり立てる内容の文章を多く載せている。教科書のような単行本教材と紙上教材の特徴的な相違点は、紙上教材は日々の時代状況に合わせた内容を取り扱えるというところにある。「国語ノチカミチ」が連載された当時、陸軍特別志願兵制が実施されており、一九四三年十一月七日から志願締切日の十一月二十日まで、連日志願を求める「国語」教材文が掲載されていたことは、その一例である。十一月二十日付け「毎日新報」の「国語ノチカミチ」では、「締切日」と題して、志願を促す対話文が掲載され（本稿附録一を参照のこと）、また同じ紙面に、次の記事が載せられている。

一三〇三一（一九四三・十一・二十）

さあ、最後の一日だ一學徒よ、もう 考へる余地は ないぞ

かんげきの あらしで むかへられた 志願兵の しめきりの日も いよ〳〵 今日に せまりました。半島學生の みなさん、みなさんの なかには まだ あれこれと ためらって 志願しない人が をりますか。さうだとすれば みなさんは なにを かんがへて ゐるのでせう。みなさんの 父兄は 一月といふ ながいあひだ みなさんに こん〳〵と ときかせ、おなじ教室で かたを ならべて 學んでゐた みなさんの ともだちは ほとんど ぜんぶ 祖國の ために かんぜんと たちあがって 今は 敵げきめつの 決戰場へ おもむく はれの日を まってゐるばかりです。これらの ゆうかんな ともだちと いまだに ためらってゐる みなさん自身とを くらべてみて ください。また みなさんを ひけふものと して まってゐる みなさんの 將來を おもひ ゑがいて みてください。じぶんを いかす ためにも みなさんは このさいごの日に たちあがらなければ なりません。

このような顕著な例からよく分るように、この時期の朝鮮における「国語普及」運動は、朝鮮民衆を戦時総動員体制に繰り込むための思想統制を意図したもの

だった。

本稿で紹介したように、「毎日新報」に掲載された「国語」紙上教材には、日本語本文とともに、朝鮮語対訳が付されている。当時、学校教育から朝鮮語科目が排除され、学校で朝鮮語の読み書きを学ぶ機会が剥奪されていた。それだけに、「毎日新報」に連載された日朝対訳形式の「国語普及」教材は、朝鮮語の読み書き能力を高めるうえでも役立てられたであろうと、筆者は考えている。朝鮮語使用に対する抑圧が強まっていた当時、「毎日新報」の編集者たちが「国語普及」教材のこうした隠れ蓑的活用法に気づいていなかった筈はなく、民族語を窒息させようとする植民地支配に対して、消極的方法ではあれ抵抗し続けた姿を見出すことが出来るだろう。

本稿で紹介した資料からもわかるように、アジア・太平洋戦争期の「国語」教育は皇国臣民化教育の骨幹をなし、朝鮮民衆の主体性は全く無視されていた。こうした「国語」教育の経験は、解放後の朝鮮民族に対して、日本語を一つの「外国語」として位置付け難くする心情を抱かせ続けた。

朝鮮総督府が編纂した学校教育用「国語」教材の分析・研究に加え、本稿で概観した社会教育における「国語」教材の分析・研究も進めることによって、朝鮮における植民地言語教育の様相を、より明らかにし得るだろう。

主要参考文献

李錬（二〇一三）『일제강점기 조선언론 통제사』、박영사
熊谷明泰（二〇〇四）『朝鮮総督府の「国語」政策資料』、関西大学出版部
毎日新報社「国民新報」（復刻版、全九冊、二〇〇九、청운）
景仁文化社（一九八九）『毎日申（新）報　一九一〇・八～一九四五・八』（全八十五冊）

附録：「毎日新報」記事抜粋

資料一・「国語ノチカミチ」

「毎日新報」の「国語」欄からの転載に当たり、文字表記、分かち書きなどを原典通りに写すように心掛けた。ただ、本稿「はじめに」でも触れたように、「毎日新報」ではㅆ以外の濃音字の表記は、筆者が見る限り一つの例外もなく「ㅺ ㅼ ㅽ ㅾ」のように合用並書されているが、本稿では朝鮮文字入力の都合上、これらはすべて「ㄲ ㄸ ㅃ ㅉ」のように各自並書に置き換えて示した。

また、「国語ノチカミチ」では、すべての記述において、朝鮮文字を用いて日本語音をルビの形で表記し、日本語に対する朝鮮語対訳が付されているが、本稿ではこのルビと朝鮮語対訳は初めの方だけ記載し、その後の部分は省略した。 角括弧（［ ］）内の記述は筆者による注記。記号「‖」「—」は、読みやすさの便宜を考え、転載にあたって筆者が書き加えたもの。

一二九六五（一九四三・九・十四）「国語ノチカミチ」

バウクウエンシフ（보ー꾸ー엔슈ー）**（방공연습）**［防空演習］

イマカラ（이마카라）‖バウクウエンシフヲ（보ー꾸ー엔슈ー오） ハジメマス（하지메마스）

（지금부터 방공연습 시작합니다）

モンヘ（몸페）［ぺの誤植］ボウシ（보ー시） テブクロ（데부꾸로） サンカククキン（상까꾸신）

タオル（다오루） ミナ（미나） ソロヒマシタカ（소로이마시다가）

（몸페 모자 장갑 삼각건 수건 다 가추엇습니다［ママ］）

ハイ（하이） ミナ（미나） ソロヒマシタ（소로이마시다）

（네 다 가추엇습니다）

セウイダン（쇼ー이단）［焼夷弾］ニハ（니와） ユシセウイダン（유시쇼ー이단）［油脂焼夷弾］ト（또） ワウリン（오ー린） セウイダン（쇼ー이단）［黄燐焼夷弾］ガ（가）

アリマスネ（아리마스네）

（소이탄에는 유지소이탄과 황린소이탄이 잇지요）

ハイ（하이） サウデス（소ー데스）

（네 그럿습니다）

「ユシセウイダン（유시쇼ー이단） ラクカ（락까）［落下］」ノ（노） トキニハ（도끼니와）

ドウシマスカ（도ー시마스까）

（유지소이탄이 떠러진 때에는 어떠케 합니가［ママ］）

ヌレタ|ムシロヲ カブセ スナヲ カブセ ソノツギニ
ミヅヲ カケマス

（저즌 가마니를 덥고 모래로 덥고 그|다음에는 물을 끼언습니다）

サウデス モウヒトツ ワウリンセウイダンガ|アリマスネ
／ソノトキニハ ドウシマスカ

（그럿습니다 또하나 황린소이탄이 있지요 그 땐 어떠케합니가）

ユシセウイダンノバアヒト オナジデスガ／
ワウリンセウイダンハアツクテケムリガタクサン
デマスカラ スコシ ハナレテ ヒヲ ケシマス

（유리 소이탄의 경우와 갓습니다만 황린소이탄은 뜨겁고 연기가 만히나니까 좀떠러저 불을끕니다）

ハイ サウデス ソレデハ エンシフ［演習］ヲ
ハジメマセウ

（네 그럿습니다 그러면 연습을 합시다）

一二九六六（一九四三・九・十五）「国語ノチカミチ」

カヒモノ（물건살때）［買い物］

「イラッシャイマセ」

（어서 오십시요）

「コドモフクヲ ミセテ クダサイ」

（어린애 양복을 보여주십시요）

「ハイ コレハ イカガデセウ」

（네 이것은 어떠켓습니까）

「スコシ チヒサイヤウデスネ」

（좀、적은것 갓흔데요）

「コチラニ オホキイ モノモ ゴザイマス、コレハ
イカガデスカ」

（이쪽에 큰것도 잇습니다 이것은 어떠습니까）

「コレニ シマセウ、オイクラ デスカ」

（이것으로 하지요 얼맙니까）

「八圓五十センデ ゴザイマス」

（八원 五十전이 올시다）

「十圓デス、コレデ トッテ クダサイ」

（十圓입니다、이것으로 바다주십시요）

「オマタセ シマシタ、一圓五十センノ オツリデゴザイマス」

（기다리 섯습니다、一원五十전 거슬러 드리겟습니다）

「サヤウナラ」

（안녕히 계십시요）

「マイド アリガタウ ゴザイマス」

（매양 고맙습니다）

一二九六七（一九四三・九・十六）「国語ノチカミチ」

テガミ（편지）［手紙］

「オカアサン ニイサンカラ オテガミデスヨ」

（아머니、형님한테서 편지가 왓세요）

「ドレ ドレ ハヤク ヨンデ ゴラン」

（어디、어디、빨리 읽어 보아라）

「ミナサン オカハリハ ゴザイ マセンカ」

（여러분 별고 업스십니까）

「ボクハ ゲンキデ マイニチ ハタライテ 卄マスカラゴアンシン クダサイ」

（저는 몸성히 매일 일하고 잇스니 안심하십시요）

「オメシニ アヅカル ヒマデハ ドンナ コトガ アッテモビヤウキ ナンカ イタシ マセン」

（부르심 밧자올 날까지는 무슨 일이 잇든지 알커나 하지는 안켓습니다）

「ヒタスラ カラダヲ ネリ［練り］ココロヲ ミガキリッパナ クワウグン［皇軍］ノ ヒトリニ ナルカクゴデス」

（오직 몸을 단련하고 맘을 닥가 훌륭한 황군의 한 사람이 될 각오입니다）

「ゴブサタ イタシマシタ」

（오랫동안 적조햇습니다）

「オカラダ ゴタイセツニ」

（몸 조심하십시요）

一二九六八（一九四三・九・十七）「国語ノチカミチ」

ガクカウ（학교）［学校］

「ヤナギサン」
(야나기상)
「ハイ」
(네)
「ホンヲ オヨミナサイ」
(책을 읽어보아라)
「ハイ」
(네)
「タイヘン ヨク ヨメマシタ」
(퍽 잘 읽었다)
「コノエハ ナンデスカ」
(이그림은 무엇이냐)
「ニッポンノ ヘイタイサン デス」
(일본 군인 입니다)
「サウデス ツヨイ ツヨイ ニッポンノ ヘイタイサン デス」
(그러타 굿세고 굿센 일본군인이다)
「ボク タチモ オホキク ナッタラ ヘイタイサン ニ ナリマス」
(우리들도 크면 군인이 되겟습니다)
「エライ ミンナ ヨク オベンキャウシ ツヨイ カラダヲ キタヘテ リッパナ ヘイタイサンニ ナリマセウネ」
(장하다、모두 잘공부하고 튼튼한 몸을 단련하야 훌륭한 군인이 되자)
ガクカウ(학교) ケウシツ(교실) センセイ(선생님) セイト(생도)

一二九六九(一九四三・九・十八)「国語ノチカミチ」
トウクワ クワンセイ(등화관제)[灯火管制]
「ヨナカニ ケイハウ[警報]ガ オリタラ ドウ シマスカ」
(밤중에 경보가 내리면 어떡케합니까)
「ケイハウニ ヨッテ ソレゾレ トウクワ クワンセイ[灯火管制]ヲ オコナヒ マス」
(경보에 따라서 각각 등화관제를 합니다)
「ケイハウニハ ケイカイケイハウ[警戒警報]トクウシフケイハウ[空襲警報]ガ アリマスネ」

（경보에는 경계경보와 공습경보가 잇지요）
「サウデス ケイカイケイハウハ 三プンカン ツヅケテ
ナラシマス クウシフケイハウハ ハチビャウゾツ
アヒダヲ オキ 四ビョウカンヅツ 十クワイ ナラシ
マス」
（그럿습니다 경계경보는 십분간 게속해서 울리고
공습경보는 팔초식 새를두고 사초간식 열번을 울립
니다）
「ケイカイケイハウノ トキニハ ドウシマスカ」
（경계경보때에는 어떠케합니가）
「アカリガ ソトニ モレナイヤウニ オホイ［覆い］ヲシ
シゴトハ ソノママ ツヅケマス」
（비치 박그로 새지안케 덥고 일은 그대로 게속합
니다）
「クウシフケイハウノ トキモ オナジデスカ」
（공습경보의 때에도 갓습니가）
「イイエ アカリガ ゼンゼン モレナイヤウニ
マックラクシ メイメイクウシフニ ソナヘル
ジュンビヲ イタシマス」
（아니요 불비치 전전 새지안케하야 깡깜하게하고
제각금 공습에 대처할 준비를 합니다）
バケツ（바께쓰）、スヰサウ（물통）、トビグチ（갈퀑
이）、ヒタタキ（불똥끄는것）

一二九七○（一九四三・九・十九）［国語ノチカミチ］
チョチク（저축）［貯蓄］
「センセイチョチクヲ ススメルノハ ドウイフ
ワケデセウカ」
（선생님 저축을 장려하는것은 어떠한 까닭입니가）
「ムダヅカヒヲ ハブキ ナクス シンパイガ ナイデセウ」
（헛돈을 쓰지안코 일허버릴 걱정이업지요）
「ハイ サウデス」
（네 그럿습니다）
「ソレカラ イマノ ジキョクニハ チョチクハ ソノママ
センサウ［戦争］ノ チカラト ナルモノデス」
（그리고 지금시국에는 저축은 그대로 전쟁의 힘이

되는것입니다)

「ソレデハ ユウビンチョキンヲ スレバ ヨイノデスカ」

(그러면 우편저금을 하면 좋습니가)

「ユウビンチョキンバカリデハ アリマセン。ギンカウヨキンモ［銀行預金］アリサイケンヲカフコトモホケン ニハイルコトモミナチョチクトナルモノデス」

(우편저금뿐이 아닙니다 은행예금도 있고 채권을 사는것도 보험에 드는 것도 저축이 됩니다)

「コトシノ チョチク モクヘウガクハ イクラデスカ」

(금년 저축 목표액은 얼마입니가)

「ゼンセン［全鮮］ノ チョチクモクヘウガクハ 十二オクエンデス、シタガッテ ヒトリアタリ 四十八エントイフ ワリアヒニ ナリマス」

(전선의 저축목표액은 십이억원입니다。따라서 한사람압헤 사십팔원이라는 비율이 됩니다)

「ヨクワカリマシタ。イマカラハ デキルダケケンヤクシテ チョチクニ ツトメタイト オモヒマス。

(잘알엇습니다。지금부터는 될수잇는 대로 저축에 힘쓸가합니다)

「ツウチャウ（통장） マメサイケン（꼬마채권）セイメイホケン（생명보험）

一二九七二（一九四三・九・二十一）「国語ノチカミチ」イウビンキョクデ（우편국에서）［郵便局で］

「ダングワンキッテ［弾丸切手］ヲ 二マイ クダサイ」

(탄환절수［탄환절수の誤植］를 두장 주십시요)

「ハイ 二マイデ 四エンデ ゴザイマス／アリガタウゴザイマシタ」

(네 두장에 四원입니다 고맙습니다)

「ソレカラ アノウデンパウ［電報］ヲ ウチタイノデスガ」

(그리고 저어 전보를 처야겟는데요)

「ソレデハ コノライシンシ［頼信紙］ニ アテナト ヨウムキト アナタノ オトコロト オナマヘヲ カイテ アチラノ マドグチニ オダシ クダサイ」

（그러면 이 전보지（뢰신지）에다 저쪽 주소와 용건과 당신 주소 성명 써서 저쪽 창에다 내주십시요）

「デンパウレウ［電報料］ハ オイクラデ ゴザイマスカ」

（전보료는 얼맙니까）

「テウセンナイ［朝鮮内］ナラ十五ジマデガ四〇センデス」

（조선안이면 열다섯자 까지가 사십전입니다）

チョキン（저금） ゼイキン（세금） キッテ（절수）

ハガキ（엽서）

一二九七三（一九四三・九・二十二）「国語ノチカミチ」

キョウシュツ（공출）［供出］

「オタクニモ オコメノ キョウシュツリャウヲ シラセテキマシタカ」

（댁에도 벼의 공출량 통지가 왓습니가）

「ハイ キノウ メン［面］カラ シラセガ アリマシタ。」

（네 어제 면에서 통지가 잇섯습니다）

「コトシハ ハヤイデスネ」

（금년은 빨으드군요）

「サウデス ソレヲ ジゼンワリアテ［事前割當］トイヒコトシノ アキハ ソレダケ ヲサメタラ ヨイノデス」

（그럿습니다 그것을 사전 할당이라하야 금년가을에는 그것만내면 된답니다）

「キョウシュツハウ［供出法］ハ イママデトカハリアリマセンカ」

（공출방법은 지금까지와 다름업습니가）

「ハイ ベツニ カハリアリマセン」

（네、별로 달라지지 안핫습니다）

「アリガタウ ゴザイマシタ イッシャウケンメイニヤリマス」

（고맙습니다。열심히 하겟습니다）

「オネガヒ イタシマス。オコメノ キョウシュツガイチバン オクニノ タタカフ チカラヲ ツヨメルノデス」

（그러케 해주십시요。쌀공출이 우리 나라의 싸우는 힘을 강하게 하는 것입니다）

一二九七四（一九四三・九・二十三）［国語ノチカミチ］

ビャウキミマヒ（문병）［病気見舞い］

「イカガデ ゴザイマスカ。スコシハ オヨロシウゴザイマスカ」

（어떠십니까。좀 나섯습니까）

「ワザワザ オイデクダサイマシテアリガタウゴザイマス。オカゲサマデ タイヘン ヨクナリマシタ」

（일부러 오셔서 대단히 고맙습니다.염려해 주신 덕택으로 퍽낫습니다）

「ソレハ ケッコウデ」ゴザイマシタ。モウ オネツモゴザイマセンカ」

（그건 참 다행입니다。인제 열두 업스세요）

「ハイ モウ ホトンド ゴザイマセン」

（네、인제 거이 업서젓습니다）

「デモ ビャウキハ ナホリギワガ ダイジデスカラゴヨウジン ナサイマセ」

（그러나 병은 낫기 시작할때가 어려우니까 조섭［調攝］잘 하십시요）

「イロイロ ゴシンパイ イタダキマシテ ホンタウニアリガタウ ゴザイマス」

（여러가지로 근심하여 주셔서 참 고맙습니다）

オイシャ（의사） デンセンビャウ（전염병）

ケンオンキ（검온기）

一二九七五（一九四三・九・二四）［国語ノチカミチ］

サンポ（산보）［散歩］

「イイ オテンキデスネ。ドチラヘ イラッシャイマスカ」

（조흔 날씹니다。어디가십니까）

「シゴトガ ヒトトホリ カタヅキ マシタノデ ブラブラサンポニ デカケル トコロデス」

（일이 대강 끗낫기에 정처업시 산뽀를 나온 길입니다）

「ソロソロ サンポニハ イイトキデスネ。」

（차차 산보하기에 조흔 때입니다）

「ゴイッショニ マヰリマセンカ。アノ—モリノ ナカハ

トテモ シヅカデ イイ トコロデスヨ」

（가치 안가십니까。저 숩속은 참조용하고 조흔 곳입니다）

「オトモ イタシマセウ」

（가치 가십시다）

「ワタクシハ アノ モリガ スキデ タイテイ アサバンニイチドヅツハ マヰリマス」

（저는 그 숩풀을 조와해서 대개 아침저녁 한번식은 갑니다）

一二九七六（一九四三・九・二十五）

［「国語ノチカミチ」は掲載されず、「国語よみもの」として「あこがれの青空」（わたなべ さぶらう）が紙面左三分の一、八段組みで載せられている。］

一二九七七（一九四三・九・二十六）「国語ノチカミチ」

アサノアイサツ（아침인사）［朝の挨拶］

「オハヤウ ゴザイマス」

（안녕히 주무섯습니까）

「キモチノ イイ アサデスネ」

（상쾌한 아침입니다）

「ミナサン オカハリモ ゴザイマセンカ」

（여러분들 안녕하십니까）

「ハイ オカゲサマデ ミナ一ゲンキデス」

（네 덕분에 다 잘잇습니다）

「アサバン メッキリ スズシク ナリマシタネ」

（아침저녁으로 무쩍 시원해젓지요）

「オカゼヲ メサナイヤウニ ゴヨウジン ナサイマセ」

（감기 안드시도록 몸조심하십시요）

「アリガタウ ゴザイマス。ドウゾ オクサマニ ヨロシクマウシアゲテ［申し上げて］クダサイ」

（고맙습니다。부인께 문안여쭈어 주십시요）

一二九七九（一九四三・九・二十八）「国語ノチカミチ」

バンノ アイサツ（저녁 인사）［晩の挨拶］

「コンバンハ」

（곤방와、저녁인사）
「イラッシャイマセ」
（어서 오십시요）
「イイ オツキヨデ ゴザイマスネ」
（조흔 달밤이 올시다그려）
「ホンタウニ キレイナ オツキサマデスネ」
（참으로 아름다운 달님이지요）
「一日 ハタライテ カウシテ 一アセナガシタ アトノキモチハ ナントモ イヘマセンネ」
（종일 일하고 이러케 땀을씻고 난후의 기분이란 무어라고 말할수 업지요）
「マッタクデス カウイフノヲ ハタラクモノノ ヨロコビトイフノデセウ」
（과연 그럿습니다 이런것을 일하는 사람의 기쁨이라 하겟지요）
「センチノ ヘイタイサンハ コンナ バンモ ヤハリオクニノ タメニ タタカッテ ヰルデセウネ」
（전지의 군인들은 이런밤에도 역시 나라를위하야 싸우고 잇겟지요）
「ホンタウニ アリガタイ コトデス」
（참으로 고마운 일입니다）
「コンバン カヘッタラ サッソク ヰモンブン」［慰問文］ヲ カキマス」
（오늘밤 가서 곳 위문편지를 쓰겟습니다）
「ワタクシモ カク ツモリデス」
（나도 쓸작정 입니다）
「デハ コレデ シツレイ イタシマス サヤウナラ」
（그럼 이만 실례하겟습니다 아녕히 게십시요）
「サヤウナラ マタ アソビニ オイデ クダサイマセ」
（안녕히 가세요 또 놀러와 주십시요）

一二九八〇（一九四三・九・二十九）「国語ノチカミチ」**四季ノ アイサツ（ハル）**（사시의 인사、봄）［四季の挨拶（春）］

「アタタカイ イイ オヒヨリデ ゴザイマスネ」
（따뜻한 조흔 날씨올시다）

「ホンタウニ カゼモナク アタタカデ ヨイ キモチデス」

（참으로 바람도 업고 따뜻해서 조흔 기분입니다）

「アノ サクラヲ ゴランナサイ イマガ マッサカリ デハアリマセンカ」

（저 벗꽃을 보십시요 지금이 한창이 아닙니까）

「ホンタウニ ヒトメデ イイカラ コノ サクラノ ハナヲオクニノ タメニ イノチヲ ササゲタ ヘイタイサンガタニミセタイ モノデスネ」

（참으로 한번이라도 조흐니 이벗꽃을 나라를위해 목슴을 바친 군인들에게 보여들이고 십습니다）

一二九八一（一九四三・九・三十）「国語ノチカミチ」

四季ノ アイサツ（ナツ）（사시의 인사、여름）［四季の挨拶（夏）］

「コンニチハ」

（안녕하십니까）

「イラッシャイマセ オアツウ ゴザイマスネ」

（어서 오십시요 매우 덥습니다）

「オタクノ ミナサン オカハリ ゴザイマセンカ」

（댁 여러분들 별고 업스십니까）

「アリガタウ ゴザイマス ジツハ コノ二三ニチ コドモガハラヲ コハシテ ネテ ヲリマス」

（고맙습니다 실상은 이 二三일 어린것이 배탈이나서 누어 잇답니다）

「マア マア ソレハ ゴシンパイデセウ／ドウゾオダイジニ ナサイマセ」

（아이고 그것참 걱정 되시겟습니다 부대 잘 조섭하십시요）

「アリガタウ ゴザイマス」

（고맙습니다）

一二九八二（一九四三・十・一）「国語ノチカミチ」

四季ノ アイサツ（アキ）（사시의 인사、가을）［四季の挨拶（秋）］

「カゼガ スズシウ ゴザイマス」

（바람이 시원합니다）

「ホンタウニ クラシヨイ トキニ ナリマシタ」
(챰 지내기 조흔 때가 됏습니다)
「アンナニ イネガ キイロク ミノリマシタ」
(저러케 벼가 누러케 익엇습니다)
「コレカラ トリイレデ ヒトサハギデ ゴザイマス」
(인제부터 추수로 야단 입니다)
「デモ コンナニヨク デキマスト オイソガシクテモ オタノシミデ ゴザイマセウ」
(그래두 이레케 잘되면 바쁘서두 기쁘실거에요)
「サヤウデ ゴザイマス/オコメヲ タクサン ツクルノガ ワタクシタチノツトメデ ゴザイマスカラ ホウサクデスト ホンタウニ ホット イタシマス」
(그럼은요 쌀을 만히 만드는것이 우리들의 직책인고로 풍년이들면 참한시름 이즙니다)
「ソノ オココロガケガ ワタクシタチニハ アリガタク ウレシイノデ ゴザイマス」
(그러케 생각하시는게 저이들에게도 참 고맙고 기뿜니다)
「ワタクシタチハ ソレヨリ ホカニ オクニニ ツクス ハウハフ[方法]ヲ ソンジマセン」
(우리들은 그박게 나라위해 일하는 방법을 몰른답니다)

一二九八三(一九四三・十・二)「国語ノチカミチ」

四季ノ アイサツ(フユ)(사시의 인사、겨울)[四季の挨拶(冬)]

「オサムウ ゴザイマス」
(매우 춥습니다)
「キノフ ケフ ホンタウニ ツメタウ ゴザイマスネ」
(어제 오늘 참 춥군요)
「ヘヤノ ナカノ ミヅマデ コホッテ シマフンデスモノ」
(방안의 물까지 얼어붓는걸요)
「ウチデモ スヰダウ[水道]ガ コホッテ シマッテ コマッテ ヲリマス」
(저이 집에서두 수도가 얼어부터서 고생이랍니다)
「デモ コドモタチハ ホンタウニ ゲンキデ ゴザイマスネ」

（그래두 아이들은 참기운이 조하요）
「エエ、アンナニ ユキノ ウエデ スマフ［相撲］ヲ トッテ アソンデ ヰルンデスモノ」
（네에、저러케 눈위에서 씨름을 하면서 놀고 잇는걸요）
「コドモタチニ マケナイデ ワタクシタチモ ゲンキデ ハタラキマセウ。」
（아이들에게 지지 안케 우리들도 기운잇게 일하십시다）

一二九八四（一九四三・十・三）「国語ノチカミチ」
ミチヲ キク（길을 묻다）［道をきく］
「チョット オウカガヒ イタシマス」
（잠간 말슴 여쭈어 보겟습니다）
「ハイ ナンデ ゴザイマスカ」
（네、왜 그러십니까）
「アノウ、ソウトクフ［総督府］ハ ドノヘンデ ゴザイマセウカ」
（저어、총독부는 어디쯤입니까）
「ソウトクフデスカ。コノミチヲ マッスグ イラッシャイマスト ムカフニ デンシャミチガ ミエマスデセウ」
（총독부말슴입니까。이길을 곳장 가시면 저기 전차길이 보이지 안습니까）
「ハイ アノ デンシャミチデ ゴザイマスネ」
（네、저 전차길 말슴이지요）
「サウデス。アノデンシャミチニ ズット ツイテ イラッシャイマスト シロイ オホキナ タテモノガ ミエマス。ソレガ ソウトクフデ ゴザイマス」
（그럿습니다。저 전차길을 한참 따라가면 힌 커다란 집이 보입니다。그것이 총독부입니다。）
「ヨク ワカリマシタ。ドウモ アリガタウ ゴザイマシタ」
（잘 알앗습니다。매우 고맙습니다）

一二九八六（一九四三・十・五）「国語ノチカミチ」
ヒノ マルノ ハタ（일장기）［日の丸の旗］

「ヒノ マルノ ハタハ ワガ クニノ シルシデ アリマス」
（일장기는 우리 나라의 표적입니다）
「アサヒノ ノボル イキホヒヲ ソノ ママ アラハシタ ホンタウニ イサマシク ウツクシイ ハタデス」
（아침해가 떠오르는 기세를 그대로 나타내인 참 힘차고 아름다운 기입니다）
「アヲゾラ タカク ヒルガヘル ヒノ マルノ ハタヲ ミアゲルト
（푸른 하늘 노피 휘날리는 일장기를 처다보면）
「アリガタイ クニニ ウマレタ ヨロコビヲ カンジマス」
（고마운 나라에 태어난 기쁨을 느낍니다）
「ヒノマルノ ハタハ コンナニ タフトイ［尊い］ ハタデスカラ」
（일장기는 이러케 존귀한 기이니까）
「ヨゴシタリ ソマツニ シタリ シナイデ ダイジニ アツカハナケレバ ナリマセン」
（드럽히거나 소홀히 하지말고 소중하게 취급하지 안흐면 안됩니다

朝鮮語新聞「毎日新報」（朝鮮総督府機関紙）に掲載された「国語」欄の歴史的変遷（一九三九年～一九四四年）　一四一

一二九八七（一九四三・十・六）「国語ノチカミチ」
ジンジャ サンパイ（신사 참배）［神社参拝］
「ナンノ タメニ ミナサンハ ジンジャヘ サンパイ スルノデスカ」
（무엇때문에 여러분은 신사에 참배하십니까）
「ワタクシタチガ カウシテ ナンノ シンパイモ ナク クラシテ イケルノハ ミンナ カミサマノ オカゲデスカラ ソノ オレイニ オマヰリ スルノ デス」
（우리들이 이러케 아무걱정 업시 살아 갈수 잇는 것이 모두「가미사마」의 은혜니까 그 치하말슴 드리기 위하야 참배하는 것입니다）
「サウデス。ワガ クニハ カミノ クニデスカラ カウシテ ワレワレガ イキテ イケルノモ ミンナ カミサマノ オカゲナノデス。デハ オマヰリ シタトキ ドンナコトヲ オイノリ シマスカ」
（그럿습니다。우리나라도 신국（神國）인고로 우리들이 이러케 살아갈수 잇는것도 모두「가미사마」덕입니다。그러면 참배해서 어떤것을 기도하십니까）

「イチニチモ ハヤク ワガクニガ センサウニ カツヤウニ ヘイタイサンガ ゴブジデ ゴホウコウ デキルヤウニ オイノリシ ワタクシタチハ カタク ジュウゴヲ マモリヌキマスト オチカヒシマス」

（하루라도 속히 우리 나라가 전쟁에 익이도록군인들이 무사하게 봉공할수 잇도록 기원하고 우리들은 굿게 총후를 지키겟습니다라고 맹서합니다）

「サウデス。デハ コレカラ オマヰリニ イキマセウ」

（그럿습니다。그럼 지금부터 참배하러 가겟습니다）

一二九八八（一九四三・十・七）「国語ノチカミチ」

オサウヂ（소제）［お掃除］

「タラウ［太郎］サン ハナコサン オハヤウ」

（다로오야、하나꼬야 잘잣니）

「オカアサン オハヤウ ゴザイマス」

（어머니 안녕히 주무섯세요）

「カホヲ アラフ マヘニ オサウジヲ イタシマセウ」

（세수하기 전에 소제를하자）

「ハイ ワタクシハ オニハヲ ハキマス」

（네、저는 마당을 쓸겟습니다）

「ボクハ オヘヤヲ ハキマセウ」

（저는 방을 쓸겟습니다）

「デハ オカアサンガ マドガラスヲ フキ ザフキンガケヲシマセウ」

（그럼 어머니가 유리창을 닥고 걸레질을 치겟다）

「アリガタウ トテモ キレイニナリマシタ」

（고맙다 참 정해젓구나）

「オカアサン キモチガ イイデスネ」

（어머니 참 기분이 조하요）

「サアハヤク オカホヲアラッテゴハンヲ イタダキマセウ」

（자아 얼른 세수하고 밥먹자）

一二九八九（一九四三・十・八）「国語ノチカミチ」

タイセウホウタイビ（대조봉대일）［大詔奉戴日］

「ケフハ ヤウカ［八日］デスネ ヤウカハ ナンノ ヒデスカ」

（오늘은 八일이지요 八일은 무슨 날입니까）

「タイセウホウタイビデス」

（대조봉대일입니다）

「タイセウホウタイビハ ドンナ ヒデスカ」

（대조봉대일은 어떤 날입니까）

「ベイエイニ タイスル センセン［宣戰］ノ タイセウ［大詔］ヲ オクダシニナッタ ヒガ（미영에 대한 선전의 대조를 내리옵신날이）

「セウワ［昭和］十六ネンノ十二ガツ ヤウカデスカラ コノ トキノ ケッシンヲ イツマデモ ワスレナイ タメニ サダメタ ヒデス」

（소화 十六년 十二월 八일인고로 이때의 결심을 언제까지든지 잊지 안키위하야 정한 날입니다）

「ソノ トキノ ケッシントハ ナンデスカ」

（그때의 결심이란 어떤것입니까）

「ベイエイヲ タタキツブシ キット タタカヒニ カチヌイテ ダイトウアキヨウエイケンヲ ケンセツスルト イフケッシンデス」

（미영을 때려부서고 반드시 이전쟁을 이겨서 대동아공영권을 건설하겟다는 결심입니다）

一二九九〇（一九四三・十・九）「国語ノチカミチ」

四季（사절）［四季］

「アナタハ イチネンヂユウデ イツガ イチバン オスキデスカ」

（당신은 일년중에서 어느때를 제일 조하 하심니까）

「ボクハ ハルト アキガ イチバン スキデス」

（저는 봄과 가을이 제일 좃습니다）

「ドウシテ スキデスカ」

（왜 조하 하십니까）

「アツクモ ナク サムクモ ナク ケシキガ ヨクテ ウンドウニモ ベンキャウニモ イチバン イイ トキダカラデス」

（더웁지도 안코 춥지도 안코 경치가 조코 운동에도 공부에도 제일 조흔 때이니까요）

「ボクハ フユガ スキデス／コホリ スベリ［氷滑］ガ デキマスカラ」

（저는 겨울이 좃습니다 어름을 지칠수가 잇스니까요）

「ミヅアソビガ デキルカラ ボクハ ナツガ ダイスキデス」

（물작난을 할수 잇스니까 저는 여름이 제일좃습니다）

一二九九一（一九四三・十・十）「国語ノチカミチ」

ヱンソク（원적）［遠足］

「オカアサン アシタハ ガクカウ［学校］デ ヱンソクニ ユクサウデス」

「ソレハ ヨカッタネ＝ドコヘ ユクノ」

「テウセン ジングウ［朝鮮神宮］ヘ サンパイシテカラ ナンザン［南山］ノ イタダキ マデ ノボル サウデス」

「ヂャ オベンタウハ オホキク ツクッテアゲマセウネ」

「ハイ オカズハ ナンデモ ヨイカラ ニギリメシニ シテクダサイ」

「スイトウ、ハンカチ、チリガミハ ワスレナイヤウニ ヨウイシナサイヨ」

「デハ アシタ ハヤク オコシテ クダサイネ」

「ハイ ハイ、アンシンシテ グッスリオヤスミ」

一二九九三（一九四三・十・十二）「国語ノチカミチ」

ハウモン（방문）（一）［訪問］

「ゴメン クダサイ」

「ハイ イラッシャイマセ」

「ゴシュジンハ オイデニ ナリマスカ」

「ハイ ヲリマス＝ドナタサマデ イラッシャイマスカ」

「ワタクシハ タナカト マウシマス＝チョット オメニ カカリタイト マウシ アゲテ クダサイ」

「デハ セウセウ オマチ クダサイマセ」

「オマタセ イタシマシタ＝ドウゾ オアガリ クダサイマセ」

一二九九四（一九四三・十・十三）「国語ノチカミチ」

ハウモン（방문）（二）［訪問］

「ヨク イラッシャイマシタ」

「オヒサシブリデ ゴザイマス」

「ミナサン オゲンキ デスカ」

「エ、 オカゲサマデ ミナタッシャデス＝アナタモ マスマス オゲンキナ ヤウデスネ」

「ハイ カラダハ イタッテ タッシャデ ゴザイマス」

「ナント イッテモ ケンカウ ダイ一デスネ」

一二九九五（一九四三・十・十四）「国語ノチカミチ」

センタク（빨래）［洗濯］

「ネイサン オガハ［小川］ニ センタクニ マヰリマセウ」

「ハイ、コノ カゴニ ハイッタ センタクモノハ ワタクシガ モッテ イキマセウ」

「デハ セッケント センタクボウ［洗濯棒］ハ ワタクシガ モッテ イキマス」

「ケフハ ミヅガ キレイデスネ」

「サア セッセト アラヒ マセウ」

「アンマリ センタクボウデ ツヨク タタイテハ イケマセンヨ」

「モウ スッカリ キレイニ ナリマシタ」

「デハ アタマニ ノセテ カヘリマセウ」

一二九九六（一九四三・十・十五）「国語ノチカミチ」

ダイドコロ（부엌）［台所］

「サア ユフゴハンノ シタクヲ シマセウ」

「オカアサン ワタクシタチモ テツダヒマス」

「ソレハ カンシンデスネ＝デハ アキコサンハ サカナヲヤイテ クダサイ」

「オカアサン ワタクシハ？」

「ア、ハルコサンハ オチャワンヲ アラッテ クダサイ」

「ハイ キレイニ アラヒマス」

「デハ オカアサンハ ゴハンヲ タキマセウ」

一二九九七（一九四三・十・十六）「国語ノチカミチ」

サイハウ（바느질）［裁縫］
「ハサミト モノサシト ハリト イトヲ ヨウイ シマシタカ」
「ハイ ミンナ コノ ハリバコニ ハイッテ ヰマス」
「デハ コノ キレヲ スンパフ［寸法］ニ アハセテ タチマセウ」
「ワタクシガ コレヲ ヌヒマス」
「ソコハ ホソイ イトデ テイネイニ ヌッテ クダサイネ」
「オカアサン コノ エリツケハ オカアサンガ シテ クダサイ」
「ナニゴトモ レンシフ［練習］デスカラ マア シテ ゴランナイサイ ═ オカアサンガ ヲシヘテ アゲルカラ」

一二九九八（一九四三・十・十七）「国語ノチカミチ」
リョカウ（여행）［旅行］
「ドチラマデ イラッシャイマスカ」
「ヘイジャウ［平壌］マデ マヰリマス」
「ヘイジャウガ オクニデスカ」
「サヤウデ ゴザイマス ═ コノゴロノ キシャハ ホンタウニ タイヘンデ ゴザイマスネ」
「ドレモ ミンナ マンヰンデ デキレバ リョカウ［旅行］ナド ヤメタイモノデスガ」
「センサウ［戦争］ニ ヒツヤウナ モノヲ ハコブノデスカラ ナルベク ムダナ リョカウハ ヤメタイ モノ デスネ」
「エエ、ミンナガ ソノ キモチニ ナレバ ヨロシイノデスガ」
「ナニカ キフナ［急な］ゴヨウデモ オアリナノ デスカ」
「ハイ チチガ キフビャウデ…」
「ソレハ ゴシンパイデ ゴザイマセウ」

一二九九九（一九四三・十・十九）「国語ノチカミチ」
タヒガウ（대피호）［退避壕］
「オタクデハ ダイヒガウ［退避壕］ヲ オホリニ ナリマシタカ」
「イイエ、マダデ ゴザイマス」
「ハヤク オホリ クダサイ」
「ハイ、ジツハ ドコニ シヨウカト マヨッテ ヲリマス」

「オニハノ スミデ ヨロシイノデスヨ」
「ナニシロ ニハガ セマイカラ」
「ダイドコロデモ ケッカウデス。ホリオコシタ ツチハ ヒヲ ケストキニ ツカヘマス」
「サッソク ケフ ホルコトニ イタシマセウ」

一三〇〇〇（一九四三・十・二十）「国語ノチカミチ」
カウツウ ダウトク（교통 도덕）［交通道徳］
「ミチヲ アルク トキハ ドチラガハヲ アルキ マスカ」
「ヒダリガハヲ アルキマス」
「ドコノ ヒダリガハ デスカ」
「ジンダウ［人道］ノ ヒダリガハデス」
「ミチニハ チャント ジンダウト シャダウ［車道］ノ クベツガ アリマスカラ ヨク キヲ ツケマセウネ」
「ハイ」
「シンガウトウ［信号灯］ニ アカガ デタラ ドウシマスカ」
「アヲガ デルマデ ミチヲ ヨコギラズニ マチマス」
「サウデス、シンガウニ シタガッテ ヨク カウツウ ダウトク［交通道徳］ヲ マモレバ ケッシテ アブナク アリマセン」

一三〇〇一（一九四三・十・二十一）「国語ノチカミチ」
オホサウヂ（청결）［大掃除］
「アシタハ オホサウヂデスヨ」
「ハイ シャウチ イタシマシタ」
「ナルベク アサ ハヤクカラ カカッテ クダサイネ」
「エエ チョウド ニチエウ［日曜］デスカラ ミンナデ イッショニ ヤレマス」
「フダン テノ トドカナイ トコロ、メニ ミエナイ トコロヲ キヲ ツケテ ヤッテ クダサイ」
「カシコマリマシタ ＝ダレニモ マケナイ ヤウニ イタシマス」

一三〇〇二（一九四三・十・二十二）「国語ノチカミチ」
ジャウクワイ（상회）［常会］
「カネヤマサン、ジャウカイ［常会］ニ マヰリマセウ」

「モウ オジカンデ ゴザイマスカ」
「エエ、コノマヘ オクレマシタカラ ケフハ スコシ ハヤメニ シュッセキシマセウ」
「サウシマセウ。デハ スグ シタクシマスカラ チョット オマチクダサイ」
「ソノ ママデ イイヂャ アリマセンカ。」
「イイエ、チョット ヘヤヲ カタヅケルダケデスヨ」
「コノツギノ ジャウクゥイハ オタクデ ゴザイマスネ」
「ハイ、ヘヤガ チヒサイノデ シンパイシテ ヲリマス。オマチドホサマ」

一三〇〇三（一九四三・十・二十三）「国語ノチカミチ」
カラダ（몸）［体］
「アナタノ シンチャウハ ドノ クラヰデスカ」
「一メートル 五十四センチデ ゴザイマス」
「タイヂュウハ ドノ クラヰ アリマスカ」
「五十二キロ ゴザイマス」
「タイヘン リッパナ カラダデス」
「スコシ ヰチャウガ ヨハクテ コマッテヲリマス」
「ハヤク ナホサナケレバ ナリマセンネ」
「ハイ、ソノ ホカニハ ベツニ ヨハイトコロハ アリマセン」
「ナント イッテモ カラダガ イチバン ダイジデスヨ」
「ハヤク ケンカウニ ナリタイト イッシャウケンメイ ハゲンデ ヲリマス」
「アサノ ラヂヲ タイサウハ ヰチャウノ タメニ イイデスヨ」
「サウデスカ アシタカラ ヤッテ ミマセウ」

一三〇〇四（一九四三・十・二十四）「国語ノチカミチ」
サイケン（채권）［債券］
「コンゲツブンノ サイケンガ デマシタ」
「アラ サウデ ゴザイマスカ」
「コンゲツハ スクナウゴザイマス」
「ホンタウニネェ アマッタラ ワタクシノ ハウニ マハシテ クダサイ」

「ホホホ サイケンノ カヒダメ バカリハ オコラレマセンカラネェ」
「コトシノ チョチクセイセキハ ヨク―ナント シンブンニデテ ヰマシタ」
「エエ ハヅカシイ コトデス ＝ワタクシタチノ ハン［班］ダケデモ ウントカヒマセウヨ」
「ワタクシタチノ ゴホウコウ［御奉公］ハ サイケンヲ カフ コトデスヨ」

一三〇〇六（一九四三・十・二十六）「国語ノチカミチ」
ハイキフ（배급）［配給］
「ケフハ セッケンノ ハイキフガ アリマスカラ オカネヲモッテ スグ アツマッテ クダサイ」
「ハイ ワカリマシタ ＝キンジョニモ サウ ツタヘマス」
「サア ミンナ アツマリマシタネ」
「ハイ オカネモ オツリノ イラナイ ヤウニ ヨウイ シマシタ」
「デハ マツバラサン ヤナガワサン トシカハサンノ トコロハ カゾクガ オホイカラ 四マイ ヅツデス」
「イケヤマサンノ トコロハ 三マイデスネ」
「サウデス ハイキフ サレタ セッケンハ デキルダケ セツヤクシテ ハイキフダケデ マニ アハセマセウ」

一三〇〇七（一九四三・十・二十七）「国語ノチカミチ」
オツカヒ（심부름）［お遣い］
「チョット オツカヒニ イッテ クダサイ」
「ハイ オカアサン ドンナ オツカヒ デスカ」
「コノ カキヲ ヲヂサンノ オタクニ トドケテ クダサイ」
「ナント イッテ トドケマセウカ」
「コレハ ウラノ カキノキニ ナッタモノデス スコシデスガ メシアガッテ クダサイ トイヘバ ヨイノデス」
「ハイ ワカリマシタ ＝デハ イッテマヰリマス」
「キヲ ツケテ イッテ イラッシャイネ」

一三〇〇八（一九四三・十・二十八）「国語ノチカミチ」
テガミ（편지）［手紙］

「オカアサン マンシウ［満洲］ノ ニイサンカラ オテガミデスヨ」
「オヤ サウカイ＝ドレドレ ハヤク ヨンデ ゴラン」
「オトウサンモ オカアサンモ オゲンキデスカ」
「ウン ソノツギハ」
「コチラハ ミナ ブジデスゴアンシンクダサイ＝マンシウデハ モウ スッカリ アキガ タケテ マイアサ シモガ オリマス。アキノ トリイレモ ダイタイ スンデ ヰマスガ オコメノシウクゥクハ サクネンヨリ ウント フエマシタ。ナニシロ オコメハ コクミンノ ダイジナ ショクリャウデ アリマスノデ ミナ トテモ ヨロコンデ ヲリマス。ダンダンキコウガ サムクナリマス マスマス オカラダヲ ダイジニナサイマセ」

一三〇〇九（一九四三・十・二十九）「国語ノチカミチ」

ヘイタイゴッコ（一）（**병정노리**）［兵隊ごっこ］

「カネヤマクン アソバウ」
「ヤマモトクンカイ＝ウン アソバウ」
「アラ イラッシャイ ヤマモトサン」
「ヲバサン コンニチハ＝カネヤマクント アソンデモ イイデセウ」
「エエ イイデスヨ＝ダケド アンマリ トホクヘ イカナイデネ」
「イイエ ウラノ ハラッパデ アソビマス」
「モウ スグ ゴハンデスカラ ハヤク カヘッテ イラッシャイ」
「サア イカウ。ネエ、ヤマモトクン ケフハ ナニヲ シテアソバウカ」
「ミンナヲ ヨバウヨ＝ソシテ ヘイタイゴッコヲ シヨウ」
「ウン ソレガ イイ＝ヂャ ボク ハシッテイッテ ヨンデクルヨ」
「ボクモ ヨンデ コヨウ」
「アノ キノ シタニ アツマルンダヨ」
「ヨウシ キタ」

一三〇一〇（一九四三・十・三十）「国語ノチカミチ」

ヘイタイゴッコ（二）（**병정노리**）［兵隊ごっこ］

「ミンナ アツマレーッ」

「コノ ヤマヲ ハサンデ シロハ ミギ アカハ ヒダリニ ワカレルンダ」

「シロノ ブタイチャウハ カネムラクン アカノ ハウハ ヤマモト クンダ」

「セントウ カイシ」

「コノ マツカサハ テリウダン［手榴弾］ダヨ ＝テキノ ヂンチニ ナゲ コメーツ」

「コッチハ ニクダン トツゲキダ ＝ツッコメ ツッコメ」

一三〇一一（一九四三・十・三十一）［国語ノチカミチ］

オサラヒ（**복습**）［おさらい］

「ユフゴハンモ スミマシタカラ オサラヒヲ ナサイネ」

「ハイ」

「ホンヲ モッテ ココヘ イラッシャイ ＝ネイサン［姉さん、누나］ト 一ショニ シマセウ」

「ハイ ケフハ サンスウノ シュクダイガ アルカラ ソレヲ シマス ＝アトデ ネイサン ミテ チャウダイネ」

「エエ ワカラナイトコロガ アッタラ オキキナサイ」

「サア コレデ シュクダイハ スンダ」

「ドレ ミセテ ゴランナサイ。アラ ココ｜チガッテ ヰマスネ」

「サウカナ ＝ヂャ モウ一ド｜ヨク カンガヘテ ミマス」

一三〇一三（一九四三・十一・二）［国語ノチカミチ］

ビャウキ ミマヒ（**문병**）［病気見舞い］

「オカゼデ ネテヲラレル サウデスガ イカガデ ゴザイマスカ」

「ハイ ワザワザ オミマヒ クダサイマシテ アリガタウ ゴザイマス」

「オネツガ タカイノデスカ」

「エエ ネツガ サガリマセンシ セキガ ヒドイノデ コマリマス」

「ソレハ オコマリデセウ ＝チャウド ウチニ ヨクキクセキグスリガ アリマスカラ アトデ オトドケ シマス」

「アリガタウ ゴザイマス」
「デハ ドウゾ オダイジニ ナサイマセ」

一三〇一四（一九四三・十一・三）「国語ノチカミチ」
デンワ（전화）［電話］
「モシ モシ ミナミサンノ オタクデスカ」
「ハイ サヤウデ ゴザイマス」
「ワタクシハ ヤマモトト マウスモノデ ゴザイマス ＝ゴシュジンハ イラッシャイマスカ」
「ハイ チョットオマチクダサイマセ」
「モシモシ ミナミデ ゴザイマス」
「アア、オハヤウ ゴザイマス ＝ケフハメイジセツ［明治節］デスカラ ジングウ［神宮］ニ オマヰリシマセンカ」
「ワタクシモ ソノ ツモリデシタ ＝デハ 十ジニ トリヰノマヘデ オアヒシマモ［セの誤植］ウ」
「オマチ シテヰマス ＝サヤウナラ」

一三〇一五（一九四三・十一・四）

＊「国語ノチカミチ」は掲載されず、「国語よみもの」のタイトルで「兄弟の国」が二段組みで掲載されている。

一三〇一六（一九四三・十一・五）「国語ノチカミチ」
ツケモノ（김장）［漬物］
「ハクサイハ アラッタラ コチラヘ ハコンデ クダサイ」
「ハコンデ キタブンハ シホ［塩］ヲ フッテ カメニ ツケテ オキマセウカ」
「ハイ オネガヒ シマス ＝ソノアヒダニ ニンニクヤ シャウガ［生姜］ヲ キザンデ オキマセウ」
「コノダイコンハ センギリニ スルブンデスネ」
「サウデス、センギリニ シテ コノザルニ イレテクダサイ」
「シホヤ タウガラシコ［唐辛子粉］ハ タリナイデセウカ」
「ダイジャウブデス、ナンデモ ハイキフ［配給］ダケデ ヤッテ イクトコロガ シュフノ ウデジャ アリマセンカ」

一三〇一七（一九四三・十一・六）「国語ノチカミチ」

ガクカウ（학교）（一）［学校］
「ハルコサン ガクカウヘ マヰリマセウ」
「ハイ アキコサン チョット マッテ クダサイネ」
「ケフハ ジュゲフレウビ［授業料日］デスカラ ワスレナイヤウニ モッテイキマセウ」
「エエ モウ ユフベ オトウサンニ イタダイテ オキマシタ」
「ワタクシモ サウ シマシタ」
「オマチドホサマデシタ ＝サア マヰリマセウ」
「ハイ イソイデ マヰリマセウ」

一三〇一八（一九四三・十一・七）「国語ノチカミチ」
ガクカウ（학교）（二）［学校］
「カネガ ナリマシタ」
「センセイガ オミエニ ナリマス」
「オケイコヲ ハジメマセウ ＝ソノマヘニ ヒトツ ウレシイ オシラセヲ イタシマス」
「センセイ ハヤク キカセテ クダサイ」
「カナガワサンノ ニイサンガ トクベツシグヮンヘイ［特別志願兵］ニ シグヮンシマシタ」
「アノ ダイガクニ イッテヰル ニイサンデスカ」
「サウデス」
「センセイ ワタクシノ ニイサンモ ニイサンノ トモダチモ オホゼイ シグヮンシマシタ」
「ホウ サウデスカ オトウサンヤ オカアサンモ ヨロコンデ ヲラレルデセウ」
「ハイトテモ ヨロコンデ ハンタウ［半島］ノ オヤ［親］トシテ コンナ クヮウエイ［光栄］ハ ナイト イッテヲリマス。」

一三〇二〇（一九四三・十一・九）「国語ノチカミチ」
ガクカウ（학교）（三）［学校］
「ケフノ オケイコモ スミマシタ」
「ハヤク オソウヂヲ シテ カヘリ マセウ」
「サア オサウヂガ スミマシタ ＝ホンタウニ ヨイ キモチデスネ」
「デハ マッスグ オウチヘ カヘリマセウ」

「ハヤク カヘッテ オカアサンニ センセイカラ キイタトクベツ シグワンヘイ［特別志願兵］ノ ハナシヲ シテ アゲマセウ」

一三〇二一（一九四三・十一・十）「国語ノチカミチ」

ニイサン（옵바）［兄さん］

「オカアサン タダイマ」

「アア オカヘリナサイ＝ケフハ ハヤカッタネ」

「ニイサンハ マダ カヘッテヰマセンカ」

「エエ マダデス＝トクベツシグワンヘイニ シグワンスルコトデ センセイト―ゴサウダンガ アルカラデセウ」

「ニイサンハ キット リッパナ ヘイタイサンニ ナルデセウネ」

「サウデストモ」

一三〇二三（一九四三・十一・十二）「国語ノチカミチ」

トクベツ シグワンヘイセイ（특별 지원병제）（一）［特別志願兵制］

「ドンナ ヒトガ コンドノ トクベツ シグワンヘイニ シグワンデキルノ デスカ」

「ダイガクヤ センモンガクカウニ イッテヰル ハフブンクワ［法文科］ノ ハンタウガクセイ［半島学生］タチデス」

「ソウイフ ヒトタチハ モウ チョウヘイネンレイハ コシテヰルワケデスネ」

「サウデス＝ダカラ イクラ センサウ［戦争］ニ デタクテモ デラレナカッタノデスガ イマ ネガヒガ カナッタワケデス」

「ソレデハ ヒトリノコラズ ミナ―シグワンシテ デルデセウ」

一三〇二四（一九四三・十一・十三）「国語ノチカミチ」

トクベツ シグワンヘイセイ（특별 지원병제）（二）［特別志願兵制］

「オタクノ ムスコサンハ イマ ダイガクニ イッテ イラッシャイマスネ」

「ハイ ダイガクノ ハフクワ［法科］ニ ヲリマスガ コン

ド トクベツ シグワンヘイニ|シグワンシマシタ」
「ソレハ、ソレハ、ヨイムスコサンヲ モッテ シアワセデスネ」
「アリガタウ ゴサイマス」(ママ)
「ワタクシノ ムスコモ チュウガクニ|イッテ ヰマスガ デタラ スグ ヘイタイニ ナルノダト イキゴンデ ヰマス」

一三〇二五（一九四三・十一・十四）「国語ノチカミチ」**トクベツ シグワンヘイセイ（특별 지원병제）**（三）［特別志願兵制］
「コンドノ トクベツ シグワンヘイニ シグワンサレタ サウデス ネ」
「ハイ キノフ テツヅキヲ スマセマシタ」
「ワタクシタチノ ブンマデ ドウゾ|シッカリ オハタラキクダサイ」
「アナタモ イガクノ ハウ［方］ヲ マスマス ベンキャウサレテ オクニノ タメニ ツクシテ クダサイ」
「ハイ、ソツゲフシタラ グンイトシテ カナラズ センヂャウヘデル ツモリデス」

一三〇二七（一九四三・十一・十六）「国語ノチカミチ」**ソツゲフ セイモ（졸업생도）**［卒業生も］
「コンドハ トクベツシグワンヘイニ ソツゲフセイ［卒業生］モ シグワンデキル サウデスネ」
「サウデス、コトシノ クグワツ ソツゲフ（九月卒業）シタ ヒトモ シグワン デキルノデス」
「シウショク シテヰナイ ヒトダケデスカ」
「イイエ、シウショクシテ ヰナイヒトハ モチロンデスガ ショクニ ツイテ ヰルヒトデモ ナルベク タクサン シグワンシタ ハウガ ヨイノデス」

一三〇二八（一九四三・十一・十七）「国語ノチカミチ」**トクベツ シグワンヘイセイ（특별 지원병제）**［特別志願兵制］
「トクベツ シグワンヘイハ イツマデニ シグワンスレバ ヨイノデスカ」

「コンゲツノ ハツカマデデス」
「アア ソレデハ シメキリ マデニ アト ヨッカシカ ノコッテ ヰマセンネ」
「サウデス マダ マヨッテ ヰルヒトハ コノサイ シグヮンシテシマハナイト マニアハナク ナリマス」
「デハ イソイデ カヘッテ ムスコノ クヮンショ［願書］ヲカクコトニ シマス」

一三〇三〇（一九四三・十一・十九）「国語ノチカミチ」
トクベツ シグヮンヘイセイ（특별 지원병제）［特別志願兵制］
「オタクニハ テキカクシャ［適格者］ハ ヰマセンカ」
「ヒトリ ヰマシタガ モウ シグヮン［志願］シテシマヒマシタ」
「ソレハ ケッカウデシタ」
「マダ シグヮンシテ ヰナイヒトモ スコシハ アルヤウデスガ コノ ヒトタチハ ドウナリマスカ」
「ヘイタイサンニ ナルカハリニ コウバ ハウメン［工場方面］ニ チョウヨウ［徵用］サレマス」

一三〇三一（一九四三・十一・二十）「国語ノチカミチ」
シメキリビ（마감날）［締切日］
「ケフ［今日］ハ トクベツ シグヮンヘイ シグヮンノ シメキリビ デスネ」
「サウデス ＝ハンタウ［半島］ノ ガクト［学徒］タチガ ソノ マゴコロヲ シメス サイゴノ ヒデス」
「モシ ケフ シグヮンシナカッタ ナラバ アトニ ナッテズヰブン コウクヮイ スルコトニ ナルデセウ」
「サウデストモ ＝シカシ イマカラデモ オソクハ ナイノデスカラ ゼヒ ケフヂュウ［今日中］ニ ヒトリ ノコラズシグヮンスルヤウニ シタイモノデスネ」

一三〇三二（一九四三・十一・二十一）「国語ノチカミチ」
ショクジ（식사）［食事］
「サア ミンナ ゴハンデスヨ」
「タラウ［太郎］モ ハルコ［春子］モ キレイニ テヲ ア

ラッテ イラッシャイネ」
「ハイ」
「デハ オアガリナサイ」
「イタダキマス」
「コンナ オイシイ ゴハンヲ イタダケルノモ オヒ［ヤ］ク
シャウサン ガタノ オカゲデス」
「ダカラ ボク ヒトツブデモ コボサ ナイヤウニ キヲ ツ
ケテヰマス」
「サウ、イイコネ」
「ゴチサウサマ」

一三〇三四（一九四三・十一・二十三）「国語ノチカミチ」
ニヒナメマツリ（니이나메마쓰리）［新嘗祭］
「ケフハ ニヒナメ マツリ［新嘗祭］デスカラ ハタ［旗］
ヲ タテテ クダサイ」
「ハイ シャウチ シマシタ」
「ニヒナメマツリハ ドンナ ヒカ ゴゾンジ デスカ」
「アタラシイ コクモツニ カンシャスル ヒデス」
「サウデス キュウチュウデハ テンノウヘイカ オンミヅカ
ラ シンコク［新穀］ヲ カミガミニ オソナヘアソバサレ
ホウサクヲ オイノリ アソバサレマス」

一三〇三七（一九四三・十一・二十六）「国語ノチカミチ」
センタク（빨래）［洗濯］
「オカアサン、コノ シャツハ ワタクシガ アラヒマセウ」
「ソレハ スフデスカラ キヲツケテ アラッテ クダサイネ」
「イシノ ウヘデ ゴシゴシ コスッタラ イケナイノ デセウ」
「サウデス ＝アンマリ アツイ オユニ ツケタリ センタク
ボウデ ツヨク タタイタリ シテモ イケナイノ デスヨ」

一三〇三八（一九四三・十一・二十七）「国語ノチカミチ」
ボウクワ スヰサウ（방화 물통）［防火水槽］
「オカアサン コノ スヰサウニハ ミヅガ ハイッテ ヰマセ
ンネ」
「エエ ミヅハ ダシテ シマッタノデス ＝コホッタラ コマ
リマスカラ」

「デモ ケイハウ［警報］ガ デタ トキハ ドウシマスカ」
「モチロン ケイハウガ デタ トキハ スグ ミヅヲ ミタシテ オキマスガ フダンハ スキサウガ コホラナイヤウニ カラニシテ オクノデス」

一三〇三九（一九四三・十一・二十八）「国語ノチカミチ」
タイヒガウ（대피호）［退避壕］
「ケフハ ニチエウビ［日曜日］デスカラ ウチデ キンラウホウシ［勤労奉仕］ヲ シマス」
「ソレハ アリガタウ、ヂャ タイヒガウ［退避壕］ノ テイレヲ シテクダサイ」
「ダイブ マハリガ クヅレテ キマスネ、ソレニ ナカニモミヅガ タマッテ キマス」
「アタリニ アル カハラ［瓦］ヤ イシコロモ カタヅケテキレイニ サウヂシテ クダサイ」

一三〇四一（一九四三・十一・三十）「国語ノチカミチ」
ユキ（눈）［雪］
「ユキガ ドンドン フリマスネ」
「ムカフノ オニハ モウアンナニ ツモッテ キマス」
「［家モ道モ白クナッテ］キレイ デスネ」
「アノ ウレシサウニ ハシリマハッテキル コイヌヲ ゴランナサイ」
「サア ワタクシタチモユキカキヲ □□□□□ョウ」

一三〇四二（一九四三・十二・一）「国語ノチカミチ」
チョチク（저축）［貯蓄］
「コンゲツノ ジッセン テッテイ ジカウ［実践徹底事項］ハ ナンデスカ」
「チョチクニ ツトメル コトデス」
「ソレハ ヨイ コトデスネ＝トシノ クレニ ナリマスト ドウシテモ ムダヅカヒヲ シヤスク ナリマスカラ」
「コトシノ ネンマツハ 一オク［一億］ガ ミナ センサウ［戦争］ニ デタ ツモリデ ゼッタイニ ムダヅカヒヲ ツツシミ シャウヨ［賞与］ヤ リンジシウニフ［臨時収入］ナドハ ゼンガクヲ チョチク スルコトニ ナッテキマス」

一三〇**四四**（一**九四**三・十二・三）「国語ノチカミチ」

コナタン（**분탄**）［粉炭］

「オタクデハ マキ［薪］ノ ジュンビガ デキテヰマスカ」

「ワタクシノ トコロデハ マキハ タキツケニ バカリ ツカッテヰマスカラ マイツキノ ハイキフ［配給］ヲ ウケルモノデ マニ アヒマス」

「デハ レンタンヲ オツカヒニ □□デスカ」

「イイエ コナタン［粉炭］ヲ マルメテ ツカッテヰマス＝コナタンハ ネダンモ ウント ヤスクテ モノモ カヒヤスイデスネ」

「サウデスカ＝ソレデハ ワタクシノ トコロデモ コレカラハ コナタンヲ ツカッテ ミマセウ」

一三〇**四五**（一**九四**三・十二・**四**）「国語ノチカミチ」

クワサイ（**화재**）［火災］

「マイトシ フユニナルト ドウシテ クワサイ［火災］ガ フエルデセウカ」

「サムクナルト シゼント ヒヲ オホク ツカフシ クウキモ カンサウシテヰルセイデスネ」

「オクニノ ダイジナ ザイサンヲ モヤシテ シマフトハ ヲシイコト デスネ」

「マッタクデスヨ。イクラ ヒヲ オホク ツカッテモ チュウイサヘ一スレバ クワジ［火事］ハ ダサナイ ハズデスノニネ」

一三〇**四六**（一**九四**三・十二・**五**）「国語ノチカミチ」

タイセウホウタイビ（**대조봉대일**）［大詔奉戴日］

「モウ スグ タイセウホウタイビデスネ」

「サウデスヨ。ダイトウア セイセン［大東亜聖戦］モ コレデ ダイ三ネンニ ハイリマス」

「コノ ヒニ ナニカ キネンニ ナルコトヲ シタイト オモヒマスガ ナニガ イイデセウカ」

「ワタクシノ イヘデハ イチニチセンシチョキン［一日戦士貯金］ヲ ショウト オモッテ ヰマス」

「サウデスネ＝ソレガ タイセウホウタイビヲ ムカヘルニ フサハシイ デスネ」

一三〇五一（一九四三・十二・十）「国語ノチカミチ」

ケンサ（검사）［検査］

「アスカラ ガクト シグワンヘイ［学徒志願兵］ノ ケンサガ ハジマリマスネ」

「オタクノ オコサンハ カラダガ オヂョウブデスカラ ココロヅヨイ デセウネ」

「エ、ジブンモ オレハ カフシュカフカク［甲種合格］ダト ヰバッテヰマス」

「ウラヤマシイ デスネ。ウチノ コハ シンザウ［心臓］ガヨハイ ハウデスカラ シンパイニ ナリマスヨ」

一三〇五二（一九四三・十二・十一）「国語ノチカミチ」

カナモノ（쇠부치）［金物］

「マダ シンチュウ［真鍮］ノ ショクキ［食器］ヲ カクシテ オイテ ツカフ イヘガ アリマスネ」

「セトモノヲ ツカヘバ イイデスノニ センサウ［戦争］ニヒツエウ［必要］ナ カナモノ［金物］ヲ ドウシテ アンナニ カクシテマデ ツカフノカ ワカリマセンネ」

「ケッキョク クニヲ アイスル マゴコロガ タリナイカラデスヨ」

「ホントニ ヒコクミント イハレテモ シカタガ ナイデスネ」

一三〇五三（一九四三・十二・十二）「国語ノチカミチ」

ガクヘイ ケンサ（학병검사）［学兵検査］

「一ラウ［一郎］サンハ ドコヘ イカレタノデスカ」

「キノフカラ ガクヘイ［学兵］ノ ケンサガ ハジマッテヰマスノデ ケンサヲ ウケニ イキマシタ」

「キット 一ラウサンハ リッパナ ヘイタイサンニ ナルデセウネ」

「ドウカ ガフカク［合格］シテ リッパナ ヘイタイサンニナッテ クレタラト ソレバカリヲ イノッテヰマス」

一三〇五五（一九四三・十二・十四）「国語ノチカミチ」

セイサウ（청소—淸掃）［清掃］

「コレカラハ マイシウ［毎週］ノ クワエウビ［火曜日］ヲ

ワガ ハン［班］ノ セイサウビ［清掃日］ニ キメマシタ
＝ケフハ ミンナデ マチヲ ハキマセウ」
「ホントニ コンゲツノ ジッセン テッテイジカウ［実践徹底事項］ノ ヒトツニ セイサウガ アリマシタネ」
「ハウキト チリトリトヲ モッテ ワタクシノ イヘノ マヘニ アツマッテ クダサイ。ソレカラ オトナリニモ ヒトツオシラセ ネガヒマス」
「ハイ、シャウチ シマシタ。」

一三〇五六（一九四三・十二・十五）「国語ノチカミチ」
ドウジャウ ブクロ（동정 주머니）［同情袋］
「カク アイコクハン［各愛国班］ニ ドウジャウブクロ［同情袋］ガ デテ キマシタ。ドウジャウノ オカネヲ イレテ ダシテクダサイ」
「アサウデスカ＝ドノ クラヰ イレレバ ヨイデセウ」
「イクラト キマッテハ ヰマセン。マヅシイ ヒトビトニ オクル ドウジャウデスカラ マゴコロカラ テキタウニ イレレバ ヨイデセウ」
「サウデスカ＝ワカリマシタ」

一三〇五八（一九四三・十二・十七）「国語ノチカミチ」
タイマ ホウサイ（一）（대마봉재）［大麻奉斎］
「オタクデハ タイマ［大麻］ヲ ホウサイ［奉斎］シテ ヰマスカ」
「ハヅカシイ ハナシデスガ マダ ホウサイシテ ヰマセン」
「ソレハ イケマセンネ。スルヤウニ シマセウ」
「ジツヲ イフト イタダイテ オイテハ アリマスケド イママデニ カミヲ マツッタコトガ ナイモノデスカラ ナンダカ…」

一三〇五九（一九四三・十二・十八）「国語ノチカミチ」
タイマ ホウサイ（二）（대마봉재）［大麻奉斎］
「ソノヤウナ キモチカラ マダ一ホウサイシテ ヰナイカタガ オホイヤウデス」
「ヤハリ ワタクシト オナジカタモ ヲリマスカ」
「アリマストモ。シカシ ジッサイニ ヲガンデ ミルト ソ

ンナ キモチナンカ トンデシマッテ ホンタウニ カミサマニ タイスル キガ オコル モノデスヨ」

「ワタクシモ サウジャナイカト オモッテ チカイ ウチニホウサイ シヨウトハ一オモッテ ヰマシタ」

「サウデスカ イチニチモ ハヤク ホウサイ スルヤウニ シマセウ」

一三〇六〇（一九四三・十二・十九）「国語ノチカミチ」

テイコク グンジン（제국군인）［帝国軍人］

「ケフ［今日］デ ガクト シグヮンヘイ［学徒志願兵］ノケンサモ ヲハリマスネ」

「セッカク シグヮンシテ カラダガ ヨワイ タメニ オチタヒトハ キノドクデスネ」

「デモ シンブンヲ ヨミマスト ハンタウノ ガクヘイ［学兵］タチハ ホンタウニ タイカクガ リッパダ サウデスヨ」

「サウラシイ デスネ。ソレニ ミンナ カクゴモ リッパデマウシブンノナイ テイコク グンジンニ ナレルト シンサクヮンモ ホメテ ヰラッシャイ マスネ」

「ホントニ タノモシイ コトデスネ」

一三〇六二（一九四三・十二・二十一）「国語ノチカミチ」

ジュウゴ（총후）［銃後］

「オタクデハ ナニカ オシャウグヮツノ ジュンビヲ ナサイマスカ」

「イイエ ベツニ イタシマセン。タダ モチヲ スコシ ツクッテ ツツマシク ムカヘル ツモリデス」

「コトシハ アタラシイ トシヲ ムカヘル ジュンビト イッテ サワグ イヘガ アマリ ミウケラレマセンネ」

「サウイヘバ ジュウゴ［銃後］モ ホンタウニ キンチャウシテ キマシタネ」

一三〇六三（一九四三・十二・二十二）「国語ノチカミチ」

オシャウグヮツ（정월）［お正月］

「コンドノ オシャ［ウ］グヮツニハ ドコモ オヤスミガ ナイサウデスネ」

「ギンカウモ クヮイシャモ ヘイゼイ ドホリニ ハタラク

ノハ モチロン コウバヤ クヮウザン［鉱山］デモ ゾウサンニ ハゲムコトニ ナッテヰマス」

「センセン［戦線］デハ オシャウグヮツ ダカラト ―イッテ タタカヒヲ ヤスム コトハ アリマセンカラネ」

「ソレ バカリデ ナシニ ジュウゴ［銃後］デ イチニチ ヤスメバ タタカフ チカラガ ソレデケ ヨワク ナリマスモノネ」

一三〇六五（一九四三・十二・二十四）「国語ノチカミチ」

カゼ（감기）［風邪］

「オコサンガ カゼデ ネテヰル サウデスガ イカガデスカ」

「アリガタウ ゴザイマス。イチジハ ネツガ タカクテ シンパイダッタノデスガ イマハ ダイブ ヨク ナリマシタ」

「サウデスカ。ソレハ ヨカッタデスネ」

「ウチノ コドモハ カラダガ ヨワイ モノデスカラ フユニナルト ヨク カゼヲ ヒキマス」

「ナツニ ニックヮウヨクヲ オサセナサイマセ。カゼヲ フセグニハ ニックヮウヨクガ ナニヨリモ ヨク キキマスヨ」

一三〇六六（一九四三・十二・二十五）「国語ノチカミチ」

ハンタウノ メイヨ（반도의 명예）［半島の名誉］

「ハンタウノ シグヮンヘイニモ □二カイキフ［二階級］シンキフ［進級］ガ アリマシタネ」

「ホンタウニ ムネガ ワクワクスル ウレシイ タヨリダッタデスネ」

「シユウシハ ジツニ リッパニ タタカッテ クダサイマシタネ」

「チョウヘイセイ ジッシヲ マヘニシテ ハンタウ［半島］ノ タメニ コンナ メイヨナ コトハ ナイト オモヒマス」

「サウデストモ。ソレニ イイ オテホンニ ナリマスヨ」

一三〇六七（一九四三・十二・二十六）「国語ノチカミチ」

ガクヘイ クンレン（학병 훈련）［学兵訓練］

「ワタクシノ オトウトモ ダイイチ オツシュ［第一乙種］デ ガフカク［合格］シテ ジブンデ フトンヲ カツイデ クンレンジョヘ ユキマシタヨ」

「アラ、オトウトサンモ シグヮン ナサッタンデスカ。ア

ノカタハ モウ ガッカウヲ デテ ヰラシタノヂャ ナカッタノデスカ」

「エ、サクネンノ アキ ソツゲフ［卒業］シテ クヮイシャニ ツトメテ ヰタノデスケド ジブンデ シグヮン シマシタ」

「サウデスカ、ソレハ リッパナ カタデスネ」

一三〇六九（一九四三・十二・二十八）「国語ノチカミチ」

ゼイキン（세금）［税金］

「ゼイキンガ マタ アガルト イフ ハナシガ アリマスネ」

「サウデス。シンブンニモ ハッペウ［発表］サレテ ヰマスヨ」

「ドンナ ゼイキンガ アガリマスカ」

「スベテノ ゼイキンガ アガリマス」

「ソノ オカネハ ドコニ ツカハレル デセウカ」

「モチロン オモニ センサウニ ツカワレマスヨ。ソレカラ ゼイキンヲ アゲル モウ ヒトツノ モクテキハ コクミンノ ムダヅカヒヲ フセグノニモ アリマス」

一三〇七〇（一九四三・十二・二十九）「国語ノチカミチ」

ガクカウセイビ（학교정비）［学校整備］

「イロイロノ ガクカウガ ダイブ セイビサレルサウデスネ」

「サウデス ═ マヅ リクヮ［梨花］、シュクメイ［淑明］ノフタツノ ジョシセンモンガクカウ［女子専門学校］ガ フジンシダウシャ［婦人指導者］ヲ ツクリダス ガクカウトナリマス」

「ジョシ ノウゲフガクカウ［女子農業学校］モ タツサウデスネ」

「ハイ、カウシテ ジョシダケデモ ジュウゴ［銃後］ヲ マモッテ ユケル ヤウニ ツギツギト ヨイキマリガ デキテ ユキマス」

一三〇七一（一九四三・十二・三十一）「国語ノチカミチ」

シンネン（새해）［新年］

「ケフデ コトシモ オシマヒデスネ」

「イツノ マニカ イチネンガ スギマシタネ。ホンタウニ ツキヒハ ハヤイ モノデスネ」

「フリカエレバ ヘイタイサンモ ジュウゴ［銃後］デモ ヨクタタカヒ ヌキマシタネ」
「コトニ ハンタウニ オイテハ チョウヘイセイガ ジッシサレ、ガクセイガ コゾッテ シュツヂン シタ カンゲキノ イチネンデシタヨ」
「ライネンハ オタガヒニ モウ イッソウ グワンバリマセウ」

一三〇七六（一九四四・一・五）「国語ノチカミチ」
オシャウグヮツ［お正月］
ムラ（마을） バウシ（모자） キモノ（옷） オネンシマハリ（세배다니는것） ヒト（사람） オトナ（어른） コドモ（어린애）
オシャウグヮツ［お正月］デス
ムラニハ ヒトガ オホゼイ デアルイテ ヰマス。バウシヲカブッタ オトナモ ヰマス。キレイナ キモノヲ キタ コドモモ ヰマス。オネンシ マハリヲ シテ ヰルノデセウ。

一三〇七八（一九四四・一・七）国語ノチカミチ
ユキ（눈）［雪］
イヘ（집） キ（나무） イヌ（개） ミチ（길） ヤマ（산）
ユキガ フリマス
ドンドン ツモリマス
イヘモ ミチモ キモ ヤマモ マッシロニ ナリマシタ
イヌガ ウレシサウニ カケマハリマス

資料二：「ケフノオケイコ」

次の第一三〇七九号の転載で示したように、「ケフノオケイコ」で記述された日本語語句と日本語用例文には、それぞれに朝鮮語対訳が付されているが、本稿への転載に当たっては、用例文に付された朝鮮語訳は省略した。角括弧（［　］）内の記述はすべて本稿筆者（熊谷）による注記である。

一三〇七九（一九四四・一・八）「ケフノオケイコ」
アメ（아메）［雨］…비、イハ（이와）［岩］…바위、ウマ

（우마）［馬］…말、エンピツ（엔삐쓰）［鉛筆］…연필、オホカミ（오오까미）［狼］…늑대
アメガ フリマス（비가 옵니다）
イハガ アリマス（바위가 잇습니다）
ウマガ ハシリマス（말이 달립니다）
エンピツガ アリマス（연필이 잇습니다）
オホカミガ ホエマス（늑대가짓습니다）
ケフカラ アタラシク コクゴノオケイコヲ ハジメマス。ミナサン シッカリ ベンキヤウ シマセウ。（오늘부터 새로 국어공부를 시작합니다＝여러분 ═ 열심으로 공부합시다）

一三〇八〇（一九四四・一・九）「ケフノオケイコ」
カミ（가미）［紙］…종이、キリ（기리）［霧］…안개、クモ（구모）［蜘蛛］…거미、ケモノ（게모노）［獣］…짐승、コマ（고마）［独楽］…팽이
カミニ ジヲ カキマス
キリガ カカッテ ヰマス
クモガ ヰマス
ケモノガ ヰマス
コマヲ マハシマス

一三〇八二（一九四四・一・十一）「ケフノオケイコ」
サカナ（사까나）［魚］…생선、シロ（시로）［城］…성、スズリ（스즈리）［硯］…벼루、セイト（세이또）［生徒］…생도、ソリ（소리）［そり］…설매
サカナヲ ウリマス
シロガ クズレマシタ
スズリガ アリマス
セイトタチガ アソンデヰマス
ソリヲ ヒキマス

一三〇八三（一九四四・一・十二）「ケフノオケイコ」
タヌキ（다누끼）［狸］…너구리、チリトリ（지리또리）［塵取り］…쓰레받기、ツリザヲ（쓰리자오）［釣竿］…낚시대、テヌグヒ（데누구이）［手拭い］…수건、トマト（도마도）［トマト］…일년감

タヌキガ ニゲマス
チリトリヲ ツカヒマス
ツリザヲガ アリマス
テヌグヒデ フキマス
トマトガ ジュクシマシタ

一三〇**八五**（一**九四四**・一・十四）「ケフノオケイコ」
ナシ（나시）[梨]…배、ニシン（니싱）[鰊]…비웃、ヌカ（누까）[糠]…겨、ネズミ（네즈미）[鼠]…쥐、ノコギリ（노꼬기리）[鋸]…톱
ナシヲ タベマス
ニシンヲ ヤキマス
ヌカヲ モヤシマス
ネズミヲ トリマス
ノコギリデ キリマス

一三〇**八六**（一**九四四**・一・十五）「ケフノオケイコ」
ハシ（하시）[橋]…다리、ヒマシ（히마시）[蓖麻子]…아주까리、フロシキ（후로시끼）[風呂敷]…책보、ヘイタイ（헤이따이）[兵隊]…병정、ホシ（호시）[星]…별
ハシヲ ワタリマス
ヒマシヲ ウエマセウ
フロシキヲ カヒマス
ヘイタイサンガ アルイテ キマス
ホシガ ヒカッテヰマス

一三〇**八七**（一**九四四**・一・十六）「ケフノオケイコ」
マユ（마유）[繭]…고치、ミソ（미소）[味噌]…된장、ムラ（무라）[村]…마을、メクラ（메꾸라）[目暗]…장님、モチ（모찌）[餅]…떡
マユヲ ハカリマス
ミソヲ カヒマス
ムラガ ミエマス
メクラガ ヰマス
モチヲ ツキマス

一三〇八九（一九四四・一・十八）「ケフノオケイコ」

ヤリ（야리）[槍]…창、イト（이도）[糸]…실、ユキ（유끼）[雪]…눈、エビ（에비）[蝦]…새우、ヨダレ（요다레）[涎]…침

ヤリヲ ナゲマス

イトヲ マキマス

ユキガ フリマス

エビヲ トリマス

ヨダレヲ ナガシマス

一三〇九〇（一九四四・一・十九）「ケフノオケイコ」

ラッパ（랍빠）[喇叭]…나팔、リンゴ（링고）[林檎]…사과、ルスバン（루스방）[留守番]…집보는것、レンタン（렌땅）[練炭]…연탄、ロバ（로바）[驢馬]…당나귀

ラッパヲ フキマス

リンゴヲ タベマシタ

ルスバンヲ シテクダサイ

レンタンヲ タキマス

ロバガ トホリマシタ

一三〇九一（一九四四・一・二十一）「ケフノオケイコ」

ワシ（와시）[鷲]…수리、ヰド（이도）[井戸]…우물、ウメ（우메）[梅]…매화、ヱホン（얘홍）[絵本]…그림책、ヲノ（오노）[斧]…도끼

ワシガ トビマス

ヰドヲ ホリマス

ウメノ ハナガ サキマス

エホンヲ ミマス

ヲノヲ カツイデ イキマス

一三〇九三（一九四四・一・二十二）「ケフノオケイコ」

ガクセイ（가꾸세이）[学生]…학생、ギョライ（교라이）[魚雷]…어뢰、グンカン（궁깡）[軍艦]…군함、ゲタ（게다）[下駄]…게다、ゴハン（고항）[御飯]…밥

ガクセイタチガ アソンデヰマス

ギョライヲ ウチマス

グンカンニ ノリマス
ゲタノ オヲ スゲマス
ゴハンヲ イタダキマス

一三〇九四（一九四四・一・二十三）「ケフノオケイコ」
ザル（자루）［笊］…소코리、ジドウシャ（지도오샤）［自動車］…자동차、ズキン（즈낑）［頭巾］…두건、ゼンマイ（젠마이）［発条］…태엽、ゾウ（조오）［象］…코끼리
ザルニ イレマセウ
ジドウシャニ ノリマス
ズキンヲ カブリマス
ゼンマイヲ マキナサイ
ゾウガ アルキマス

一三〇九六（一九四四・一・二十五）「ケフノオケイコ」
ダイコン（다이꽁）［大根］…무　ヂメン（지멩）［地面］…땅、ヅグヮ（즈가）［図画］…도화、デンシャ（덴샤）［電車］…전차、ドウブツエン（도오부쓰엥）［動物園］…동물원
ダイコンヲ ヌキマス
ヂメンガ ヌレマシタ
ヅグヮヲ カキマス
デンシャニ ノリマス
ドウブツエンニ イキマス

一三〇九七（一九四四・一・二十六）「ケフノオケイコ」
バケツ（바께쓰）［バケツ］…바께쓰、ビン（빙）［瓶］…병、ブタ（부다）［豚］…도야지、ベンタウ（벤또）［弁当］…변또、ボタン（보땅）［ボタン］…단추
バケツヲ カヒマス
ビンヲ コハシマシタ
ブタヲ カヒマセウ
ベンタウヲ モッテ イラッシャイ
ボタンヲ ツケマス

一三〇九九（一九四四・一・二十八）「ケフノオケイコ」

パカチ（바가찌）［ひさご］…바가지、ピン（빙）［ピン］…핀、プロペラ（부로페라）［プロペラ］…푸로페라、ポプラ（보부라）［ポプラ］…포푸라、ペン（벵）［ペン］…철필

パカチヲ ツクリマス

ビンデ トメマス

プロペラガ マハリマス

ポプラガ ミエマス

ペンデ カキナサイ

一三一〇〇（一九四四・一・二十九）「ケフノオケイコ」

タマゴガ アリマス

リンゴガ アリマス

ハサミガ アリマス

ウシガ ヰマス

ウマガ ヰマス

ブタガ ヰマス

一三一〇一（一九四四・一・三十）「ケフノオケイコ」

クツガ アリマス

ホンガ アリマス

ヤマガ アリマス

ニハトリガ ヰマス

シカガ ヰマス

サカナガ ヰマス

一三一〇三（一九四四・二・一）「ケフノオケイコ」

一、カゾク（가족）［家族］

オバアサン（할머니）［お婆さん］、ニイサン（형님）［兄さん］、ネイサン（누님）［姉さん］、オトウト（동생）［弟］、イモウト（누이동생）［妹］

オトウサンハ イラッシャイマスカ

ハイ ヲリマス

アノ コドモハ ダレデスカ

ワタクシノ オトウトデス

一三一〇四（一九四四・二・二）「ケフノオケイコ」

二、**ムラ（마을）**［村］

メンジムショ（면사무소）［面事務所］、チュウザイショ（주재소）［駐在所］、ガクカウ（학교）［学校］　イウビンキョク（우편국）［郵便局］

ワタクシノ スンデヰル ムラハ チャウスヰリ［장수리、長水里］ト イヒマス

メンジムショハ マンナカニ アリマス

ガクカウト イウビンキョクハ ソノ トナリニ アリマス

一三一〇六（一九四四・二・四）「ケフノオケイコ」

アイコクハン（애국반）［愛国班］

タイセウ ホウタイビ（대조봉대일）［大詔奉戴日］、コクキ（국기）［国旗］、ハンチャウ（반장）［班長］、ハンヰン（반원）［班員］、ジャウクワイ（상회）［常会］

ケフハ タイセウホウタイビデス。

ドノ イヘニモ コクキヲ タテマシタ。

ハンチャウモ ハンヰンモ ミナ ジャウクワイニ デマス。

一三一〇七（一九四四・二・五）「ケフノオケイコ」

チョウヘイセイ（징병제）［徴兵制］

テウセン（조선）［朝鮮］、キミ（당신）［君］、ボク（나）［僕］、グンジン（군인）［軍人］

テウセンニモ チョウヘイセイガ シカレマシタ

キミモ ボクモ リッパナ グンジンニ ナリマセウ

一三一〇八（一九四四・二・六）「ケフノオケイコ」

センサウ（전쟁）［戦争］

ダイトウア センサウ（대동아 전쟁）［大東亜戦争］、リクグン（육군）［陸軍］、カイグン（해군）［海軍］

ワガクニハ ダイトウア センサウヲシテ ヰマス

リクグンモ カイグンモ イサマシク タタカッテ ヰマス

一三一一〇（一九四四・二・八）「ケフノオケイコ」

タイセウ ホウタイビ（대조봉대일）［大詔奉戴日］

マイツキ（매월）［毎月］、ヤウカ（여러 레）［八日］、シュジン（주인）［主人］、シュフ（주부）［主婦］

マイツキノ ヤウカハ タイセウ ホウタイビデス
カナラズ シュジンガ アサノ ジャウクヮイニ デマセウ

一三一一一（一九四四・二・九）「ケフノオケイコ」
ヘイキ（병기）［兵器］
ゼンセン（전선）［前線］、ヒカウキ（비행기）［飛行機］、
グンカン（군함）［軍艦］
ゼンセンヘ ヘイキヲ ドンドン オクリマセウ
サア ヒカウキヲ ツクリマセウ
グンカンヲ ツクリマセウ

一三一一三（一九四四・二・十一）「ケフノオケイコ」
キゲンセツ（기원절）［紀元節］
ケフ（오늘）［今日］、ジンムテンノウ（신무천황）［神武天皇］、クニ（나라）［国］、ヒ（날）［日］
ケフハ キゲンセツデス
ジンムテンノウサマガ ニツポンノ クニヲ オハジメ アソバサレタ ヒデ アリマス

一三一一五（一九四四・二・十三）「ケフノオケイコ」
バウクウ（방공）［防空］
ヨウイ（준비）［用意］、スヰサウ（물통）［水槽］、ムシロ（거적）［筵］、ソロヘル（가춘다）［揃える］
バウクウノ ヨウイハ デキテ ヰマスカ
スヰサウ ヒタタキ トビグチ バケツ ムシロ スナ、ミンナ ソロヘマセウ

一三一一七（一九四四・二・十五）「ケフノオケイコ」
バウテフ（방첩）［防諜］
ツマラナイ（쓸데없다）［詰らない］、イヒフラス（말을퍼트리는것）［言い触らす］、カンテフ（간첩，스파이）［間諜］、コトバ（말）［言葉］
ワカリモ セズニ ツマラナイコトヲ イヒ フラス ヒトガヰマス
コレハ カンテフ［間諜］ト オナジコトデス
コトバヲ ツツシミマセウ

一三一一八（一九四四・二・十六）「ケフノオケイコ」

オホキイ（크다）［大きい］、チヒサイ（작다）［小さい］、フトイ（굵다）［太い］、ホソイ（가늘다）［細い］、ミキ（줄기）［幹］

オホキイ キガ アリマス

ミキガ フトイ キガ アリマス

チヒサイ キガ アリマス

ミキガ ホソイ キデス

一三一二〇（一九四四・二・十八）「ケフノオケイコ」

タカイ（높다）［高い］、ヒクイ（낮다）［低い］、ヒロイ（넓다）［広い］、セマイ（좁다）［狭い］、ニハ（뜰）［庭］

タカイ ヘイガ アリマス

ヒロイ ニハガ ミエマス

ヒクイ イヘガ アリマス

セマイ ニハガ ミエマス

一三一二一（一九四四・二・十九）「ケフノオケイコ」

タツ（선다）［立つ］、スハル（안는다）［座る］、アルク（걷는다）［歩く］

ハルコサンガ タッテ ヰマス

ナツコサンガ スハツテ ヰマス

アキコサンガ アルイテ ユキマス

ユキコサンガ ハシッテ ユキマス

一三一二二（一九四四・二・二十）「ケフノオケイコ」

カラダ（몸）［体］

カラダ（몸）［体］、キタヘル（단련하다）［鍛える］、ツヨイ（튼튼하다，강하다）［強い］

カラダヲ ツヨク キタヘマセウ

ヨワイ カラダデハ リッパナ グンジンニ ナレマセン

一三一二四（一九四四・二・二十二）「ケフノオケイコ」

カホ（얼굴）［顔］

メ（눈）［目］、マユ（눈섭）［眉］、ハナ（코）［鼻］、クチ（입）［口］、ミミ（귀）［耳］

カホニハ、メ、マユ、ハナ、クチ、ミミガ アリマス
クチヲ シッカリ ムスビ、ハナヲ タラサナイヤウニ シマセウ

一三一二五（一九四四・二・二十三）「ケフノオケイコ」
カラダ（몸）［体］
アタマ（머리）［頭］、テ（손）［手］、アシ（발）［足］、ムネ（가슴）［胸］
カラダニハ アタマ、テ、アシ、ムネ、ハラガ アリマス
アタマヲ アゲテ ムネヲ ハルト シセイガ ヨクナリマス

一三一二七（一九四四・二・二十五）「ケフノオケイコ」
アサ（아침）［朝］
タイサウ（체조）［体操］、レイスヰマサツ（냉수마찰）［冷水摩擦］、ハ（이）［歯］
オトウサンハ ラジオ タイサウヲ シテヰマス
ニイサンハ レイスイマサツヲ シテヰマス
マサヲサンハ ハヲ ミガイテ ヰマス

一三一二八（一九四四・二・二十六）「ケフノオケイコ」
ケンカウ（건강）［健康］
タベモノ（먹을것）［食べ物］、キモノ（옷）［着物］、イヘ（집）［家］、セイケツ（정결）［清潔］
タベモノニ キヲ ツケマセウ
キモノヤ イヘヲ セイケツニ シマセウ
サウスレバ ケンカウニ ナッテ ビョウキニ カカリマセン

一三一二九（一九四四・二・二十七）「ケフノオケイコ」
ワタクシノ イヘ（우리집）［私の家］
ワラヤ（초가집）［藁屋］、ヘヤ（방）［部屋］、ニハ（마당）［庭］、ブタ（돼지）［豚］、ニハトリ（닭）［鶏］
ワタクシノ イヘハ チヒサイ ワラヤデス
ヘヤニハ ヨク ヒガ アタリマス
ニハニハ ブタヤ ニハトリガ アソンデ ヰマス

一三一三一（一九四四・二・二十九）「ケフノオケイコ」
キモノ（옷）（一）［着物］

コクミンフク（국민복）［国民服］、テウセンフク（조선옷）［朝鮮服］、ヤウフク（양복）［洋服］、ワフク（화복）［和服］

オトウサント ニイサンハ コクミンフクヲ キテ ヰマス

オカアサンハ イツモ テウセンフクデス

ワタクシハ ヤウフク、オトナリノ ハルコサンハ ワフクヲ キテヰマス

一三一三二（一九四四・三・一）「ケフノオケイコ」

キモノ（옷）（二）［着物］

ウハギ（웃저고리）［上着］、ズボン（바지）［ズボン］、シャツ（속옷）［シャツ］、ボタン（단추）［ボタン］、ハメル（끼운다）［嵌める］

コクミンフクハ ウハギト ズボンニ ワカレテ ヰマス

ウハギノ シタニハ シャツヲキマス

ウハギノ ボタンハ イツモ キチント ハメマセウ

一三一三四（一九四四・三・二）「ケフノオケイコ」

キモノ（옷）（三）［着物］

テウセンフク（조선옷）［朝鮮服］、ヒモ（고름、끈）［紐］、ヒラヒラスル（펄럭펄럭한다）［ひらひらする］、ツツガタ（모양이통가치된다）［筒型］、ツツガタノチマ（통치다）［筒型のチマ］

オカアサンハ テウセンフクヲ キテ ヰマス

ウハギニハ ヒモヲツケテ ヰマシタガ イマハ ボタンニ ツケカヘマシタ

チマハ ヒラヒラスル ナガイ チマデハナク ツツガタデス

一三一三五（一九四四・三・四）「ケフノオケイコ」

サイホウ（바느질）（一）［裁縫］

ヲンナ（여자）［女］、シゴト（일）［仕事］、ヌフ（꿰맨다）［縫う］、マゴコロ（정성）［真心］、テイネイ（공드리는것、공손한것）［丁寧］

サイホウハ ヲンナノ タイセツナ シゴトデス

ナニヲ ヌフニモ マゴコロヲ コメテ テイネイニ ヌヒマセウ

一三一三六（一九四四・三・五）「ケフノオケイコ」

サイホウ（바느질）（二）［裁縫］

サイホウダウグ（바느질도구）［裁縫道具］、モノサシ（자）［物差し］、ハサミ（가위）［鋏］、ハリ（바늘）［針］、イト（실）［糸］

サイホウダウグヲ ソロヘテ ミマセウ

モノサシ、ハサミ、ハリ、イト、イトマキ、ユビヌキ、ハリサシ ミンナ アリマス

一三一三八（一九四四・三・七）「ケフノオケイコ」

カヒモノ（물건흥정）（一）［買い物］

「イラッシャイマセ」

「コノ ニシンハ オイクラデスカ」

「百メ二十六センデス」

「スルト コレ 一ピキデハ イクラニナリマスカ」

一三一三九（一九四四・三・八）「ケフノオケイコ」

カヒモノ（물건흥정）（二）［買い物］

「イラッシャイマセ」

「コドモノ シャツガ アリマスカ」

「アヒニク オコサマノ シャツハ ウリキレテ ヲリマスガ」

「デハ コノツギニ シマセウ」

「ドウモ アヒスミマセン」

「サヤウナラ」

「アリガタウ ゴザイマス マタドウゾ」

一三一四二（一九四四・三十一）「ケフノオケイコ」

ハイキフ（배급）［配給］

「ハイキフノ ウンドウグツヲ カヒニキマシタ」

「ハイキフフダヲ モッテ イラッシャイマシタカ」

「ハイトコロト ナマヘヲ カイテ モッテ キマシタ」

「ナンモンガ オイリヨウデスカ」

一三一四三（一九四四・三・十二）「ケフノオケイコ」

ハイキフ（배급）［配給］

ハンチャウサンノ オタクデ ラフソク［ろうそく］ノ配

給ガ アリマシタ
ミンナガ オツリノ イラナイヤウニ オカネヲ ヨウイシテ
アツマリマシタ
ラフソクハ 一ショタイニ 二ホンヅツ ユキ ワタリマシタ
ハンチャウサンガ「コノラウソク［ろうそく］ハ クウシ
フ［空襲］ノ トキノ ヨウイニ ヨク シマッテ オキマセ
ウ」ト オッシャイマシタ

一三一四五（一九四四・三・十四）「ケフノオケイコ」
センタク（빨래）［洗濯］
オガハデ センタクヲ シマシタ
センタクモノヲ アクニ ツケマシタ
リャウテデ ヨク モンデ キレイニ ナルマデアラヒマシタ
キレイナ ミヅデススギマシタ
シボッテ ホシマシタ

一三一四六（一九四四・三・十五）「ケフノオケイコ」
祈年祭（겨년제）［祈年祭］
ケフハ コクモツガ タクサン ミノルヤウニ イノル オマ
ツリノ ヒデス
コトシコソハ 米モ ムギモ アハモ タクサン ミノリマス
ヤウニ マゴコロ コメテ イノリマセウ

一三一四八（一九四四・三・十七）「ケフノオケイコ」
ダイドコロ（부엌）（一）［台所］
カマニ ゴハンヲ タキマシタ
シチリンニ ナベヲ カケテ ミソシルヲ ツクッテヰマス
コンドハ ヒバチニ アミヲ ノセテ サカナヲ ヤキマセウ

一三一四九（一九四四・三・十八）「ケフノオケイコ」
ダイドコロ（부엌）（二）［台所］
ダイドコロ ダウグニハ ドンナ モノガ アリマスカ
カマ、ナベ、シチリン、ヒバチ、ヤクヮン、マナイタ、ホ
ウチャウ、チャワン、サラ、ソノホカ イロイロ アリマス

一三一五〇（一九四四・三・十九）「ケフノオケイコ」

ショクジ（식사）［食事］
「ゴハンデスヨ」
「ハイ イタダキマス」
「タクサン オアガリナサイ」
オゼンノ ウヘニハ ゴハント ミソシルト ヤイタ サカナト ツケモノガ アリマス
「ゴチサウサマ」

一三一五二（一九四四・三・二十一）「ケフノオケイコ」
一ツブノコメ（한톨의 쌀）［一粒の米］
一ツブノ コメモ テンノ メグミデ アリマス
ノウフ タチガ 一ネンヂュウ アセヲ ナガシテ ツクッタモノデス
ショクジノ タビニ カンシャシテ イタダキマセウ

一三一五三（一九四四・三・二十二）「ケフノオケイコ」
ミチヲ タヅネル（길을 묻는다）［道を尋ねる］
「チョット ウカガヒマスガ イウビンキョク［郵便局］ハドノヘンデセウカ」
「コノ ロヂヲ マッスグ イッテ オホドホリニデタラ スグヒダリノ ハウニ ミエマス」
「ドウモ アリガタウゴザイマシタ」
「イイエ ドウイタシマシテ」

一三一五五（一九四四・三・二十四）「ケフノオケイコ」
アサノアイサツ（아침인사）［朝の挨拶］
「オハヤウ ゴザイマス」
「コンナニ オハヤク ドチラヘ イッテ イラッシャイ マシタカ」
「ジングウ［神宮］ニ サンパイシテ カヘル トコロデス」

一三一五六（一九四四・三・二十五）「ケフノオケイコ」
ヒルノ アイサツ（낮 인사）［昼の挨拶］
「コンニチハ」
「ヨイ オテンキデスネ」
「スッカリ ハルラシク ナリマシタ」

「ソトヘ デテ ハタラクニハ コレカラガ 一バン ヨイトキデスネ」
「オタガヒニ センジャウ［戦場］ニデタ ツモリデ シッカリ ハタラキマセウ」

一三一五七（一九四四・三・二十六）「ケフノオケイコ」
バンノ アイサツ（저녁인사）［晩の挨拶］
「コンバンハ」
「コンバンハ、ヨク イラッシャイマシタ」
「コノマヘ ヤクソクシタ ヤサイノ タネヲ モッテ キマシタ」
「アリガタウゴザイマス、オイソガシイノニ スミマセン」
「イイエ ドウ イタシマシテ デハ コレデ シツレイ シマス」
「サヤウナラ、オヤスミナサイ」

一三一五九（一九四四・三・二十八）「ケフノオケイコ」
アキチリヨウ（一）（빈터이용）［空地利用］

バウクウガウ［防空壕］ノ ドテニ ヒマヲウエマシタ
アキニ ナッタラ ヒカウキ［飛行機］ノタメニ ヤクダツ
アブラガ タクサン トレルデセウ
クヮダン［花壇］ニハ コトシカラ ハナヲ ヤメテ トマトヲ ウエマス
トマトガ タクサン トレルダケデ ナク アカイ ミガ ナッテイルノハ ハナヨリ モット キレイデセウ

一三一六〇（一九四四・三・二十九）「ケフノオケイコ」
アキチリヨウ（빈터이용）［空地利用］
ワタクシノ イヘデハ アキチハ ノコラズ タガヤシテ ハタケニ シマシタ
ニハ［庭］ノ スミニハ ハウレンサウ［ほうれん草］ヲ マキマシタ
モンノ ソバニハ ナスヲ ウエマシタ
ヘイ［塀］ノシタニハ一カボチャノタネヲ マキマシタ

一三一六二（一九四四・三・三十一）「ケフノオケイコ」

ハルサメ（봄비）［春雨］
ハルサメガ シトシトト フッテヰマス
ハタケガ ホドヨク シメリマシタ
イマノ ウチニ タネヲ マキマセウ
ハヤク メガ デテ ヨク ソダチマス

一三一**六三**（一**九四四・四・一**）「ケフノオケイコ」
モクザイ（목재）［木材］
モクザイハ タタカフ ブキデス
［紙面破損の為、三行判読不能］
ウエル コトヲ ワスレナイヤウニ シマセウ
キッタダケハ カナラズ ウエマセウ

一三一**六四**（一**九四四・四・二**）「ケフノオケイコ」
タベモノ（음식）［食べ物］
イロイロナ モノガ クサリヤスイ トキデス
タベモノニ キヲ ツケマセウ
クサッタ モノヲ タベルト アタリマス

カビノ ハエタ モノモ イケマセン

一三一**六七**（一**九四四・四・五**）「ケフノオケイコ」
［紙面破損の為、前半部判読不能］
「ハイ ココニ 十ショタイノ ハン［判］ガミナ ソロッテ イマス
「デハ コノニクヲ アイコクハンニ オクバリ クダサイ」

一三一**六九**（一**九四四・四・七**）「ケフノオケイコ」
［紙面破損の為、判読不能］

一三一**七〇**（一**九四四・四・八**）「ケフノオケイコ」
タイセウ ホウタイビ（대조봉대일）［大詔奉戴日］
ケフハ タイセウ ホウタイビデス
コンゲツカラ アサノ ジャウクヮイハ 六ジハンデス
ハヤメニ オキテ コクキ［国旗］ヲ タテマセウ
［紙面破損の為、判読不能］ケフ 一ニチ［紙面破損の為、判読不能］クラシマセウ

一三一七一（一九四四・四・九）「ケフノオケイコ」
［紙面破損の為、判読不能］

一三一七三（一九四四・四・十一）「ケフノオケイコ」
［紙面破損の為、判読不能］

一三一七四（一九四四・四・十二）「ケフノオケイコ」
木（나무）［木］
センサウ［戦争］ハ 木ヲ タベルト イヒマス
ソレハ センサウニ キガ タクサン イルト イフコトデス
木ノ ヒカウキヤ フネヲ ツクルニモ コウバヲ タテルニ
モ デンシンバシラヤ センロノ マクラギニモ ミナ 木ガ
ツカハレマス
「スフ」モ ジンケン［人絹］モ カミモ 木カラ ツクラレ
マス

一三一七五（一九四四・四・十三）「ケフノオケイコ」
リウゲンヒゴ（유언비어）［流言蜚語］
ドコデ ダレガ キイテ ヰルカ ワカリマセン
ヨケイナ コトハ イハナイヤウニ イタシマセウ
オクニノ ヒミツガ テキニ モレタラ タイヘンデス
ワルイ ウハサ［噂］ガ トンデモ タタカフ ヒトタチハ フ
アンデス
リウゲン ヒゴヲ ツツシミマセウ

一三一七七（一九四四・四・十五）「ケフノオケイコ」
ハナ（꽃）［花］
ノヤマニ ツツジヤ レンゲウ［れんぎょう］ガ キレイニ
サキマシタ
キレイナ ハナヲ ナガメルト キモチモ タノシク ナリマ
ス
ハナハ ミンナデ ナガメテ タノシム モノデスカラ カッ
テニ ヲッタリ ツンダリ シナイヤウニ シマセウ

一三一七八（一九四四・四・十六）「ケフノオケイコ」
ニチエウビ（일요일）［日曜日］

ワガクニハ イマ タタカッテ ヰマス
ニチエウビ ダカラト イッテ シゴトヲ ヤスンダリ アソビマハッタリ スルヒトハ ヲリマセン
ミンナ ニチエウビデモ シゴトバニ デテ ハタラクカ イヘノ シゴトヲ テツダフカシマス

一三一八〇（一九四四・四・十八）「ケフノオケイコ」
ヒマ（피마주）［蓖麻］
ヒマヲ ウエマセウ
一ケンデ 六ポンイジョウハ カナラズ ウエナケレバ ナリマセン
ニハノ スミデモ ノキバタデモ ドコデモ ヨイノデス
ウエタラ ヨク テイレシテ リッパナミガ ナルヤウニ シマセウ
ヒマノ ミカラハ ヒカウキ［飛行機］ヤ グンカンニ ツカフ アブラガ トレルノデス

一三一八一（一九四四・四・十九）「ケフノオケイコ」
ツミクサ（나물캐기）［摘草］
ネイサン［姉さん］ト ノハラニ ツミクサニ イキマシタ
ナヅナ、ヨモギ、セリ、ノビルナド タクサン ツミマシタ
カゴニ 一パイ ツンデ ネイサント ウタヲ ウタヒ ナガライヘニ カヘリマシタ

一三一八三（一九四四・四・二十一）「ケフノオケイコ」
チョウヘイ ケンサ（징병검사）［徴兵検査］
キノフ チョウヘイケンサヲ ウケニ イッタ ニイサンハ ユウガタ カヘッテ クルナリ「カフシュ［甲種］ダ」トド ナリマシタ
「ホンタウカ」ト デムカヘタ オトウサンモ オホヨロコビデシタ
ワタクシモ オモハズ「バンザイ」ヲ サケビマシタ

一三一八四（一九四四・四・二十二）「ケフノオケイコ」
シフクワン（습관）［習慣］
チヒサイ トキカラ ヨイ シフクワン［習慣］ヲ ヤシナヒ

マセウ

アサネバウ［朝寝坊］ヲ シタリ ネコロンデ ホンヲ ヨンダリ ゴハンツブヲ コボシタリ スルノハ ミンナ ヨク ナイ シフクヮンデス

ハヤク イマノ ウチニ ナホシマセウ

一三一八五（一九四四・四・二十三）「ケフノオケイコ」

オサウヂ（소제）［掃除］

アタタカク ナルト イロイロ キタナイ モノガ メニ ツキマス

ヘヤノ ナカヤ イヘノ マハリヤ ミチバタナドヲ マイアサ ハヤク オキテ キレイニ ハキキヨメマセウ

スム トコロガ キレイダト ココロモ キヨク ナリマス

一三一八七（一九四四・四・二十五）「ケフノオケイコ」

グンジンヱンゴ（군인원호）［軍人援護］

オクニノ タメニ タタカッテ ヰル ヘイタイサンタチエ ゴシンパイヲ カケテハ ナリマセン

ヘイタイサンタチヤ ヘイタイサンヲ ダシタ オウチヲ ジユウゴ［銃後］ノ ヒトタチガ シッカリ マモラナケレバ ナリマセン

センサウニカツタメニ ヘイタイサンタチノ オテツダヒヲ シマセウ

一三一八八（一九四四・四・二十六）「ケフノオケイコ」

ハル（봄）［春］

クサガ アヲアヲト ノビマシタ

サクラモ サカエル ニッポンノ スガタヲ アラハシテ マッサカリデス

ノウフ［農夫］ハ イソガシサウニ タ［田］ニデテ ハタライテ ヰマス

タタカフ ニッポンノ ハルハ ノドカナウチニモ―ヒキシマッタキモチガ アフレテ ヰマス

一三一九〇（一九四四・四・二十八）「ケフノオケイコ」

ザッサウ（잡초）［雑草］

ハルニ ナルト ザッサウガ マッサキニ メヲ ダシマス
ヘイノ シタニモ ニハノ スミニモ ミチバタニモ イロイ
ロナ カハイイ クサガ イッパイ ハヘマス
ソノ ナカニハ タベラレル クサモ スクナク アリマセン
キレイナ ハナガ サク クサモ アリマス

一三一九一（一九四四・四・二十九）「ケフノオケイコ」
ワズカナ カネ（적은돈）［僅かな金］
イツシャウケンメイニ ハタライテ マウケタ［儲けた］カ
ネヲ ワヅカヅツデモ タメテ チョキンシマセウ
ソノ ワヅカナ チョキンガ タタカフ チカラヲ ツヨメル
ノデス
センサウガ ツヅク アヒダハ デキルダケ クラシヲ ツメ
テ チョキン シマセウ

一三一九四（一九四四・五・二）「ケフノオケイコ」
ハナヲ ヲルナ（꽃을 꺾지마라）［花を折るな］
ハナハ ミンナデ ミテ タノシムモノデス
ジブンダケノ コトヲ カンガヘテ ハナヲ オッタリ シテ
ハ ナリマセン
キヲ イタメル バカリデナク ハナノ ウツクシサモ ナク
ナリマス
ソシテ キノ シタヲ チラカサナイヤウニ チュウイシマセ
ウ

一三一九五（一九四四・五・三）「ケフノオケイコ」
オトウト（동생）［弟］
ワタクシノ オトウトハ コトシ 六ツデス
コノ マヘノ ヤスミニ ウラノ ヤマヘ ツレテ イキマシタ
オトウトハ トテモ ウレシサウニ ドンドン サキニ タッ
テ カケテ イキマシタ
ソラハ アヲク ヒザシガ アツイクラヰデシタ

一三一九七（一九四四・五・五）「ケフノオケイコ」
コヅツミ（소포）［小包］
タマゴ、クダモノ、オサカナ、ミソナドハ コヅツミデ オ

クレマセン
コメヤ ムギナドノ コクモツモ ムロン オクレマセン
ソレヲ シッテヰテ コヅツミニシテ ダス ヒトガ アリマス
イウビンキョク［郵便局］ニ ムダナ テスウヲ カケ ダイジナ モノヲ オクル ジャマニ ナリマス
コンナ コトハ シナイヤウニ ココロガケマセウ

一三一九八（一九四四・五・六）「ケフノオケイコ」
アカチャン（애기）［赤ちゃん］
キノフノ アサ アカチャンガ ウマレマシタ。
ヲトコノ コデ トテモ ヨク フトッテヰマス
ナキゴエモ ゲンキデ タイテイ 一ニチヂュウ ネテ ヰマス
オトウサンハ オホヨロコビデ「コノコハ アワラシ［荒鷲］ニ シヨウ」ト オッシャイマシタ。

一三一九九（一九四四・五・七）「ケフノオケイコ」
ナハシロ（못자리）［苗代］
ハヤク ナハシロヲ ツクリマセウ
ホドヨク アメガ フッテ キマシタカラ ソノ ミヅヲ 一テキモ ノガサズニ タメテ ハヤメニ ナヘヲ ウヘマセウ
コトシコソハ ノウゲフ［農業］モ ケッセンノトキデス

一三二〇一（一九四四・五・九）「ケフノオケイコ」
ガス（가스）［ガス］
ガスヲ セツヤクシテ ツカヒマセウ
ガスモ タタカフ オクニノ ブキデス
ツカッタラ ガスノ センハ カナラズ シメマセウ
センヲ アケテ オクト ガスガ モレマス
クウシフノ トキ クヮジ［火事］ノモトニモ ナリマス

一三二〇二（一九四四・五・十）「ケフノオケイコ」
デンセンビャウ（전염병）［傳染病］
ハルニ ナルト イロイロナ デンセンビャウガ ハヤリマス
コトニ オホイノハ ハッシンチフスト クヮイキネツ［回

帰熱］デス
コレラノ ビャウキハ オモニ ノミ、シラミガ ウツシマス
ミノ マハリヲ キレイニシ フトンハ トキドキ ニックワ
ウセウドク［日光消毒］ヲ イタシマセウ

一三二〇四（一九四四・五・十二）「ケフノオケイコ」
ムラ（마을）［村］
ワタクシノ ムラハ ヤマノ フモトニ アリマス
トテモ シヅカデ キレイナ ムラデス
ナガメガ ヨイバカリデ ナク ミンナ ナカヨク ハタラク
ムラデス
コノマヘノ チョウヘイ ケンサ［徵兵検査］デ 五ニンモ
カフシュ［甲種］ヲ ダシマシタ

一三二〇五（一九四四・五・十三）「ケフノオケイコ」
ザッサウ（잡초）［雑草］
コノマヘ ウラノ ヤマヘ イッテ キイロイ ツボミヲ ツケ
タ クサヲ トッテ キマシタ

ハチニ ウエテ マイニチ ミヅヲ カケテ ヤッタラ グング
ン オホキク ナッテ チヒサイハナガ タクサン ヒラキマ
シタ
「キレイナ ザッサウエンダコト」ト ネイサンモ オホヨロ
コビデシタ

一三二〇六（一九四四・五・十四）「ケフノオケイコ」
レンシフキ（연습기）［練習機］
アヲイ アヲイ ソラニ バクオンガ トドロキマシタ。
キイロイ レンシフキガ トンデ ヰルノデス
アノ ヒカウキ［飛行機］ニハ セウネンカウクウヘイ［少
年航空兵］ガ ノッテ ヰマス
ボクラモ イキマセウ ソラノ ケッセンヂャウ［決戦場］ヘ

一三二〇八（一九四四・五・十六）「ケフノオケイコ」
ムギ（보리）［麦］
ムギフミヲ シタノガ ツイキノフノコトノ ヤウニ オモ
ハレマスノニ モウ コシノ タカサニ マデ ソダッテ オホ

キナ ホガ デマシタ
アト ヒトツキモ シタラ ムギカリガ ハジマリマス
コトシハ ホドヨク アメガ フッテ ムギハ ヒジョウニ ジョウデキデス

一三二〇九（一九四四・五・十七）「ケフノオケイコ」
ヒカウキヲ オクレ（비행기를 보내라）［飛行機を送れ］
トロキナ［地名］デ チミドロノ タタカヒヲ ツヅケテヰル ゼンセン［前線］ノ ユウシ［勇士］タチガ ジュウゴ［銃後］ヘ 五マンヱント イフカネヲ オクッテ キマシタ。
スキナ アマイモノモ タベズニ タメタ オカネデス
「コレデ ヒカウキヲ ツクッテ クダサイトサケブ ゼンセンノ ユウシタチノ コノ マゴコロニ ワレワレハ ドウ コタヘタラ イイデセウカ。
一キ［一機］デモ オホクノ ヒカウキヲ オクルコトデス。

一三二一一（一九四四・五・十九）「ケフノオケイコ」
カナモノ（쇠부치）［金物］
カナモノト ナガ ツクモノナラ フルクギ 一ポン ノコサズニ ミンナ オクニヘ サシダシマセウ
「コンナモノ ヒトツグラヰ」ト カンガヘルノハ マチガヒ。ソレガ アツマッテ ヒカウキ［飛行機］ト ナリ、センシャ［戰車］ト ナリ、ダングワン［弾丸］ト ナルノデス。オクレズニ タメラハズニ、サア イマ スグ サガシテ サシダシマセウ

一三二一二（一九四四・五・二十）「ケフノオケイコ」
ゴミバコ（쓰레기통）［ゴミ箱］
ゴミバコノ ナカニ マダ ヤクニ タツモノハ ハイッテヰマセンカ
アキビン、アキグワン［空缶］、カミクズ、ワラクズ、アキダハラ、イタキレナド モット ヨク キヲ ツケテ ホンタウニ ツカヘナイ モノダケ ステルヤウニ シマセウ
イヘノナカヲ キレイニ スルノモ ケッカウ［結構］デスガ ヤクニ タツモノヲ ステナイコトガ モット ダイジデス

一三二一三（一九四四・五・二十一）「ケフノオケイコ」

ハヘトカ（파리와모기）［蠅と蚊］

ハヘトカ［蠅と蚊］ガ フエルトキデス

ゴミステバヲ キレイニ シマセウ

ゲスヰ［下水］ヤ ベンジョモ キレイニシテ ボウフラヤ ウジガ ワカナイヤウニ シマセウ

バウクワスヰサウ［防火水槽］ニハ キンギョヤ メダカナドヲ カフコトデス

アイコクハン［愛國班］ゼンブガ チカラヲ アハセテ コレヲ ジッカウ［実行］シマセウ

一三二一五（一九四四・五・二十三）「ケフノオケイコ」

ギャウレツ（행렬）［行列］

ダイ一セン［第一線］デハ ハゲシイ タタカヒ［戦い］ガ ツヅケラレテ ヰルト イフノニ ジュウゴ［銃後］ノ ヒトタチガ フヒツエウ［不必要］ナ モノヲ カヒアツメル タメニ ミセサキデ ナガイ レツヲ ツクッテ ヰルノハ ハヅカシイ コトデス

オタガヒニ ユヅリアッテ ミニクイ ギャウレツヲ ナクサウデハ アリマセンカ

一三二一六（一九四四・五・二十四）「ケフノオケイコ」

コトシノ ナツハ（올여름에는）［今年の夏は］

コトシノ ナツハ アタラシイ キモノヲツクラズニ スマセマセウ

ナルベク フルイ キモノヲ リヨウシ アマッタ カネハ チョチクスルヤウニ イタシマセウ

ヒトリガ 一シャク［一尺］ヅツ キレヂ［切地］ヲ ケンヤク シタラ 一オクシャク［一億尺］、ヤク三マンキロノ キレヂガ アマル カンジャウデス

カチヌクマデハ フルギデ ガマンシマセウ

一三二一八（一九四四・五・二十六）「ケフノオケイコ」

ユウレイ（유령）［幽霊］

ウチノ ナカニ イマデモ ユウレイヲ カッテ オク ヒトガ アルサウデス

ソノ ユウレイノ ブンマデ ハイキフヲウケテ シラヌ カホヲ シテ ヰルサウデス
オバケト イッショニ スム ナンテ コハイ ヒトタチデハ アリマセンカ
コレラノ ユウレイノ タメニ ジュウゴ［銃後］ノ ムスビツキガ コハレマス
ユウレイジンコウヲ ゼンブ ナクシテ シマハウデハ アリマセンカ

一三二一九（一九四四・五・二十七）「ケフノオケイコ」
カイグンキネンビ（해군기념일）［海軍記念日］
ケフハ ダイ三十九クワイメノ カイグン キネンビデス
メイジ三十八ネン 五グワツ二十七ニチ、ロシアノ ダイカンタイヲ ニッポンカイグンデ ウチヤブリ カガヤク ショウリヲ エタ ヒデス
コンドハ 一ニチモ ハヤク ベイエイノカイグンヲ コノヤウニ ウチヤブリ サラニ オホキナ ショウリヲ ヲサメナケレバ ナリマセン

ケフノ キネンビヲ ムカヘテ ソノ カクゴヲ マスマス カタメマセウ

一三二二〇（一九四四・五・二十八）「ケフノオケイコ」
ヤレバ デキル（하면된다）［やれば出来る］
一ネン カカッテ ヤット デキルシゴトヲ タッタ 四カゲツデ シアゲタ ヒトタチガ アリマス
ヤラウト オモッタラ ドンナ コトデモ デキマス
ワガ カイグンニハ「デキナイ コトデモ デキルヤウニ スル」ト イフ コトバガ アリマス
コノ ケッシンデ ドンナ フジイウ［不自由］デモシノビコノ センサウニ カツマデ グワンバリマセウ

一三二二一（一九四四・五・三十）「ケフノオケイコ」
チョチク（저축）［貯蓄］
カネガ アマッタラ チョチク シヨウト イフノハ マチガッタ カンガヘデス
マヅ チョチク、ソノ ツギニ セイクワツデス

デキルダケ セイクヮツハ キリツメ アトハ ゼンブ チョチクシマセウ

チョチクハ オクニノ タタカフ チカラヲ ツヨメル バカリデナク イザト イフトキ ジブンノ タメニモ ナルノデス

一三二二三（一九四四・五・三十一）「ケフノオケイコ」

ゲンキン（현금）［現金］

タクサンノ ゲンキンヲ テンジャウウラ［天井裏］ニ カクシテオイタ ヒトガ アリマシタ

アル バン クヮジ［火事］ガ オコッテ イヘガ マルヤケニ ナリマシタ

ムロン テンジャウウラノ ゲンキンモ ヤケテ シマヒマシタ

ソノ ヒトハ チョキン シナカッタ コトヲ ヒジャウニ コウクヮイシマシタ

オカネハ カナラズ イウビンキョク［郵便局］カ クミアヒ［組合］ニ アヅケマセウ

一三二二五（一九四四・六・二）「ケフノオケイコ」

ミチ（길）［道］

コドモタチヲ ミチデ アソバセテハ ナリマセン

アブナイ バカリデナク ミチモ キタナクナリマス

マキ［薪］ナドヲ ツミアゲテ オクノモ ヨクアリマセン

ミチヲ トホル ヒトタチノ ジャマニ ナリマス

ジブンノ イヘノ マハリノ ミチハ イツモ キレイニシテ オキマセウ

一三二二六（一九四四・六・三）「ケフノオケイコ」

ジュンジュンニ（차례차례로）［順々に］

キシャヤ デンシャニ ノルトキハ 一レツニ ナランデ ジュンジュンニ ノリマセウ

オホキナ ニモツハ モチコマナイヤウニ シマセウ

ザセキハ ラウジン［老人］ヤ コドモニ ユヅリマセウ

ツバヲ ハイタリ ヨゴシタリ シナイヤウニ キヲツケマセウ

一三二二七（一九四四・六・四）「ケフノオケイコ」

アルカウ（걋자）［歩こう］

イソガナイ トキハ ナルベク アルクヤウニ シマセウ

アルク ハウガ カラダノ タメニモ ヨク スズシイ カゼガ

フイテ キテ キモチノ ヨイモノデス

ミチヲ アルク トキハ カナラズ ヒダリガハヲ アルキヨ

コギル トキハ マヘヤ ウシロ、ミギヒダリニ ヨク キヲ

クバリマセウ

一三二二九（一九四四・六・六）「ケフノオケイコ」

タウエ（모내기）［田植え］

ホドヨク アメモ フリ ヨイ オテンキガ ツヾキマシタノ

デ ナハシロノ ナヘガ スクスクト ソダチマシタ

ツヨイ ナヘヲ エランデ ソロソロ タウエヲ ハジメマセ

ウ

タメイケニハ ミヅガ イッパイ タマッテ ヰマス

コトシコソハ ウント タクサンノ オコメヲツクリ デキル

ダケ タクサン オクニニ サシダシマセウ

一三二三〇（一九四四・六・七）「ケフノオケイコ」

ヨバウチュウシャ（예방주사）［予防注射］

ナツニ ナルト セキリヤ チャウチフス［腸チフス］ガ ハ

ヤリマス

ヨバウチュウシャヲ ウケテ コンナ ビョウキニ カカラナ

イヤウニ シマセウ

ナニヨリモ タベモノヱ キヲ ツケテ イツモ ジャウブナ

カラダデ オクニノ タメニ ハタラキマセウ

一三二三一（一九四四・六・九）「ケフノオケイコ」

シラミ（이）［虱］

シラミハ ハッシンチフスノ キンヲ モチアルク ニクイヤ

ツデス

イツモ キモノヤ カラダヲ セイケツニ シテ シラミガ ワ

カナイ ヤウニ イタシマセウ

ヒトリダケデ ナク カゾク ゼンタイガ キレイニ シナケ

レバ ナリマセン

ヒトゴミノ ナカデ ウツル コトモ アリマスカラ キヲ ツ

ケマセウ

一三二三三（一九四四・六・十）「ケフノオケイコ」

トキノキネンビ（때의기념일）［時の記念日］

ケフ［今日］ハ トキノ キネンビデス

ワガ クニデ ハジメテ トケイヲ ツカッタ ヒガ ケフナノデス

コノキネンビガ マウケラレタノハ ジカント イフモノガドンナニ ダイジナ モノデアルカヲ コクミンニ シラセルタメデス

ダイトウアセンサウニ カチヌクタメニハ コトニ ジカンヲ タイセツニシテ ハタラカナケレバ ナリマセン

一三二三四（一九四四・六・十一）「ケフノオケイコ」

オモイ ニモツヲ モッタ オバアサンガ ユレル デンシャノ ナカデ クルシサウニ タッテ ヰマシタ

スミノ ハウニ スハッテ ヰタ ヒトリノ ジョガクセイガ ツイト タッテ オバアサンノ テヲ ヒキ ジブンノ スハッテ ヰタ バショニ スハラセマシタ

ソレヲ ミテ ワタクシハ キフニ デンシャノ ナカガ アカルク ナッタヤウニ オモヒマシタ

一三二三六（一九四四・六・十三）「ケフノオケイコ」

ウチテシヤマム（격멸하고야만다）［撃ちてし止まむ］

「ウチテシヤマム」ト イフコトハ「キット ウチホロボシテ シマフゾ」ト イフ イミデス

トウア［東亜］ノ テキ、ニクイ ベイエイヲ ウチホロボスニハ ナニヨリモ マヅ タクサンノ モノヲ ツクリダサナケレバ ナリマセン

ネルマモ タベルマモ ナク ゼンセンデハ ハゲシイ タタカヒガ ツヅケラレテ ヲリマス

ジュウゴノ タタカヒニモ ヤスムヒマハ アリマセン

「ウチテシヤマム」カタトキモ｜コノ コトバヲワスレテハナリマセン

一三二三七（一九四四・六・十四）「ケフノオケイコ」

ヒナン（피난）［避難］

キノフ［昨日］ハ アサカラ バウクウクンレン［防空訓練］ガ アリマシタ

ワタクシタチハ コドモデスカラ オテツダヒハ デキマセン

クウシフケイハウガ オリルト ワタクシタチハ スグ タイヒガウ［退避壕］ニ ヒナンシマス

テキキガ コハイノデハ アリマセン

ヲトナタチノ ジャマヲ シテハ ナラナイカラデス

一三二三九（一九四四・六・十六）「ケフノオケイコ」

ニジ（무지개）［虹］

ユフダチガ フッタ アトデ ウラヤマヘ ノボッテ ミタラ ムラノ ヤネノ ウヘニ ウツクシイ ニジガ カカッテ ヰマシタ

アカ、ダイダイ、キ、ミドリ、アヲ、アヰ ムラサキ ナナイロニ カガヤク ニジノ ハシ

アメノ ハレタ アトナノデ クウキモ キヨク スンデ ヰマシタ

一三二四〇（一九四四・六・十七）「ケフノオケイコ」

バウクゥスヰサウ（방화수조）［防火水槽］

オタクノ バウクゥスヰサウ［防火水槽］ニハ イツモ ミヅガ イッパイ ハイッテヰマスカ

イツマデモ ミヅヲ イレタ ママデ オイテ ボウフラガ ワイテハ ヰマセンカ

トキドキ キヲ ツケテ ミヅヲ イレカヘルカ、キンギョヲ カフカ シマセウ

スナモ シメラナイヤウニ シテ スグ ヤクニ タツヤウニ シテ オキマセウ

一三二四一（一九四四・六・十八）「ケフノオケイコ」

ワタクシノムラ（우리마을）［私の村］

ワタクシノ ムラハ チヒサイケレドモ タノシイ ムラデス

オトナハ セッセト ハタラキ コドモラハ ゲンキニ ハシリ マハッテ ヰマス

ウシモ ブタモ マルマルト コエテ ヰマス

一三二四三（一九四四・六・二十）「ケフノオケイコ」

モケイ（모형）［模型］

ワタクシト イモウトハ カイグンガスキデ ニイサンハ ヒカウキ［飛行機］ニ ムチュウデス

オトウサンノ オタンジャウビニ オネダリヲシテ ニイサンハ ヒカウキ、ワタクシタチハ フネト グンカンノ モケイヲ カッテ イタダキマシタ

ワタクシタチハ アサカラ ヘヤノ ナカデ モケイヅクリニ イッシャウケンメイデシタ

一三二四四（一九四四・六・二十一）「ケフノオケイコ」

デンワ（전화）［電話］

オタクノ デンワハ ドウシテモ ヒツエウ［必要］ナ デンワデスカ

タタカフ オクニノ タメニ ヤクニタツ デンワデスカ

デンワモ ヘイキデス

ヒマナ デンワハ オクニニ サシダシマセウ

ソシテ ナルベク ムダナ デンワハ カケナイコトニ シマセウ

一三二四六（一九四四・六・二十三）「ケフノオケイコ」

レイスイマサツ（냉수마찰）［冷水摩擦］

アサ オキタ トキト ユフガタ ガクカウ［学校］カラ カヘッタ トキ ワタクシハ オトウトト イッショニ レイスヰマサツヲ シマス

アサノ レイスヰマサツモ スズシクテ メガ サメル ヤウデスガ ユフガタ ガクカウカラ カヘリ ハタケニミヅヲ マイテヤッタ アトデ アセヲ ナガストキノキモチハ ナントモ イヘマセン

一三二四七（一九四四・六・二十四）「ケフノオケイコ」

ヘイタイサン（헤이따이상）［兵隊さん］

「ヘイタイサン」トイフ エイグワ［映画］ヲ ミテキマシタ

トクベツシグワンヘイ［特別志願兵］ニ ナッタ オニイサンモ アノ エイグワノ ヤウニ グンタイ ケウイク［教育］ヲ ウケ イマハ リッパナ クワウグン［皇軍］ノ ヒトリト ナッテ イサマシク ゼンセン［前線］デ タタカッテ ヰルコトデセウ

一三二四八（一九四四・六・二十五）「ケフノオケイコ」

タイヒ（퇴비）［堆肥］

ニイサンタチハ ムギカリニ イッシャウケンメイデス

ガクカウ［学校］カラ カヘッタ ワタクシモ テツダヒニ デマシタ

トチュウデ オトウサンニ アヒマシタ

オトウサンハ チゲニ クサヲ カツイデ ヰマシタ

「コレデ タイヒヲ ツクルンダヨ」ト オトウサンハ ニコニコシテ イラッシャイ マシタ

一三二五〇（一九四四・六・二十七）「ケフノオケイコ」

オキャクサマ（손님）［お客様］

「オキャクサマヨ」ト トナリノ ヲンナノコガ シラセテ クレマシタノデ デテ ミルト キレイナ ナイチ［内地］ノ オヂャウサンデシタ

コクゴガ ワカラナイ ワタクシハ タイヘン アワテテ カネヤマサンノ オクサンヲ ヨビニ ヤリマシタ

ハヤク コクゴヲ オボエテ コンナトキ コマラナイ ヤウニ シヨウト オモヒマシタ

一三二五一（一九四四・六・二十八）「ケフノオケイコ」

ビャウキ（병）［病気］

ユフベカラ シクシクト オナカガ イタンデ ナンベンモ ゲリヲ シマシタ

アサ オキテ ミタラ ネツガ 三十八ド五ブモ アリマシタ

カアサンガ マクラモトヘ キテ シンパイサウニ ノゾキコミ「キノフ タベタ イチゴガ アタッタンダヨ」ト オッシャイ マシタ。

一三二五三（一九四四・六・三十）「ケフノオケイコ」

オトウト（동생）［弟］

キョネン ウマレタ ウチノ オトウトハ コノゴロ ヤット クチガ キケル ヤウニ ナリマシタ

カタコトデ ウマウマ［우마우마］ト イッタリ「バアバア」［바아바아］ト ウレシガッテ ワラッタリ シマス

オカアサンガ「アバババ」［아바바바］ト アヤシテ ヤルト リャウテヲ フリマハシテ カジリツキマス

一三三五四（一九四四・七・一）「ケフノオケイコ」

ショクジ（식사）［食事］

ゴハンヲ イタダクマヘニ テヲ アラヒマセウ

ヨク カンデ ユックリ イタダキマセウ

ゴハンツブヲ コボサナイヤウニ キヲツケマセウ

オカズノ スキキラヒヲ イハナイヤウニ シマセウ

ショクジノ マヘニハ「イタダキマス」スンダラ「ゴチソウサマ」ト アイサツ シマセウ

一三三五五（一九四四・七・二）「ケフノオケイコ」

バウクウ（방공）［防空］

ケイカイ ケイハウガ オリマシタ

スバヤク モンペト マキギャハン［巻脚絆］ノ ミジタクヲ トトノヘマセウ

スヰサウ［水槽］ニ ミヅハ 一パイ クンデ アリマスカ

ハヤク アカリヲ カクシマセウ

マドヤ トハ アケハナシテ クダサイ

一三三五七（一九四四・七・四）「ケフノオケイコ」

ジョシテイシンタイ（여자정신대）［女子挺身隊］

「オカアサン、ワタクシモ テイシンタイニ ハイッテ ハタラキタイト オモヒマス」

「イマノ シゴトハ イヤデスカ」

「イイエ、イマノ シゴトガ イヤナノデハアリマセン モット タメニ ナル シゴトガ シタイノデス」

「アナタノ スキナ ヤウニ ナサイ」

「イマニ ワタクシノ ツクッタ ヒカウキ［飛行機］ガ トビマスヨ、オカアサン」

一三二五八（一九四四・七・五）「ケフノオケイコ」

トウクワクワンセイ（등화관제）［灯火管制］

チヒサイ タバコノ ヒデモ テキノ クウシフ［空襲］ノ モクヘウ［目標］ニ ナリマス

トウクワ クワンセイニハ ヨホド キヲ ツケナケレバ ナリマセン

ヨル ネルトキハ モチロン アカリヲ ケシマスガ ケシテモ アカリヲ カクス ジュンビハ チャントシテ ネルコトニ ナッテヰマス

一三二六一（一九四四・七・八）「ケフノオケイコ」

アサ（아침）［朝］

オハヤウ ゴザイマス

オハヤウ ゴザイマス キノフハ ホンタウニ ゴクラウサマデ ゴザイマシタ

イイエ、ドウイタシマシテ、ハンチョウ［班長］サンコソ オツカレデ ゴザイマセウ

デモ オカゲサマデ トテモ キレイナ タイヒガウ［待避壕］ガ デキマシタ

ミンナデ チカラヲ アハセタ カラデス。アリガタウ ゴザイマシタ。

一三二六二（一九四四・七・九）「ケフノオケイコ」

ウミ（바다）［海］

ナツハ ウミデ カラダヲ キタヘマセウ

オヨギ ツカレタラ スナノ ウヘニ ネコロンデ ニックワウヨクヲ スルノモ イイデセウ

シカシ アンマリ ヒトリデ トホクマデ オヨイデ イッタリ イツマデモ ミヅノナカニ ツカッテ ヰルノハ ヨク アリマセン

一三二六五（一九四四・七・十二）「ケフノオケイコ」

サンパイ（참배）［参拝］

アサ ハヤク ジンジャニ オマヰリスルト トテモ スガスガシイ キモチデス

四グワツカラ マイニチ ネエサント サンパイヲ ツヅケテ

キマスガ カラダモ ジャウブニナリ ヨイコニ ナッタト タイヘン センセイカラ ホメラレマシタ

一三二六七（一九四四・七・十四）「ケフノオケイコ」

カヲトラウ（모기를잡자）［蚊を捕ろう］

カヲトリマセウ

カニ ササレルト イタイ バカリデナク オソロシイ マラリヤニ カカルコトガ アリマス

カハ キタナイ ミヅカラ デキルモノデス

デスカラ ゲスキダウ［下水道］ニハ セウドクザイヲ マキ バウクウ スキサウ［防空水槽］ノ ミヅハ トキドキ イレカヘルヤウニシマセウ

一三二六八（一九四四・七・十五）「ケフノオケイコ」

アメ（비）［雨］

マチニ マッタ アメデシタ

オヒャクシャウサンノ バンザイノ コヱガ キコエル ヤウデス

コレデ モウ タウエノ シンパイモ ナクナッタデセウ

コトシコソハ ウント タクサンノ オコメヲ ツクッテテキ ベイエイヲ タタキ ッブシマセウ

一三二六九（一九四四・七・十六）「ケフノオケイコ」

ハイキフ（배급）［配給］

ハイキフモノ［配給物］ガ スクナイト フヘイヲ イフヒトガ ヲリマスガ イマノ センサウ［戦争］ノ アリサマヲカンガヘレバ フヘイナド イヘルトキデハ アリマセン

一ハコノ マッチ、一ポンノ ネギモ アア アリガタイト ココロカラ オシイタダキマセウ

一三二七一（一九四四・七・十九）「ケフノオケイコ」

アメ（비）［雨］

アメガ フリマス

タニ ミヅガ 一パイ タマリマシタ

コノ アヒダ ウエタ ナヘ［苗］ガ イキイキト ノビテキマス

マダ タウエノ デキナカッタ トコロデモ コノ アメデス
ッカリ タウエガ スムデセウ

一三二七三（一九四四・七・二十）「ケフノオケイコ」
エイレイニ コタヘヨウ（영령에게 보답하자）［英霊に応えよう］

サイパンタウ［サイパン島］ノ ユウシタチハ サイゴマデ
リッパニ タタカッテ ゼンキンセンシサレマシタ
イヨイヨ テキヲ テモトニ ヒキヨセテ 一ペンニ タタキ
ツケルヒハ キタノデス
サイゴノ ショウリガ ワガクニノ ウヘニ カガヤクヒモト
ホクハ ナイデセウ
イマコソ サイパンノ エイレイニ コタヘテ シニモノグル
ヒデ グヮンバリマセウ

一三二七五（一九四四・七・二十二）「ケフノオケイコ」
セイサンヘ（생산에）［生産へ］

ニッポンノ ヘイタイサンハ セカイデ 一バン ツヨイノデ
ス
ヒカウキ［飛行機］ヤ フネヤ タマ［弾］サヘ 十ブンニ
アレバ アメリカナド アシモトニモ ヨレナイ ヤウニ タ
タキ ツブスコトガ デキマス
サイパンノ ヘイタイサン ガタハ ブキガ タリナクテ ド
ンナニ クヤシカッタデセウ
エイレイノ アダヲ ウツミチハ タダヒトツ モノヲ タク
サン ツクリダス トイフ コトデス

一三二七六（一九四四・七・二十三）「ケフノオケイコ」
ウミ（바다）［海］

ニッポンハ 四ハウ［四方］ヲ ウミニ カコマレテヰマス
ムカシカラ ウミノ クニト イハレ イサマシク ウミヘノ
リダシテ クニノ イキホヒヲ カガヤカセマシタ
イマノ ニッポンノ ダンジガ ウミヲ シラナクテハ ハヂ
ニ ナリマス
サア ウミニ シタシミマセウ
ウミヘ デマセウ

一三二七八（一九四四・七・二十五）「ケフノオケイコ」

アタラシイ ナイカク（새 내각）［新しい内閣］

アタラシイ ナイカクガ ウマレマシタ

タタカフ ニッポンノ チカラヲ マスマス ツヨメ コクナンヲ ツキヤブッテ クダサル ツヨイ タノモシイ ナイカクデス

コクミンハ 一ソウ セイフヲ シンライシ スベテニ チカラヲ アハセマセウ

一三二八一（一九四四・七・二十八）「ケフノオケイコ」

キンラウホウシ（근로봉사）［勤労奉仕］

ワタクシノ ガクカウデハ ナツヤスミノ キンラウホウシニ ヘイタイサンノ フクノ ボタンツケヲ ヤッテ ヲリマス

ハジメハ ナレナイタメニ シゴトモ オソク ホネガ ヲレマシタガ コノゴロハ ナレテ ジャウズニ デキル ヤウニナリマシタ

マイアサ オキルト ケフモ 一ニチ シッカリ ハタラクノダト ムクムクト チカラガ ワキアガッテ キマス

一三二八二（一九四四・七・二十九）「ケフノオケイコ」

エウハイト モクタウ（요배와묵도）［遥拝と黙祷］

アサノ 七ジデス

ラジオカラ オゴソカナ ラッパノネ［音］ガ キコエテ キマス

キュウジャウ エウハイ［宮城遥拝］ノ ラッパデス

サア ヒガシヘ ムイテ ウヤウヤシク エウハイヲ イタシマセウ

シャウゴニ ナレバ ラジオカラ「ウミユカバ」ノ オンガクガ キコエマス

ソノトキハ ワスレズニ モクタウヲ イタシマセウ

一三二八三（一九四四・七・三十）「ケフノオケイコ」

マモリマセウ（직힙시다）［守りましょう］

ハヤクネテ ハヤク オキマセウ

タベモノニ キヲツケマセウ

ネルトキハ ハラヲ ヒヤサナイヤウニ シマセウ
ソトヘ デルトキハ カナラズ ユクサキヲ イッテ デマセウ

一三二八七（一九四四・八・三）「ケフノオケイコ」
アサ（아침）［朝］
アサ 五ジニ オキマシタ
レイスキ マサツヲ シテ ミチバタヲ ハキマシタ
六ジニハ ガクカウニ イッテ ラジオ タイサウヲ シマシタ
トモダチモ オホゼイ キテキマシタ
七ジニハ キュウジャウエウハイ［宮城遥拝］ヲ シマシタ

一三二八八（一九四四・八・四）「ケフノオケイコ」
スキサウノミヅ（물통의물）［水槽の水］
オカアサンガ「スキサウノ ミヅヲ カヘテ クダサイ」トオッシャイマシタ
ワタクシタチハ「ハイ」ト イッテ ソトヘ デマシタ
ニイサント オトウトガ ミヅヲ クンデ キマシタ
ワタクシハ ソレヲ スキサウニ ツギマシタ
キレイナ ミヅガ スキサウニ 一パイニ ナリマシタ

一三二八九（一九四四・八・五）「ケフノオケイコ」
アツサヲ ワスレル（더위를 잊는다）［暑さを忘れる］
アツイ アツイト イヘバ マスマス アツクナリマス
ナニカニ ココロヲ ウチコンデ ネッシンニ ハタラケバ アツサモ ワスレテシマヒマス
アツサニ ウチカツ タメニハ アツイ アツイト イフ ヒマガ一ナイホド イソガシク ネッシンニ シゴトヲ スルノガ一バンデス

一三二九〇（一九四四・八・六）「ケフノオケイコ」
モンペ（몸뻬）［もんぺ］
「モンペヲ ハキマセウ」ト イフ ウンドウガ ヒラカレテキマス
モンペヲ ハクト ハタラキヤスイシ キモノモ タイソウ セ

ツヤク サレマス

クウシフ［空襲］ガ アルカ ワカラナイ イマ、モンペハ イノチヲ マモル ヨロヒダトモ イヘマス

オカアサンモ ネイサンモ コドモマデモ ヒトリノコラズ モンペヲ ハキマセウ

一三二九三（一九四四・八・九）「ケフノオケイコ」

マモリマセウ（지킵시다）［守りましょう］

ヒトリデ カハニ オヨギニ デテ オボレタコドモガ ヲリマス

カハヘ オヨギニ デルトキハ カナラズ オトナト 一ショニ ユキマセウ

ミチバタデ ウッテヰル タベモノヤ クサッタ クダモノナドヲ カッテ タベルト ビャウキニ カカルコトガ アリマスカラ キヲツケマセウ

一三二九五（一九四四・八・十一）「ケフノオケイコ」

カナモノケンナフ（쇠부치헌납）［金物献納］

カナモノハ ヒトツノコサズ ケンナフ［献納］シタヤウデモ スミズミヲ サガセバ マダナニカ アルモノデス

ハサミ、サジ、ナベ、カマ、ハウチャウ［包丁］ナドハ ヨイノデスガ ソノ ホカハ ヒトツ ノコラズ サシダサナケレバ ナリマセン

オマツリダウグ［お祭道具、祭器］ヤ クヮビン［花瓶］、ヒバチ、テツガウシ［鉄格子］ナド マダ ソノママニ シテヰル オタクハ アリマセンカ

一三二九六（一九四四・八・十二）「ケフノオケイコ」

デンワ（전화）［電話］

ムダナ デンワハ カケナイヤウニ シマセウ

デンワデ ツマラナイ ナガバナシナドヲ スルヒトハ ヒトノ タイセツナ ハナシマデ デキナイヤウニ ジヤマヲ シテヰルコトニ ナリマス

コトニ クウシウケイハウガ オリタ トキナドハ カケナクテ ヨイヤウナ シヨウ（私用）デンワハ オタガヒニ一ツツシミマセウ

一三二九七（一九四四・八・十三）「ケフノオケイコ」

モンペ（몸뻬）［もんぺ］

フルギヲ モンペニ シタテ ナホシマシタ

フルビテ ヤブレサウナ トコロハ ウラカラ キレヲ アテマシタ

タチカタヲ ヨク クフウシマシタカラ カッコウモ ヨク、

ハタラクニモ タイソウ ラクナ モノガ デキマシタ

モンペハ タカイ カネヲ ダシテ アタラシク ツクルヨリ

タンスノ ソコヲ サガシテ フルイ キモノデ シタテ ナホシマセウ

一三三〇〇（一九四四・八・十六）「ケフノオケイコ」

アキチノキビ（빈터의수수）［空地のきび］

ハタケノ キビガ ボクノ セイヨリモ タカク ノビマシタ

コレハ オトウサント ボクガ ヒトナツヂュウ アセヲ ナガシテ ツクッタモノデス

モトハ ステテ オイタ アキチガ コンナ リッパナ キビバタケニ ナッタノデ ムラノ ヒトタチモ ビックリシテヰマス

ライネンハ モット タクサン アキチヲ タガヤシテ ハタケニスル ツモリデス

一三三〇二（一九四四・八・十八）「ケフノオケイコ」

オマヰリ（참배）［お参り］

アサハヤク ネイサント 一ショニ ジンジャヘ オマヰリシマシタ

クチヲ ススギ テヲ キヨメテ ウヤウヤシク ハイレイシマシタ

サウシテ カナラズ センサウニ カチマスヤウニ マゴコロコメテ イノリマシタ

ジンジャノ ハトガ 二三バ ワタクシノ アタマノ ウエヲ一ゲンキヨク トンデ ユキマシタ

一三三〇三（一九四四・八・十九）「ケフノオケイコ」

クヮイランバン（회람판）［回覧板］

「ヲバサン クヮイランバンデス」

「ハイ ゴクラウサマ」

「ミンナ モンペヲ ハクヤウニト イフコトト ミヅヲ セツヤク シマセウト イフコトガ カイテ アリマス

コレカラハ クウシフノトキハ ジャウクヮイ［常会］ヲ ヒラカナイデ マニ アワセルコトガ アリマス

一三三〇四（一九四四・八・二十）「ケフノオケイコ」

カナモノ アツメ（쇠부치 모으기）［金物集め］

ボクガ クルマヲ ヒキマシタ

カネダクント ハヤシクンガアトヲ オシマシタ

三ニンデ キンジョヲ マハッテ カナモノヲ アツメマシタ

クワンヅメノ アキクワンヤ アナノアイタ カナダラヒヤ

シンチュウキ［真鍮器］ナド タクサン アツマリマシタ

一三三〇七（一九四四・八・二十三）「ケフノオケイコ」

ニフエイマエ（입영전）［入営前］

ニフエイマエ［入営前］ノ カラダハ スデニ オホギミ［大君］ニ ササゲ タテマツッタ カラダデ アリマス

チョウヘイケンサモ スミ コレデアンシンシタトバカリ ヨアソビヲシタリ サケヲ ノミ マワッタリスル ヒトハ ヰマセンカ

モウスグ クヮウグン［皇軍］ノ ヒトリニ ナルノデス

オコナヒヲ ツツシミ カラダヲ タイセツニシテ アカルクキヨラカナ カラダト ココロデ ニフエイ［入営］ノ ヒヲムカヘマセウ

一三三〇九（一九四四・八・二十五）「ケフノオケイコ」

コクゴノ オケイコ（국어 공부）［国語のお稽古］

ワタクシハ チョウヘイケンサニ カフシュ［甲種］デ ガフカク シマシタ

カラダハ ジャウブデスガ コクゴヲ シリマセン

ガクカウニ カヨヘ ナカッタカラデス

ソレデ コノゴロハ ヒルハ タハタデ ハタラキ ヨルハ コクゴ カウシフクヮイ［国語講習会］ニ カヨッテ 一シャウケンメイニ コクゴヲ オケイコシテヰマス

一三三一〇（一九四四・八・二十六）「ケフノオケイコ」

ハタラク ネエサン（일하는 언니）［働く姉さん］

ワタクシノ ネエサンハ ジョガクカウニイッテ ヰマシタ
ガ ナイチノ コウバヘ ジョシテイシンタイニ ナッテ ユ
キマシタ
マイニチ センサウニ イルモノヲ ツクリナガラ タノシク
ハタライテ ヰルサウデス
コノマヘノ テガミニモ「ハヤクアナタモ コクミン ガク
カウヲ ソツゲフ［卒業］シタラ コノ コウバヘキテ 一シ
ョニ オクニノタメニ ハタラキマセウ」ト カイテ アリマ
シタ

一三三一一（一九四四・八・二十七）「ケフノオケイコ」

ヤサイヲ ツクラウ（야채를 심자）［野菜を作ろう］

アキノ ヤサイヲ ツクル トキガ キマシタ
ハタケノ クサヲトリ スミズミマデ タガヤシマセウ
ハルハ トマトヤ ナスナドヲ ツクリマシタガ アキハ ツ
ケモノ［김장］ノ ヨウイニ ハクサイヤ ダイコンガ イイ
デセウ
ハタケニ コヤシヲ イレテ タネヲ マキ ウスク ツチヲ カ
ブセタラ ヨロシイノデス

一三三一四（一九四四・八・三十）「ケフノオケイコ」

ヲンナモ ハタラク（여자도 일한다）［女も働く］

センサウニ カツマデハ ヲトコモ ヲンナモ アリマセン
ミナ オナジヤウニ センサウノタメニ ハタラカ ナケレバ
ナラナイノデス
テウセン［朝鮮］デモ ヲンナニ キンラウレイ（勤勞令）
ガ クダリマシタガ ソレニ オドロクヒトハ ヒトリモ ヲ
リマセン
ミナ ヨロコンデ｜ドンナ シゴトデモ サセテクダサイト
マチカマヘテヰマス

一三三一七（一九四四・九・二）「ケフノオケイコ」

モンペ（몸뻬）［もんぺ］

コレカラハ ドンナコトガ アツテモ ヲンナハ モンペヲ ハ

カナケレバ ナリマセン

モンペヲ ハカナイ ヒトハ キシャヤ デンシャニモ ノセナイコトニ ナツテヰマス

ソトヘ デルトキハ モチロンノコト ウチデ ハタラクトキモ リヨカウ［旅行］スルトキモ モンペヲ ハクヤウニ シマセウ

一三三二一（一九四四・九・六）「ケフノオケイコ」

ハタラク キャウダイ（일하는 형제）［働く兄弟］

ウヘノ ニイサンハ オウチョウシ［応徴士］、シタノ ニイサンハ ヘイタイニ ナリマシタ

オウチョウシノ ニイサンハ イマ カイグンノ コウバデ ハタライテヰマス

ヘイタイノ ニイサンハ ハツカニ ニフエイ［入営］シマス

ボクハ ライネンノ 三グヮツ ガクカウヲ ソツゲフシテ サンゲフ センシ［産業戦士］ニ ナリマス

一三三二三（一九四四・九・八）「ケフノオケイコ」

タイセウ ホウタイビ（대조봉대일）［大詔奉戴日］

アサオキテ コクキヲ タテマシタ

六ジハンニ ジャウクヮイ［常会］ニ デマシタ

アサノ ウチニ タイヒガウ［待避壕］ノテイレヲ シテ オキマシタ

ヨルハ アイコクハン［愛国班］デ バウクウ クンレン［防空訓練］ガ アリマス

ケフハ ドコヘ イッテモ ミンナ マキキャハン［巻脚絆］モンペノ バウクウ フクサウ［防空服装］デス

一三三二四（一九四四・九・九）「ケフノオケイコ」

ニフエイ（입영）［入営］

コノゴロハ ドノマチデモ ニフエイ［入営］スル ワカモノノ スガタガ ミエマス

ワタクシドモノ アイコクハン［愛国班］デモ オホカワクント カネムラクン［金村君］ガ ニフエイスルコトニ ナリマシタ

アイコクハンノ ヒトガ ミナ アツマッテ フタリノ カドデヲ イハヒ ブウンチャウキウ［武運長久］ヲ イノリマシタ
エキマデ ラッパヤ タイコデ ニギヤカニ ギャウレツヲ ツクッテ ミオクリマシタ

一三三二五（一九四四・九・十）「ケフノオケイコ」

ニフエイ（입영）［入営］
ニイサンガ ニフエイ［入営］スルコトニナリ ケサ キシヤデ タチマシタ
オトウサンヤ オカアサンハ モチロン アイコクハン［愛国班］ノ ミナサンモ エキマデ ミオクリニ デマシタ
ヒノマルト バンザイノコエニ［ツツマレテ］アカダスキヲ カケタ ニイサンハ ゲンキナ コエデ「シッカリ ヤリマス」トイッテ ヘイタイサンノ ヤウニ キョシュノレイヲ シマシタ

一三三三七（一九四四・九・十二）「ケフノオケイコ」

ハタラク ガクト（일하는 학도）［働く学徒］
ガクカウノ セイトタチガ コウバヤ クヮウザン［鉱山］デ アブラト アセニ マミレテ ハタライテヰマス
オトウサンヤ オカアサンガ ソノ ハタラキブリヲ ミテキテ
「ワガコナガラ アタマガ サガッタ」ト オッシャイマシタ

一三三三五（一九四四・九・二十）「ケフノオケイコ」

ジュウゴノ アキ（총후의 가을）［銃後の秋］
サヤサヤト アキカゼガ イネノホヲ ナデテ ユキマス
タニモ ハタケニモ コクモツガ ユタカニ ミノッテ オモサウニ アタマヲ タレテヰマス
スミワタッタ アキゾラノ シタデ ヲトナモ コドモモ セッセト ハタライテヰマス
ニフエイ（入営）ヲ ミオクル バンザイノ コエガ トホクカラ キコエテキマシタ

一三三三八（一九四四・九・二十三）「ケフノオケイコ」

ハタケデ（밧테서）［畑で］

「ヤア イツモ オセイガ デマスネ」

「オカゲサマデ ゲンキデ ハタライテヲリマス」

「オタクノ サクモツハ ドレモ ミナ｜タイソウ ヨク デキテ ヰマスネ」

「イネト アハハ ドウヤラ ヨク デキタヤウデスネ」

「ナニカ ヒケツデモ アリマスカ」

「イイエ タイヒヲ タクサン イレ イツモ サクモツヲ カハイガッテ マメニ テイレヲ シテヰルダケデス」

一三三四五（一九四四・九・三十）「ケフノオケイコ」

カゾク（식구）［家族］

オトウサンハ イラッシャイマスカ

ハイ チチハ ヲリマス

オカアサンモ イラッシャイマスカ

ハイ ハハモ ヲリマス

ニイサンモ ネイサンモ イラッシャイマスカ

ハイ アニモ アネモ ヲリマス

一三三四九（一九四四・十・四）「ケフノオケイコ」

カゾク（식구）［家族］

コノカタハ ドナタ デスカ

ワタクシノ チチデス

アノ カタハ ドナタ デスカ

ワタクシノ ハハデス

オトウサンハ オイクツデスカ

チチハ コトシ 五十三デ ゴザイマス

オカアサンハ オイクツデ イラッシャイマスカ

ハハハ コトシ 四十八デ ゴザイマス

一三三五一（一九四四・十・七）「ケフノオケイコ」

イネカリ（벼베기）［稲刈り］

ケフハ イヘヂュウガ ソウデデ イネカリヲ シマシタ

オトウサンヤ ニイサンガ ザクザクト カッテ ユキマシタ

オカアサント ネイサンガ タバニシマシタ

オヂサント ボクハ イネタバヲ ハコビマシタ

コトシノ イネハ タイソウ ヨク デキマシタ

一三三五六（一九四四・十・十一）「ケフノオケイコ」

ミチデ（길에서）［道で］

「コンニチハ」

「オヒサシブリ デスネ」

「ドチラヘ オデカケデスカ」

「チョット カヒモノニ マヰリマス」

「デハ イッテ イラッシャイ」

「サヤウナラ」

一三三五九（一九四四・十・十四）「ケフノオケイコ」

ホン（책）［本］

「コレハ ナンデスカ」

「ソレハ ホンデス」

「ダレノ ホンデスカ」

「ワタクシノ ホンデス」

「ドンナコトガ カイテ アリマスカ」

「ハンタウ［半島］ノ アラワシ［荒鷲］タケヤマタイヰ［大尉］ノ イサマシイ ハタラキガ カイテアリマス」

「オヨミニ ナリマシタラ ワタクシニモ カシテクダサイ」

一三三六二（一九四四・十・十七）「ケフノオケイコ」

センクヮ（전과）［戦果］

タイワンノ ヒガシニ アラハレタ テキキドウブタイヲ サンザンニ ウチヤブッタ ワガ カイグンノ チカラハ ジツニ オドロクホドデ アリマス

テキハ タクサンノ カウクウ ボカンヤ クチクカンヤ センカンヲ ウチシヅメラレ マタ ウチヤブラレテ 一萬三千メイノ ヘイト 六百キノ ヒカウキヲ ウシナヒマシタ

一三三六三（一九四四・十・十八）「ケフノオケイコ」

ハクキンヲ ダシマセウ（백금을 내노읍시다）［白金を出しましょう］

メザマシイ センクヮ［戦果］ハ ツギツギニ ハッペウ［発表］サレテ ヲリマス

アラワシ［荒鷲］ノ イサマシイ ハタラキニハ タダ アリガタサニ ナミダガ コボレル バカリデス

イマコソ アリッタケノ チカラヲ ダシテ ヒカウキ グンカンヲ ツクリ テキヲ 一ペンニ タタキツブサナケレバ ナリマセン

ハクキン ダイヤナドハ イクサノ ダウグ［道具］ヲ ツクルノニ ナクテハ ナラナイモノデス。

センクワ［戰果］ニ コタヘテ サア 一コクモ ハヤク キョウシュツ シマセウ

一三三七三（一九四四・十・二十八）「ケフノオケイコ」

カンシャ チョチク（감사 저축）［感謝貯蓄］

ワガグンハ テキノ カンタイヲ ウチヤブリ マイニチノヤウニ ダイセンクワヲ アゲテ キマス

カンシャ チョチクウンドウ［感謝貯蓄運動］ガ ヒラカレル コトニ ナッテ キマス

オカネヲ ノコシテ チョキン ショウトイフ キモチヲ ステテ

マズ チョキンヲ シテ ツギニ ノコル オカネデ クラシテ ユクヤウニ

コノ キクワイニ モット カクゴヲ アタラシク シマセウ

注

（1）李鍊（二〇一三）『일제강점기 조선언론 통제사』、박영사、二三二頁

（2）「六、内鮮文タルヲ問ハズ、鮮内發刊新聞ニハ必ズ國語欄ヲ設ケ簡易ナル日本語ノ掲載ヲナサシムルコト七、愛國班常會刊行物ニハ國語欄ヲ添記シ常會席上ニ必ズ修得セシム」（慶尚北道盈德郡）

「新聞雜誌等出版物ニシテ諺文版ノモノ其ノ發刊部數ヲ極力制限シ、且ツ其ノ紙面半分ハ日常語ノ常用修得ニ必要ナル國語文ヲ掲記セシムルコト」（江原道春川郡）

「平易ナル片仮名新聞ノ發行、常用者家庭ノ表彰ヲナスコト」（江原道原州郡）

「諺文刷新聞雜誌ニ人名地名其ノ他平易ナル單語ハ必ズ國語ヲ以テ示シ（当分問諺訳付トス）、尚紙面ノ一部ニ必ズ國語欄ヲ設クルコト」（江原道華川郡）

「朝鮮語新聞雜誌ニ「國語講座欄」ヲ設ケルコト」（咸鏡南道安邊郡）

「新聞雜誌ノ掲載、ラヂオ放送等ニ依リ、民衆ニ対シ積

極的ニ國語常用ヲ勸奬スルコト」（咸鏡南道洪原郡）
「新聞、ラヂオヲ通シ、國語ノ速成教育ヲ實施スルコト」（咸鏡南道惠山郡）
「國語ヲ解スル者ノ會話ハ凡テ國語ヲ使用スルコトトシ、新聞、ラヂオ等ノ利用ニ依リ之ヲ强調シ、本運動ヲ極力助成スルコト」（咸鏡北道吉州郡）
「諺文新聞、雜誌等ノ廢止ハ時期尚早ト思料セラルルニ付、諺文ト共ニ國語ヲ併記シ、以テ國語普及ニ協力セシムル様、發行方法ヲ改メシムルコト」（黄海道海州府）
「ナルベク諺文印刷物ハ頒布セザルコトトシ、諺文新聞及雜誌ニハ簡易ナル國語普及ヲ設クルコト」（全羅南道光州府）

（3）『朝鮮』一九四二年一〇月号、朝鮮総督府、三六～四三頁
（4）『国語運動』第六巻第一一号、国語協会、一九四二年十一月十五日、一〇～一二頁
（5）「毎日新報」一九四四年七月九日（第一三二六二号）
（6）「毎日新報」一九四四年八月四日（第一三二八八号）
（7）「毎日新報」一九四四年八月二十七日（第一三三一一号）
（8）「乳飲兒ダイテ「アイウエオ」女子青年錬成ノセイセキハ上々」「毎日新報」一九四四年八月十一日（第一三二九五号）
（9）「マヅ國語生活デ立派ナ兵隊ヲ出サウ」「毎日新報」一九四四年八月二十七日（第一三三一一号）
（10）この数字は号数を示す。
（11）引用文中の記号「＝」および「一」は筆者が読解の便宜のために書き加えたもので、句読点のような役割を持たせたものである。
（12）「文化方面に對しては、半島人の作家をして國語による文學活動を奬勵すると共に、一日の放送時間の三分の一を占めるラジオの朝鮮語による放送に於ても國語を混入することによつて漸次國語への親しみを體得せしめようと考慮されてゐる。即ち「放送に就ての御注意」といふ印刷物の中に「國語讀放送用語標準」といふものがあげてあり、國語讀みのみとする放送用語標準には、イ、皇室關係用語及日本、ロ、祝祭日及記念日、ハ、神宮神社及内地の佛寺、ホ、人名、ヘ、地名、ト、官職名等九項目があげられてをり、これらの言葉は朝鮮語の中に國語讀みのまゝ使用されることになるのである。なほ諺文新聞中には朝刊の三分の一頁を國語欄としてゐる。」（廣瀬續「國語普及の新段階」『朝鮮』一九四二年一〇月号、朝鮮総督府、三六～四三頁）
（13）また地名は、「**トウダイモン** マデ マイリマス **동대문** 까지 갑니다」（一一九十）、「コノ ノリカヘヲ オモチニナッテ **ショウロ**デ ノリカヘテ クダサイ 이 승환표를 가지고 **종로**에서 갈아 타십시요。」（一一九十）、

「コチラハ **西大門**ノ金デスガ…저어 **서대문** 김인데요…」（一一九一七）のように、日本語文では「トウダイモン、ショウロ」のように「国語読み」をしているが、朝鮮語訳は朝鮮語音で表記されている。日本語文で「西大門」と漢字表記しているのは、「国語読み」を回避した記述とも見ることが出来る。

(14) そのほか、ダイドコロ、デンシャ、テンキ、サウジ、ヒバチ【火鉢】、アサ［朝］、でんわ【二】、デンワ【二】、ホウモン［訪問］、ライキャク［来客］、オクヤミ［お悔み］、タンジョウ［誕生］、ウバ［乳母］、タイヨウ［太陽］、キシャ［汽車］、フネ【船】、センタク【빨래】［洗濯］、センタク【二】、アミモノ（一）（편물）［編み物］、アミモノ【に】편물、シンブン［新聞］、ギウニユウ【우유】［牛乳］、オカシ（과자）［お菓子］、〝クダモノ【과일】［果物］、センセイ【선생님】［先生］、メンカイ【면회】［面会］、ザッシ【잡지】［雑誌］、ヨウフク【양복】［洋服］、ユウビン【우편】［郵便］、イエ【집】［家］〟。

(15) そのほか、〝カゼノコトコスモス【바람의아이와크스모스】［風の子とコスモス］、トンデクコノハ【날라가는나무닙】［飛んでく木の葉］、コジキ【거지】［乞食］、五千ドルノバイオリン【五천돌의「히이올린」】［五千ドルのバイオリン］、オンジンノテ【恩人의손】［恩人の手］〟。

(16) そのほか、〝【晝の挨拶】、【晩の挨拶】、季節の挨拶【春】、季節の挨拶【夏】、季節の挨拶【秋】、季節の挨拶【冬】〟。

(17) そのほか、〝自分ノ斧、鼠の力、斧ノエ［斧の柄］、父ノオシヘ［父の教え］、アブノユダン［アブの油断］、ヨクバリナコドモ［欲張りな子ども］、フシギナアヒル［不思議なアヒル］、クマノサヽヤキ［熊のささやき］、狼ト子羊、ウマノカゲ［馬の影］、ロバノカゲ［ロバの影］、ロバノハナシ［ロバの話］、ツキノキモノ［月の着物］、二ヒキノネズミ［二匹のネズミ］、タカラ［宝］、チカラクラベ［力比べ］、シシノチエ［シシの知恵］、カラスノチエ［カラスの知恵］、カゼノヨ［風の夜］、アカイユウヒ［赤い夕陽］、ズルイカヘル［ずるいカエル］、シンセツナムスメ［親切な娘］、オシヤレナヲトコ［おしゃれな男］、バカナトラ［馬鹿な虎］、ヨクバリノハヒ［欲張りの蠅］、ムリナノゾミ［無理な望み］、オホカミトヤギ［狼と山羊］、バカナヒヤクセウ［馬鹿な百姓］、ネンネノオクニ［ねんねのお国］、ワルイオキヤク［悪いお客］、イタチトニハトリ［イタチと鶏］、コイヌノウタガヒ［仔犬の疑い］、コウコウナコギツネ［孝行な子ぎつね］、フシギナツボ［不思議な壺］、ドレイトシシ［奴隷とシシ］〟。

(18) 『朝鮮総督府の「国語」政策資料』、熊谷明泰、関西大

学出版部、二〇〇四年、八六頁

(19)「日常會話」は一九四二年六月三十日（一二五二七）までの間に百二十三回連載されるが、一九四二年三月一日（一二四十六）にのみ「間違えやすいことば」が載っていないので百二十二回となっている。

(20)一二七五〇（一九四三・二・十）、一二七五二（一九四三・二・十二）、一二七五五（一九四三・二・十五）、一二七五七（一九四三・二・一七）

(21)「今夜の国語用語」連載一回目だけは「初等國語講座教本」と記されている。

(22)「全鮮的に捲起こせ／國語の全解運動／清新溌剌議場を壓す／定例知事會議／成果の跡を顧る」「京城日報」一九四二年四月二十四日

(23)「三百語만 解得하면 日常會話는 할 수 있다 島田編輯課長談」「毎日新報」一九四二年五月七日朝刊三面

(24)「各學校ニ於テハ、各地方ノ實情ニ照シ、父兄母姉ニ傳授スベキ言葉約三百語ヲ豫メ選定シ置キ、朝會暮會等ニ於テ全生徒兒童ニ同日同一ノ一語ヲ傳授スルコトトシ、一ケ面内一語ヲ充滿セシメ、之ガ徹底ヲ期スルコト」（黄海道　平山郡答申書）

「學校中心ニテ、兒童ヲ通ジ一日一語主義ヲ以テ之ヲ家庭全般ニ及ボシ、受持教師ヲシテ月一回巡廻指導督励ヲ加ヘル」（咸鏡南道文川郡答申書）

「各青年隊ニ於テハ、國語ヲ知ラザル隊員ニハ、隊自体ノ事業トシテ國語未解者ニ對シテ一日一語ノ研究ヲ爲サシメ、急速的普及ヲ圖ルコト」（江原道平康郡答申書）

「各國民學校（含簡易學校改良書堂）ニ於テハ、特ニ簡易ナル會話用ノ國語ヲ在學ノ全生徒ニ對シ一日ニ一語宛必ズ選定シ、之ヲ兒童ヲ通ジテ家族ノ者ニ迨習得セシムル」（咸鏡南道三水郡答申書）

「學校ノ兒童生徒ヲシテ「一日一語」主義ヲ以テ家庭ニ之ヲ普及セシムルト共ニ、中等學校生徒ヲシテ休暇中本運動ニ協力セシムルコト」（咸鏡北道吉州郡答申書）

「指導力低弱ナル兒童ナルヲ以テ所期ノ効果ヲ得ザルモ、更ニ上級生ヲ中心ニ、之ガ實績ヲ収ムル様強化セントス」（黄海道延白郡答申書）

「簡單ナル日用語ハ一日一語トシ、尚實用語ヲ毎月五語制ヲ制定シ、之ヲ全聯盟員ニ呼ビ掛ケ、其ノ月分ハ必ズ其ノ月ニ習得セシムルヤウスルコト」（黄海道甕津郡答申書）

「學校ノ兒童ニ對シ國語配當表ヲ配付シ、各々其ノ家族ニ對シ必ズ一日一語ヲ授クルヤウ督勵スルト共ニ、教職員ハ常ニ査察ヲ嚴ニシ、實行ノ徹底ヲ圖ルコト」（黄海道長淵郡答申書）

「生徒兒童ハ校庭内ニ於テハ殆ンド完全ニ國語常用ヲナスモ、家庭ニ歸リテハ殆ンド國語常用ヲ爲サザルハ、

父母兄弟中國語ヲ解スル者ナク、話ス相手ナキニ依ルヲ主タル原因トスルニ付、特ニ家庭婦人ノ啓蒙ヲ圖ルベク、生徒兒童ヲ通ジ日常最モ多ク使用スル國語ヲ一日一語宛父兄ニ習得セシメ、之ガ成績ハ愛國班常會ノ際郡、邑面、學校職員調査督励ヲスルコト」（黄海道安岳郡答申書）

「各國民學校、簡易學校等ノ兒童ヲ通ジ一日一語ヲ各家庭に普及セシメ、關係敎職員ヲシテ其ノ結果ヲ査察セシムルコト。愛國班ヲ單位トシテ、解得班員ガ主體トナリテ其ノ班員ニ對シ一日一語宛解得セシメ、其ノ結果ヲ郡面職員ヲシテ査察セシムルコト」（黄海道谷山郡答申書）

「國民學校ニ於テハ、國語ニ諺文ヲ附シタル日用語ノ單語カードヲ調製シ、學校兒童ヲシテ一日一語以上ヲ其ノ全家族ニ傳授セシメ、時々其ノ成績ヲ審査シテ、物資配給ニ考慮ヲ加ヘルモ一方法ナリト思料ス」（全羅南道求禮郡答申書）

「學校ニ於テハ、生徒兒童ヲ通ジ、其ノ父兄母姉ニ対シ一日一語ヲ勸奬シ、學校ニ於テハ父兄會母姉會ヲ年四回位開キテ、習得状況ヲ調査スルト共ニ、其ノ實績ニ應ジテ奬勵スルヲ要ス」（全羅南道寶城郡答申書）

「父兄ニ對シ一日一語ノ習得ヲ目標トシ、兒童ヲシテ必ズ之ヲ實行セシメ、以テ毎日其ノ狀況ヲ聽取採點スル等、積極的ニ指導監督ヲ加フルコト」（全羅南道長城郡答申書）

「生徒兒童ノ國語生活ヲ徹底セシムルト共ニ、豫メ一日一語票ヲ作製シ置キ、之ヲ與ヘテ該生徒兒童家族ニ及ボシ、一方敎職員ニ於テハ隨時巡廻、之ガ實踐狀況竝ニ實情ヲ査察指導（実踐ハ實績査察簿ヲ備付之ニ記入ノコト）スルコト」（全羅南道珍島郡答申書）

(25) 「光州刑務所の國語全解運動は在監者七、八百名に對し、まづ日常の生活から一日一語を勵行、國語の習得に自發的能率をあげる方法として特殊事項以外は毎日のニュース放送や敎誨には一切通譯を廢止し好成績ををさめ刑務所を出るころには自由に會話のできるまでに上達、皇國臣民化の朗らかな第一歩を踏出してゐる」（朝日新聞南鮮版（二版）一九四二年十二月二十日第四面「尾翼燈」欄）

(26) 「一日一語集　城南国民校で編纂」『朝日新聞西鮮版』一九四二年七月十四日

(27) 「踏み出す〝國語全解〟／施策要綱を府尹、郡守に指示／一齊に猛運動を開始」「京城日報」（京城版第四面）一九四二年七月十日

(28) 最初の掲載分（一二九八三）、および最後の五回分（一九四三年十二月十五日・十七日・十八日・十九日・二十一日）だけは、日本語音の朝鮮文字転写が付され

ていないが、その理由は分からない。

(29)「リンゴ」「ナシ」「コドモ」「ツル」が二回にわたって重複掲載され、また、関連語が一語だけの場合が一回あるので、異なり語数は百六十三語だった。

(30)前回に続き、「リンゴ」と「カキ」が重複している。

(31)「コドモ」は前の方にもあり、重複している。

(32)「ツル」は前の方にもあり、重複している。

(33)(三四)「愛国イロハカルタ」のもとの文は以下の通り。

【イ】イセノカミカゼ テキコク カウフク
【ロ】ロバタ デ キク センゾ ノ ハナシ
【ハ】「ハイ」デ ハジマル ゴホウコウ
【ニ】ニッポンバレ ノ テンチヤウセツ
【ホ】ホマレハ タカシ キウグンシン
【ヘ】ヘイワ ナ シマジマ ヒノミハタ
【ト】トウア ヲ ムスブ アイウエオ
【チ】チヒサナコト カラ オホキナ ハツメイ
【リ】リクワシ ウミワシ ボクラモ ツヅク
【ヌ】ヌグフ アセミヅ キンラウ ホウシ
【ル】ルスヲ マモッテ カチ ヌカウ
【ヲ】ヲノ ノ ヒビキ モ イサマシク
【ワ】ワラヂ デ キタヘタ オヂイサン
【カ】カガヤク ムネ ノ シヤウイ キシヤウ
【ヨ】ヨセクル クロシホ ウミノ コ ワレラ
【タ】タダシイ ケイレイ タダシイ ココロ
【レ】レンセイ デ ノビル セウコクミン
【ソ】ソラノ アヲサハ カミヨカラ
【ツ】ツギノ ニッポン ボクラ ガ ニナフ
【ネ】ネエサン ガ ヌフ ラクカサン
【ナ】ナカヨシ コドモノ トナリグミ
【ラ】ラッパ デ シングン ヘイタイサン
【ム】ムラ モ ゾウサン マチ モ ゾウサン
【ウ】ウッテ キタヘル ニッポン タウ
【ヰ】ヰモンブクロ ニ テガミ ヲ イレテ
【ノ】ノコエ ヤマコエ キャウカウ グン
【オ】オニ ヲモ ヒシグ モモタラウ
【ク】クハノ ヒカリ ハ ミクニ ノ ヒカリ
【ヤ】ヤマノ オク ニモ コヒノボリ
【マ】マツノ イロマス オホウチャマ
【ケ】ケサモ ハヤオキ レイスヰ マサツ
【フ】フジ ヲ アフイ デ コクミン タイサウ
【コ】コトバ ハ タダシク ハッキリ ト
【エ】エイレイ シヅマル ヤスクニ ジンジャ
【テ】テツ セキタン アルミ フカウキ フネ ヒリヤウ
【ア】アサヒ ニ カシハデ
【サ】サクラト チッタ セウナンコウ
【キ】キミガヨ ウタフ アサ ノ ガクカウ

【ユ】ユキ モ カヘリ モ レツクンデ

【メ】メガ デタ ハ ガ デタ ボクラ ノ ハタケ

【ミ】ミヅ ダ バケツ ダ ヒタタキダ

【シ】シュッセイ カゾク ヘ オテツ ダヒ

【エ】エガホ ト エガホ デ アカルイ ショクバ

【ヒ】ヒナダン ニ ヒトエダ モモノハナ

【モ】モンペ デ ハタラク オカアサン

【セ】センセイ ニ ホメラレタ チョキンバコ

【ス】スグレタ クニガラ セカイ ガ アフグ